岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 16

川入・上東

都市計画道路(富本町・三田線)
に伴う埋蔵文化財発掘調査

1 9 7 7

岡 山 県 教 育 委 員 会

序

本書は，都市計画道路（富本町・三田線）建設にさきだち，二カ年にわたり発掘調査を実施した岡山市川入遺跡，倉敷市上東遺跡の報告書であります。両遺跡については，あらためて言うまでもなく，ともに岡山県南部の最大規模の沖積遺跡であり，すでに昭和47年から昭和48年６月まで山陽新幹線工事に伴い発掘調査され，報告書を刊行しています。

今回の発掘調査を実施するにあたっては，県土木部都市計画課との協議により，前回の調査部分に接してすぐ北側を発掘調査することになり，新幹線工事用道路の拡張という形になりました。そういう意味で今回の調査は，前回調査との接合に最大の努力をはらい，的確な事実関係の把握を重点に調査を実施しました。

調査にあっては，都市計画道路埋蔵文化財保護対策委員，地元作業員の方々，また県土木部都市計画課（岡山・倉敷地方振興局各関係課），日本国有鉄道大阪新幹線工事局岡山工事事務所の協力を得て実施し，ここに本書の刊行の運びとなりました。関係各位に感謝の意を表するとともに，不十分な点も多くあると思いますが，本報告書が今後の埋蔵文化財の保護と研究に少しでも寄与できれば幸です。

昭和52年３月

岡山県教育委員会

教育長　小　野　啓　三

例　　言

1．この報告は，都市計画道路（富本町・三田線）建設に伴い，岡山県土木部の依頼を受け，工事に先立って岡山県教育委員会が行った岡山市川入遺跡・倉敷市上東遺跡の発掘調査の概要である。

2．調査期間は

岡山市川入遺跡　1975年５月～11月

倉敷市上東遺跡　1975年12月～1976年11月である。

3．発掘調査対象範囲は，山陽新幹線建設に伴って発掘調査（以下前回調査とする）された路線敷及び工事用道路にそった北側，幅5.4m（一部8.6m）であり，調査区は両遺跡とも前回調査の区名を踏襲した。

4．この報告をまとめるにあたって，都市計画道路埋蔵文化財保護対策委員各位，及び鏡の鑑定は小林行雄京都大学名誉教授，自然遺物の鑑定は岡山大学農業生物研究所笠原安夫教授，木器の樹種鑑定は畔柳鎮岡山大学農学部教授，着色顔料の鑑定は安田博之武庫川女子大学教授，花粉分析は三好教夫岡山理科大学教授，青磁・白磁の鑑定は亀井明徳九州歴史資料館技師の諸先生方にお願いし，有益な教示と助言を受けた。また，畔柳鎮，安田博之両教授からは鑑定の玉稿をいただいた。

5．この報告書の作成は，上記の方々の助言と協力を得て岡山県教育委員会が実施し，執筆は文化課職員柳瀬昭彦，江見正己，中野雅美が担当し，章及び節末に示した。

6．遺物の整理・実測及び実測図の浄写・遺構図の浄写は，おもに柳瀬・江見・中野が行い，遺物写真及び全体編集は柳瀬があたった。また，遺物整理は細田美代子，坪井和江，遺物整理・実測には三枝健二の協力を得た。

7．この報告書の断面図の高度値は海抜高である。また，方位は磁北である。

8．この報告に掲載した「足守川下流域の遺跡分布図」は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の25,000分の１地形図を複製・縮小したものである。（承認番号昭52中複，第70号）また，「川入・上東遺跡周辺地形図」（5,000分の１）は，日本国有鉄道の資料（前回調査分）の浄写である。

9．この報告書で用いる時代区分は，一般的な用い方をし，一部文化史区分を併用する。

10．この報告書では，住居址と土壙については，両遺跡ともに住居址→H，土壙→Pの略号を使用した。また，遺構密度の高かった上東遺跡東鬼川市調査区では，西から８mごとに１～11区を設け，土壙についてはPの前に区名を示した。

目　　次

Ⅰ．周辺の地理・歴史的環境……1
Ⅱ．調査の経緯及び問題点……5
・調査に至るまでの経緯……5
・調査の構成……6
・調査経過概略……8
・調査にかかる問題点……9
Ⅲ．川　入　遺　跡……11
第１章　各調査区の遺構・遺物の概要……12
第１節　八幡西調査区……12
第２節　入溝調査区……15
第３節　大道西Ⅰ調査区……15
第４節　法万寺調査区……32
第２章　小　　結……63
Ⅳ．上　東　遺　跡……71
第１章　各調査区の遺構・遺物の概要……72
第１節　立溝調査区……72
第２節　才の町調査区……74
第３節　亀川調査区……85
第４節　東鬼川市調査区……95
第５節　西鬼川市調査区……142
第６節　田所調査区……154
第７節　下田所調査区……155
第８節　才の元調査区……163
第２章　小　　結……164
付　上東・川入遺跡出土木器の樹種鑑定……169
岡山県倉敷市上東遺跡出土遺物に塗布された赤色顔料物質の化学分析……170
Ⅴ．結　　語……172
川入・上東遺跡の弥生式土器及び古式土師器について……172
川入・上東遺跡の製塩土器について……181
お　わ　り　に……183

図　目　次

第１図　足守川流域の遺跡分布図（1/50,000）……1
第２図　川入・上東遺跡周辺地形図（1/5,000）……挿頁１
第３図　八幡西　遺構配置図……12
第４図　八幡西　平・断面図……13
第５図　入溝　平・断面図……14
第６図　大道西Ⅰ　築地状遺構及び周辺遺構図……16
第７図　大道西Ⅰ　遺構配置図（１）……挿頁２
第８図　大道西Ⅰ　遺構配置図（２）……挿頁３
第９図　大道西Ⅰ　Ｈ－３（103号住居址）平・断面図……17
第10図　大道西Ⅰ　Ｈ－３出土遺物……18
第11図　大道西Ⅰ　Ｐ－１遺構図及び出土遺物……19
第12図　大道西Ⅰ　Ｐ－２遺構図及び出土遺物……19
第13図　大道西Ⅰ　Ｐ－３遺構図及び出土遺物……20
第14図　大道西Ⅰ　Ｐ－４遺構図及び出土遺物……21
第15図　大道西Ⅰ　Ｐ－５遺構図及び出土遺物……22
第16図　大道西Ⅰ　Ｐ－６遺構図及び出土遺物……23
第17図　大道西Ⅰ　Ｐ－７出土遺物……23
第18図　大道西Ⅰ　Ｐ－８遺構図及び出土遺物……24
第19図　大道西１　Ｐ－９遺構平・断面図……25
第20図　大道西Ⅰ　Ｐ－９出土遺物（１）……26
第21図　大道西Ⅰ　Ｐ－９出土遺物（２）……27
第22図　大道西Ⅰ　焼土遺構平・断面図……29
第23図　大道西Ⅰ　包含層出土遺物（１）……30
第24図　大道西Ⅰ　包含層出土遺物（２）……31
第25図　大道西Ⅰ　包含層出土遺物（３）……32
第26図　法万寺　遺構配置図（１）……挿頁４
第27図　法万寺　Ｈ－６遺構図……33
第28図　法万寺　Ｈ－６－１出土遺物……34
第29図　法万寺　Ｈ－６－２・３出土遺物……35
第30図　法万寺　Ｈ－４出土鏡（鈕）……36
第31図　法万寺　Ｈ－４遺構平・断面図……挿頁５
第32図　法万寺　Ｈ－４出土遺物……37

第33図　法万寺　H－5遺構図及び出土遺物……39
第34図　法万寺　遺構配置図（2）……挿頁6
第35図　法万寺　溝－5出土遺物……41
第36図　法万寺　溝－8出土遺物……43
第37図　法万寺　溝－4遺構平・断面図……43
第38図　法万寺　溝－4出土遺物（1）……44
第39図　法万寺　溝－4出土遺物（2）……45
第40図　法万寺　大溝Ⅳ層出土遺物（1）……47
第41図　法万寺　大溝Ⅳ層出土遺物（2）……48
第42図　法万寺　大溝Ⅲ層出土遺物（1）……49
第43図　法万寺　大溝Ⅲ層出土遺物（2）……50
第44図　法万寺　溝－2遺構平面図……51
第45図　法万寺　溝－1・2出土遺物……52
第46図　法万寺　P－3遺構平・断面図……53
第47図　法万寺　P－3出土遺物……54
第48図　法万寺　P－1遺構図及び出土遺物……55
第49図　法万寺　P－2遺構平・断面図……56
第50図　法万寺　P－2出土遺物（1）……57
第51図　法万寺　P－2出土遺物（2）……58
第52図　法万寺　焼土遺構平・断面図……59
第53図　法万寺　東斜面出土遺物……60
第54図　法万寺　土壙及び包含層出土遺物……61
第55図　法万寺　遊離遺物……62
第56図　岡山県内出土軒丸瓦集成図……67
第57図　立溝　断面図……73
第58図　才の町　西端断面図……74
第59図　才の町　遺構配置図……挿頁7
第60図　才の町　溝B遺構平・断面図……75
第61図　才の町　溝B出土遺物……76
第62図　才の町　溝B及び溝3出土遺物……77
第63図　才の町　溝1出土遺物……77
第64図　才の町　P－2遺構図及び出土遺物（1）……78
第65図　才の町　P－2出土遺物（2）……79
第66図　才の町　P－1平・断面図……81
第67図　才の町　P－1出土遺物（1）……83

第68図　才の町　P－1出土遺物（2）……83
第69図　才の町　P－1出土遺物（3）……84
第70図　亀川　遺構配置図……挿頁8
第71図　亀川　平・断面図及び出土木器……挿頁9
第72図　亀川　東斜面出土遺物（1）（下層上段・中層下段）……86
第73図　亀川　東斜面出土遺物（2）（中層）……87
第74図　亀川　東斜面出土遺物（3）（中層）……89
第75図　亀川　東斜面出土遺物（4）（中層上段・上層下段）……90
第76図　亀川　P－2遺構図及び出土遺物……92
第77図　亀川　P－2出土遺物……93
第78図　東鬼川市　遺構配置図 (1)……挿頁10
第79図　東鬼川市　H－1出土遺物……95
第80図　東鬼川市　H－4遺構図及び出土遺物……96
第81図　東鬼川市　H－12・13出土遺物……97
第82図　東鬼川市　H－11・14遺構平・断面図……98
第83図　東鬼川市　H－11・14出土遺物……99
第84図　東鬼川市　H－15遺構平・断面図…… 100
第85図　東鬼川市　H－15出土遺物…… 101
第86図　東鬼川市　H－10遺構図及び出土遺物…… 102
第87図　東鬼川市　H－16遺構図及び出土遺物…… 105
第88図　東鬼川市　H－9遺構平・断面図…… 104
第89図　東鬼川市　建物Ⅰ・Ⅱ遺構図及び建物Ⅱ出土遺物…… 105
第90図　東鬼川市　溝3遺構平・断面図…… 106
第91図　東鬼川市　溝3出土遺物…… 107
第92図　東鬼川市　溝2遺構平・断面図…… 108
第93図　東鬼川市　溝2出土遺物…… 109
第94図　東鬼川市　溝6・7出土遺物…… 110
第95図　東鬼川市　遺構配置図 (2)……挿頁11
第96図　東鬼川市　7－P－52遺構平・断面図…… 111
第97図　東鬼川市　7－P－52出土遺物（1）…… 112
第98図　東鬼川市　7－P－52出土遺物（2）…… 113
第99図　東鬼川市　8－P－20遺構図…… 115
第100図　東鬼川市　8－P－20出土遺物（1）…… 116
第101図　東鬼川市　8－P－20出土遺物（2）…… 117
第102図　東鬼川市　5－P－22（上），8－P－16（下）遺構図及び出土遺物 …… 118

第103図　東鬼川市　５－Ｐ－30遺構図及び上面出土遺物 …… 119
第104図　東鬼川市　５－Ｐ－８遺構図及び出土遺物 …… 120
第105図　東鬼川市　７－Ｐ－50（上），５－Ｐ－６（下）遺構図及び出土遺物…… 121
第106図　東鬼川市　５－Ｐ－１遺構図及び出土遺物 …… 122
第107図　東鬼川市　４－Ｐ－４遺構平・断面図 …… 123
第108図　東鬼川市　４－Ｐ－４出土遺物 …… 124
第109図　東鬼川市　４－Ｐ－２・３遺構図及び４－Ｐ－２出土遺物 …… 125
第110図　東鬼川市　４－Ｐ－２出土遺物 …… 126
第111図　東鬼川市　４－Ｐ－３出土遺物 …… 127
第112図　東鬼川市　４－Ｐ－１遺構平・断面図 …… 123
第113図　東鬼川市　４－Ｐ－１出土遺物 …… 129
第114図　東鬼川市　５－Ｐ－12遺構図及び出土遺物 …… 130
第115図　東鬼川市　７－Ｐ－２平・断面図 …… 131
第116図　東鬼川市　７－Ｐ－２出土遺物 …… 132
第117図　東鬼川市　２－Ｐ－38遺構図 …… 133
第118図　東鬼川市　２－Ｐ－38出土遺物（１） …… 134
第119図　東鬼川市　２－Ｐ－38出土遺物（２） …… 135
第120図　東鬼川市　９－Ｐ－１遺構平・断面図 …… 136
第121図　東鬼川市　９－Ｐ－１出土遺物 …… 137
第122図　東鬼川市　６－Ｐ－30・41・42遺構平・断面図 …… 139
第123図　東鬼川市　６－Ｐ－30・41・42出土遺物 …… 140
第124図　東鬼川市　各種土壙出土遺物 …… 141
第125図　西鬼川市　遺構配置図 ……挿頁12
第126図　西鬼川市　溝１及び６出土遺物 …… 143
第127図　西鬼川市　溝４遺構平・断面図 …… 144
第128図　西鬼川市　溝４出土遺物（１） …… 145
第129図　西鬼川市　溝４出土遺物（２） …… 146
第130図　西鬼川市　溝５遺構平・断面図 …… 148
第131図　西鬼川市　溝５出土遺物 …… 149
第132図　西鬼川市　Ｐ－１遺構図及び出土遺物 …… 151
第133図　西鬼川市　Ｐ－２遺構図及び出土遺物 …… 152
第134図　西鬼川市　池状遺構－１断面図及び出土遺物 …… 152
第135図　西鬼川市　池状遺構－２平・断面図及び出土遺物 …… 153
第136図　田所　全体図・断面図及び出土遺物 …… 154
第137図　下田所　遺構配置図 ……挿頁13

第138図　下田所　西斜面断面図及び出土遺物 …… 155
第139図　下田所　溝１・２・４・５・６出土遺物 …… 156
第140図　下田所　Ｐ－１・Ｐ－２出土遺物 …… 157
第141図　下田所　Ｐ－３遺構図及び出土遺物 …… 158
第142図　下田所　Ｐ－４遺構平・断面図 …… 159
第143図　下田所　Ｐ－４出土遺物（１） …… 160
第144図　下田所　Ｐ－４出土遺物（２） …… 161
第145図　才の元　遺構配置図 ……挿頁14
第146図　才の元　斜面出土遺物 …… 163

表　目　次

表１　岡山県内緑釉出土地名表……64
表２　岡山県内瓦出土地名表（平城宮6225，6663亜型式）……66
表３　大道西Ⅰ　Ｐ－９椀計測表……69
表４　大道西Ⅰ　Ｐ－９小皿計測表……69
表５　東鬼川市　各種土壙出土ガラス小玉及び石鏃一覧表…… 141
表６　川入・上東遺跡出土土器編年表（弥生中期後半～古墳前期）……挿頁15
表７　編年対比一覧表（弥生中期後半～古墳前期）…… 179
表８　川入・上東遺跡出土製塩土器脚部径計数比較表…… 182

図　版　目　次

図版１　(1)　川入・上東両遺跡遠景（北西から）…… 1
　　(2)　川入遺跡遠景（北西から）…… 1
　　(3)　上東遺跡遠景（北から）…… 1
図版２　(1)　八幡西調査区　土手状遺構（南から）…… 2
　　(2)　入溝調査区　遺構検出状況（東から）…… 2
図版３　大道西Ⅰ調査区　築地状遺構周辺（北から，南から）…… 3
図版４　(1)　大道西Ⅰ調査区　Ｈ－３検出状況（北から）…… 4
　　(2)　大道西Ⅰ調査区　微高地西端付近（東から）…… 4
図版５　(1)　大道西Ⅰ調査区　Ｐ－５検出状況（南から）…… 5
　　(2)　大道西Ⅰ調査区　Ｐ－４検出状況（東から）…… 5
図版６　大道西Ⅰ調査区　Ｐ－８検出状況（南から）…… 6

図版７　(1)　大道西Ｉ調査区　Ｐ－９上層遺物出土状況（西から）……７
(2)　大道西Ｉ調査区　Ｐ－９上層遺物出土状況部分（南から）……７
図版８　大道西Ｉ調査区　Ｐ－９検出状況（南から）……８
図版９　(1)　法万寺調査区　Ｈ－４検出状況（南から）……９
(2)　法万寺調査区　Ｈ－５検出状況（南から）……９
図版10　(1)　法万寺調査区　溝状遺構検出状況（東から）……10
(2)　法万寺調査区　溝４遺物出土状況（南から）……10
図版11　(1)　法万寺調査区　遺構検出状況（東から）……11
(2)　法万寺調査区　Ｐ－１検出状況（東から）……11
図版12　法万寺調査区　Ｐ－２遺物出土状況（北から，南から）……12
図版13　(1)　才の町調査区　遺構検出状況（東から）……13
(2)　才の町調査区　作業風景……13
図版14　(1)　才の町調査区　Ｐ－２検出状況（西から）……14
(2)　才の町調査区　Ｐ－２遺物出土状況（北から）……14
図版15　(1)　才の町調査区　Ｐ－１検出状況（東から）……15
(2)　才の町調査区　Ｐ－１曲物蓋出土状況（北から）……15
図版16　才の町調査区　Ｐ－１遺物出土状況（北から）……16
図版17　(1)　亀川調査区　微高地東斜面（南から）……17
(2)　亀川調査区　東斜面中層遺物出土状況（南から）……17
図版18　(1)　亀川調査区　東斜面上層出土遺物……18
(2)　亀川調査区　東斜面上層遺物出土状況（南から）……18
図版19　亀川調査区　Ｐ－２検出状況（北から，南から）……19
図版20　(1)　東鬼川市調査区　遺構検出状況（東から）……20
(2)　東鬼川市調査区　住居址群検出状況（西か）……20
図版21　東鬼川市調査区　Ｈ－10検出状況（南から，東から）……21
図版22　(1)　東鬼川市調査区　８－Ｐ－20検出状況（南から）……22
(2)　東鬼川市調査区　４－Ｐ－４検出状況（東から）……22
図版23　(1)　東鬼川市調査区　５－Ｐ－１検出状況（南から）……23
(2)　東鬼川市調査区　４－Ｐ－３遺物出土状況（西から）……23
図版24　(1)　東鬼川市調査区　２－Ｐ－38検出状況（東から）……24
(2)　東鬼川市調査区　９－Ｐ－１検出状況（東から）……24
図版25　(1)　西鬼川市調査区　遺構検出状況（西から）……25
(2)　西鬼川市調査区　溝４遺物出土状況（東から）……25
図版26　(1)　西鬼川市調査区　溝４及び溝５遺物出土状況（南から）……26
(2)　西鬼川市調査区　溝４及び溝５検出状況（南から）……26

図版27 (1) 西鬼川市調査区　東部分遺構検出状況（東から）……27
(2) 西鬼川市調査区　溝２及び溝６検出状況（南から）……27
図版28 (1) 下田所調査区　遺構検出状況（東から）……28
(2) 下田所調査区　Ｐ－４遺物出土状況（東から）……28
(3) 下田所調査区　Ｐ－３出土ヤリガンナ……28
図版29 (1) 才の元調査区　溝状遺構検出状況（南から）……29
(2) 才の元調査区　溝－Ｄ断面（南から）……29
図版30 大道西Ⅰ調査区　出土遺物……30
図版31 大道西Ⅰ調査区　Ｐ－９出土遺物……31
図版32 大道西Ⅰ調査区　Ｐ－９出土遺物部分……32
図版33 法万寺調査区　Ｈ－４出土遺物……33
図版34 法万寺調査区　溝４，Ｐ－１，Ｐ－２出土遺物……34
図版35 法万寺調査区　大溝出土遺物（Ⅳ層，Ⅲ層）……35
図版36 (1) 川入遺跡出土緑釉……36
(2) 川入遺跡出土白磁・青磁……36
図版37 (1) 才の町調査区　Ｐ－１出土遺物……37
(2) 亀川調査区　東斜面中層出土遺物……37
図版38 亀川調査区　Ｐ－２出土遺物……38
図版39 (1) 東鬼川市調査区　７－Ｐ－52出土遺物……39
(2) 西鬼川市調査区　溝４出土遺物……39
図版40 (1) 東鬼川市調査区　２－Ｐ－38出土遺物……40
(2) 東鬼川市調査区　６－Ｐ－42出土遺物……40
(3) 東鬼川市調査区　９－Ｐ－１出土遺物……40
図版41 下田所調査区　Ｐ－４出土遺物……41
図版42 上東遺跡出土遺物（分銅形土製品・玉類・銅鏃）……42
図版43 上東遺跡出土石器（石鏃・石庖丁・石錘）……43
図版44 才の町調査区　Ｐ－１出土木器……44
図版45 亀川調査区　東斜面中層出土木器……45
図版46 東鬼川市調査区　各土壙出土木器……46
図版47 (1) 上東遺跡各土壙出土種子類……47
(2) 亀川調査区　東斜面下層出土貝類……47
図版48 施文各種……48

Ⅰ　周辺の地理・歴史的環境

倉敷市上東（じょうとう）遺跡（旧都窪郡庄村上東）及び岡山市川入（かわいり）遺跡（旧吉備郡吉備町川入）とは，岡山市と倉敷市の市街地を結ぶ直線上のほぼ中間位置にある。旧山陽道が北２㎞の所を，また山陽本線，国道２号線が南１㎞～２㎞の所を東西に走っている。現在，両遺跡の所在する平野には，ほぼ中間点に足守川が南流し，一帯には何条もの用水が走り，典型的な田園風景が見られ，広大で肥沃な水田が周辺

1．川入遺跡
2．上東遺跡
3．高田遺跡
4．新邸遺跡
5．柿梨塚
6．伝賀陽氏館跡
7．西尾貝塚
8．辻山田遺跡
9．女男岩遺跡
10．楯築遺跡
11．王墓山古墳群
12．日畑廃寺（赤井堂屋敷）
13．矢部貝塚
14．矢部古墳群
15．日差山廃寺
16．二子・御堂奥古窯址群
17．御堂奥遺跡
18．二子古墳群
19．二子堂屋敷廃寺
20．大内田貝塚
21．関戸貝塚
22．吉備中山茶臼山古墳
23．尾上車山古墳
24．矢喜迫山古墳
25．榎高廃寺跡
26．神力廃寺
27．神宮寺
28．小丸山古墳
29．観音山古墳群
30．津寺散布地
31．矢部廃寺
32．惣爪廃寺
33．南崎散布地（特殊器台片？）
34．南崎・黒住・向場古墳群
35．造山古墳
36．榊山・千足古墳他
37．江田・大山古墳群
38．庚神山東遺跡（特殊器台片？）
39．庚神山・雲上山古墳群
40．庚神山窯址

第１図　足守川流域の遺跡分布図（1/50,000）

一帯に展開している。両遺跡の所在地から約1.5㎞北方には「備中国足守庄絵図」に付合する一帯があり，古図に描かれた「大井川」が流走している。これが現在足守川と通称される河川で，当時と局部的には流路を変えているとはいえ，流れの大きな方向はほとんど変化なく南流していて，この下流域の河道をはさむ東西両側に，川入遺跡および上東遺跡が所在するのである。そして，南約１㎞には，現在国道２号線がほぼ東西に走向し，その南には，早島，帯江，丹生などの集落地をのせた比高約30mの低丘陵が横たわり，さらに南方15kmにしてはじめて瀬戸内の海岸線にいたる。その間は，岡山における一大穀倉地帯であるが，児島湾をふくむ広義の岡山平野は，周知のとおり，河川の土砂運搬作用によって形成された単なる扇状地ではなく，時代をおって積み上げられた開田の方向を示すもので，本格的には近世以降実施された人為的干拓による歴史的平野なのである。したがって，海岸線を巨視的にとらえるならば，上記低丘陵の南に施工された著名な「宇喜多堤」の築堤工事が16世紀であった史実は重要な手がかりとなり，低丘陵以南はなおこの時点まで海水の侵入を許していた状況が想定される。そこで，足守川「大井川」の河口つまり児島湾の湾入線はまず庭瀬あたりに想定され，汀線と遺跡所在の位置関係はきわめて至近距離にあったといえる。児島はまさに孤島であり，江戸時代以降の大規模な埋め立てによって形成された広い平野を除去すれば，さらに足守川下流にみられる小丘陵名が早島，松島などかつて島であったなごりをとどめている点を想起すれば，上東，川入一帯は，この多島性の内海を前面にする遠浅の河口であったと考えられる。この想定を支持するかのように足守川下流域周辺の丘陵中腹あるいは当時の海岸線と思われる縁辺に貝塚の存在が知られている。西岡貝塚，山地貝塚，矢部貝塚，西尾貝塚はその陸地側の貝塚であり，羽島貝塚大内田貝塚等は島の貝塚である。これら貝塚は弥生時代以前のものもふくまれるが，当時の海岸線を復原する格好な資料といえよう。この点については，日本建築学会による「倉敷市の地盤」の報告内容によってより確かな状況をとらえることができる。上東遺跡の所在地から西方約２㎞にあたる倉敷市中庄松島北口地内の土壌柱状図の一例を示すと，第一層黄褐色耕土（地表～0.95m），第２層黒色腐蝕物混入層（0.95～1.9m），第３層暗灰色シルト層（1.9～2.8m），第４層灰色貝交りシルト混入砂層（2.8～3.3m），第５層暗灰色腐蝕物交り砂混入シルト層（3.3～6.6m）で，地表下8.8mにして透水層にたどる結果を伝えている。おそらく第２層が生活層であることは，上東遺跡，川入遺跡などの遺構存在面と比較してまず誤りない。そして，少くとも第４層，第５層は湿地帯への自然物堆積層と考えられるので，海辺に近いこの一帯には，ベルト状クリークがかなり発達していたものと思われる。

旧河道の変遷を時代ごとに的確におさえることはなかなか困難な作業であるが，旧河道によって形成された自然堤防のつらなりが，遺跡立地の大きな指標になることはいうまでもない。縮尺の大きな地図や航空写真を利用しながら現地踏査した結果，旧足守川の主河道は二本あるようで，一つには東流する砂川が足守川に合流するあたりから，長田，東加茂，板倉を経て，宮内の南側で吉備中山につきあたり，納所を通り蛇行しながら撫川方面に南下するものが認められる。また一つには，長田のあたりから西加茂を通り，南下してう回しながら新邸，藤ノ木の南側を西流し，王墓山丘陵と岩倉の間をぬけ，南におれて少し蛇行しながらそのまま海に至るものが考えられる。この一帯の旧河道は時期により少なからず流れを変えていたと思われるが，主流や支流に囲まれたいくつかの自然堤防状のた

かまり（微高地）が，弥生時代以降居住地として選地され，集落が形成されたのである。これらの微高地上に形成された遺跡は，弥生時代前期末～中期初めの高田遺跡（註１），おもに同中期中頃の土器が出土し貝塚が知られる新邸遺跡（註２），同前期～後期前半の土器が出土している岩倉遺跡，今回調査の対象となった上東遺跡，川入遺跡などが知られる。

上東遺跡は，昭和の初め以降の田畑の地下げや暗渠，農業用水工事などに伴って土器片をはじめ多量の遺物が出土することから，大規模な集落址が存在するものと想定されてきた。そして，土器が出土する小字名をもとに遺跡群として1963年（昭和38年）発行の「全国遺跡地名表（岡山県）」に集録されることとなった。それ以前，坪井清足，鎌木義昌らによって出土土器をもとにした編年研究が試みられ，中部瀬戸内地方の弥生時代後期を代表する指標として「上東式」を位置づけた(註３)。また水田の地下げ作業などによって出土した壷棺の報告が相前後して公表され（註４），遺跡の重要性がますます補強されていった。しかし，弥生式土器が多量に出土するにもかかわらず，その遺構の存在形態についてはほとんど不明に近い状態であり，あいつぐ小規模な工事によって遺構は部分的であるにせよ徐々に破壊されてきた。しかし，現在まで水田として利用されてきたことが幸して遺跡の大規模な破壊はまぬがれ，思いのほか良好な状態であることが，ひにくにも山陽新幹線の建設に伴う事前の発掘調査によって明らかになった。それは1972年のことで，川入遺跡ともども想定される微高地を横断して巨大な東西トレンチを入れる結果となった。およそ上東遺跡と称される一帯は，実は東西方向に４つの微高地が確認され詳細な微地形も明白になってきた（註５）。

川入遺跡は足守川の東側に形成された，少なくとも３つの微高地上に存在するが，周辺は上東遺跡と同様に水田地帯であり地下げの工事などが行われたことは事実で，その土が近くの家の土壁に使用されており，よく観察すると土器片が散見される。しかしながら，遺跡の存在は上東遺跡ほど明確にはつかまれていなかった。この遺跡もまた山陽新幹線に伴う事前調査で，弥生時代前期～中世に至る遺構，遺物が明らかにされ報告書（註６）に述べるとおりであるが，微高地は通称「板倉川」と呼ばれる旧河道の両側に位置している。この河道が，『備中国風土記』逸文（註７）の「賀夜の郡，伊勢御神の社の東に河あり。宮瀬川と名づく。河の西は，吉備建日子命の宮なりき。比の三世の王の宮を造りし由に，仍りて宮瀬と名づく」の記事にみられる宮瀬川にあたる（註８）と思われ，これこそまさに都宇郡と賀夜郡との古代郡境を示す河道で，法万寺微高地が都宇郡側の，大道西Ｉ微高地が賀夜郡側の泊（とまり）と想定できる。

丘陵に目をやると，上東遺跡のすぐ北側の王墓山丘陵の西端近くには最近とみに注目をあつめている弥生時代後期末ないし古墳時代初期に比定される墳墓群が数多く知られている。たとえば，女男岩，辻山田両遺跡（註９），楯築墳丘墓（註10），甫崎遺跡群，甲辰山東遺跡（註11）などが知られる。中でも甫崎・甲辰山東両遺跡は上記河道の右岸に突出した丘陵頂部にあって，両遺跡間の距離は約1.5㎞である。また王墓山丘陵一帯には100基余りの後期古墳が群在することでも著名である。西側の丘陵には，矢部古墳群，二子古墳群，北西方向には日本第４位の大きさを誇る造山古墳とその陪塚である榊山古墳・千足古墳などが，周辺には甫崎・黒住・向場古墳群，江田・大山古墳群，庚神山・雲上山古墳群などが知られる。平野の東に目をうつすと，吉備中山には３つの 100 m前後の前方後円

（方）墳（吉備茶臼山・車山・矢藤治山古墳）が，あたかも当時想定される南に広がった海を意識するかのように構築されている。平野の北側には，南に張り出した丘陵上に観音山古墳群・名越山古墳群などの後期古墳群が散在する。

一方，周辺には日畑廃寺（赤井堂屋敷），柿梨堂，日差山廃寺，二子堂屋敷，矢部廃寺，惣爪廃寺，吉備中山の北東に神力廃寺，神宮寺，高麗寺跡など寺院関係の遺構も数多く知られ，特に矢部・惣爪廃寺はほぼ南北方向に通じる旧山陽道に面して位置することが想定できる。これらの寺は出土瓦の様式からそれぞれ時期が推定され，平野部に位置するものについては白鳳期から天平期にかけての存続時期が与えられる。山上の寺院址については，平安時代以降の時期のものと思われるが，日差山廃寺出土瓦の文様については白鳳期説と平安時代説があり時期決定に困難を来している。

また，山陽新幹線建設に伴い事前調査された二子御堂奥古窯址群から出土した瓦の様式から，日畑廃寺・矢部廃寺・柿梨堂・惣爪廃寺などの出土瓦と照応でき，都宇郡中寺院の瓦の供給だけではなく下道郡などへの供給も指摘されている（註12）。

以上のように，足守川下流域には弥生時代前期から歴史時代にかけての遺跡が多数みられ，旭川下流域や芦田川下流域とともに「吉備の国」の重要な位置を占める地域である。（柳瀬）

註 1　鎌木義昌・近藤義郎「岡山県高田遺跡」『農耕文化の生成・本文篇』考古学協会編　1961
註 2　近藤義郎「備中新邸貝塚」『古代学研究・8号』　1963
註 3　鎌木義昌・坪井清足「岡山県庄村上東遺跡の土器」『弥生時代土器聚成図録解説・第6輯』弥生式土器文化研究特別委員会編　1954
　　鎌木義昌「各地域の弥生式土器―中国」『日本考古学講座4・弥生文化』　1955
註 4　近藤義郎「備中都窪郡庄村上東出土の弥生式壺棺」『古代学研究・第1巻第2号』　1951
　　間壁葭子「岡山県都窪郡庄村上東遺跡出土の壺棺」『瀬戸内考古学・第2号』　1958
註 5　伊藤晃・柳瀬昭彦・池畑耕一・藤田憲司「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・第2集』岡山県教育委員会　1974
註 6　正岡睦夫・枝川陽・大谷猛「川入遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財調査報告・第2集』岡山県教育委員会　1974
註 7　「風土記・逸文―備中国―」『日本古典文學大系2』岩波書店
註 8　葛原克人「古代吉備豪族の誕生―古墳の形成過程を中心として―」『月刊歴史手帳・第4巻7号』　1976
註 9　間壁忠彦・間壁葭子「女男岩遺跡」・「辻山田遺跡」『倉敷考古館研究集報・第10号』　1974
註 10　近藤義郎「古墳以前の墳丘墓―楯築遺跡をめぐって―」『岡山大学法文学部学術紀要・第37号（史学篇）』　1977・1
註 11　出宮徳尚・根木修両氏の御教示による。
註 12　葛原克人・池畑耕一「二子御堂奥古窯址群」『岡山県埋蔵文化財調査報告・第2集』岡山県教育委員会　1974

Ⅱ　調査の経緯及び問題点

調査に至るまでの経緯

都市計画道路は，野殿，三田線として昭和42年に計画決定されていた。しかし，その計画とは別に日本国有鉄道新幹線工事局（以下国鉄）は，山陽新幹線計画にもとづき，この一帯をはさむ両側ですでに工事着工を行っていた。このため，岡山県土木部都市計画課（以下都計）は国鉄に対して計画変更を求めたが，結局，都計側が路線変更をすることになり，国鉄側は新幹線建設の際の側道を提供するということで，昭和48年３月12日知事と国鉄の間に協定が結ばれた。その時点で都計側は「富本町・三田線」と名称を変更し，工事用道路の北側を5.4m（一部8.6m）拡幅し，計11m（一部14m）路線敷として決定した。都計は新幹線建設の際に一挙に調査を行いたいと希望をもっていたが，諸般の事情により対応ができなかった。このため，都計は昭和49年４月になって岡山県教育庁文化課に調査を依頼したものである。当委員会としてはこれに対応する体制が整わず，丸１年遅れて昭和50年５月７日から発掘調査に着手したものである。

資料１.

都 計 第　45　号
昭和49年４月20日

岡山県教育庁文化課長　あて

岡山県土木部都市計画課長名

都市計画道路野殿三田線築造に伴う埋蔵
文化財の発掘調査等について（依頼）

このことについて，別添図書のとおり築造工事に着手したいので早急に調査をお願いします。
なお，必要概算経費をお知らせください。

資料２.

文財二第　50　号
昭和49年４月27日

岡山県土木部都市計画課長　あて

岡山県教育庁文化課長名

都市計画道路野殿三田線築造に伴う
埋蔵文化財の発掘調査等について（回答）

このことについて，昭和49年４月20日付都計第45号で依頼のありました発掘調査ならびに必要概算経費について次のとおり回答します。

(1) 発掘調査について

発掘調査については当課の今年度計画には入っておらず，人員等の確保もされておりませんので，来年度以降の計画に含めるよう検討します。

(2) 発掘調査の必要な遺跡および調査対象区域について

発掘調査の必要な遺跡は川入遺跡（岡山市川入），上東遺跡（倉敷市上東）の２ケ所です。これらの遺跡はともに岡山県南部地方では最大規模の低湿地遺跡であり，山陽新幹線工事の際の発掘調査においても10数名の調査員と数千万円におよぶ経費をかけ，２年にわたる調査を必要とした遺跡であります。この山陽新幹線工事の際の調査においては，川入，上東両遺跡とも11ｍの内5.6ｍ分はすでに調査を行っておりますので，残りの5.4ｍが調査対象地域になり，その調査対象地域及び面積は下記のとおりです。（別添図参照）

川入遺跡

①	八幡西地区	20ｍ×5.4ｍ	108㎡
②	入溝地区	20ｍ×5.4ｍ	108㎡
③	大道西(Ⅰ)地区	130ｍ×5.4ｍ	702㎡
④	法万寺地区	120ｍ×5.4ｍ	648㎡
	小計	290ｍ×5.4ｍ	1,566㎡

上東遺跡

①	立溝地区	20ｍ×5.4ｍ	108㎡
②	才の町地区	70ｍ×5.4ｍ	378㎡
③	亀川地区	20ｍ×5.4ｍ	108㎡
④	東鬼川市地区	100ｍ×5.4ｍ	540㎡
⑤	西鬼川市地区	60ｍ×5.4ｍ	324㎡
⑥	下田所地区	60ｍ×5.4ｍ	324㎡
⑦	才の元地区Ａ地点	40ｍ×5.4ｍ	216㎡
	Ｂ地点	20ｍ×5.4ｍ	108㎡
	小計	390ｍ×5.4ｍ	2,106㎡
	合計	680ｍ×5.4ｍ	3,672㎡

(3) 必要概算経費について

このことについては，昭和48年度における山陽新幹線工事に係る発掘調査の際の単価（資料別添）をご参照ください。

調査の構成

発掘調査は，岡山県教育委員会が昭和50年度，51年度の二カ年継続で行った。調査にあたり岡山県

遺跡保護調査団の推薦を受け，下記の方々に都市計画道路（富本町・三田線）建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員を委嘱した。

都市計画道路埋蔵文化財保護対策委員（アイウエオ順）（昭和50年度・51年度）

岡山大学	小野　昭
県立玉島高校	小野一臣
阿哲郡大井野小学校	高見周夫
岡山市教育委員会	出宮徳尚
県立矢掛高校	中田啓司
自家商業	西岡憲一郎
倉敷考古館	間壁葭子
岡山市立桑田中学校	水内昌康

対策委員各位からは，二年間にわたり助言と協力を得た。深く感謝の意を表したい。

岡山県教育委員会

教育長	小野啓三
教育次長	岡田政敏（昭和50年度）・佐藤章一
文化課長	小林孝男
参事	富岡敬之（昭和50年度）・西口秀俊
文化主幹	水田　稔
文化係長	小川佳彦
文化財二係長	光吉勝彦
文化財保護主査	葛原克人
文化財保護主事	柳瀬昭彦
主事	江見正己・中野雅美（昭和50年度）

調査協力者

板谷俊二・板谷隆雄・犬飼元四郎・内田慧・内田純之・内田竹三・内田昇・内田秀雄・江国正明・熊代梅夫・高木三郎・高木昇・高木彦吉・高木正治・坪井金平・坪井安雄・中村勲・難波斐夫・難波善吉・難波和弐・林義夫・松永誠司・森安浩・吉田勇・吉田麿佐夫・犬飼孝恵・犬飼弘子・犬飼美雪・内田和子・内田兼子・内田操・小野文江・桐野輝子・坪井和江・細田美代子・吉田喜代子・吉田千恵子・渡辺歌子

上記の方々には，調査作業員として御支援を受けました。中でも川入・上東両遺跡二年間にわたり，作業員の中心となって御助勢，御協力をいただいた内田竹三氏，川入地区の町内会長でもあり作業員としても参加していただき，いろいろ便宜を計ってくださった高木彦吉氏に厚く御礼申し上げます。

また学生，板谷幸彦・岡崎真・川下順子・三枝健二・中田泰嗣・松浦初美・松田順子・森下恵介・森田友子・森田義孝・山下貴弘の方々には多大の調査援助をいただいた。さらに学生，大沢さつ

き・那須三枝子・難波智重美・難波和児・平井泰男・山本悦世・渡辺京子の方々には報告書作成の援助を得た。記して感謝の意を表します。（柳瀬）

調査経過概略

昭和50年５月の連休あけより翌年の10月下旬までの約18カ月をかけて，川入・上東遺跡の発掘調査を行った。そのうち，川入遺跡に約７か月，上東遺跡に約９カ月を要した。この間，調査の進行に障害となった原因として次の４項があげられる。

1．新幹線調査の際，使用した杭がどの調査区にも残っておらず，グリッド割り付けの際困難をきたした。

2．計画時点においては発掘幅は全て5.4ｍであったのに対し，実際には8.6ｍ幅の調査区が２箇所あった。

3．両遺跡とも海抜1.5ｍ前後に存在するため，地下水位が高く，発掘作業中に出水する個所や若干の雨量においてもグリッド一面に雨水が溜る箇所ができ，また田植期から収穫前までの３日に一度の「番水」のため水がグリッド内にしみ込んでくるなど，排水作業に多くの時間を割かれた。

4．調査の追い込みの時期にかかる昭和51年４月から，調査員１名の減員となった。

以上の状況下において，当初計画より２カ月近く遅れて調査を終了したものである。

日誌抄

昭和50年

4月23日　川入遺跡事務所設置
4月24日　発掘機材搬入
5月６日　第１回対策委員会
5月７日　大道西調査区発掘調査開始
5月19日　入溝調査区発掘調査開始
5月21日　法万寺調査区内において，４箇所発掘調査区内へ一部工事が侵入，そのため工事関係者（県土木課，銭高組）立ち合いのもとに，厳重に申し入れを行う。
5月29日　入溝調査区　発掘調査終了
7月９日　第２回対策委員会
7月18日　法万寺調査区　発掘調査開始
9月22日　第３回対策委員会
10月２日　八幡西調査区　発掘調査開始
10月30日　八幡西調査区　発掘調査終了
11月13日　第４回対策委員会
11月15日　川入遺跡現地説明会
11月17日　事務所を川入から上東へ移す。

11月25日　立溝調査区　トレンチ設定　発掘調査開始。

12月２日　立溝調査区　発掘調査終了。才の元調査区　発掘調査開始。

昭和51年

１月14日　下田所調査区　発掘調査開始

１月19日　西鬼川市調査区　発掘調査開始

１月24日　第５回対策委員会

１月26日　才の元調査区　発掘調査終了

２月９日　田所調査区　トレンチ設定，発掘調査開始

２月25日　才の町調査区　発掘調査開始

３月８日　亀川調査区　発掘調査開始

３月９日　田所調査区　発掘調査終了

３月30日　下田所調査区　発掘調査終了

４月10日　西鬼川市調査区　発掘調査終了

６月14日　東鬼川市調査区　発掘調査開始

９月25日　亀川調査区　発掘調査終了

10月３日　上東遺跡現地説明会

10月11日　才の町調査区　発掘調査終了

10月23日　東鬼川市調査区　発掘調査終了

10月28日　事務所撤去　図面類・遺物などを西古松収蔵庫へ搬出
川入・上東遺跡の発掘調査終了。　（江見）

調査にかかる問題点

今回の発掘調査に入るにあたっては，前記「調査に至るまでの経緯」の中で述べたように，前回新幹線調査と深くかかわり，このことが調査に強く影響している。結果的には，同一遺跡であるにもかかわらず発掘時期がずれたため，前回の調査部分の拡張調査という形態になった。したがって，前回の報告書第Ⅰ部・第１章「本線敷と側道敷の分離調査の問題」で指摘のあった内容が，そのまま現実になったことである。つまり，前回調査で問題を残しながらも，調査に入った時点で，予想される都市計画道路のルート変更等の根本的な保存処置は取れなくなったことである。

今回の調査開始時の都市計画道路埋蔵文化財保護対策委員会議において，委員各位から提出された問題点及び要望は，次のようなものであった。

１）側溝工事の時に用地外が掘り起こされることも予想されるため，用地外発掘の件につき都市計画課との話し合いをして欲しい。

２）側道つなぎの部分を，極力前回の調査結果と合わせるよう努力すること。

３）高縄手地区（川入遺跡）での条里遺構の確認に努めること。

4）残土処理の件につき，日本国有鉄道大阪新幹線工事局と協議を行うこと。

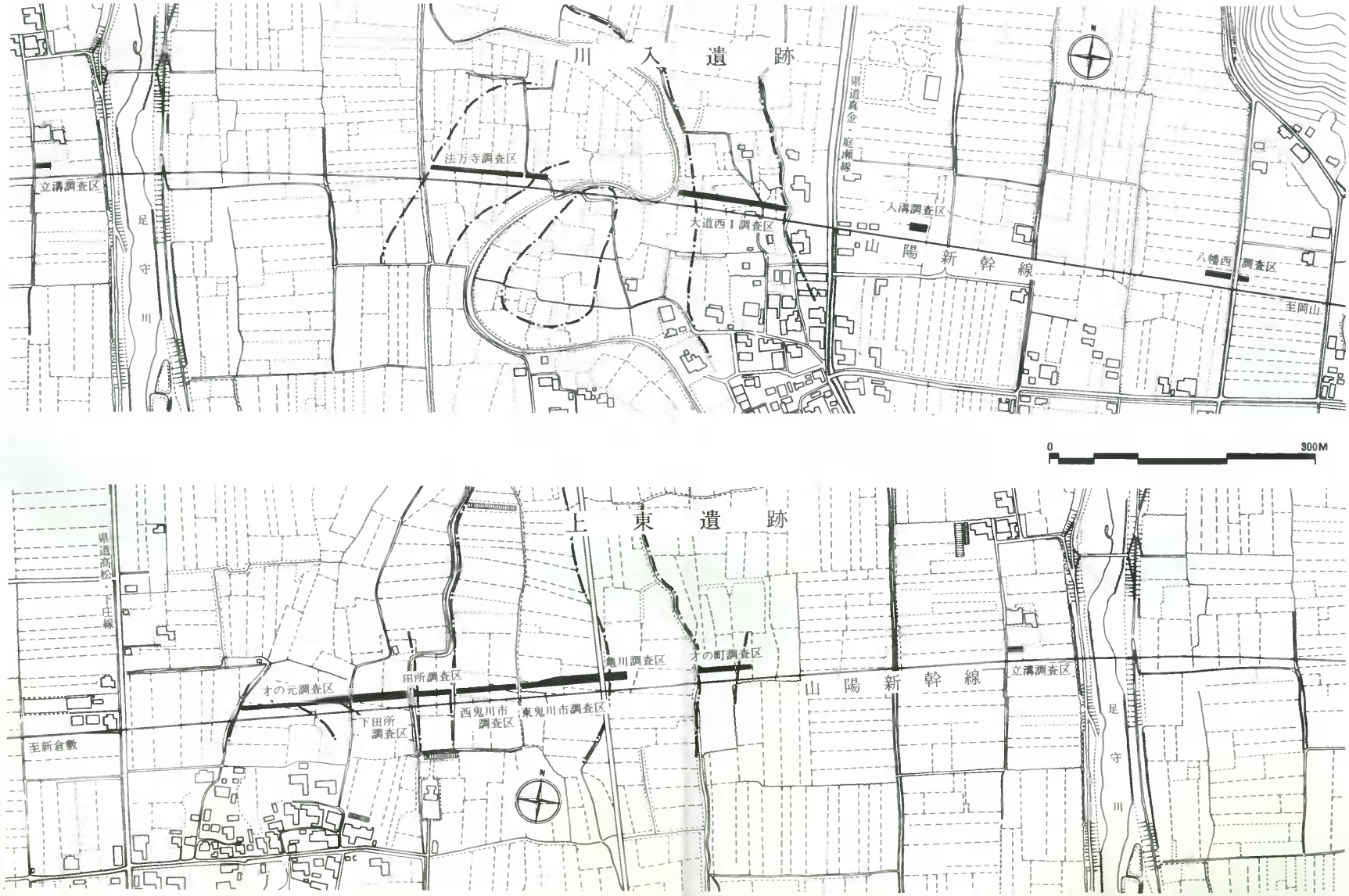
1）については，都市計画課と協議の結果，稲の作付けとの関連で現時点では調査は不可能であり，都市計画道路工事側に用地外は極力掘らないということを申し入れる形になり，都市計画課長の承諾を得たものである。

2）については，川入遺跡では前回調査の側道敷から今回調査区内にセメント塊が張り出していたこと，また前回調査の時のグリッド設定の基礎杭が見つからなかったことに起因するものである。前者についてはブレーカー（削岩機）を使用して取りのぞき，後者については取りのぞいた時に発見したグリッド杭及び調査終了後のグリッド基本線の正確な方位を検討し，検出した南北溝のつながり等を点検しつつ前回と今回との調査結果が図上で接合できるよう図面合わせには特に注意をはらい，修正を加える方法をとった。上東遺跡では，前回調査のグリッド杭は見つからなかったものの，新幹線橋脚位置，都市計画道路工事用中心杭から割り出したグリッドが，前回とほとんど違いなく一致した。

3）については，都市計画課との協議で，事前に立ち合い，断面観察の上調査が必要であるか否かを決めることになっていたが，事前に連絡がないまま工事に入られる結果となり，反省しなければならない点を残した。

4）については，日本国有鉄道大阪新幹線工事局に申請し，現状復元の条件付きで許可された。

以上概略的に述べてきたが，今回調査の大きな問題は1）と2）に集約されよう。1）の問題は，単に今回の調査だけにとどまらず，それ以前にもあったであろうし，また今後も持ち上がるであろうと思われる。以前の調査においては，ケース・バイ・ケースで処理されてきたであろう。しかし，工事の技術的限界で用地外をも掘り下げることは事実であり，その場合，記録保存の面から見れば基本的には発掘調査は用地外まで含めてする必要があり，しかしながらそうなると作付補償や借地の問題もおこり，これに要する予算的処置の面をも含めて，今後検討されなければならない事項であろう。2）の問題も今後おこりうるもので，特に川入遺跡の場合は，前調査者と今回調査者が違うということで，発掘対象地がカーブしているという悪条件も重なり，同一遺跡のつなぎ部分でのくい違いが生じたものである。以後，同一遺跡に接して調査がなされる場合には，前調査者の少なくとも一名以上が加わることが望ましい。（柳瀬）



第２図　川入・上東遺跡周辺地形図（1/5000）

Ⅲ 川入遺跡

第１章　各調査区の遺構・遺物の概要

第1節　八　幡　西　調　査　区

この調査区は，川入遺跡中最も東側に位置する。東には吉備の中山がせまり，周辺は水田地帯が広がる。この地域は，地表が海抜１ｍ前後と周辺にくらべ最も低い。調査は，周辺の水位が高いのと，強度な粘土のため困難をきわめた。

今回の調査は，市道をはさんで西に南北5.4ｍ×東西28ｍ；東に南北３ｍ×東西11ｍの調査区をもうけた。西調査区の基本的な堆積層は，上から耕土，青灰色砂質土層，淡灰色粘質土層，黄灰色粘土層，暗灰色粘土層と続き，その下層の青灰色粘土層で前回調査で確認された土手状遺構，溝を検出した。遺物は，暗灰色粘土層に若干の須恵器，土師器の細片を確認した。西調査区は，前回調査で土器が少量出土したため念のために調査区を設定したが，遺構，遺物は認められなかった。

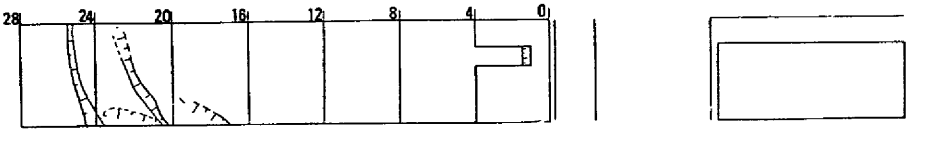
１）土手状遺構

＜**遺構**＞東調査区の西端に位置する。青灰色粘土層を削り出した土手状の遺構を２～３ｍ確認した。方向は，南北側で少しふくらみ気味だがほぼ南北方向に延びる。上面には石が散乱し，土手状の肩部に１列の杭列が存在する。杭の太さは５～８㎝で，長さ70～90㎝残存していた。打たれている方向には法則性はなかった。杭の樹種は，アカマツ，ネズミサシ等であった。

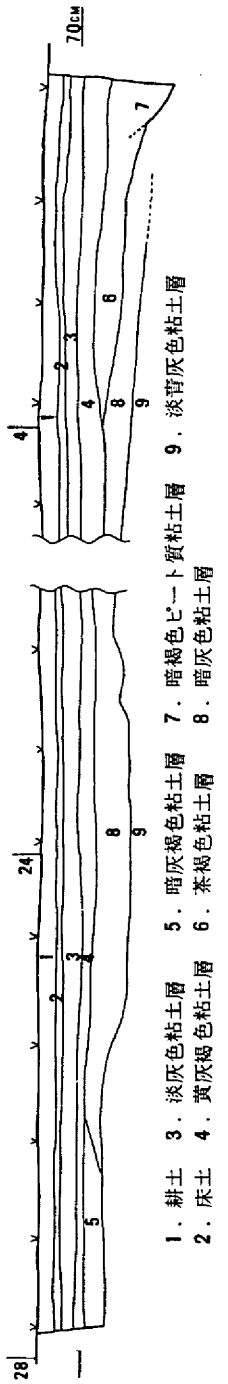
土手状遺構の東側には，幅３～４ｍの溝状の落ち込みが存在する。土手状遺溝に伴う排水用の溝状のものであろうか。落ち込みには，暗茶褐色粘土層が堆積しており，東側肩部から数片の弥生時代中期後半の土器が出土している。

時期については，前回調査で平安時代と推察しているが，今回の調査では，土手状遺構から時期を推定しうる遺物は検出されなかった。

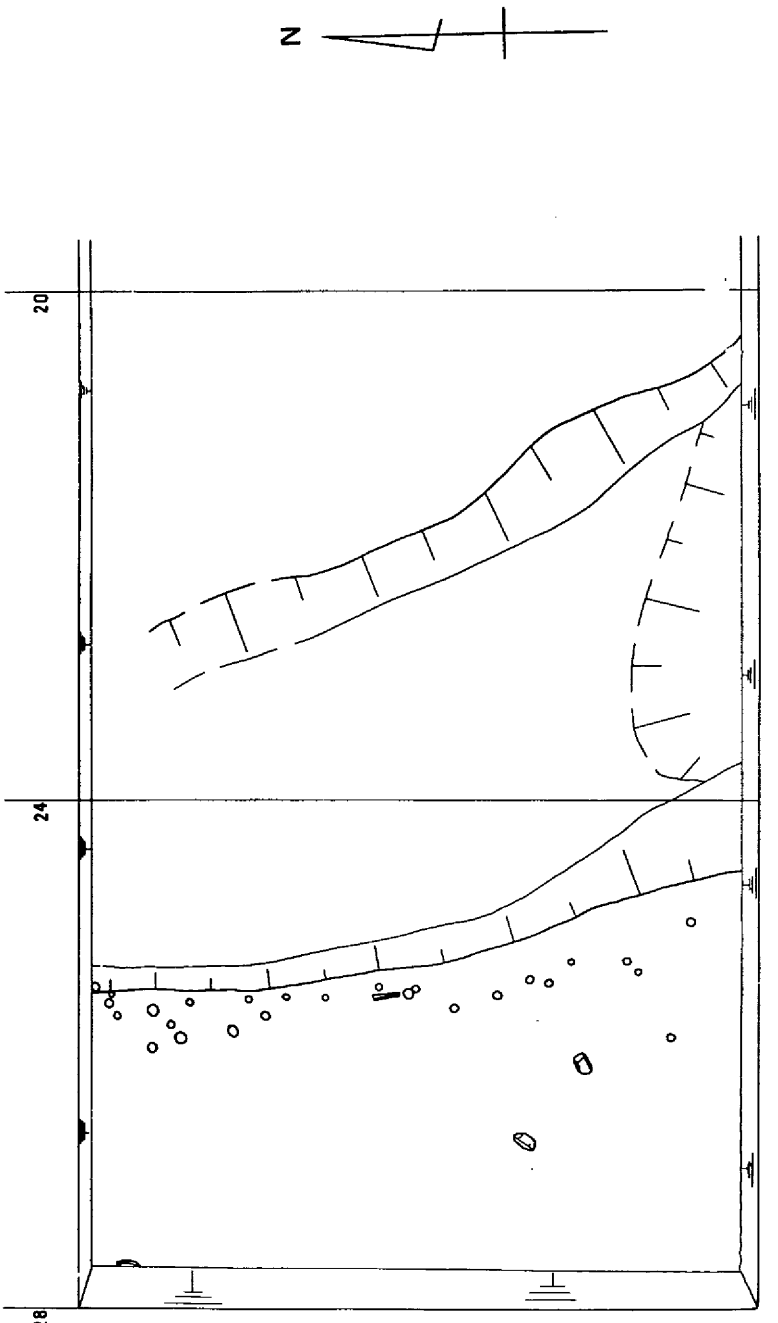
２）溝



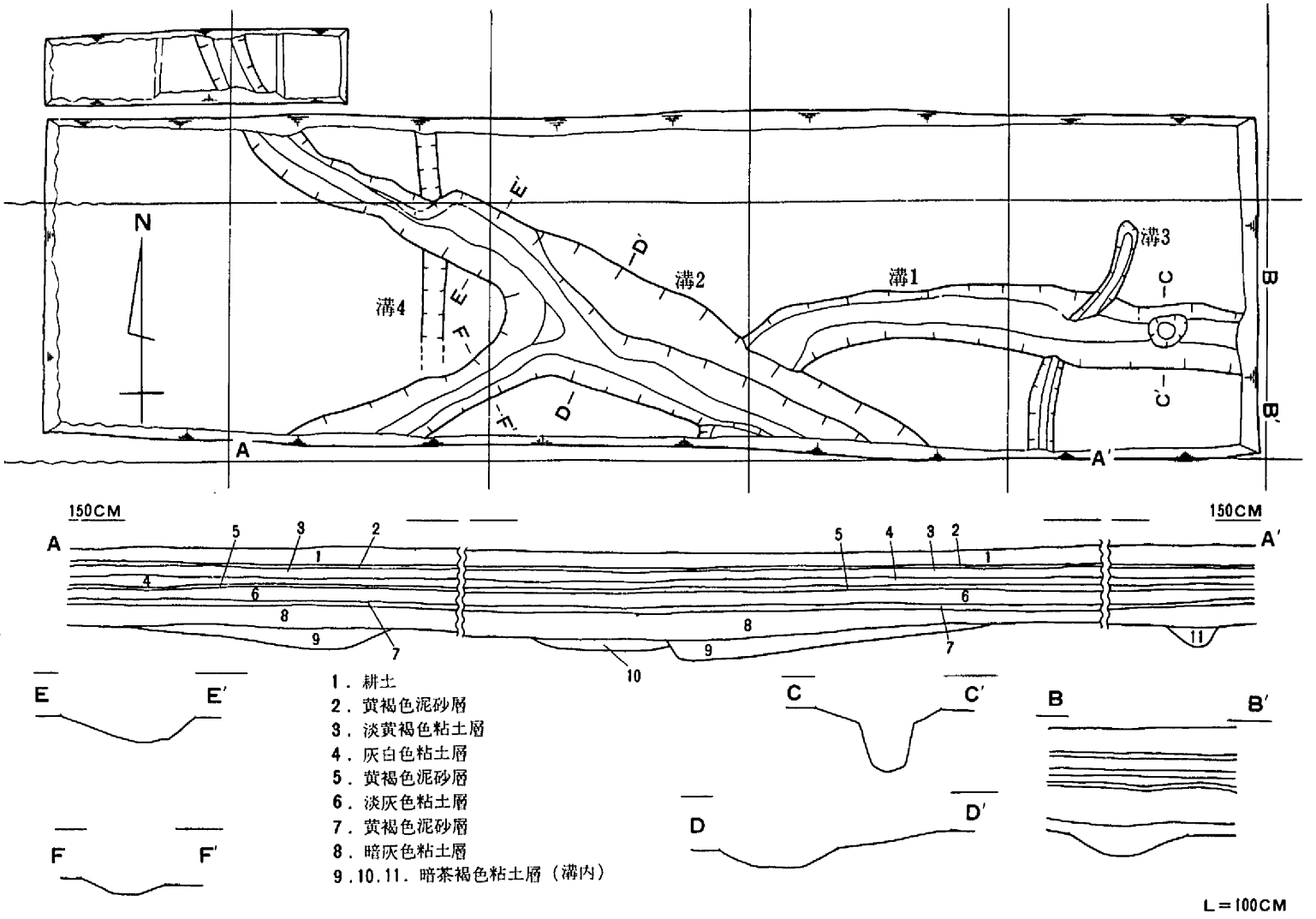
第３図　八幡西　遺構配置図



1．耕土　3．淡灰色粘土層　5．暗灰褐色粘土層　7．暗褐色ピート質粘土層　9．淡青灰色粘土層
2．床土　4．黄灰褐色粘土層　6．茶褐色粘土層　8．暗灰色粘土層



第4図　八幡西　平・断面図



第5図　入溝　平・断面図（1/100）・（1/50）

＜遺構＞東調査区の東端に位置する。水路が接近しているため，トレンチにより西の肩部と一部確認したにとどまった。堆積土は暗褐色ピート質粘土層で，遺物は出土していない。　（中野）

第2節　入　溝　調　査　区

この調査区は，県道真金～吉備線の東約75m地点にあたる。今回の調査では，前回調査で確認されていた溝状遺構を追求する目的で，東西19m，南北7mの調査区を設定した。層位は第1層から第8層まで特に変化はなく水平堆積を示すが，その下層の灰白色粘土層を切り込んで溝が4本検出された。溝は4本ともに深さ20～30cmで埋土は暗灰色粘土を呈し，遺物は出土していない。

溝の切り合い関係からみて溝1が最も古いと考えられるが，他は不明である。溝の時期は不明であり，方位が定まらず蛇行するこれらの溝の検出状況から，条里の溝とは考えがたく，性格も不明である。　（柳瀬）

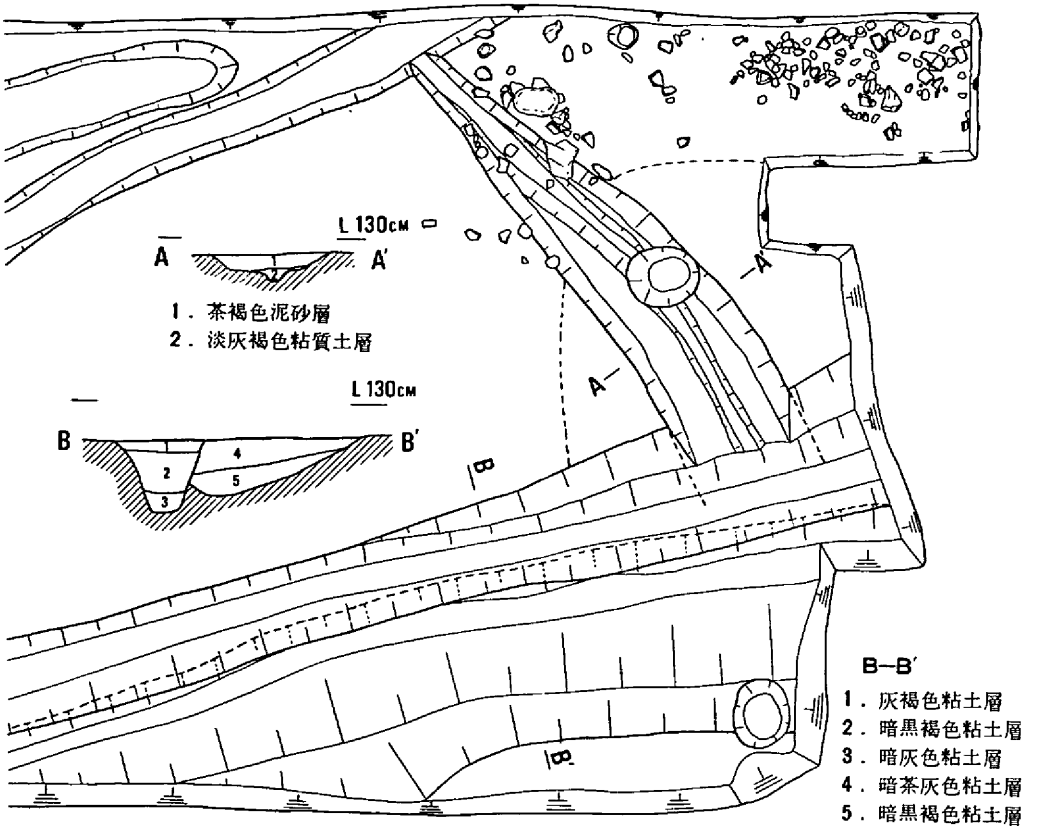
第3節　大道西Ⅰ調査区

本調査区は県道真金～吉備線の西側に位置し，板倉川の東方に形成された微高地上約5.4m×85mの範囲が発掘調査対象となった。微高地上の遺構は後世の削平等によって良好な残存状態を示さず，遺構検出面は表土下約30cmに位置する。遺構は前回の調査で検出された住居址・溝などの遺構の続きの他，新たに土壙群・柱穴群を検出した。検出遺構・出土遺物の示す年代は弥生時代前期から鎌倉時代初頭に比定される。大半の遺構は耕土直下の包含層から掘りこまれているが，農道下から東方微高地の傾斜しはじめる農業用水路までの間では，基盤層である黄褐色砂層を切りこんだ溝・築地状遺構の前回調査の続き部分を検出した。遺構の上層は，弥生～鎌倉時代の遺物を含む包含層が厚く堆積しているが，特に奈良時代の須恵器・瓦，平安～鎌倉時代の土師器が顕著に認められた。　（柳瀬）

以下，遺構・遺物の概略である。

1）築地状遺構

＜遺構＞この調査区の東端に位置する。前回の調査では，西側の段が高さ30cm前後残存していたが，今回の調査では，基盤層の黄褐色泥砂層が西側に向ってゆるやかに高くなる部分（第6図点線）を検出したにとどまった。一方北側は，北壁から約1m南で10cm前後の段をもって黄褐色泥砂層が下がり，北壁との間には，瓦，土師器，小石などが集中散布していた。東側は農業用水路のため調査はできなかったが，築地状遺構は，ここで一旦とぎれるのか，または東に続く屈曲部と想定される。しかし，微高地は東に傾斜しており，東側に続く可能性は薄いと思われる。また，築地状遺構の上面に平行して南北方向に走る溝9は，北西に方向を変えて二段堀りになっており，北側では細くなる。堆積土は，下層が淡灰褐色粘質土層，上層が茶褐色泥砂層であった。遺物は須恵器の細片を数点検出したにすぎない。



第6図　大道西Ⅰ　築地状遺構及び周辺遺構図（1/50）

＜遺物＞北壁際に検出した遺物は，平城宮6225式亜型式の軒丸瓦を始め，後述する瓦（第23図，第24図）を中心に，土師器片など奈良時代の時期を示す土器である。

また，農道から水路にいたる間のゆるやかな微高地傾斜面に厚く堆積する包含層中には，築地状遺構と同時期の土器を始めとして，弥生時代～鎌倉時代の土器が多量に出土した。

2）溝1・2（前回調査溝101・102）

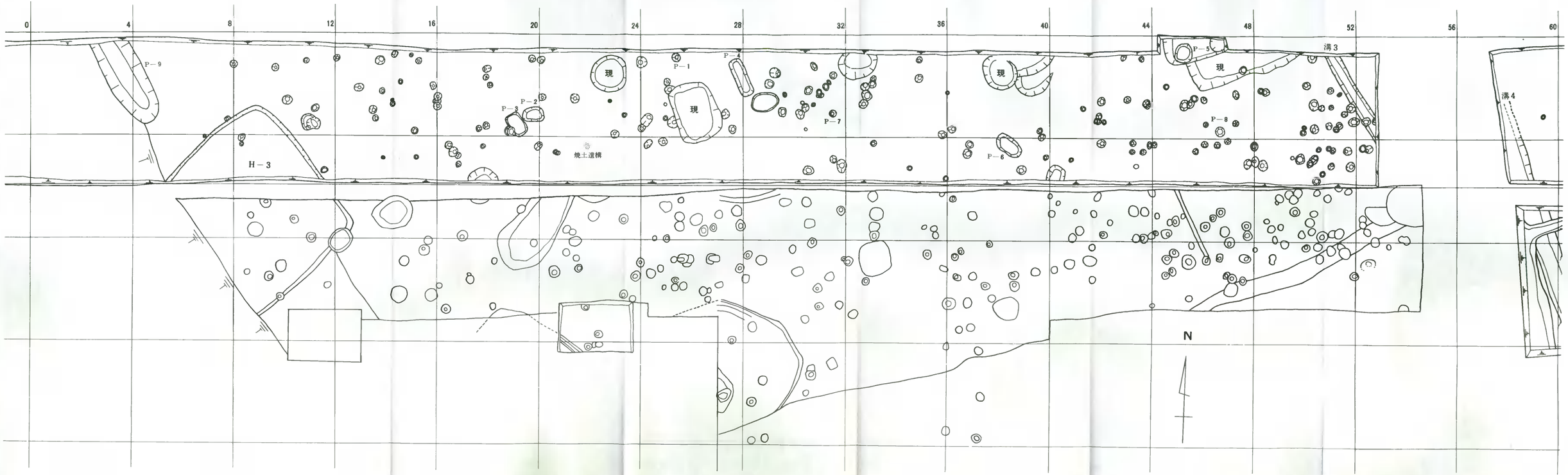
両溝とも，微高地が徐々に傾斜してもう一度水平面を保つあたりの調査区東端で検出された。切りあい関係から溝2が溝1のうえに重複して南西から北東方向に流走している。遺物は，両溝とも弥生時代後期後半の土器を含んでいたが，特に溝2からは，弥生時代前期の土器が数片出土している。

（中野）

3）溝　3

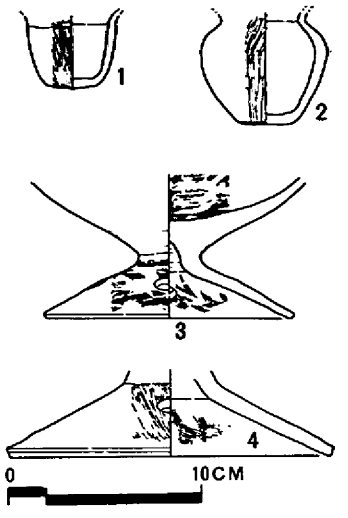
農道をはさんだ調査区東端から検出されたもので，南東方向に延びている。幅50cm，深さ20cmを測る。遺物は全く含まない。前回調査の溝103の延長部分と思われたが，幅・深さともに違い，当溝は農道下を流走しているらしい。時期は不明である。

第7図　大道西Ⅰ　遺構配置図(1)（1／100）



第8図　大道西Ⅰ　遺構配置図(2)（1／100）

第9図　大道西Ⅰ　H－3(103号住居址)平・断面図（1/60）



第10図　大道西Ⅰ　H－3出土遺物

4）溝　4

前回調査で検出されている溝104の北側延長部分にあたるもので，溝の東肩部分を検出した。推定幅100㎝深さ50㎝を測る。遺物は皆無に近く，時期決定はできなかったが，前回調査では弥生時代中期後半の土器片が出土している。

5）溝7・8

前回調査で検出された溝103の支流にあたると思われるもので，調査区中央を北東方向に延びており，途中から分岐する。幅50㎝，深さ20㎝を測る。遺物は皆無に近いが，遺構発見面の状況から中世の溝である可能性が強い。　（江見）

6）H－3

＜遺構＞微高地の西端部に位置する。この住居址は，前回の調査で一部を確認していたが，今回の調査によって残存する住居址一軒分の全容をほぼ知ることができた。ただし，住居址の西端部は，基盤層が西へ傾斜している部分にあたるため，自然浸蝕をうけてやや検出が困難であった。住居址の形態は隅丸方形で，規模は一辺約6ｍ～6.4ｍの竪穴式住居址である。そして，住居壁に添って壁体溝を認めることができる。床面には，多量の炭化材が検出でき，火災に遭ったものと思われる。さらに床面には，図示した土器の他に壺形土器などの破片も出土している。土器の出土状況は，住居址中央部にはあまりなく住居址内の外縁に認められた。柱はＰ－１，Ｐ－２を対とする４本柱と考えられるが，柱間は4.7ｍと広い。

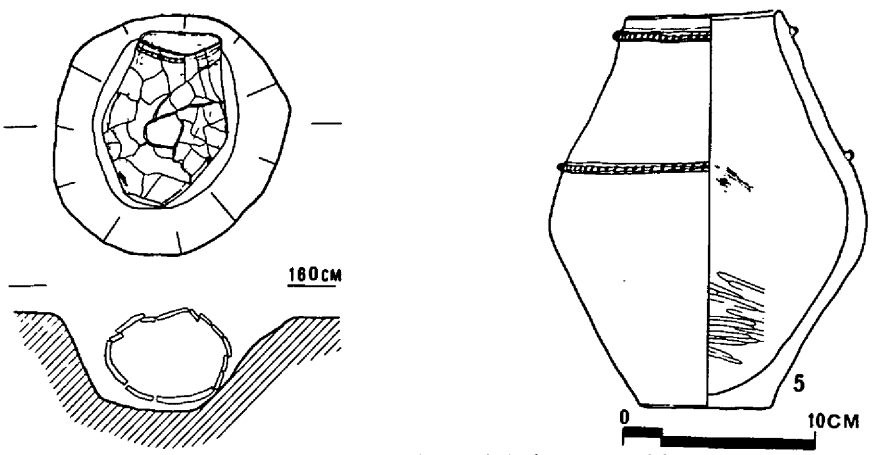
＜遺物＞高杯形土器（３，４）は，短かい脚部で４個の円孔をもつ。脚部内外面は，細かい刷毛目で調整したのちナデによって仕上げている。杯部内面も，刷毛目，ナデによって仕上げている。また，小型土器（１，２）も出土している。

出土遺物が量的に少なく，また破片なのではっきりした時期は決めがたいが，才の町Ⅰ～Ⅱ併行と思われる。前回調査では，雄町12類併行期としている。　（中野）

7）P－1

＜遺構＞微高地中央部の用地内北壁際に位置する。径約35㎝，深さ約20㎝の土壙である。中からは口縁部を北側にして，横倒しの状態で，土器１個体部分が出土した。埋土は茶褐色泥砂土で，炭化物を少量含んでいた。

＜遺物＞５は，無頸の壺形土器である。口縁部と胴部上半に，それぞれ一条ずつ刻み目をもつ凸帯を有している。凸帯は肩部に沈線を入れ，その上に貼り付けている。外面は箆状のものでていねいに整形されており，内面は底部近くに数条の箆磨き痕，ほぼ中央部に刷毛目がわずかにみられる他は観



第11図　大道西Ⅰ　P－1遺構図（1/10）及び出土遺物

察しがたい。また底部には，少なくとも３粒の籾痕と思われるものが認められる。

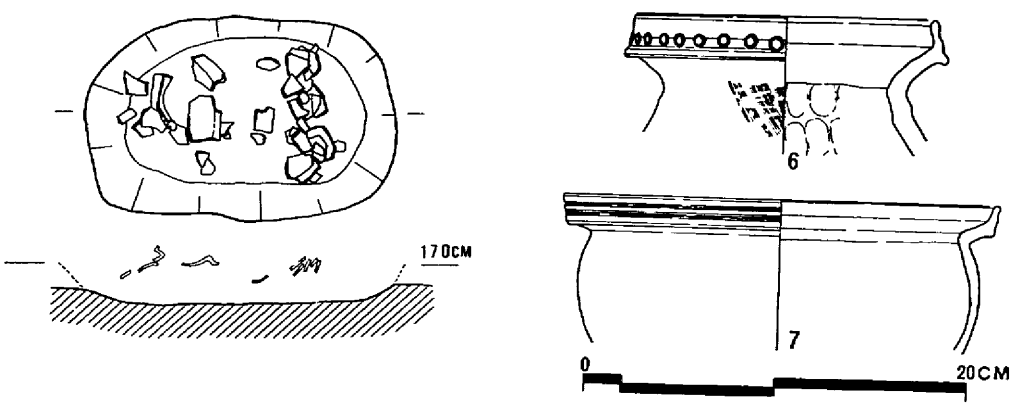
諸要素からみて，弥生時代前期の範疇に入る土器と考えられる。

8）P－2

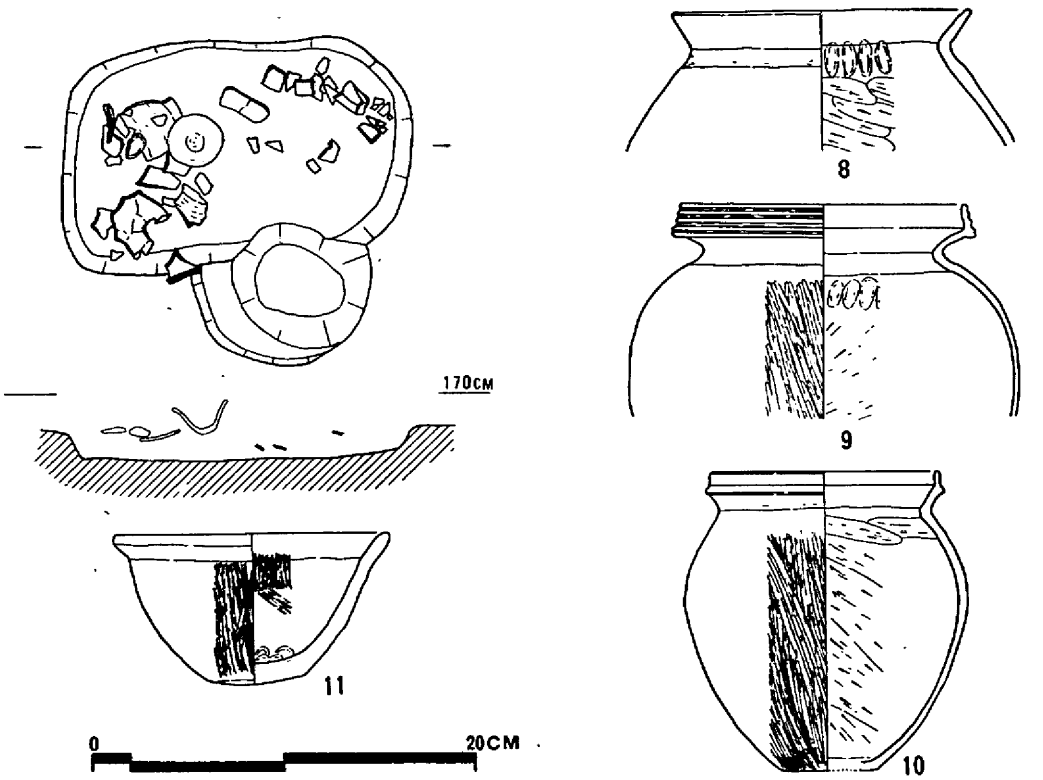
＜遺構＞微高地中央部やや西寄りにP－3と隣接して位置する。長径約85㎝，短径約55㎝を測り，長軸を東西方向におく楕円形の土壙である。埋土中の暗茶褐色泥砂土からは，底から10㎝前後浮いた状態で土器が出土した。

＜遺物＞壷形土器（6）は，口縁端部がやや内傾し上下に拡張する。口縁部端面には，連続して竹管文が廻っている。また口縁部には，一部黒斑があり丹の付着もみられた。頸部は「ハ」字形に開き，器壁は厚い。外面を縦方向の刷毛目で調整したのち，ナデによって仕上げている。内面には指頭圧痕が残る。

また上記の土器以外には，鉢形土器（7），壷形土器，甕形土器の胴部破片が少数出土している。



第12図　大道西Ⅰ　P－2遺構図（1/20）及び出土遺物



第13図　大道西Ⅰ　P－3遺構図(1/20)及び出土遺物

9）P－3（第13図）

＜遺構＞P－2と近接する位置に，一部を中世の土壙に切られて検出された。主軸はほぼ北西一南東に向け，長軸90cm，短軸60cmの楕円形を呈する。土壙内からは，完形の鉢形土器などの遺物が出土している。

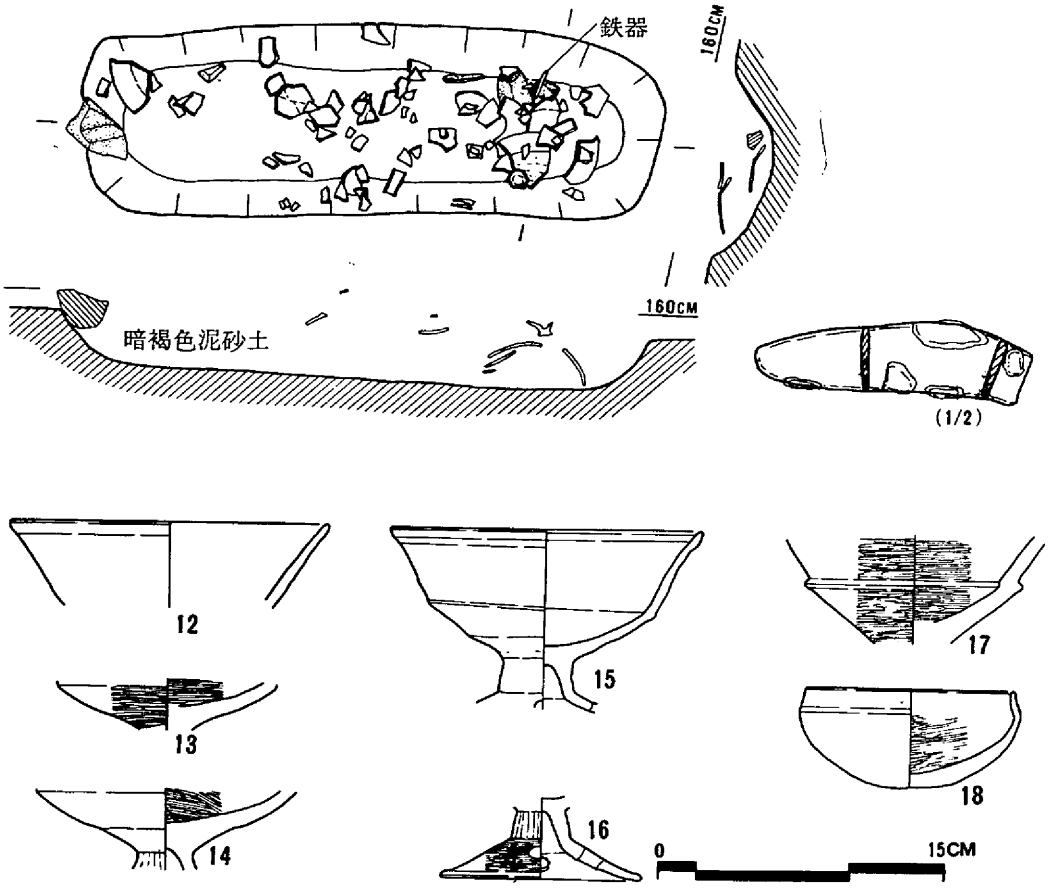
＜遺物＞甕形土器（8～10）口縁部を「く」の字状に開き，端部はやや細めに丸くおさめるもの（8）と，口縁端部がやや内傾して上方に拡張し，端面に四条の退化凹線をもつもの（9）がある。小型の10は，口縁部が「く」の字状に開き，端部が上方に拡張する。外面は，繊維状の工具によると思われる調整痕がみられる。

鉢形土器（11）は，口縁部がゆるやかに外反し，胴部がやや張って不安定な底部をもつ。内外面ともに，10と同様の工具を用いている。内面底部には，指頭による圧痕が残る。

以上の遺物から上東・鬼川市Ⅲ式，あるいは才の町Ⅰ式のあたりに比定される。

10）P－4

＜遺構＞微高地中央部に位置し，現存長約150cm，幅約50cm，深さ約15cmのやや不整形な長方形を呈する土壙である。長軸は，北北西～南南東の方向である。埋土中からは高杯数個体分をふくむ土器



第14図　大道西Ⅰ　P－4遺構図（1/20）及び出土遺物

片と鎌状鉄器を検出した。大半の遺物はいずれも底面より5～10cm浮いた状態で出土した。この土壙は，形態及び出土遺物からみて墓壙として想定できる。

＜遺物＞高杯形土器（12～17）と椀形土器（18）が出土した。高杯には，杯部にゆるやかな稜線をもち外反するもの（12～15）と明瞭な段をもち器壁の厚いもの（17）がある。脚部（16）は，短かい脚柱部から屈曲して急に「ハ」の字状に広がり，端部は丸くおさめている。穿孔は4孔である。土壙内から出土した土器は，すべて粒子の細かい粘土を使用している。

鎌状鉄器　先端部が一部破損しているが，全長約7cm，刃部長さ約1.7cm，厚さ3cm前後を測る。付根あたりからやや屈曲しながら内彎している。刃部については錆のため観察がしがたく，どちら側が刃なのか断定し得なかった。

上記出土土器により，才の町Ⅰ式に比定できる。

11）P－5

＜遺構＞微高地東寄りに位置する。当初調査区の北側に接して一部を検出したが，全容を明らかに

する必要性から地権者のご厚意により拡張区をもうけ，全体を確認した。

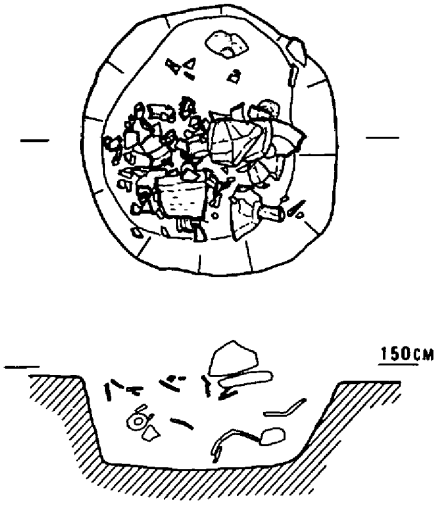
径約70㎝，深さ約25㎝のほぼ円形を呈する土壙である。土壙内には，炭化物を少量含んだ暗灰褐色泥砂土が堆積し，その埋土中には河原石数個と各種の土器を検出した。

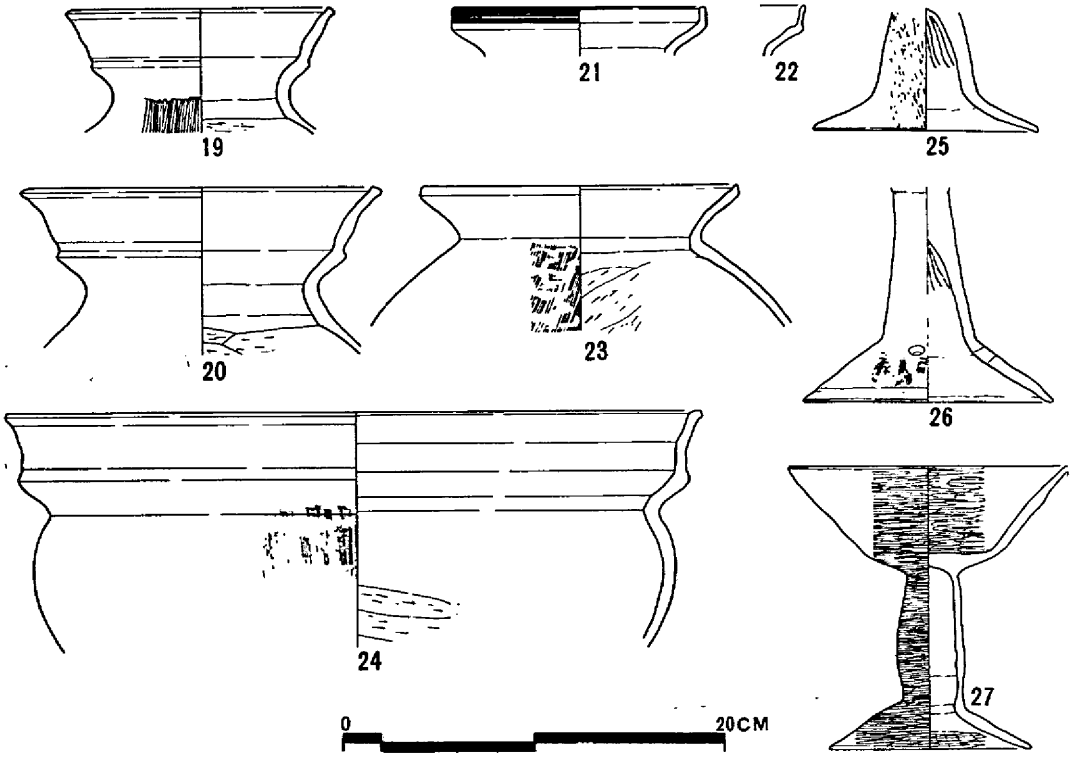
＜遺物＞壷形土器（19，20）は，いわゆる二重口縁を呈し，一度外反した口縁部に鈍い稜線をつくり内面にもゆるい段をなしてもう一度外反する。口縁端部は外側にやや肥厚させている。内外面ともていねいに横ナデされ，外面頸部下を篦磨きで仕上げている。

甕形土器（21～23）は，小片であるが口縁部が「く」の字状に外反するもの（23）とさらに上方に拡張して口縁端面に櫛描沈線を施すもの（21・22）がある。鉢形土器（24）の口縁部は壷形土器（19・20）と成形を同一にするものである。

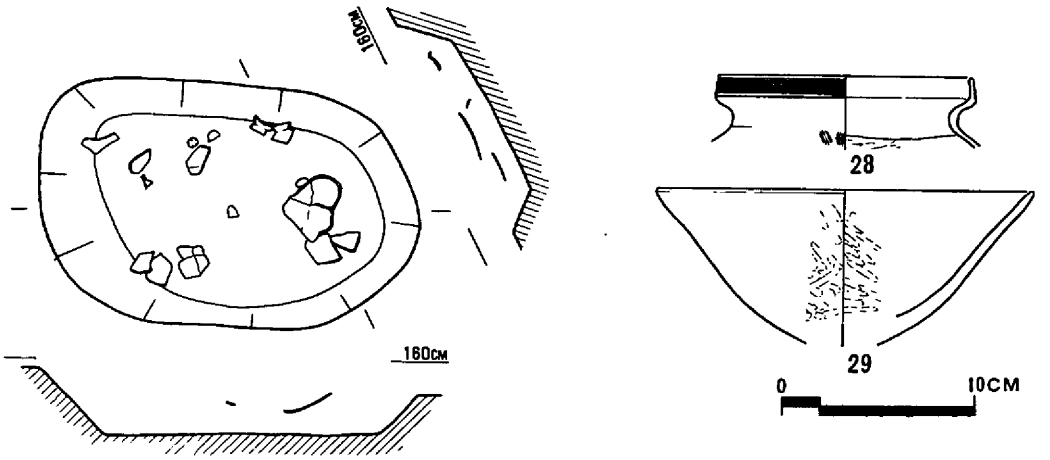
高杯形土器（25～27）には短脚のもの（25）と長脚のもの（26・27）が認められた。

この一括の土器は，上東遺跡亀川上層式の範疇に入るものと思われる。（中野）





第15図　大道西Ⅰ　P－5遺構図（1/20）及び出土遺物



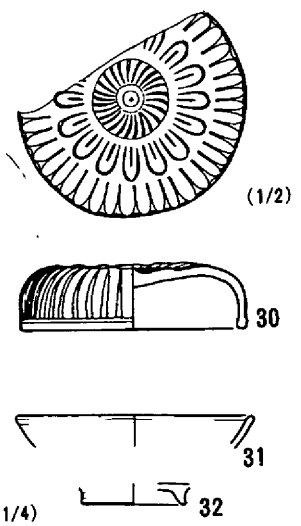
第16図　大道西Ⅰ　P－6遺構図（1/20）及び出土遺物

12）P－6

＜遺構＞径100×60㎝の楕円形を呈し，深さ25㎝を測る。土壙は暗灰色泥砂層を掘り込んで造られており，土壙内埋土もそれに類似しているが，わずかに炭が混じる。平面プラン及び遺物のあり方は前述のP－2，P－3に類似しているが，遺構の性格は不明である。

＜遺物＞4個体分出土しているが，土壙上部が削平を受けているためか，いずれも破片である。甕形土器（28）は「く」の字状にのびた口縁部に，上方に拡張する端部をもち，その拡張面には櫛状工具による沈線が施されている。頸部以下，外面は刷毛調整，内面は篦削りしている。高杯形土器（29）は杯部から口縁部にかけてわずかに外彎するが，口縁部は斜め外方に直線的に延びる。内外面ともに細かい篦磨き調整されている。水簸し粘土を使用している。

これら土器の特徴から亀川上層式併行のものと考えられる。



第17図　大道西Ⅰ　P－7
出土遺物

13）P－7

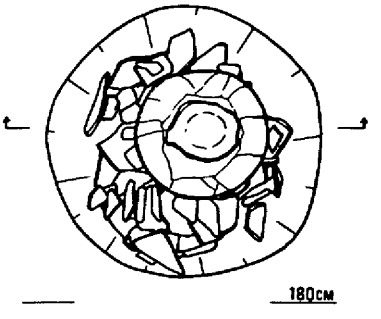
直径35㎝，深さ30㎝を測る柱穴状を呈す土壙であるが，建物を想定できる他の柱穴は検出されなかった。しかし当土壙内からは次の遺物3片が出土している。

青磁合子蓋（30）は約¼を欠損するが，型押しして成形されたと思われるもので，器表面全体に花弁文様を配したものである。白色の胎土で，青白色の釉が器表面及び内面天井部にかけられている。

椀形土器（31・32）はどちらも土師質のもので，31の高台は断面三角形を呈す。後述のP－9出土遺物と類似しており，鎌倉時代中頃のものと考えられる。

14）P－8

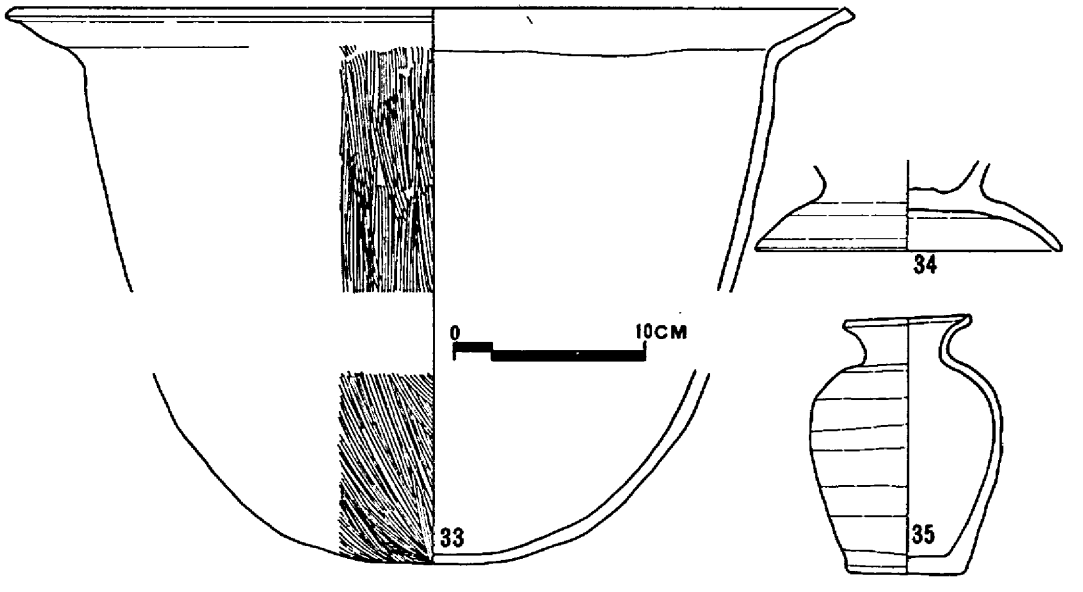
＜遺構＞直径35cmの円形を呈す土壙で，深さ35cmを測る。土層は3層に分けられる。第1層は暗灰色泥砂層で，土壙中央から椀形土器（34）が伏せられた状態で出土しており，その下部には深さ14cmにわたり破砕されたと思われる鉢形土器2個体分がぎっしりと詰まっていた。第2層は炭化木混じりの炭層で，土壙やや北よりの所から壷形土器（35）が出土し，壷の中からは骨片を確認している。第3層は暗灰色炭混砂泥層である。



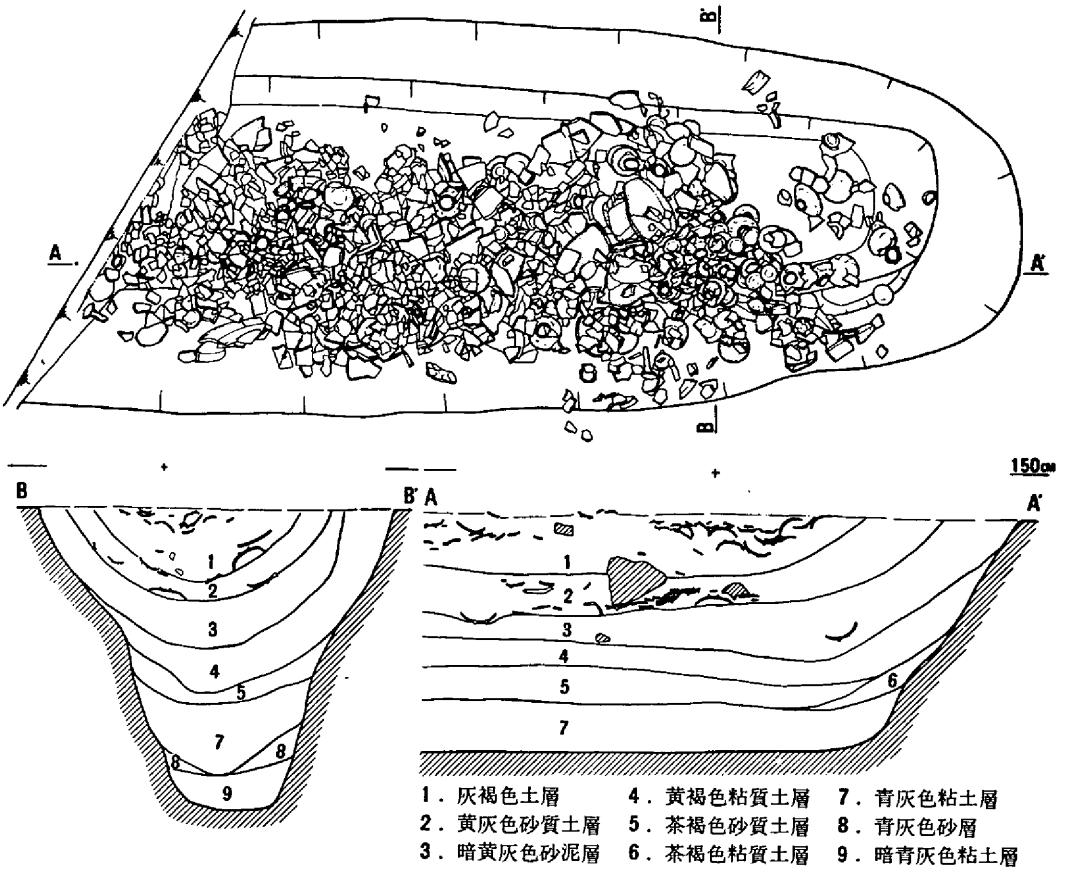
1．暗褐色泥砂層
2．炭層
3．暗灰色泥砂層

＜遺物＞椀形土器（34）は高台端部が欠損しているが，口径16.5cm，器高6cmを測る。杯部から口縁部にかけてゆるやかに内彎する浅い椀部をもち，高台部はしっかりしている。椀部と高台の接するあたりは，高台接合の際に生じたと思われるわずかな凹みがみられる。内外面ともに横ナデ調整されている。淡黄褐色を呈しており，砂粒はほとんど含まない。

鉢形土器（33）は斜め外方に開く口縁部をもち，胴部はゆるやかなカーブを描きながら底部に至る。胴部外面は荒い刷毛調整されており，内面はナデ調整されている。またもう一個体，



第18図　大道西Ⅰ　P－8遺構図（1/10）及び出土遺物



第19図　大道西Ⅰ　P－9遺構平・断面図（1/30）

外面に細かい刷毛調整されているものがあるが実測不可能であった。

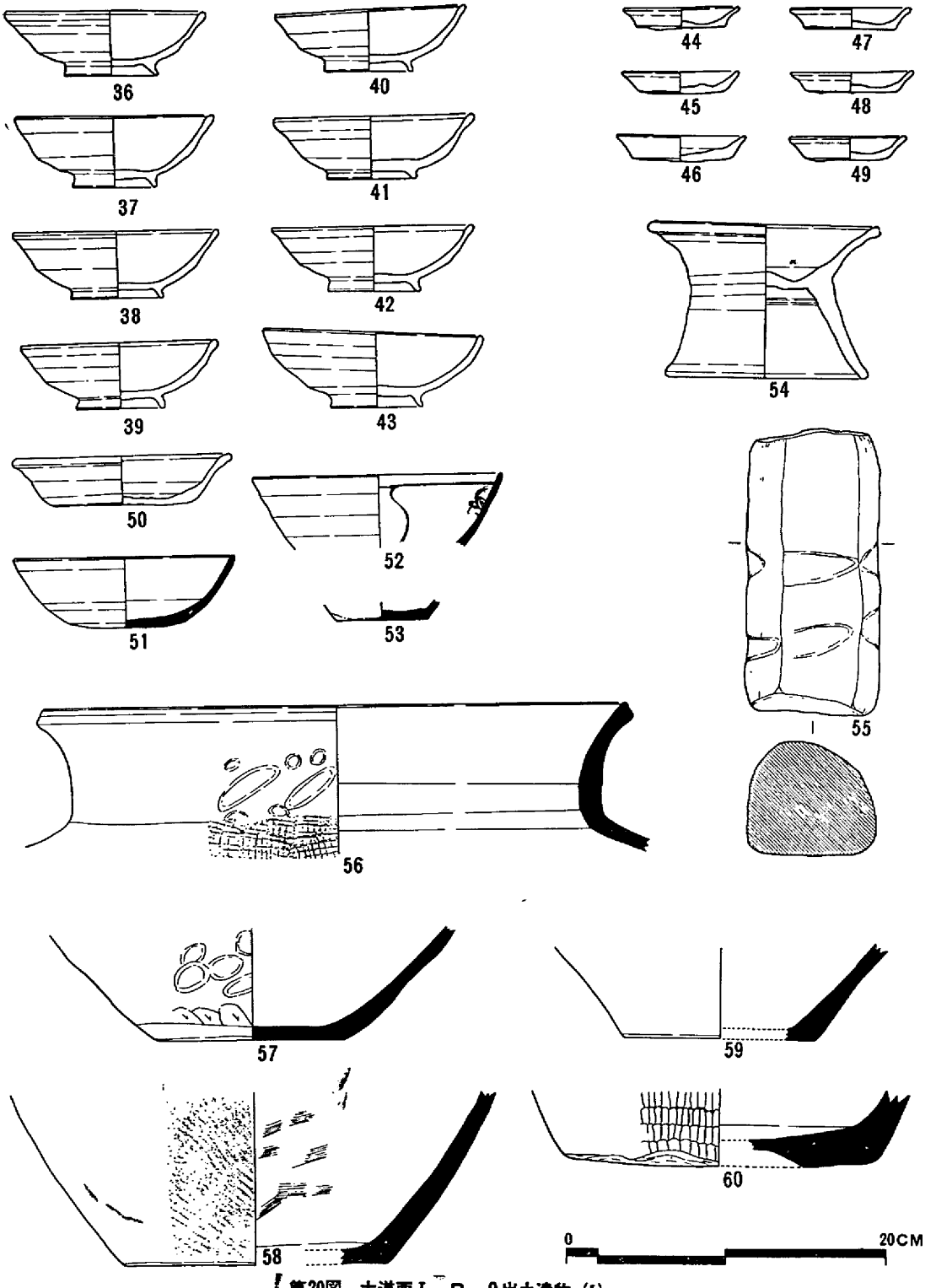
壺形土器（35）は口縁部の一部を欠損しているが，口径6.8cm，底径6.2cm，最大径10cm，器高14.5cmを測る。頸部からゆるく外反する口縁部をもち，端部は上方につまみ上げられている。肩はあまり張らず，底部は厚く，しっかりしている。外面は全て横ナデ調整されている。乳白色を呈し，砂粒をわずかに含む。

以上，これら遺構・遺物のあり方から平安時代末の火葬墓と考えられる。　（江見）

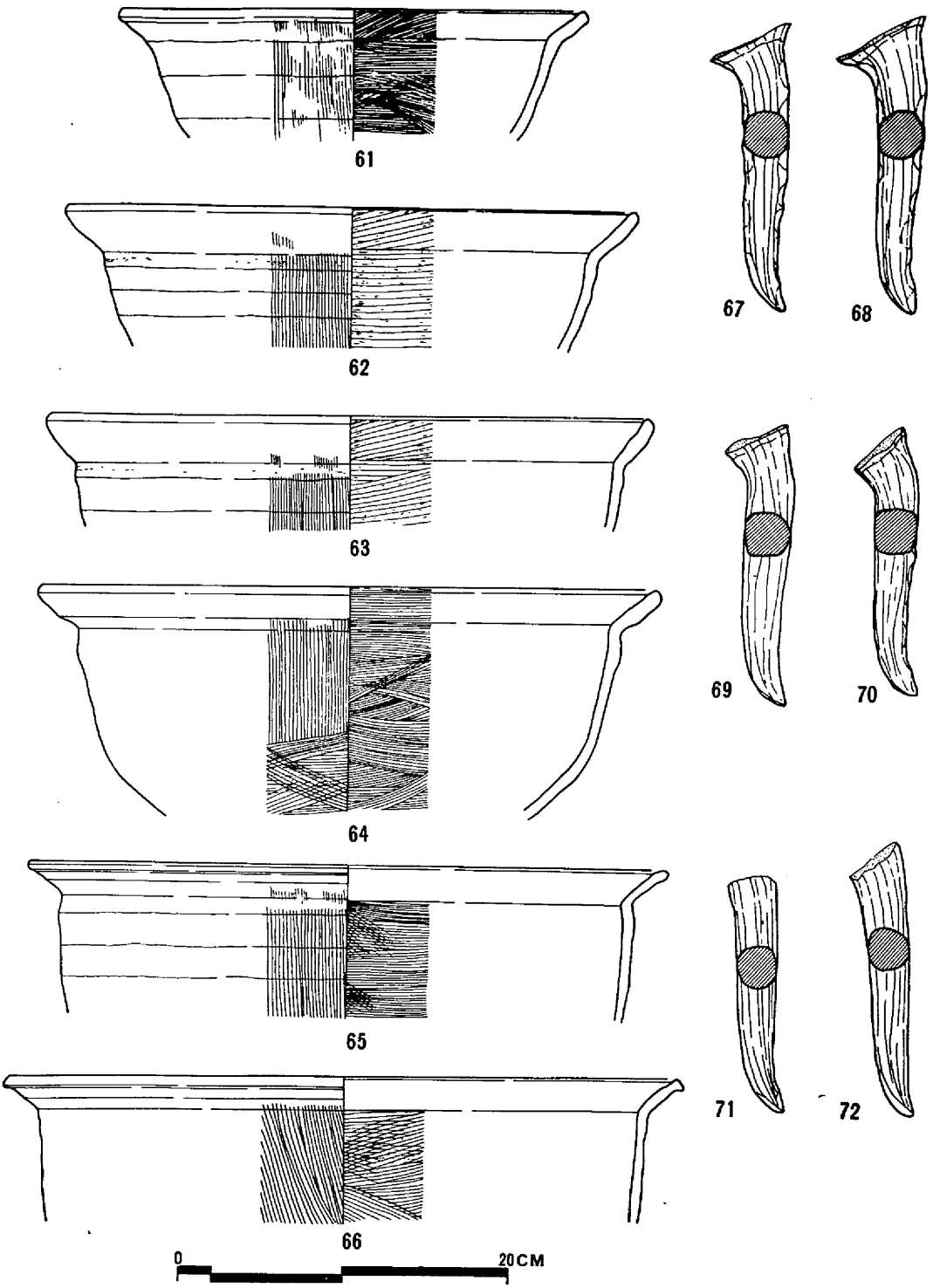
15）P－9

＜遺構＞この土壙は，大道西Ⅰ微高地の西端肩部付近に検出された。幅約150cm，深さ約120cmを測るが，調査は対象範囲内約350cmの長さに限られた。ボーリング棒による確認では，遺構はほぼ北西方向に数m以上は延びるようで，主軸は想定される微高地肩部に併行して溝状を呈すかも知れない。土壙は約50cmの深さまでは擂り鉢状に下がり，そこから下方にほぼ垂直に落ち込む。土壙端部の平面プランは円形を呈すが，中段の平面プランは隅丸方形を呈す。

遺物の出土状況は第19図及び図版7，8のようであり，南西側に寄ってぎっしり詰まって検出さ



第20図　大道西Ⅰ－P－9出土遺物（1）



第21図　大道西Ⅰ　P－9出土遺物 (2)

れ，おもに第１層及び第２層から完形を含み，椀形土器，小型皿形土器（小皿）がそれぞれ100個体以上，他に鍋形土器（土鍋・三足を含む）が数10個体，杯形土器，青磁片，滑石製鍋片，カマド片などが出土している。その中で，椀形土器，小形皿形土器は南東部分に多くみられ，中央から北西部分にかけては鍋形土器が多くみられた。また，第８層のグライ化した土からは裏面に細かい布目を残した黒漆片が数片出土している。土層堆積は凹レンズ状を示し，上部が削平された状況がうかがえる。

遺構本来の性格は内部の遺物との関連ではつかみにくいが，遺物は日用雑器的なものが多くまた完形が多いことから，当時の葬送儀礼的な行事に使用されたのち，一括廃棄されたことが想定され，出土状況から土壙そのものは二次的に廃棄場所として使用されたように思える。（柳瀬）

＜遺物＞土壙内からは多量の土器が出土しているが，厖大な量のため全体にわたっての整理作業は終えていない。今回は，その中の代表的なものにとどめて報告する。なお，後述する小結では，おもに椀，小皿を取り上げ若干の検討を加えた。

出土遺物中もっとも量的に多かったのは，椀（36～43），小皿（44～49）である。黄白色を呈し，胎土中には，砂粒を多く含む。椀は口縁部と高台部を横ナデ，体部と底部は未調整のままで，内面は，皮または布でていねいに調整している。小皿は底部に篦切り痕が残り，口縁部は内外面とも横ナデにより仕上げられ内面にはかさね焼痕が残る。杯形土器（50）は，ほかに数点出土している。口縁部は，篦切り痕が残る底部から外反して斜め上方に立ち上がり，端部は肥厚気味に丸くおさめている。内外面とも横ナデを行っている。54は，50に杯部高よりも高い「ハ」の字状を呈する台をつけた，いわゆる台付杯形土器である。

土鍋類（61～72）は，口縁部が「く」の字状に開きやや内彎し，端部を丸くおさめるもの（61～64）と，口縁部が「く」の字状に外反して立ち上がり，径約40㎝と大形で深めのもの（65，66）に大別できる。土鍋のほとんどは，外面を荒い縦方向の刷毛目ののち体部下半から底部にかけて横方向の刷毛目で調整している。内面もまた横方向の刷毛目で調整しているが，62，63のように板状工具による調整のものも認められた。土鍋脚部（67～72）は，多数出土し，61の小型のものには接合するのを確認したが，他の土鍋体部との接合関係は不明で，大型のものには脚がつかない可能性もある。

55は，長さ18㎝，径８㎝前後の不整円柱形の粘土塊である。胎土，焼成とも椀，小皿などに類似している。外表面には，握った様に指痕が残る。用途は不明である。その他図示できなかったが羽釜，カマドなどが出土している。

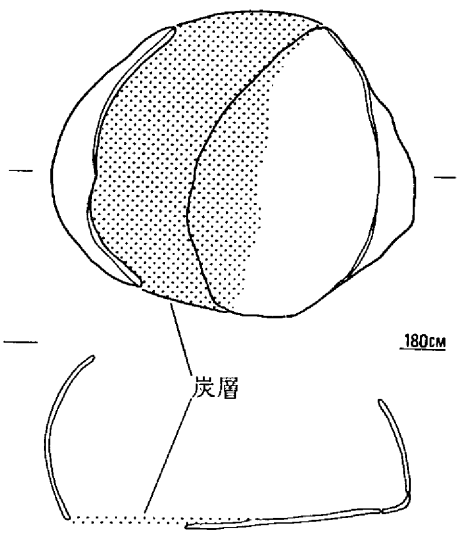
以上の土器が出土遺物の大半をしめ，その他糸切り底の須恵質の杯形土器（51），外面が赤色発色する須恵器系（註１）の甕形土器，さらに亀山焼（56～58）が出土している。52，53は青磁で技法，胎土，焼成から見て，竜泉窯系のものである。また，滑石製の石鍋（60）も１点出土している。

以上の遺物から，特に後述する『嘉定通宝』と伴出した椀形土器との比較において，鎌倉時代前半に位置づけられる。（中野）

16）焼土遺構

厚さ約１㎝の焼土が，幅45㎝，高さ22㎝にわたって検出された。底部は円形を呈しており，上部は

本来ドーム状に廻っていたものと思われる。一方，底部北半分には焼土が存在せず，炭層が一部焼土を覆うようにして薄く堆積していた。遺物は皆無であり，当遺構の機能及び時代は全く不明である。　（江見）



第22図　大道西Ⅰ　焼土遺構　平・断面図 (1/10)

17）包含層及び柱穴状土壙出土遺物

瓦（第23図，第24図）

大道西Ⅰ調査区全域から出土したが，特に農道から水路にいたる微高地東斜面の包含層中にもっとも多量に認められた。

＜軒丸瓦＞（73～77）　軒丸瓦は，11点出土している。前回調査でも検出されている平城宮6225亜型式のものがほとんどで，１点だけ単弁のもの（77）が含まれていた。73～76は径16㎝前後を測り，外縁は傾斜線をもち，凸鋸歯文を廻らす。外区は，２重の圏線をもつ。内区は，８葉複弁蓮華文を施し，中房に１＋８の蓮子がある。間弁と蓮弁の一部は，規則性を失なっている。また外区外縁には，74，76のように一部笵が破損しているものが認められた。瓦当と丸瓦の接合は，瓦当裏面に溝をつけて行っている。軒丸瓦は，いずれも軟質の焼成である。

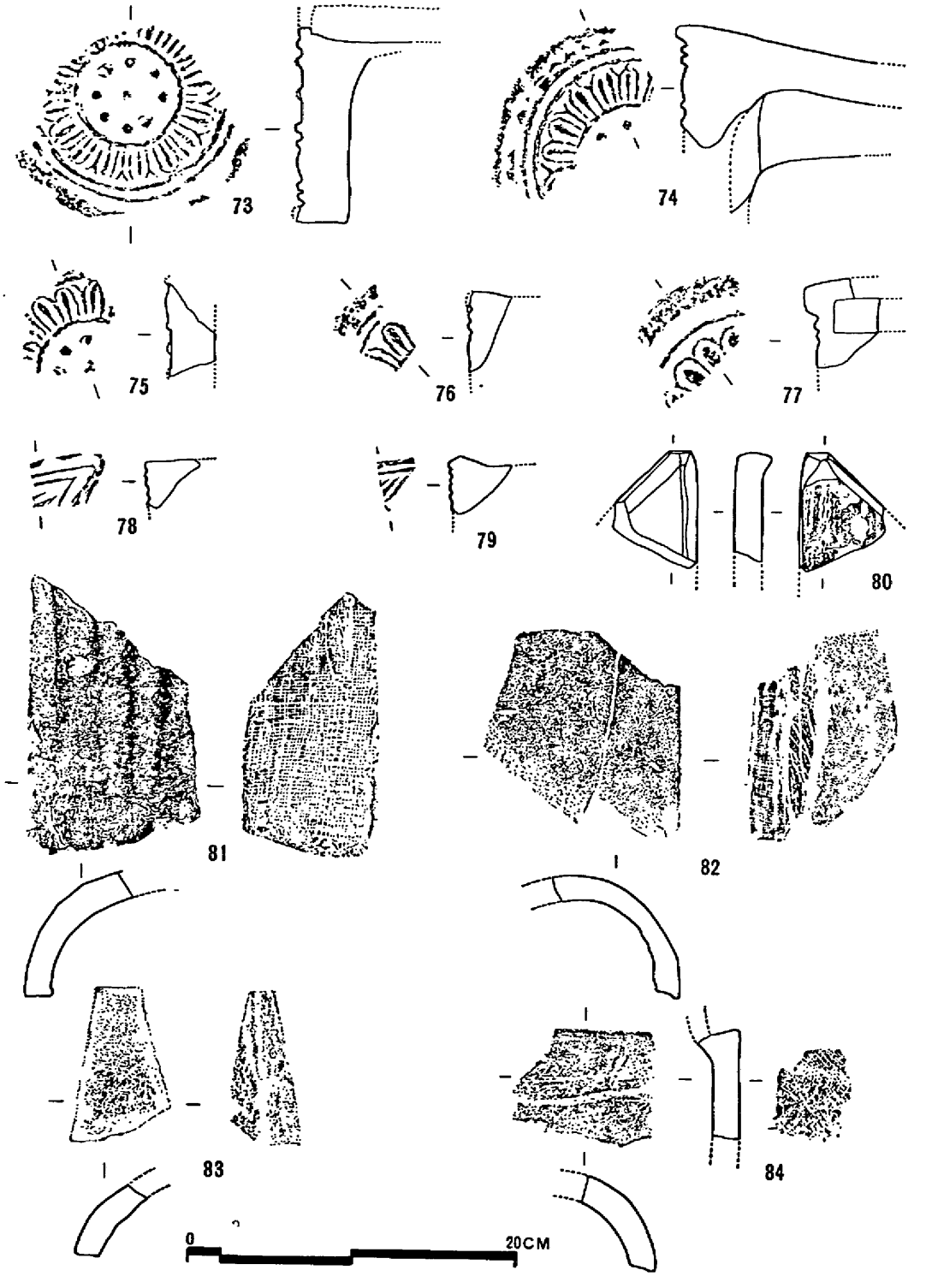
＜軒平瓦＞（78，79）　今回調査では小片が２点出土している。小片であるため断定はできないが，軒丸瓦6225亜型式と対応する平城宮6663亜型式の軒平瓦であろう。

＜丸　瓦＞（81～84）　丸底は，破片の数にして50片前後出土している。行基瓦は一片もなく，すべて玉縁瓦であった。凸面は縄叩き目ののち板ナデ，凹面は布目が認められる。側面，端面とも箆削りされている。

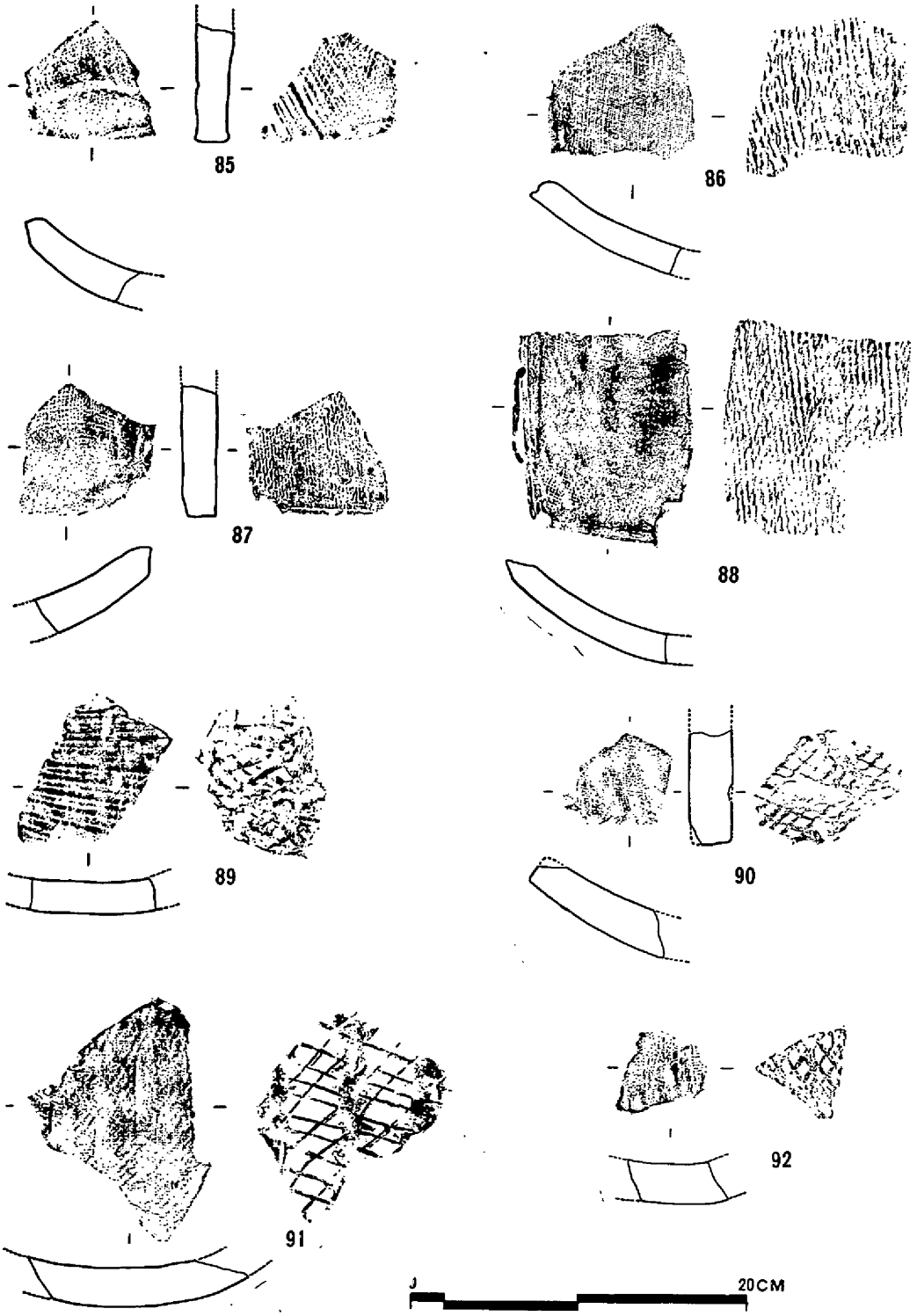
＜平　瓦＞（85～92）　出土瓦中平瓦と考えられる438点を抽出して分類すると，凸面に縄叩き目をもつもの（85～88）375点（85.6%），凸面に格子叩き目をもつもの（89～92）12点（2.7%），観察不明のもの51点（11.7%）であった。凹面には，全て布目を有している。側面化粧は，縄叩き目瓦が２面，格子叩き目瓦が１面であった。また格子叩き目瓦には，小さな格子で硬質のもの（89，90，92）と，大きな格子で軟質のもの（91）が認められた。前述したように格子叩き目瓦は量的に少なく，縄叩き目瓦の方が圧倒的に多いという結果から，格子叩き目瓦はのちの差し変え瓦と考えられる。さらに軒丸瓦（72）も同様なことが考えられるであろう。

緑釉・白磁・青磁

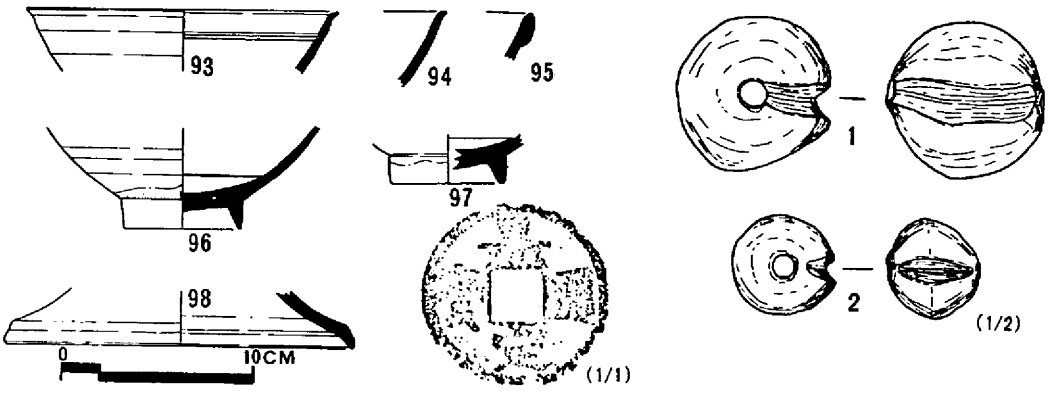
緑釉は３点出土している。花瓶の脚部（98）２点と器種不明１点がある。白磁（93～97）青磁は，各々10点前後出土している。83，94は，口縁部が内彎する脚部から短かく外反する。この口縁部に接合する高台は，削り出しの深い96，97と考えられる。また前記の白磁よりも新しいと思われる口縁玉縁の95も出土している。これらの白磁は，12世紀及び12～13世紀という年代が与えられる。



第23図　大道西Ⅰ　包含層出土遺物 (1)



第24図　大道西Ⅰ　包含層出土遺物 (2)



第25図　大道西Ⅰ　包含層出土遺物 (3)

土錘（1，2）

土錘は，微高地東斜面の包含層中から2点出土している。2点の土錘ともほぼ球形を呈し，中央には直径0.5～0.7㎝の穿孔が貫通している。外面には穿孔と平行して一方だけに断面「V」字形の溝をもつ。1は全体に黒斑をもち，直径2.5㎝前後で重さは14.5gを測る。2は一部に黒斑をもち，直径4.1㎝で重さ59.8gを測る。外面の一部に砂粒の露出がみられ，これは使用痕と思われる。時期は，同包含層中出土の遺物から鎌倉時代初め頃と思われる。

銭貨（第25図）

『嘉定通宝』（1208年～）は，P－1の西約1.5mの径約20㎝の柱穴状土壙内から出土した。埋土中には，他に椀形土器の細片が数点認められた。このことは，一部で早島式土器と称されてきた白っぽい焼きをした椀形土器の年式を明らかにする上で格好の資料である。

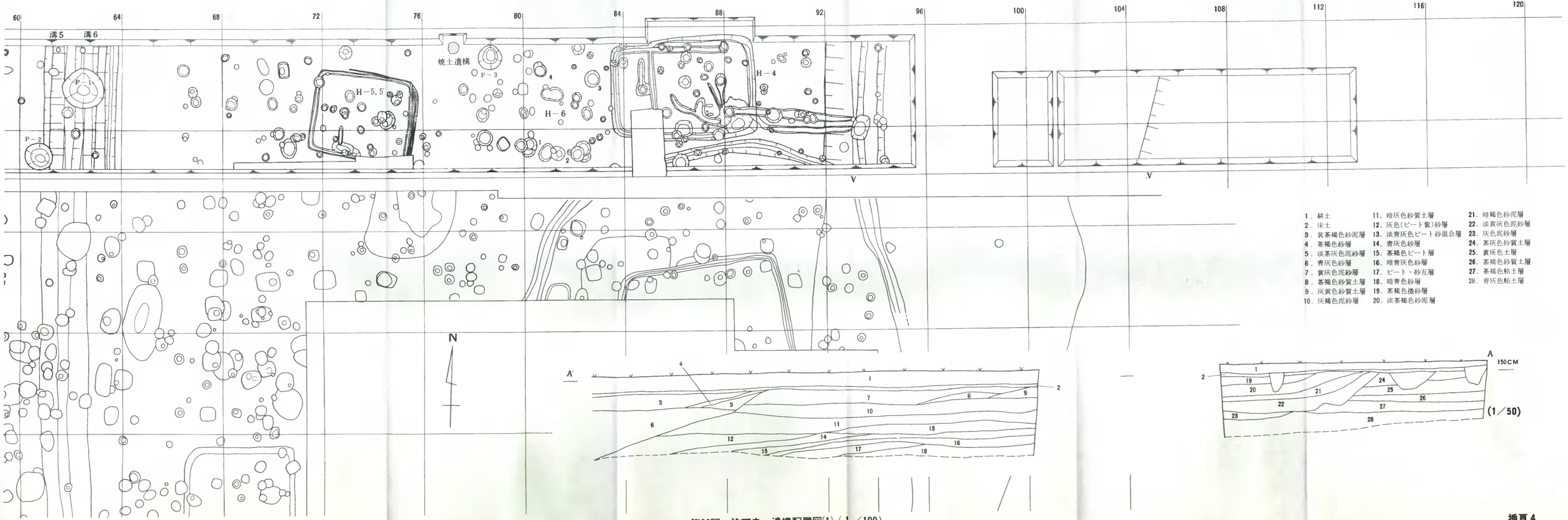
また，当微高地ほぼ中央の包含層からは，『咸平元宝』（998年～）が1枚出土している。（中野）

第4節　法　万　寺　調　査　区

当調査区は川入遺跡の西端にあたる。大道西Ⅰ調査区から西方約150mに，東西幅130mの微高地を確認した。当微高地東側は旧河道の本流が流走していたらしく急激に落ち込むのに対し，西側は徐々に下がっていく。微高地上は後世に相当削平を受けたらしく，多時期にわたる遺構が床土直下の同一面上から切り込まれて検出されている。前回調査においては弥生時代～中世にかけての遺構，遺物が多数検出されている。今回調査においては，それら遺構，遺物の検出を主目的として調査を進めた。

その結果，微高地東方からは弥生時代中期末の住居址1，弥生時代後期後半の土壙1，古墳時代初頭の住居址3，土壙2，西方からは弥生時代中期末～8世紀にかけての多数の溝状遺構を検出した。また微高地全体にわたって直径25㎝前後の柱穴状土壙を検出しているが，大半が平安時代末～鎌倉時代にかけてのものであった。

以下，遺構・遺物の概略を記す。（江見）

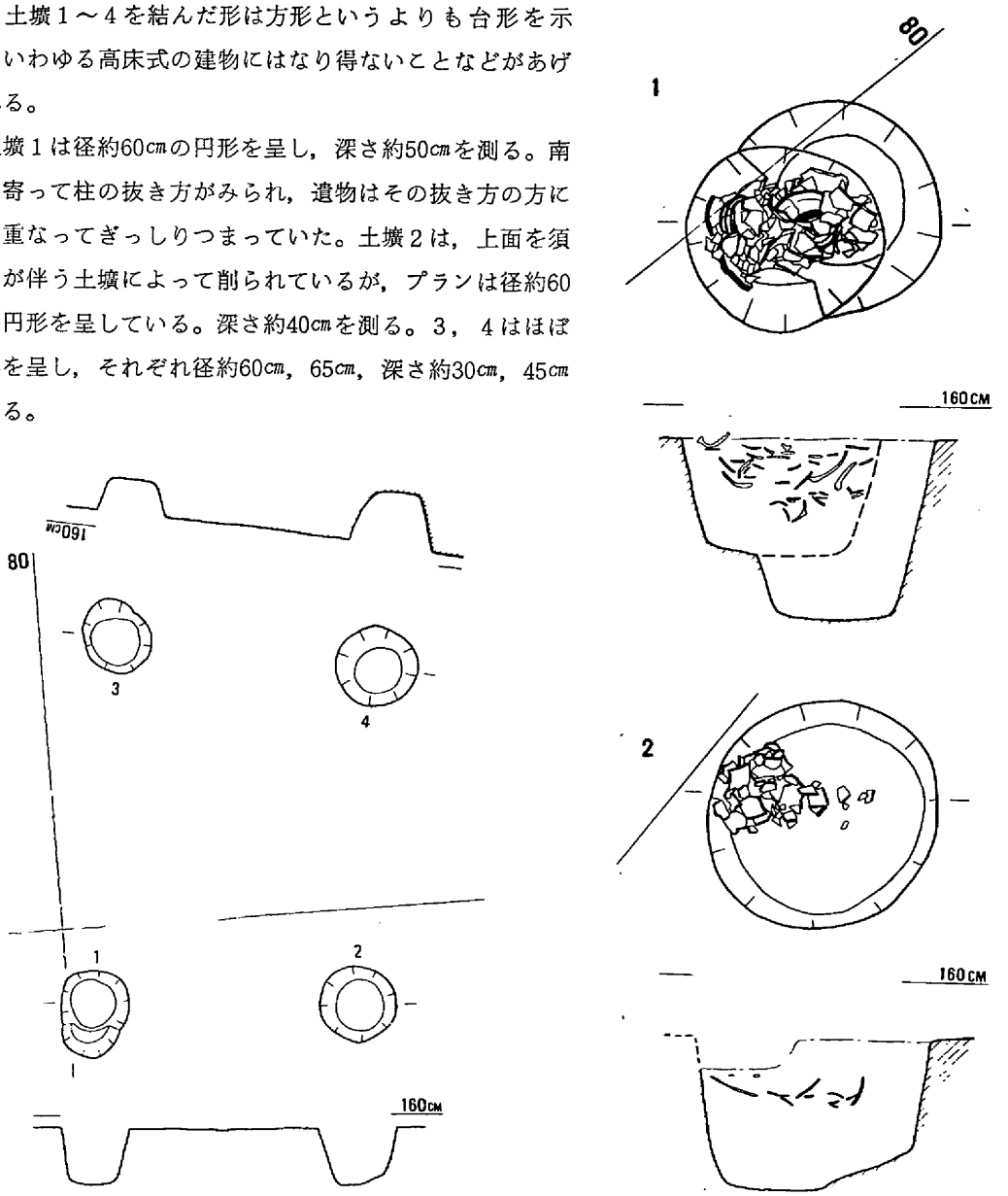


第26図　法万寺　遺構配置図(1)（1／100）

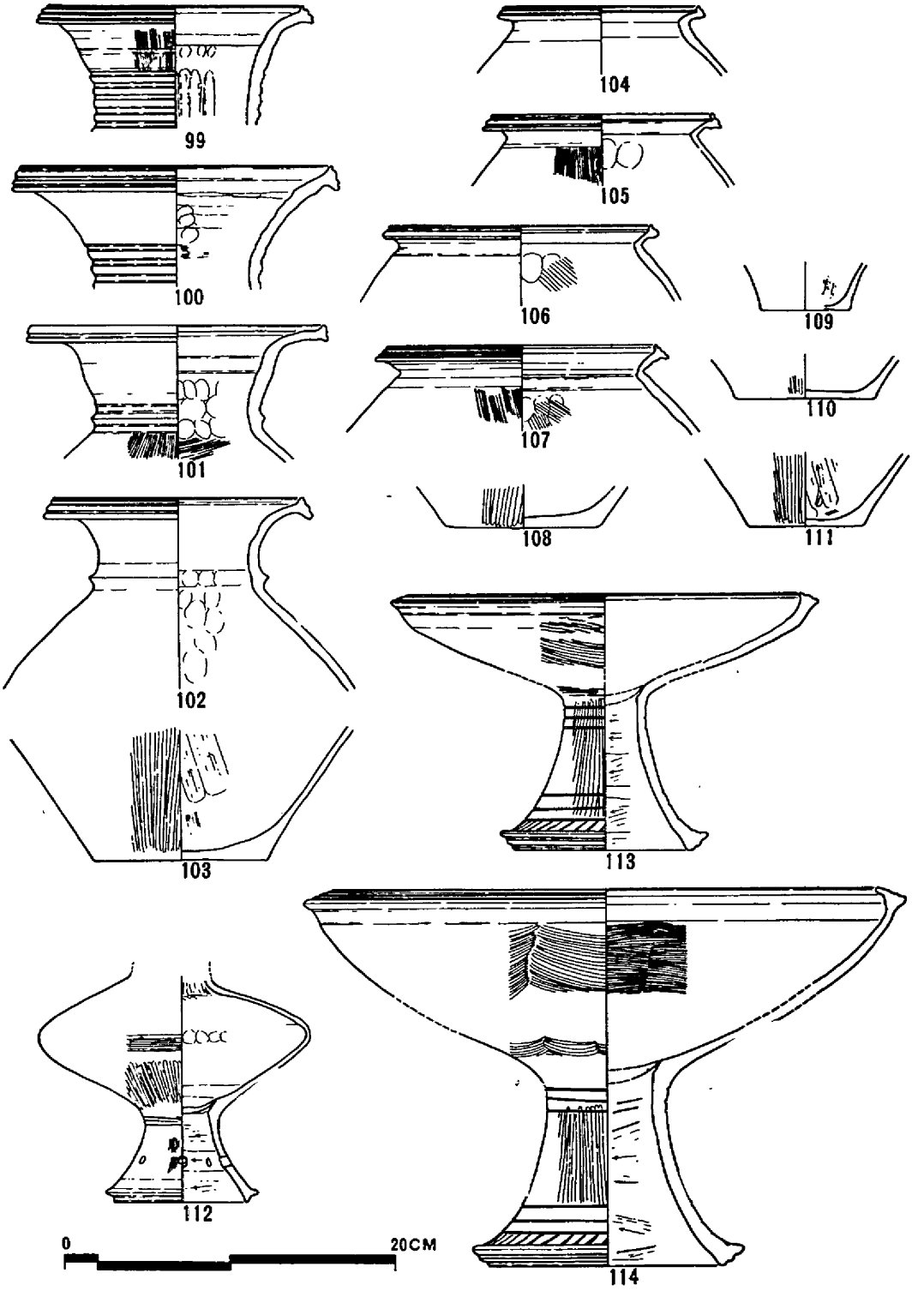
1）H－6

＜遺構＞当微高地の東端に近いところに位置する。遺構は１～４の４本の柱穴状土壙からなり，これらの土壙は，床面を削平された住居址の基本柱になると思われる。その理由として，そのうち土壙１・２・３内に弥生時代中期後半の土器が一括して伴っていること，周辺にも同様の小土壙が散在するが，それらは弥生時代後期の土器を含んでいたり須恵器を含んでいたりで，様相を異にしていること，土壙１～４を結んだ形は方形というよりも台形を示し，いわゆる高床式の建物にはなり得ないことなどがあげられる。

土壙１は径約60㎝の円形を呈し，深さ約50㎝を測る。南側に寄って柱の抜き方がみられ，遺物はその抜き方の方に折り重なってぎっしりつまっていた。土壙２は，上面を須恵器が伴う土壙によって削られているが，プランは径約60㎝の円形を呈している。深さ約40㎝を測る。３，４はほぼ円形を呈し，それぞれ径約60㎝，65㎝，深さ約30㎝，45㎝を測る。



第27図　法万寺　H－６遺構図（1/60，1/20）



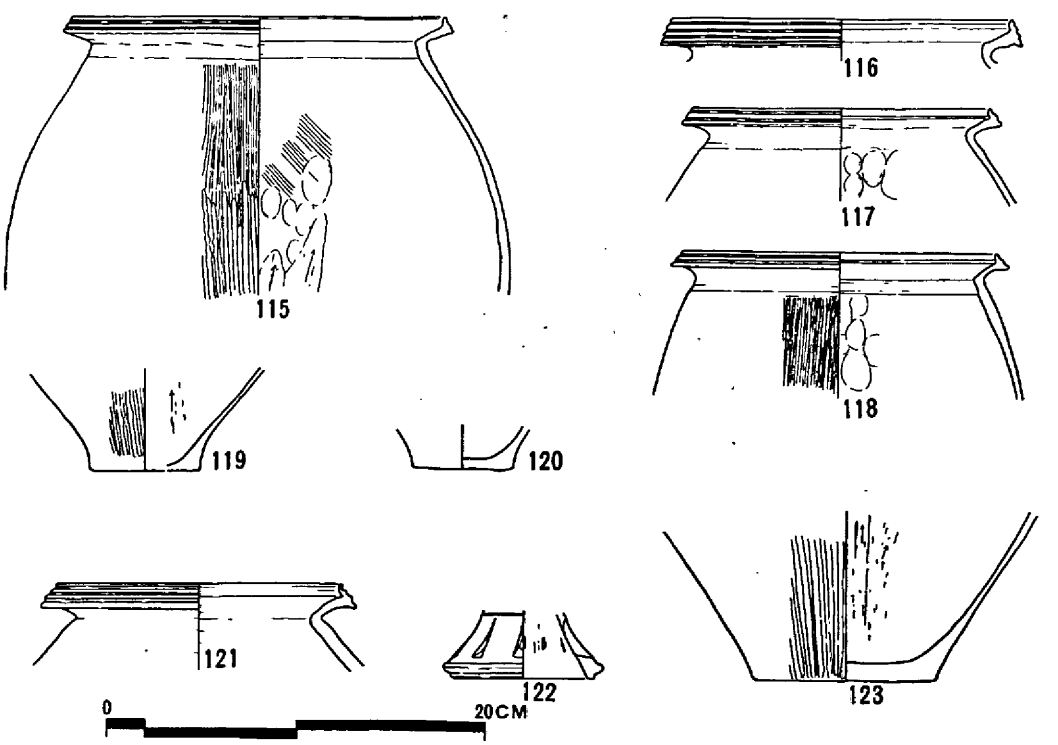
第28図　法万寺　H－6－1出土遺物

＜遺物＞土壙１からは長頸壷形土器，台付直口壷形土器，甕形土器，高杯形土器などが，土壙２からは甕形土器などが，土壙３からは甕形土器，台付直口壷形土器の台部などが出土している。いずれも量的には多く出土しているが，破片が多いため図示できるものだけを載せた。

長頸壷形土器は，いずれも少しなでぎみの肩部からラッパ状に開いて立ち上がる頸部をもち，口縁端部は内傾して多少上下に拡張している。端面には一～三条の凹線を廻らせている。99と100は頸部に何条かの凹線を，101と102は，頸部下に断面三角形の凸帯をそれぞれ廻らせている。全体的に胎土，焼成とも良好で，上部は外面の調整はおもに刷毛と横ナデ，下部は篦磨きでなされ，内面は口縁部付近が横ナデ，頸部は押圧，胴部上半は押圧を刷毛（101，102），下半は篦削り（103）がそれぞれていねいになされている。

112は，隅丸菱形の胴部に，「ハ」の字状に広がる短かめの脚部をもつ。胴部と脚部の接続は，円盤充塡法によっている。脚端部は多少肥厚させて外方につまみ上げ，脚腹部には５つの貫孔がほぼ等間隔で廻る。脚の上部には三条の篦描沈線を施している。122は112の円孔が三角透しになっているだけの違いで，112と同種の器形が想定できる。

甕形土器は，ナデ肩を示す肩口から急に「く」の字状に折れ曲がる口縁部をもち，端部は肥厚して斜め上下に拡張をもつもの（105，107，116，121）と，上方だけに拡張をもつもの（104，106，115，117，118）の二種類がある。いずれも口縁端部には一～三条の凹線がみられ，器壁は薄く器面の調整及び胎土は長頸壷形土器と大差はない。



第29図　法万寺　H－6－2・3出土遺物

高杯形土器はどちらも内彎する杯部をもち，端部は肥厚させ内方に拡張をもつ口縁部を有する。端面には浅い凹線が二～三条みられる。脚部は外反しながら開き，肥厚させて端面をつくり出し，二条の凹線を廻らす。脚部外面は，篦磨き調整ののち上部に三条の篦描沈線を，裾部に三条の篦描沈線と篦先による刻線文をそれぞれ廻らせ，内面はていねいな篦削りを行っている。杯部外面は弧状を描くように連続して篦磨き，内面は刷毛調整が成され，口縁部内外面はともに横ナデで仕上げている。

以上，出土遺物の形態からこれら一括の土器は，前山Ⅱ式としているものに類似しており，弥生時代中期後半の時期が与えられる。

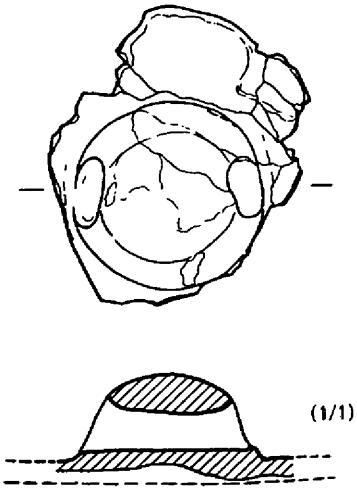
2）H－4

＜遺構＞当微高地東斜面端部に検出された一辺約500㎝の隅丸方形の住居址である。一部用水工事の際の撹乱及び後世の遺構によって切られている箇所もある。住居址は西側に約170㎝×420㎝の拡張部をもつが，基本的には中央部の２本の柱穴（１，２）が主になるようで，他の３～６の柱穴の位置関係及び東南隅土壙から東斜面に向って延びる２本の溝を有することなどから，二時期にわたるとみられ，拡張部は建て増し分と思われる。２本の溝は幅約40㎝，深さ50～60㎝で，どちらも東斜面の途中に位置する約80㎝×110㎝，深さ約25㎝の土壙状の「たまり」に注いでいる。溝の底のレベルは全体にほぼ一定の深さを保ち，「たまり」の近くで下がりぎみになるだけである。遺構の検出状況及び切り合い関係から，南側の溝が一部暗渠で存在したのち北側の溝が掘られたものと考えられる。床面にはほぼ全面に貼り床がみられ，それをはずすといくつかの小さい溝状の掘り込みが検出されている。また，壁体溝は北側及び東南隅土壙をのぞいて，顕著に検出されている。

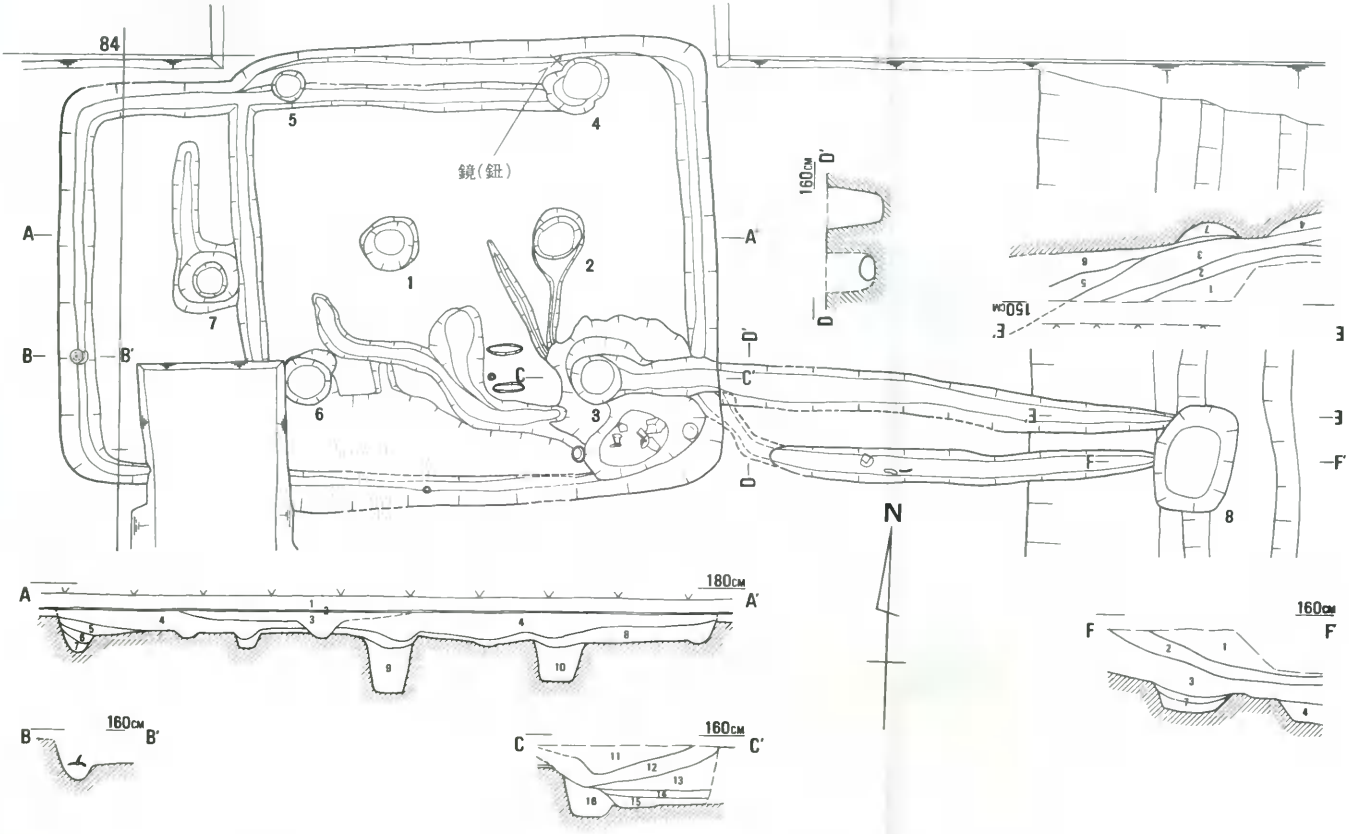
遺物は，完形の土器を含み出土しているが，覆土（A－A′断面・第４層）からの遺物はほとんどが細片であり，量も少なかった。多くは東南隅土壙の第12層（C－C′断面）からのもので，ほかにB－B′断面の位置にほぼ完形の小型器台形土器，貼り床上面の×印の位置から鏡の鈕部分がそれぞれ出土している（図版33）。

＜遺物＞鏡は図のように鈕以外がほとんど欠損しており，全体に保存は良くない。鈕の大きさ（径2.5㎝，高さ1.2㎝）から，復原径は20㎝前後と推定される。また，鈕座などの特徴から仿製内行花文鏡との鑑定を得ている。

甕形土器は，口縁部が肩部から「く」の字状に外方に折れ，端部がほぼ直立して上方に立ち上がり，端面に五～七条の櫛描平行沈線文を施すもの（124～127）とほぼ球形の胴部表面に叩き目を配し，肩口から「く」の字状に折れわずかに内彎した口縁をもつもの（128，129）の二種類がある。前者は口縁部内外面ともに横ナデで調整され，内面篦削りは口縁部近くまでなされている。ほぼ球形の胴部とほとんど丸底化した底部をもつと思われる。胎土



第30図　法万寺　H－4
出土鏡（鈕）



A及びC

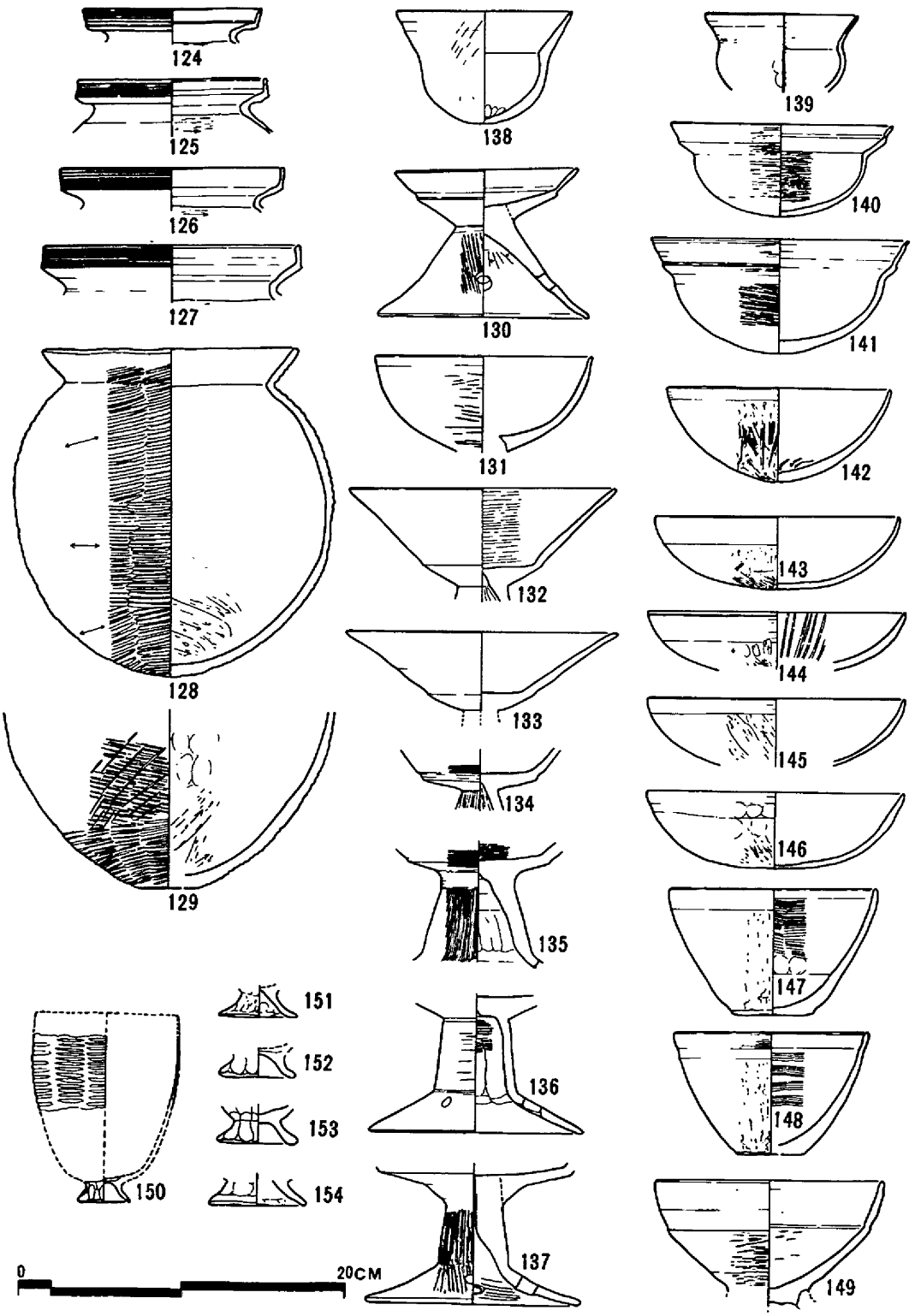
1．表土
2．灰褐色土層
3．茶褐色粗砂層
4．暗灰色土層
5．赤茶褐色土層(焼土粒含)
6．黄灰色土層
7．暗黄灰色粘質土層
8．黄灰色粘質土層
9．茶褐色土
10．茶褐色土
11．暗黄灰色土層
12．暗灰色砂質土層(炭含)
13．黄灰色粘質土層(ブロック含)
14．灰褐色粘質土層
15．暗灰色粘土層
16．黄褐色土

E及びF

1．灰黄色砂質土層
2．黒灰色砂質土層
3．灰褐色砂質土層
4．暗青灰色粘土層
5．黄灰色粘質土層(黄色粘土塊含)
6．暗黄灰色粘質土層
7．6と同(粘土塊含)
　暗青灰色粘土

第31図　法万寺　H－4　遺構平・断面図（1／60）

挿頁 5



第32図　法万寺　H－4出土遺物

には長石粒が目立ち，色は灰褐色を呈するものが多い。後者の128の表面は，底部には左下がりの，胴部中央から下には平行の，胴部上半から口縁部にかけては左下がりのそれぞれ荒い叩きがみられ，三段階にわけて製作されたことがわかる。口縁部内外面ともに押圧と横ナデで調整され，胴部内面は底部付近に篦削りがみられるほかはていねいな押圧とナデで調整されている。129は，外面の底部近くを左下がりの，胴部中央を左上がりの叩きの上に左下がりの粗い叩きでそれぞれ仕上げ，内面は128と同様である。どちらも砂粒を多く含み，灰褐色または褐色を呈している。

高杯形土器は，A$_1$・A$_2$・B類の3類に分けられる。A類は杯部から異常に発達した口縁部が斜め外方に立ち上がるもので，B類は内彎して立ち上がる椀のような杯部をもつものである。A$_1$類はA類の特徴をもち，杯部が小さく，細長い脚柱部から急に開く裾部をもつもの（132～133）で，A$_2$類はA$_1$類よりも杯部が広く，太めの長い脚柱部から急に開く裾部をもつもの（135，136）である。表面の剝離が著しいが，A$_1$類が篦磨きとナデ，A$_2$類が刷毛目とナデが多いように思われる。137はA$_1$・A$_2$類のどちらの要素もそなえているが，脚部だけをみると古い要素を残している。B類は131のみである。脚部はA$_1$類様のものがつくと思われる。いずれも水簸し粘土が使われ，赤褐色を呈する。

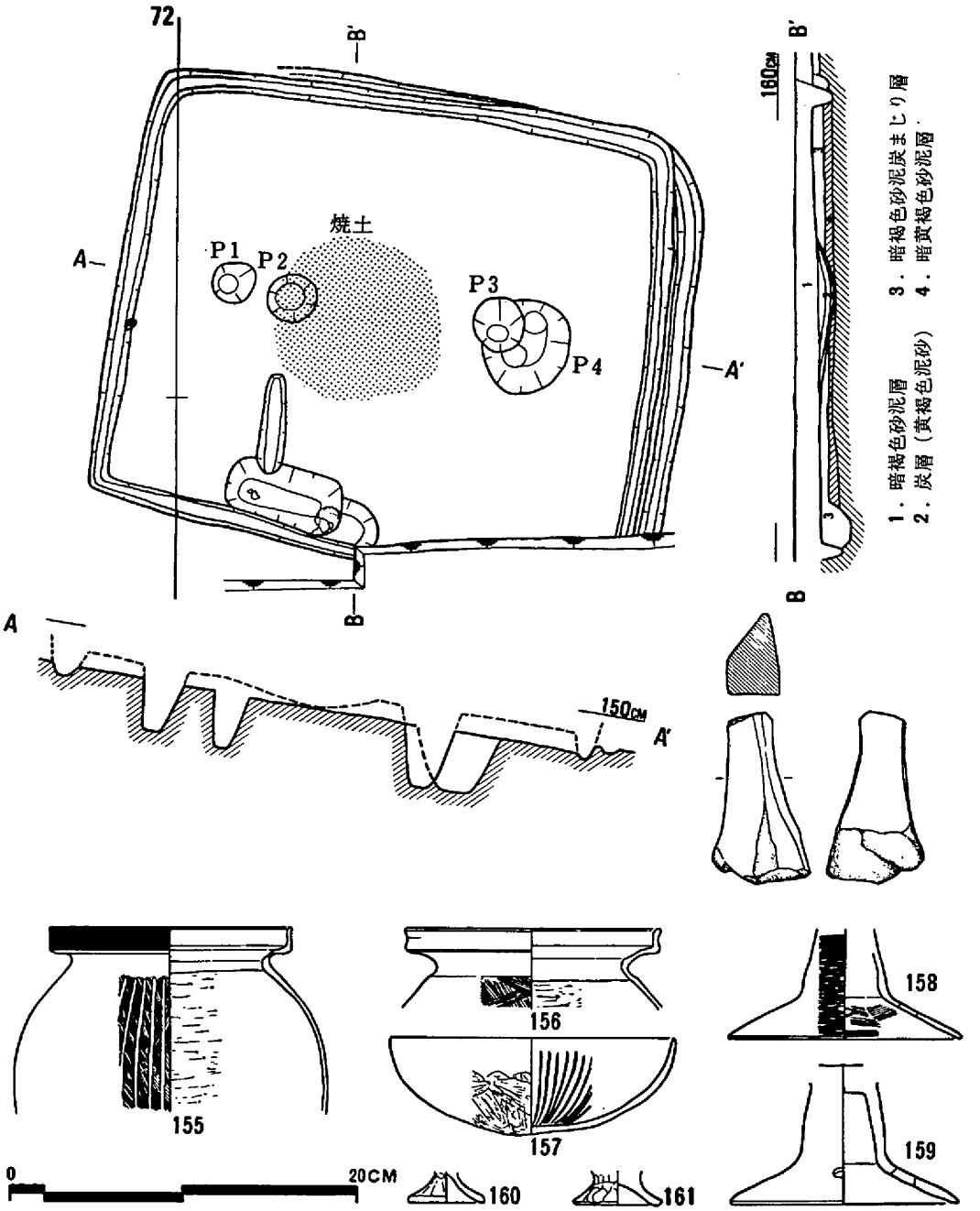
小型坩形土器（138，139），小型鉢形土器（140，141），小型器台形土器（130）の3種は小型品のセットと考えられるものである。138は丸底を呈し，口縁部は胴部の高さよりやや短かく斜め外方に立ち上がる。口縁部内外面は横ナデ，胴部外面はていねいな磨き，内面は指頭圧とナデで調整されている。139は138よりも口縁部が短かめで，器壁は薄い。140と141は器形の大小はあるが，ともに丸底の椀形の胴部をもち，斜め外方に二重に立ち上がる口縁部をもつ。内外面ともに口唇部近くは横ナデ，胴部には横方向の細かな篦磨きを施している。130は円錐形の下脚部に，小さな杯部から斜め外方に立ち上がる口縁部をもつ上台部を付けたものである。脚部の裾には等間隔に4孔を穿つ。器表面の剝離などで調整痕が不明なところが多いが，口縁部付近は横ナデ，脚部は荒い刷毛調整と思われる。三種ともに胎土に水簸し粘土が使われ，色調は赤褐色を呈している。

皿形土器は，深めの142と浅めの143～146の二種類がある。いずれも器表面は口縁部付近を横ナデ，以下を篦削りで仕上げ，内面は暗文を施すもの144とナデ調整するものがある。142は形態的には143～146に先行するものである。胎土は甕形土器に似て，色調は褐色を呈す。

鉢形土器（147～148）は平底を呈し，多少内彎しながら斜め外方に立ち上がる体部をもつ。器壁は厚めで，胎土に砂粒を含み褐色を呈している。胴部外面は雑な押圧調整のみで，内面は刷毛と押圧調整をていねいに行い，口縁部は内外面ともに横ナデ調整されている。149は台付の鉢形土器で，内外面ともにおもに篦磨き調整がみられ，胎土に水簸し粘土が使用され，白っぽい色調を呈す。

製塩土器は，図示したもののほかは，体部の小片ばかりが少量出土しているに過ぎない。少さめの台脚部ををもつ150は，後述する大溝下層出土のものなどの特徴を加味して，口径9㎝前後，高さ13㎝前後に復原できる。胴部には全面に横方向の荒い叩き目がみられる。台脚部は指頭により造り出され，内面はていねいなナデ調整がみられる。151～154の台脚部は151よりも少し大きめであるが，成形手法は151と同様である。

以上，出土土器の形態・特徴から，多少のばらつきはあるものの亀川上層式に比定できる。（柳瀬）



第33図　法万寺　H－5遺構図（1/60）及び出土遺物

3）H－5，5′

＜**遺構**＞H－4の西約10mから検出されたものであるが，上面は大部分削平を受けていた。

H－5′住居址　H－5住居址と大部分重復して検出され，壁体溝は西側及び南側部分が不明である。残存する壁体溝は幅約20㎝，深さ約15㎝を測る。柱穴はP－2，P－4の2本柱で深さ約50㎝を測る。住居址南からは長方形土壙に切られて，推定径50㎝，深さ約20㎝の円形土壙が検出された。以上，当住居址は後述する住居址の壁体溝とほぼ平行すること，柱穴間の距離が同じであることなどから，H－5と同様の規模の住居址が建てられていたものと思われる。

H－5住居址　平面プランは430×400㎝の長方形を呈す。壁体溝は幅約20㎝，深さ約15㎝を残す。柱穴はP－1，P－3の二本柱が基本になると思われる。深さは約60㎝を測る。また住居址中央付近からは直径90㎝前後に広がる炭を検出した。掘り下げた結果ゆるやかな凹みを呈し，黄褐色泥砂と炭層が互層になって堆積していた。炉のような施設があったと考えられる。住居址南からは壁体溝にそって約100×50㎝，深さ約15㎝の長方形土壙を検出した。また土壙の北西から幅約15㎝，深さ約10㎝のわずかに南に傾斜する溝状遺構を検出した。

遺物は長方形土壙及び周辺から出土しており，砥石は西壁体溝肩部から出土した。

住居址はB－B′の断面図で明らかなように，第5層はH－5′の，第4層はH－5の貼り床と考えられる。つまり二軒の重複した住居址は，切り合い関係からH－5′⟶H－5が想定される。また両住居址覆土内には他時期の遺物は全く含まないことから，ほぼ同一時期に建て直されたものと考えられる。

＜遺物＞甕形土器（155，156）はいずれも口縁端部がほぼ垂直に上方に拡張するものである。155は肩の張らない胴部をもつ。口縁端面には櫛描平行沈線文が施されている。胴部は刷毛調整ののち暗文を施している。胴部内面は篦削りしている。

高杯形土器（158，159）はいずれも筒状を呈す脚部を持つ。脚裾部は「ハ」の字状にわずかに広がり，4つの穿孔がみられる。158の外面は篦磨き調整，内面は刷毛目が残る。いずれも水漉し粘土を使用している。椀形土器（157）は浅いボウル状を呈す。口縁端部は横ナデによって丸くおさめられており，底部は丸底を呈す。外面は篦削りされ，内面は横ナデののち放射条に暗文が施されている。

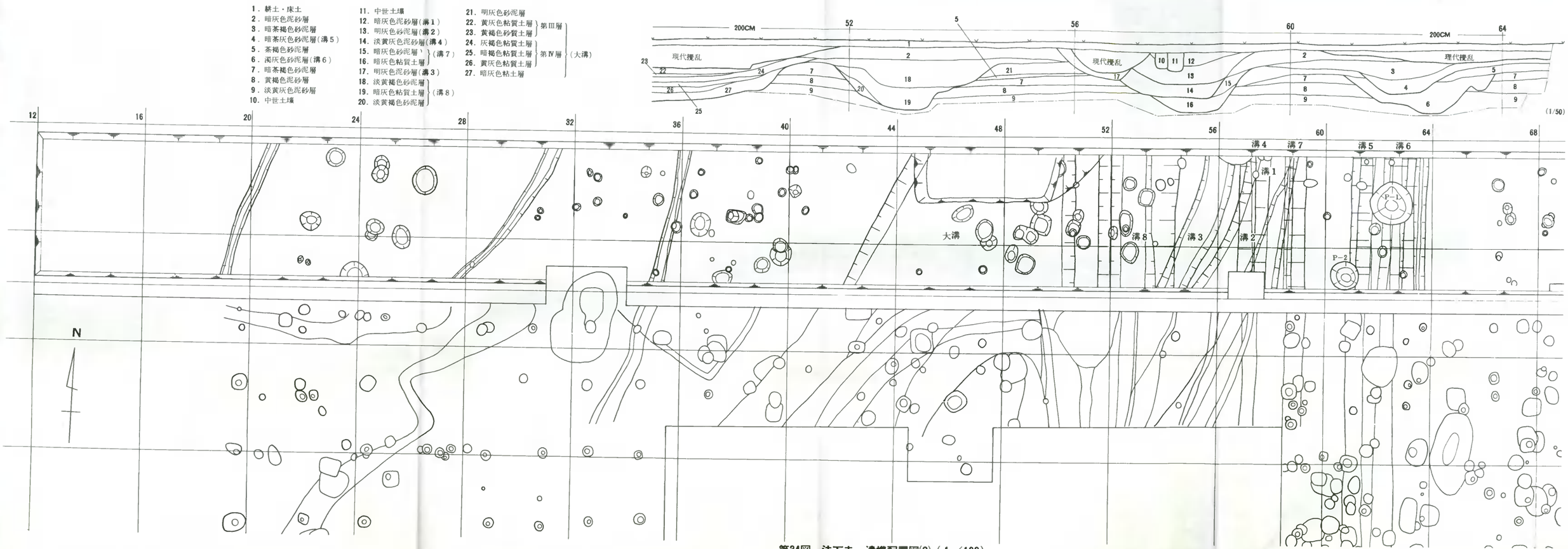
製塩土器（160，161）は脚部のみ出土している。ラッパ状に開く小さな脚部を持ち，外面には指頭圧痕が残る。内面はナデられている。

その他，5面に擦痕がみられる砥石が出土している。

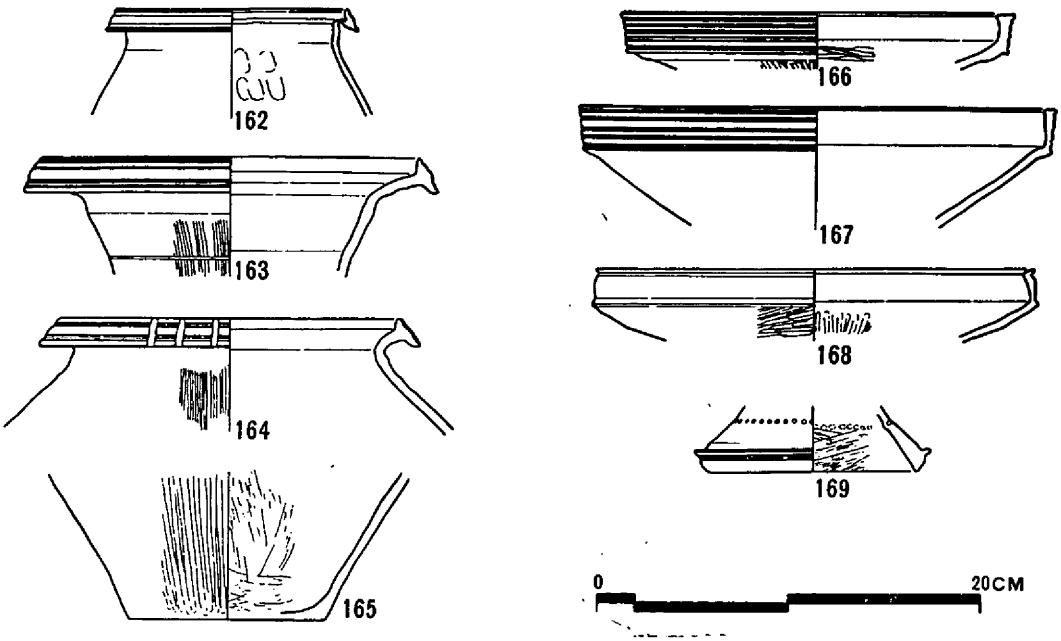
以上，前述のH－4出土遺物と類似しており，亀川上層式併行のものと考えられる。　（江見）

溝状遺構

当調査区からは15本の溝状遺構を検出しているが，H－4の南から検出した溝以外はすべて南北ないし南東方向に流走している。特に微高地最高所と考えられる40～64地点からは，8本の溝状遺構が集中して検出された。そのうち7～8世紀と考えられる溝1～3を除いて，弥生時代中期末～古墳時代の溝4～8及び大溝は，比較的規模の大きな溝で，用水路としての機能を果たした可能性が強い。



第34図　法万寺　遺構配置図(2)（1／100）



第35図　法万寺　溝－5出土遺物

4）溝　6

幅約240cm，深さ約70cmを測る。溝底は西側が一段高くなっており，幅約50cmの平坦面がみられる。また溝の東肩部には，幅約40cm，深さ約30cmの溝が当溝に併行して掘られている。

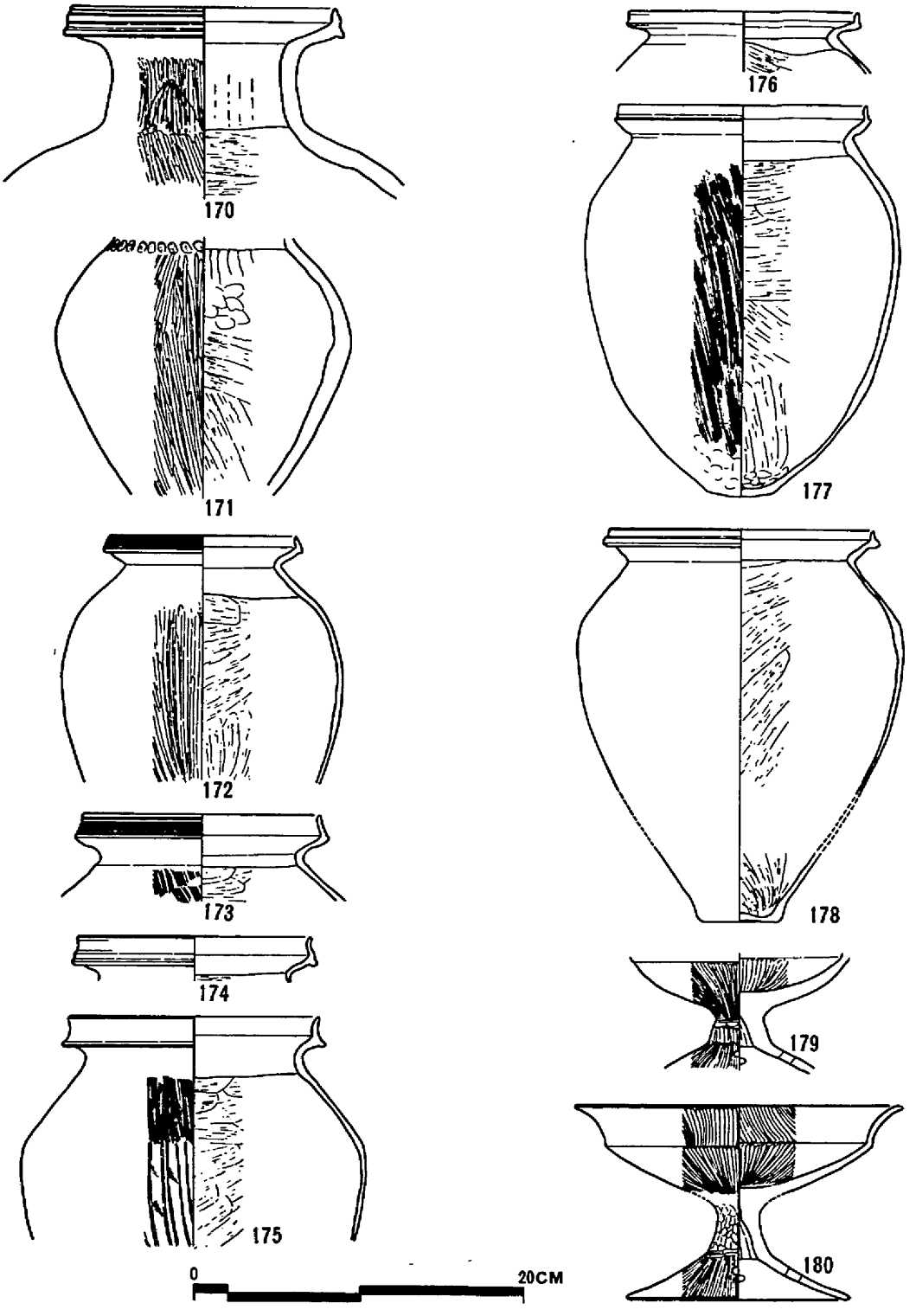
遺物は土器片が少量出土しているが，時期を決定することは困難であった。しかし，前回調査を検討した結果，弥生時代中期後半に埋没した溝と考えられる（註2）。

5）溝　5

＜**遺構**＞幅約180cm，深さ約40cmを測り，断面逆台形状を呈す。調査当初は溝6中の一土層と考え調査を進めていたが，第4層は腐植土混じりの暗茶褐色砂泥層で，下層とは明らかに差違が認められ，プランにおいても溝6とは様相を異にしていることから，新たに開溝されたものの可能性が強い。

＜**遺物**＞壷・甕形土器はいずれも口縁端部が内傾して上下に拡張するもので，端面には二～四条の凹線が施されている。壷形土器はやや外ぶくらみの短い頸部に，急激に外反する口縁をもつもの（**162**）と，斜め外方に開く頸部に，さらに外開きになる口縁をもつ大型のもの（**163**）がある。甕形土器（**164**）は「く」の字状に外反する口縁をもち，口縁拡張部外面には3本の棒状浮文が施されている。高杯形土器は口縁部が直立し，数条の凹線をもつもの（**166，167**）と，口縁部がやや内傾して立ち上がり，横ナデ調整されているもの（**168**）がある。脚部（**169**）は「ハ」の字状を呈し，端部を肥厚させている。脚部中央には円棒状の工具による刺突が廻らされている。

以上，弥生時代中期末に比定できる。



第36図　法万寺　溝－8出土遺物

6）溝　7

溝4によって溝の一部が切られており，残存幅約130㎝，深さ約70㎝を測る。遺物は弥生時代中期末の土器片が少量出土している（註3）。

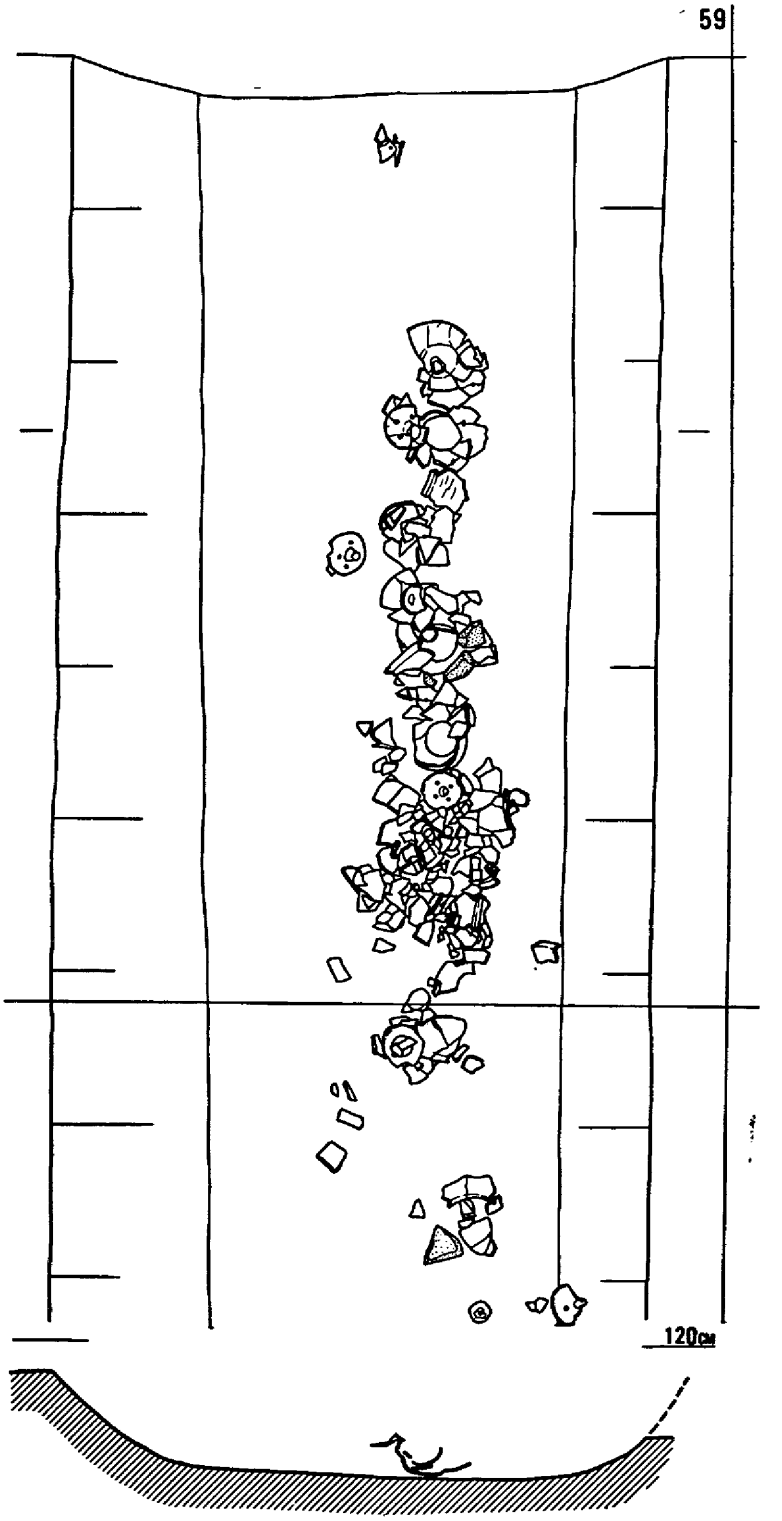
7）溝　8

幅約300㎝，深さ約70㎝を測り，土層は上下二層に大別される。出土遺物においても上東・鬼川市Ⅲ（170, 171, 174, 175, 178）と才の町Ⅱ（172, 173, 177）に明らかに区別できることから，当溝は一度埋没した後，新たに開溝された可能性が強い。　（江見）

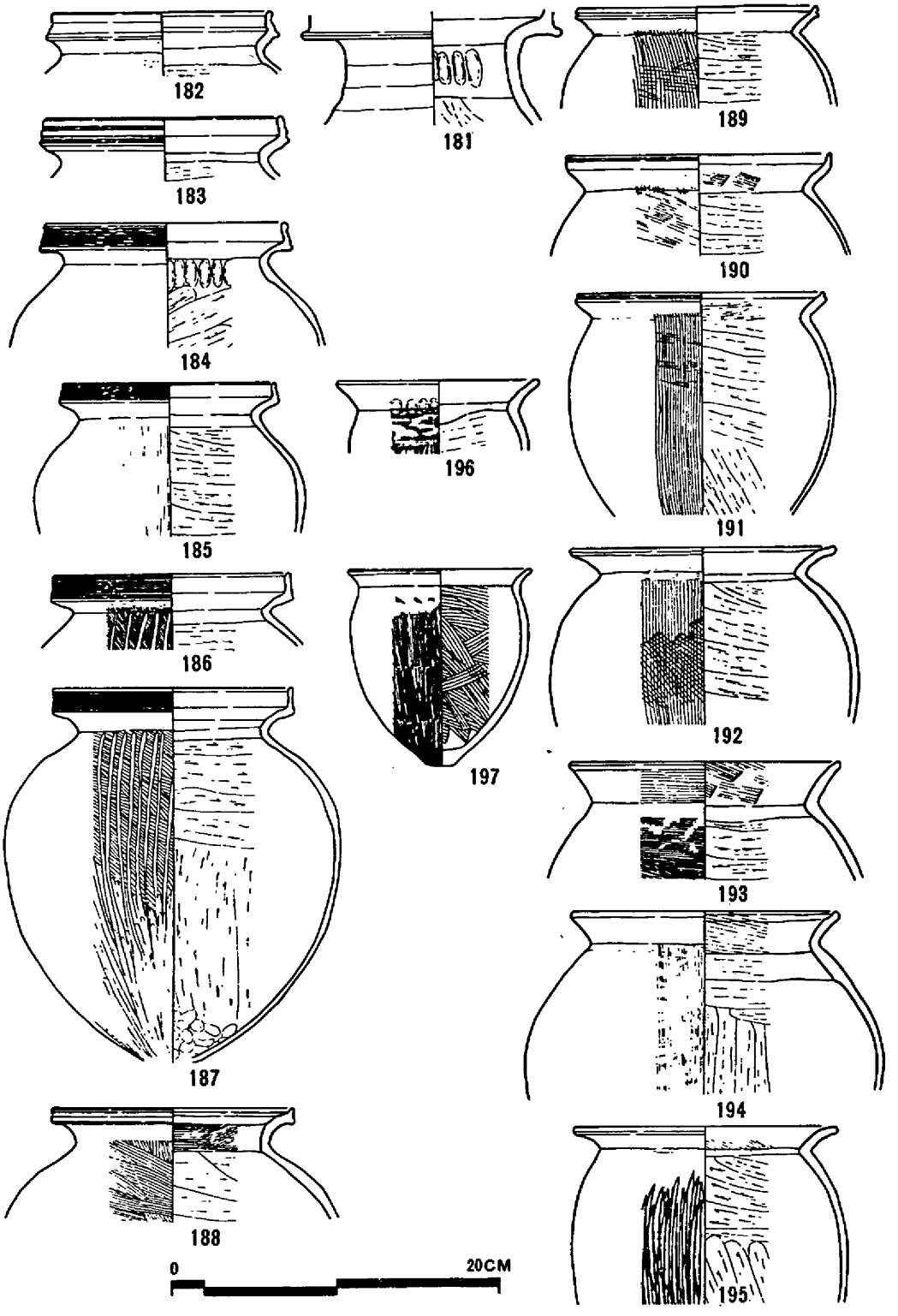
8）溝　4

＜遺構＞上部を溝2によって切られているもので，残存幅約230㎝，深さ約40㎝を残す。溝の底からは完形を含む土器群が，一括廃棄された状態で出土している。

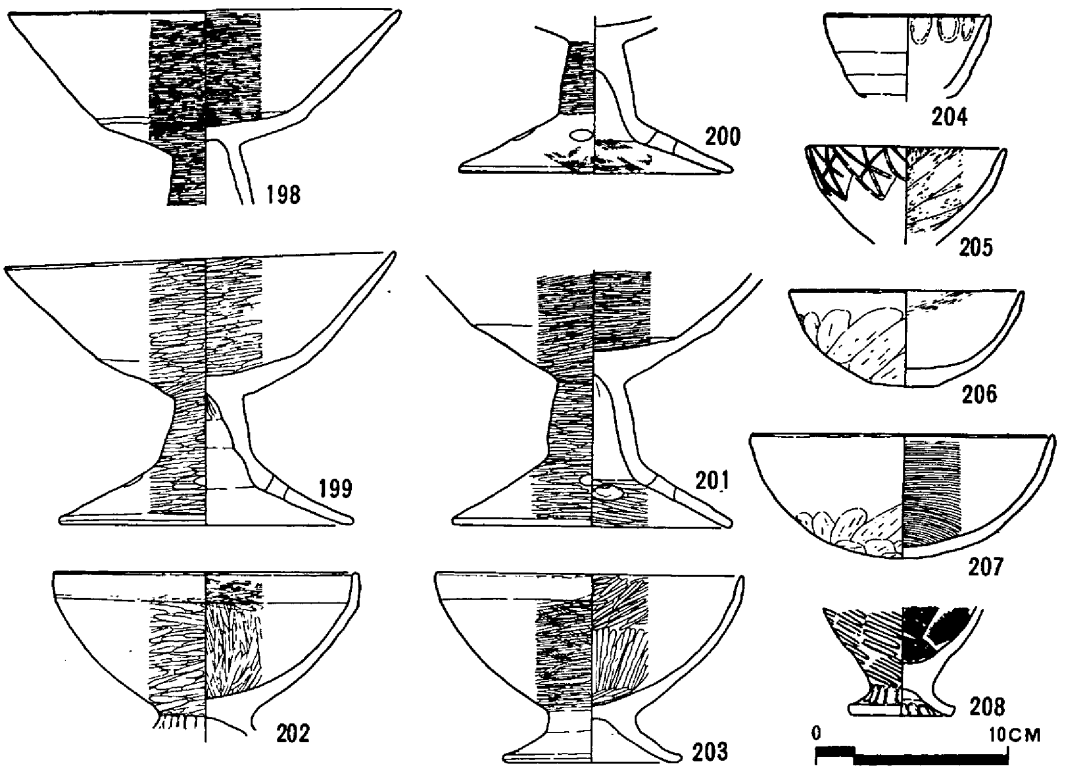
＜遺物＞壷形土器は，出土土器中数片しか見いだせなかった。181は，口縁部が「ハ」の字状に広がる頸部から外方に鋭く屈曲し，端部は上下に大きく拡張する。外表面には，丹の付着が認められた。



第37図　法万寺　溝－4遺構平・断面図（1/30）



第38図　法万寺　溝－４出土遺物（1）



第39図　法万寺　溝－4出土遺物（2）

甕形土器はA類・B類・C類に大別できる。A類は「く」の字状口縁をもち端部を丸くおさめるもの（192～197）である。B類は，A類の口縁端部を多少つまみ上げて端面をつくりだすもの（188～191）で，口縁部の立ち上がりの角度で二種類にわけることもできる。C類は口縁端部がやや内傾して立ち上がるもので，端面に退化凹線をもつ182・183や擬凹線をもつ184，櫛描平行沈線文をもつ185～187がある。186・187は，外面を刷毛目調整ののち，下半を篦磨きで仕上げ，肩口から胴部にかけては暗文になっている。185は横ナデでていねいに調整されている。またいずれも砂粒を多く含み，褐色か黒褐色を呈し，内面篦削りの特徴を示す中にあって197は精良な粘土を用い，赤褐色を呈し，内面は荒い刷毛で調整されている。

高杯形土器全体に杯部が大きく，短脚で裾部は屈曲して「ハ」の字状に開き，4孔の透しをもつ。200の裾部内外面は，199，201にみられる篦磨きではなく，細かい刷毛目調整ののち部分的にナデられており，器形的にもやや古い様相を示す。

鉢形土器202，203は，内彎する体部から稜線をもち立ち上がる口縁部をもつ台付の鉢形土器である。杯部外面は刷毛目調整ののち篦磨きを，内面は2回に分けて篦磨きを施す。205は口縁部外面に「＊」の文様が凸になるようにして，連続的にスタンプしている。内面は，板状工具による調整が行なわれている。206，207は，のちによくみられる皿形土器の遡源的なものと考えられる。どちらも外

面は体部から底部にかけて篦削りで調整している。208は上部が欠損しているが，外面体部を左上りの荒い叩きののちナデで，内面を蜘蛛巣状の刷毛目でそれぞれ調整している。

以上出土土器を概述したが，溝の性格上古い様相をもつ土器（181～184，200）を含むものの，その他の土器は形態・成形技法からみて，一括して才の町Ⅱ式よりやや後出の，また亀川上層式よりも先行する一群として位置づけられる。（中野）

9）大　溝

＜**遺構**＞当微高地の中央から少し西寄りに，北東一南西方向に検出された幅約700㎝，深さ80㎝の溝である。前回調査で溝321・322として報告しているものがこれにあたると思われるが，今回調査では溝内堆積土層を検討した結果，一本の溝であると理解した。つまり，大溝内の土層は6層にわけることができたが，そのうち第22層・第23層（Ⅲ層）が前回溝321に，第24層～第26層（Ⅳ層）が前回溝322にあたり，Ⅲ層の堆積状況から溝321が単独の溝とは理解しがたい。Ⅲ層・Ⅳ層ともに多くの土器が出土している。Ⅲ層は完形に近い土器が多くみられ，「く」の字口縁の甕形土器と小型手捏土器が目立った。Ⅳ層は製塩土器片と口縁端面に櫛描平行沈線文を施した甕形土器片が多くみられた。

この溝の出土土器は，Ⅲ層・Ⅳ層ともに時期のかなり限定できる一括土器として取り上げることができ，以下Ⅲ層を大溝上層，Ⅳ層を大溝下層として説明したい。なお，図示した遺物は実測のできるものに限った。また，溝上部の第Ⅱ層から銀環が出土しているが，包含層出土遺物として取り扱った。

＜**下層遺物**＞壺形土器は「く」の字口縁を呈すもの（209）と二重口縁を呈すもの（210，211）がある。211は器壁の厚い口縁部をもち，口縁端部は少し肥厚させて丸くおさめている。また，肩部に篦描波状沈線文を廻らす。胎土に緻密さはなく，焼成も良くない。209～211は褐色を呈す。

甕形土器は，口縁部の形態によりA類（222，224，225），B類（223），C類（212～221）に大別できる。C類は，H－4出土の124～217と同類である。

鉢形土器（226，227）は二重口縁を呈すものである。227は口縁部内外面とも横ナデ，胴部内外面はそれぞれ篦削り，押圧と刷毛でていねいに調整している。

高杯形土器は，A_1類（230～235），B類（228）などが出土している。A_1類は，H－4の同類のものと成形・調整等に変わりはない。228・229は脚柱部が短かく，前出的な特徴を示している。

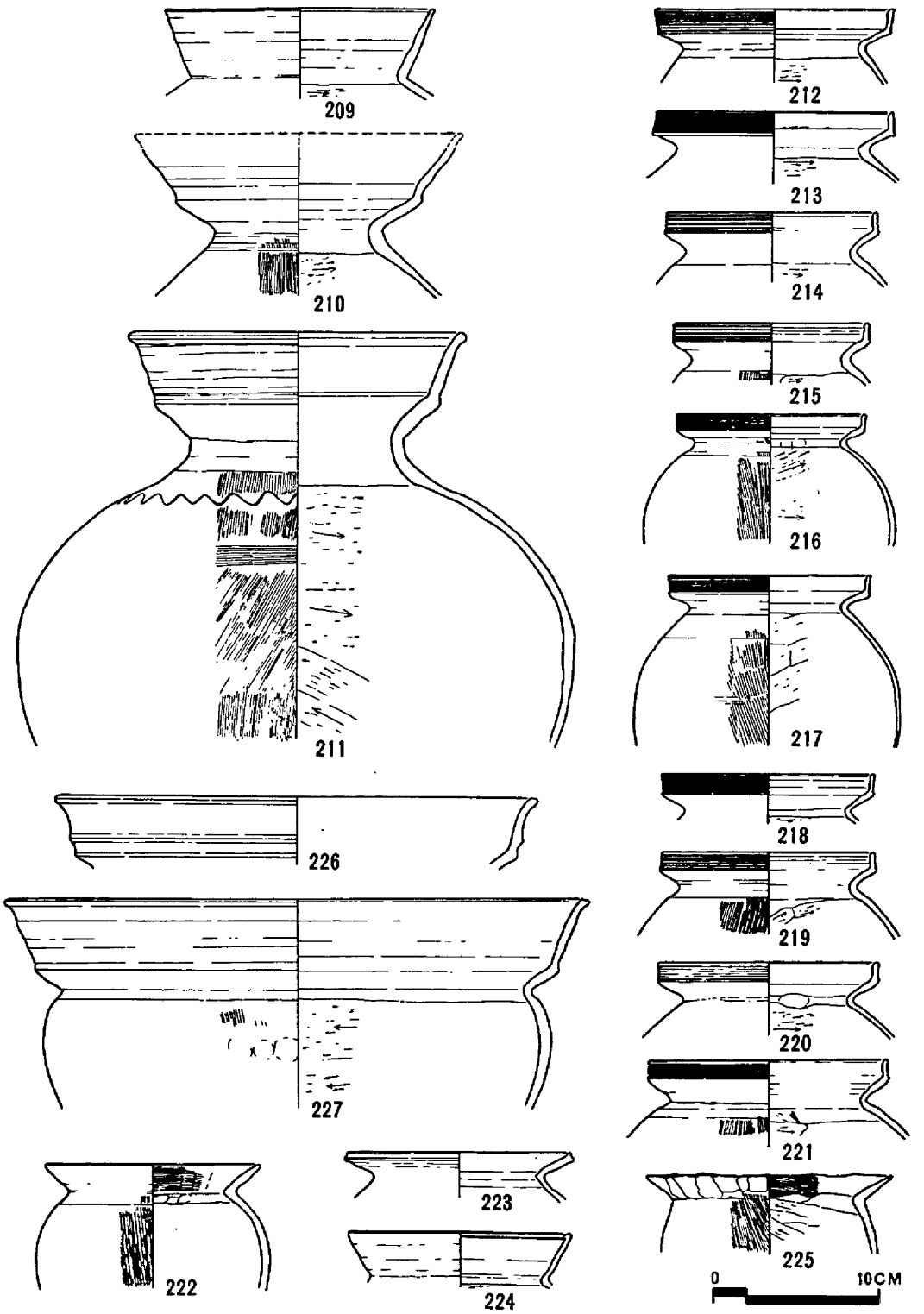
小型坩形土器・小型器台形土器・小型鉢形土器は，それぞれH－4出土のものと同種である。238は138と比べて口縁部が長めで，内面に刷毛目がみられる。239は140・141と比べて少し残い。

Ⅲ形土器は，H－4のものと形態的には変わらず，143～146で口縁部近くまで成された外面篦削りが，240～242では底部付近にみられる点が違うくらいで，胎土・色調にも変化はない。

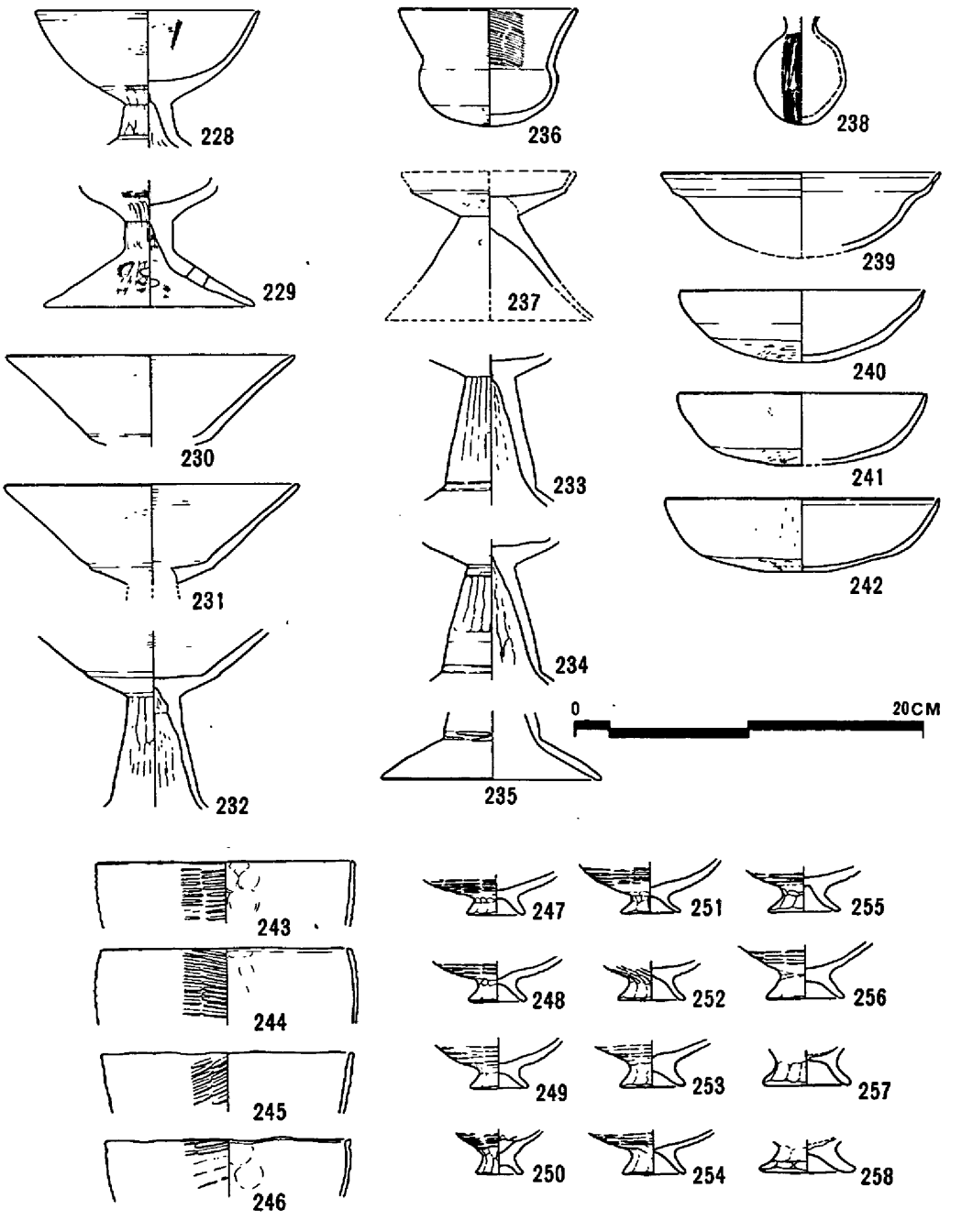
製塩土器は，脚部で110個体以上まとまって出土している。脚部径は平均3.75㎝を測り，器部底の張りが強い。150～154の土器と同じ成形・調整法による粗製の土器である。

以上の土器は，H－4，5，5′出土の土器に類似しており，亀川上層式に比定できる。

＜**上層遺物**＞壺形土器（262）はナデ肩で胴部はほぼ中央に最大幅をもち，不安定に突出させた底部をもつ。



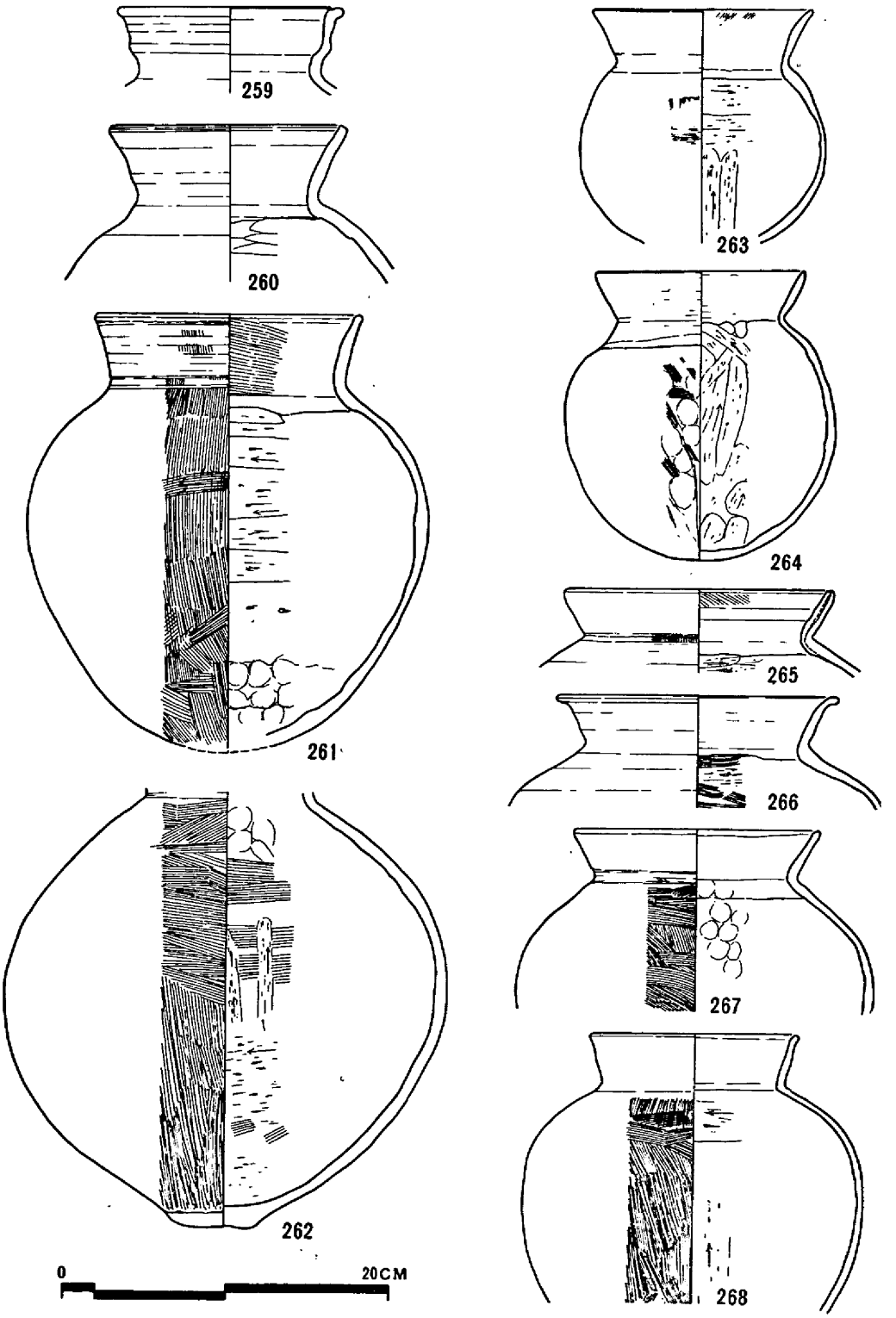
第40図　法万寺　大溝Ⅳ層出土遺物　(1)



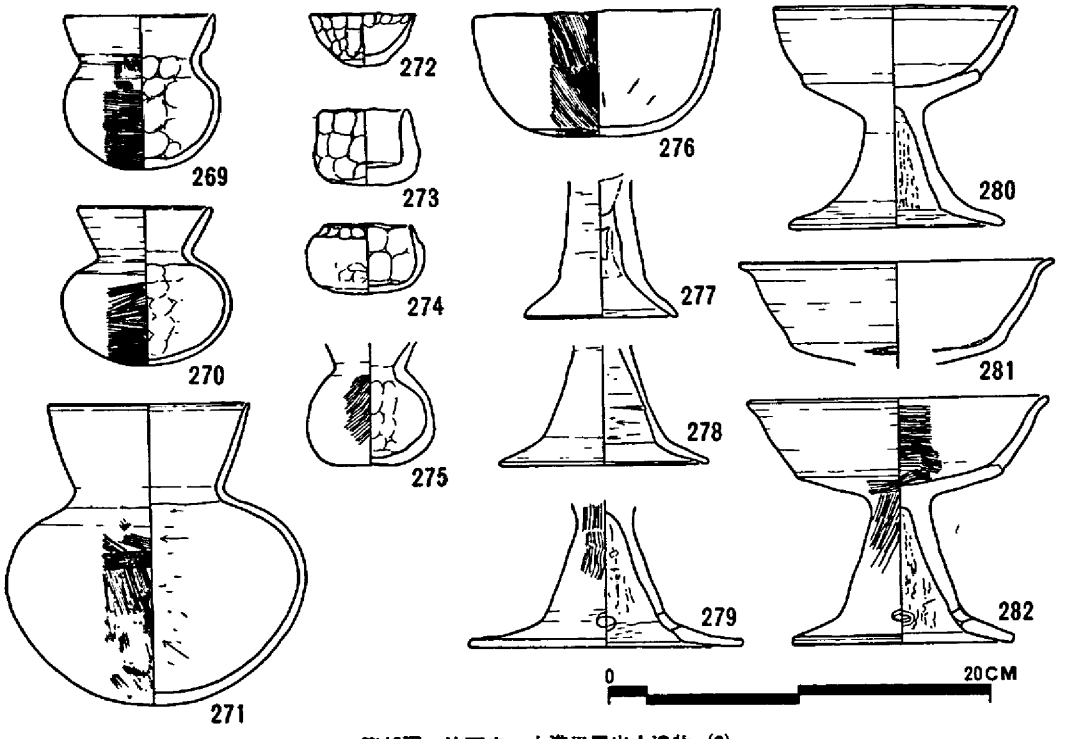
第41図　法万寺　大溝Ⅳ層出土遺物　(2)

甕形土器は，ほとんどのものがほぼ球形の胴部に，「く」の字状に開く口縁部をもつ。259～261は器形的には壺形を呈すが，胎土が粗く，二次的な火を受けていること，調整が雑であることなどから用途的には甕として使用されたと思われる。263～268についても，成形・調整ともに粗雑である。

小型壺形土器は，ほぼ球形の胴部に斜め外方に立ち上がる直口部をもつもので，比較的大きなもの



第42図　法万寺　大溝III層出土遺物 (1)



第43図　法万寺　大溝III層出土遺物（2）

（271）もある。いずれも口縁部内外面は横ナデを加え，胴部外面は刷毛目で調整している。内面の調整は指頭圧によるもの（269，270）と篦削りによるもの（271）がある。

高杯形土器は徐々に広がる脚柱部が端部近くで急に開くもので，深めの杯部をもつ。裾部に貫孔をもつもの（279，282）ともたないもの（280，277，278）がある。器表はおもに横ナデと荒い刷毛で調整している。胎土はいずれも甕形土器と同様に粗い。また全体に器壁が厚く，形態的にもシャープさがみられない。

椀形土器（276）は，一括土器の中にあって比較的胎土の堅緻なものである。器表は細かな刷毛で調整している。

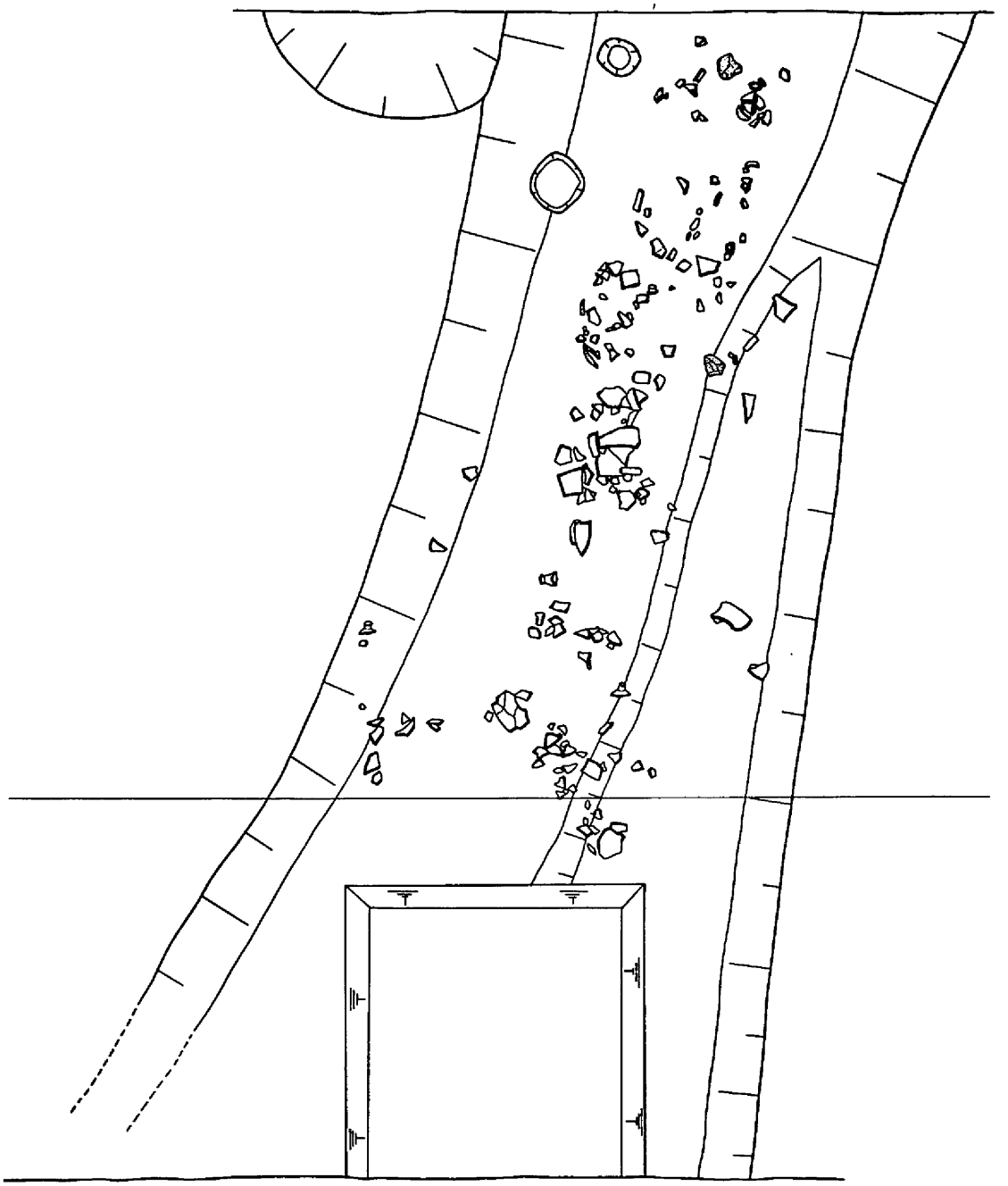
手捏土器（272～274）は，前回調査においても多く出土しているもので，形態的には図示の３種類くらいにわけられる。

以上，出土土器の形態から，笠岡市走出遺跡（註４）のものに比較的近い時期と思われ，この時期には壺と甕の区別がつきにくくなり，高杯形土器も器壁が厚く，つくりも雑で全体的に器種が実用本位になっていく傾向をみせ，いわゆる供献土器が須恵器に変わりつつあることを想定させる。

（柳瀬）

10）溝　1

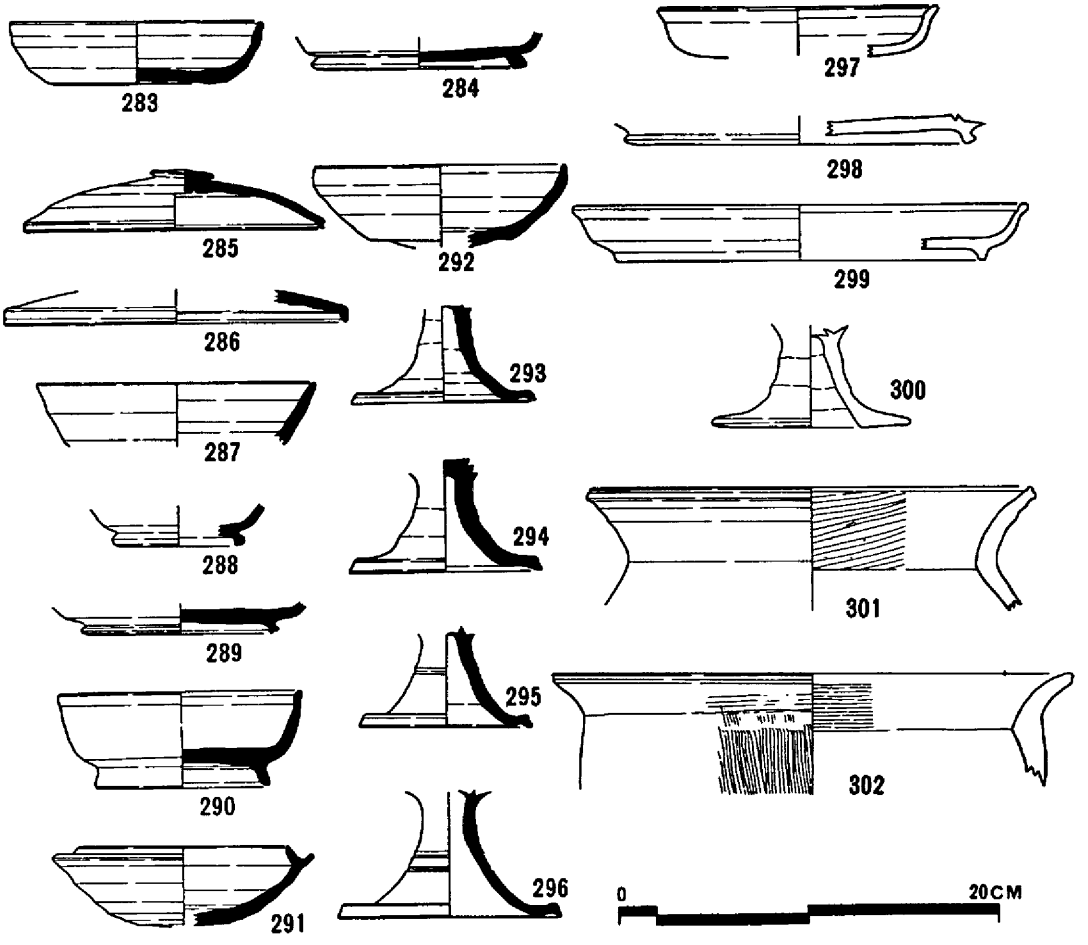
溝２の上部に重復して存在する。幅約 120 ㎝，深さ約25㎝の南北に延びる溝である。溝内には，暗灰色泥砂層が堆積し，283，284のほか若干の土器が出土している。



第44図　法万寺　溝－２遺構平面図（1/30）

11）溝　2

＜遺構＞微高地中央部にほぼ南北に延びる。溝１の下部に位置し，幅は北側約 190 ㎝，南側では広



第45図　法万寺　溝－1・2出土遺物

く250～300㎝を測り，東側は２段掘りになっている。残存する深さは，約60㎝で暗灰色砂泥層が堆積している。遺物は，須恵器，土師器が溝底及び肩口に集中して出土している。

＜**遺物**＞須恵器は，杯蓋（285，286）杯身（287～291），高杯（292～296）の図示した以外にも各種のものが出土している。土師器は，皿（297），盤（298，299），杯などの食器の破片が非常に多くみられた。精良な粘土を使用しており，ていねいな横ナデによって仕上げている。杯の中には，内面に暗文を施すものも数片認められた。その他，高杯（300），甕（301～302）なども出土している。

以上のように出土土器は，７世紀中頃を上限として８世紀中頃までの時期を示す。

12）溝　3

溝２の西側に平行してほぼ南北に延びる。幅約 120 ㎝，深さ約50㎝を測る。溝内には，明灰色泥砂層が堆積し，堆積土中には溝１，溝２と同様の土器が認められた。　（中野）

13) P－3

＜遺構＞微高地のほぼ中央部の床土直下から検出されたもので，直径約90cmの円形を呈す。深さは110cmを測る。発見面から60cmまでは擂鉢状に落ち込み，以下，底部まではほぼ垂直に落ち込んでいる。堆積土は4層に分けられる。第1層は暗褐色砂泥層で，遺物はほとんど含まない。第2層は灰色粘土層で，当土壙出土遺物の大半がこの層から出土している。第3層は炭層，第4層は植物質の混じった茶褐色砂泥層である。

以上，形態的には井戸状を呈す土壙であるが，壁面は粘土層であり，その機能には疑問が残る。

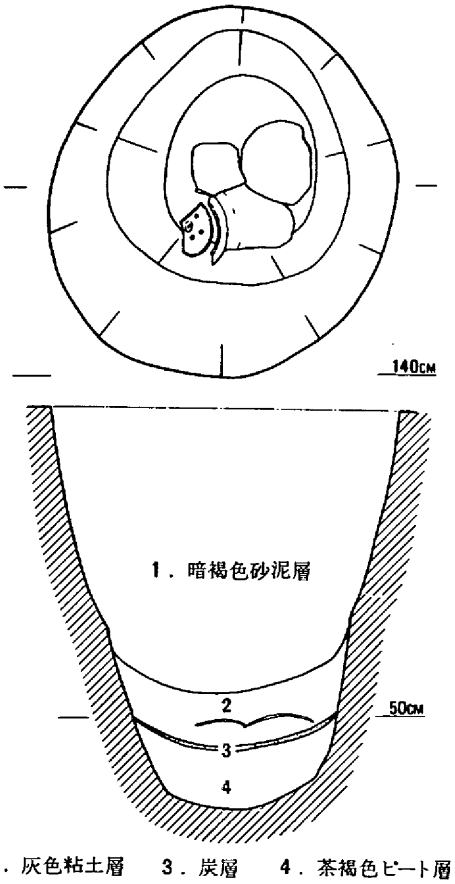
＜遺物＞壷形土器（303，304）303は斜め外方に立ち上がる口縁部をもつ，全体に稚拙な作りの土器である。胴部外面は雑な篦磨き，内面は篦削りで調整されている。304は頸部に断面方形の突帯をもち，突帯外面及び上面には一対の小円形を呈す刺突が廻らされている。また，頸部には篦状工具による刺突が廻らされている。内面は頸部から胴部にかけて指頭圧痕及びナデ調整痕がみられ，胴部中央以下は篦削りしている。

甕形土器（305～308）口縁部は「く」の字状に外反し，端部がわずかに肥厚するもの（307，308），端部が内傾し上部に拡張するもの（306），端部が内傾し上下に拡張するもの（305）がある。306の拡張部外面は，五条の平行沈線を施したのち，横ナデ調整されている。外面肩部は刷毛調整，胴部以下底部までは篦磨き調整されている。内面は胴下半部に指頭圧痕を残し，その上半は篦削りしている。器壁は薄く，シャープな作りである。なお，器表面全体にススが付着している。

高杯形土器（309）わずかに外反する口縁部をもち，杯部は浅い。脚柱部は短かく，裾部にかけて「ハ」の字状に広がっている。杯部内外面及び脚部外面は篦磨き調整されている。水漉し粘土を使用している。

その他，椀形土器（310），鉢形土器の脚部（311）なども出土している。

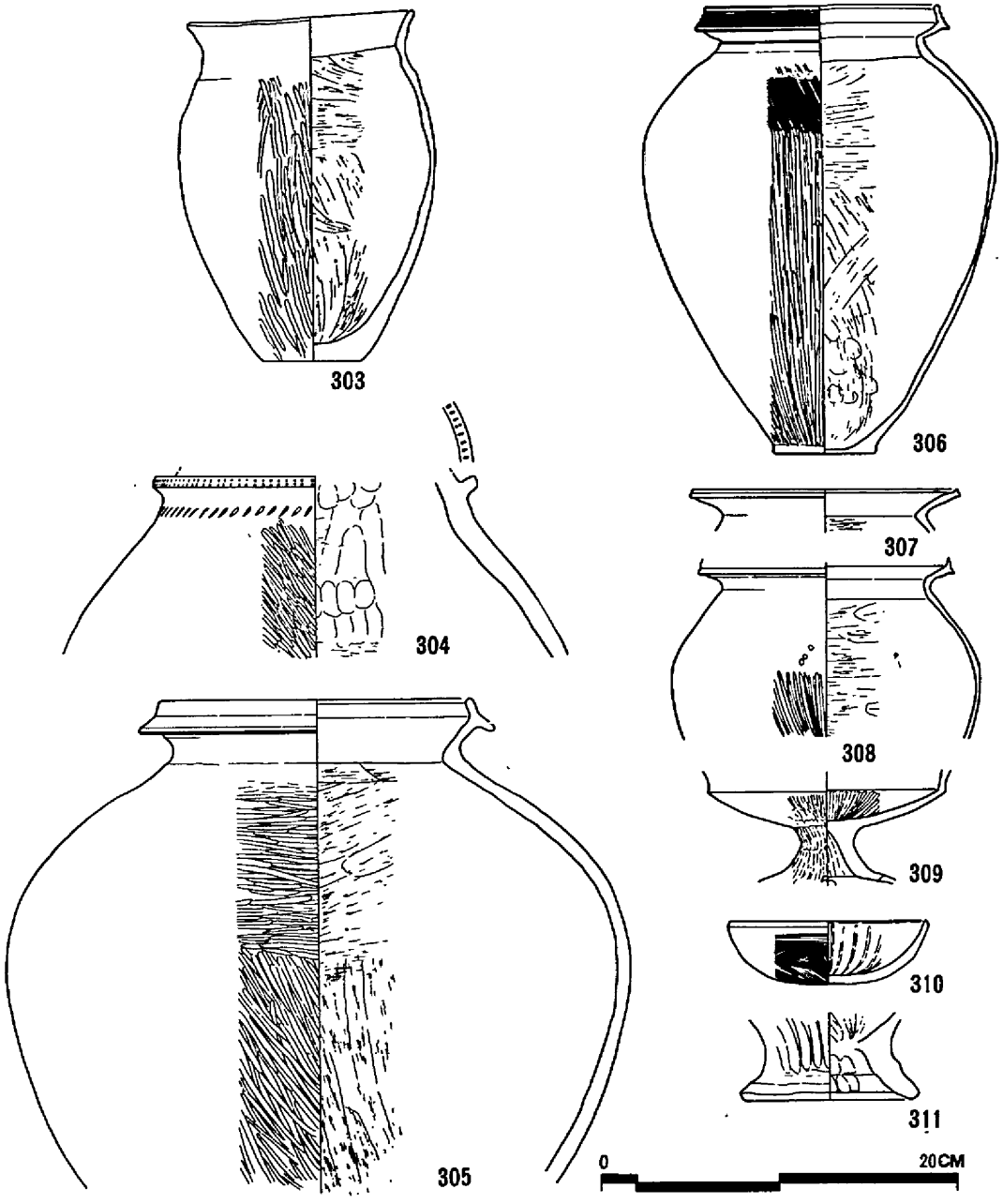
以上，304など古い様相を残すものもあるが，全体的な特徴から上東・鬼川市Ⅲ～才の町Ⅰ式に併行する時期のものと考えられる。



第46図　法万寺　P－3遺構平・断面図
(1/20)

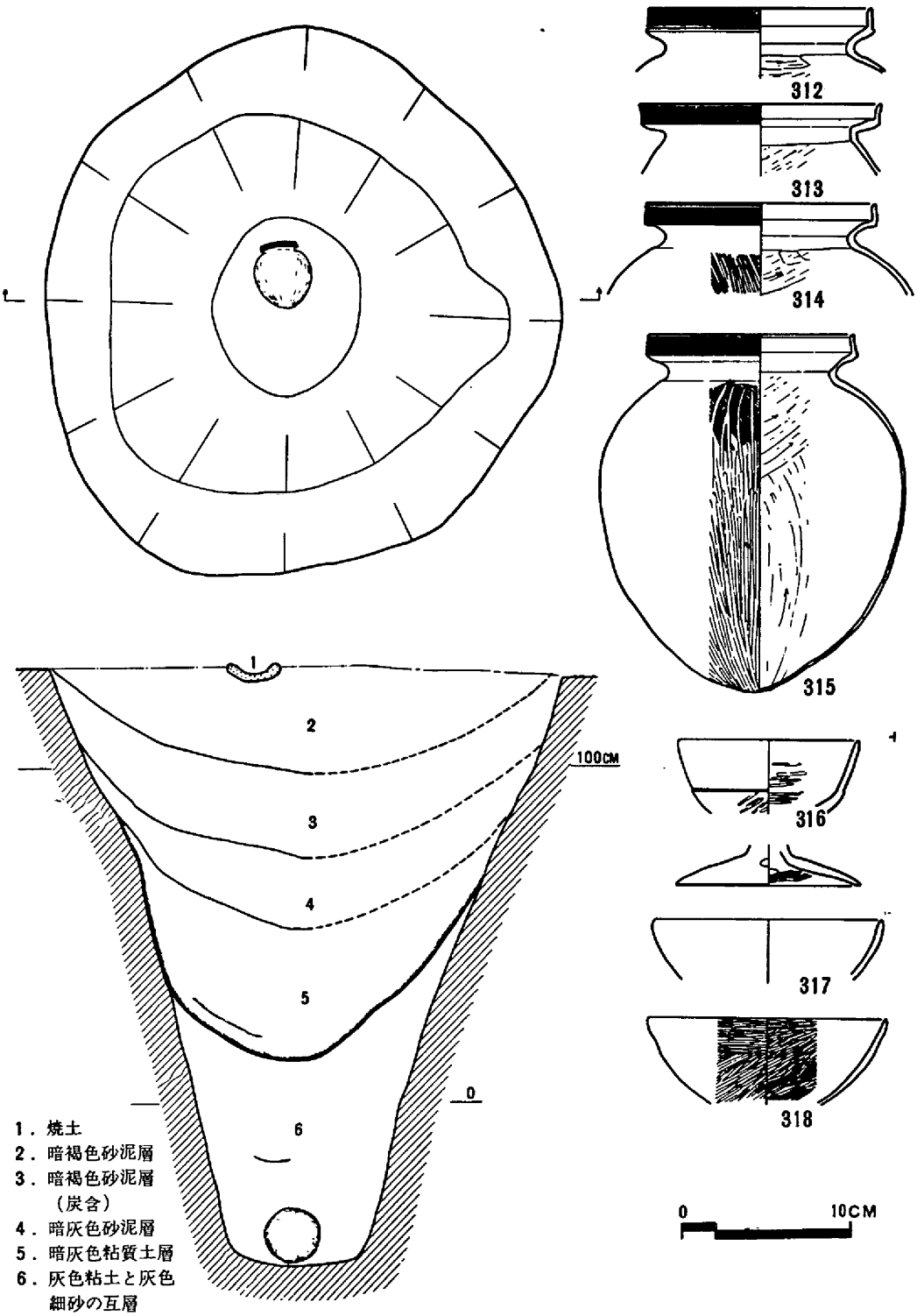
14) P－1

H－5の西方約10mの床土直下から検出したもの



第47図　法万寺　P－3出土遺物

で，直径160㎝のほぼ円形を呈す。深さは180㎝を測り，下部の溝5，6を一部切って存在する。上部60㎝までは擂鉢状に落ち込み，以下底部までの120㎝はやや角度を変えて斜めに落ち込んでいる。土壙中程から上部にかけては，一部凹んだ箇所がみられる。土層は3層に大別される。1は直径20㎝の範囲で焼土がドーナツ状に一周する遺構である。野鍛冶址の可能性が強いが，当土壙とは直接の関係



第48図　法万寺　P－1遺構図（1/20）及び出土遺物

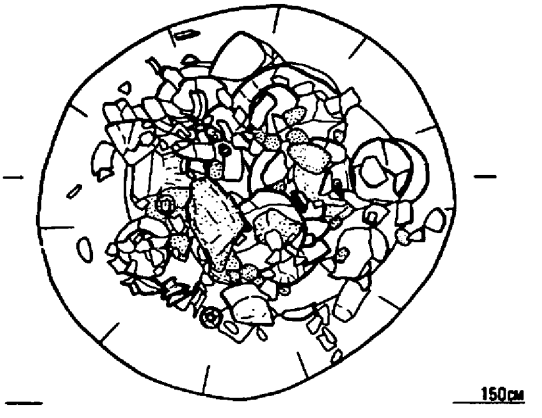
はないものと思われる。時期は不明である。第Ⅱ層にはワラ状のものがスライス状に堆積している部分がみられた。第Ⅱ，Ⅲ層間には植物質のものが混じる炭層が堆積していた。第Ⅲ層は植物混じりの粘質土層で，底部からは完形の甕（315）が横になった状態で出土している。

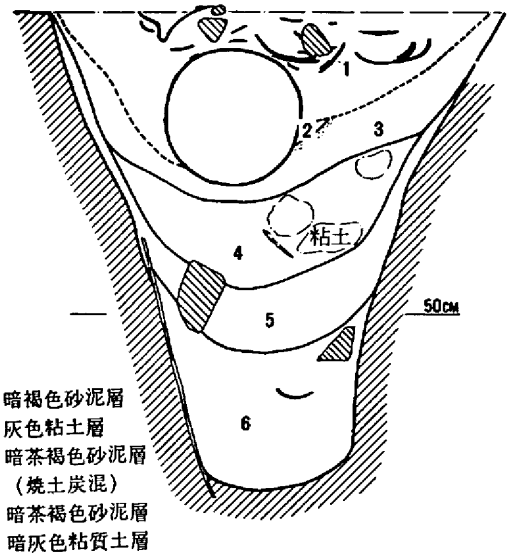
以上，形態的に井戸状を呈す当土壙は，1．植物繊維質のものを多分に含む。2．他の同様土壙に比べ出土遺物が著しく少ない。 3．井戸状を呈しているにもかかわらず底部は湧水層まで達していない。などの特徴があげられる。

＜遺物＞甕形土器（312～315）全て口縁端部に拡張面をもつもので，端面には8～10本の櫛描平行沈線文が施されている。また拡張部は比較的短かく，その作りも粗雑で，全体にシャープさがなくなっている。315の胴部外面は，肩部を刷毛調整，以下を篦磨き調整している。また一部篦磨きが暗文風に肩部まで延びている。胴部内面は篦削り調整により，器壁が非常に薄くなっている。

高杯形土器（316～318）杯部が椀状を呈すもの（317，318），杯部外面途中に稜線が入り，杯部及び口縁部を明確に区別しているもの（316）がある。杯部はすべて篦磨き調整されている。316の脚部内面は刷毛調整されている。すべて水漉し粘土を使用している。

以上，高杯形土器においては亀川上層式のものと比較して，古い様相を残しており，また，甕形土器においても，亀川上層式のものに比べ肩に張りがあり，外面の篦磨きも肩部近くまでおこなわれていることなどから，当土壙出土の遺物は，亀川上層式より若干先行する時期のものと考えられる。



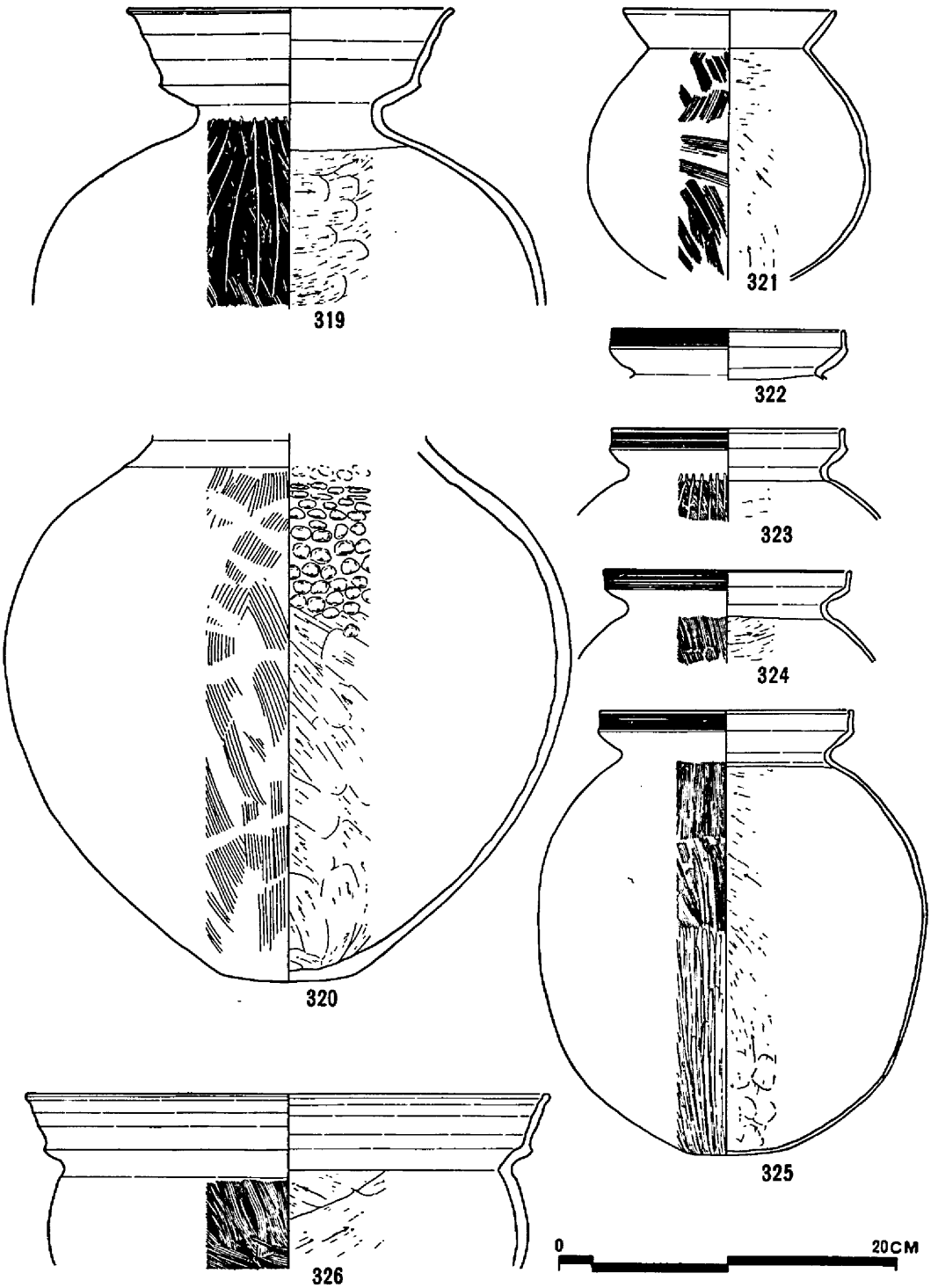


1．暗褐色砂泥層
2．灰色粘土層
3．暗茶褐色砂泥層（焼土炭混）
4．暗茶褐色砂泥層
5．暗灰色粘質土層
6．灰色粘土層

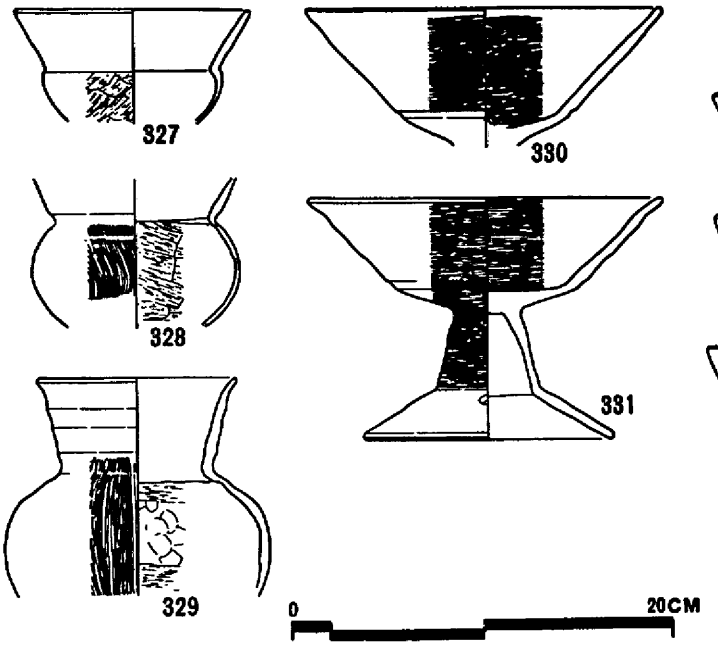
第49図　法万寺　P－2遺構平・断面図（1/20）

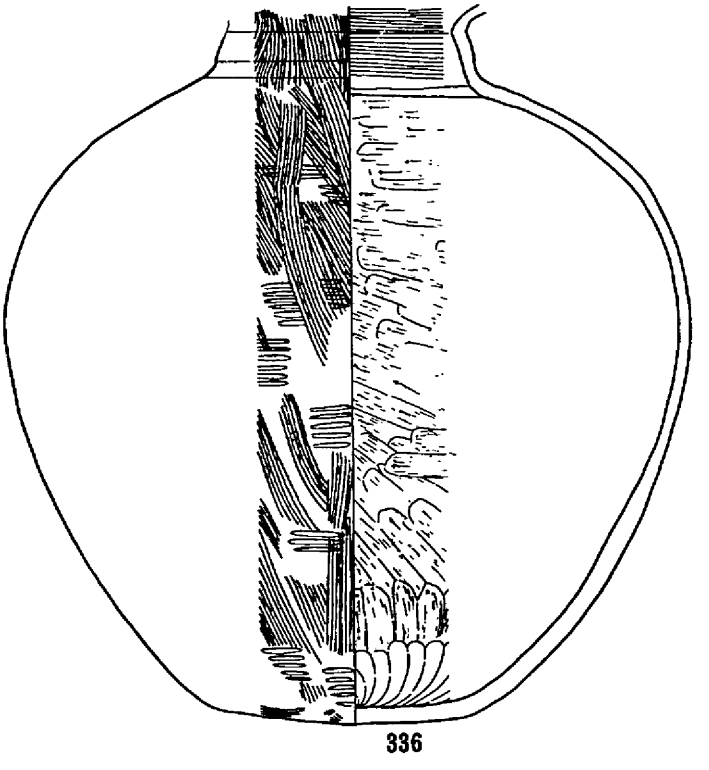
15）P－2

＜遺構＞P－1の南方約3mの床土直下より検出されたもので，平面プランは直径110cmのほぼ円形を呈す。深さ120cmを測る。土壙は深さ50cmの所でわずかに角度を変えるものの，ほぼ同様に落ち込んでいる。底部は径40cmの円形を呈す。土壙北側には幅30cm，長さ



第50図　法万寺　P－2出土遺物（1）





第51図　法万寺　P－2出土遺物（2）

70㎝，厚さ約1㎝の板が壁にそって検出された。板は土壙底部から10㎝程打ち込まれた状態であった。壁崩れ防止の矢板と思われるが，他に同様な箇所はなく，矢板の裏側も壁崩れの跡はない。さらに矢板部分の土壙壁は全て同一の粘土層であり疑問が残る。土層は3層に大別できる。第1層からは，多量の土器が径2～20㎝前後の礫に混じって出土している。土器は破片が多いが完形のものも数点出土しており，単に廃棄物として投棄されたものとは考えられない。第1～3層にかけては，口縁部を欠損した壷形土器336が横向きになった状態で出土している。第3層は焼土・炭を含む。第4層は白色粘土や植物質のものを含む。第5・第6層は数個の角礫を含むが，土器はほとんど含まない。

以上，平面プラン及び深さなど形態的には井戸状を呈すが，前述のP－1，P－3同様，底部は湧水層まで達していない。また当土壙のあり方は上東遺跡で検出されたP－へ（'74）と類似しており，土壙墓として二次使用された可能性を残すとともに，当土壙廃棄時の祭祀址としての可能性をも残すものである。前述土壙の疑問点をも含め，井戸状を呈す土壙の性格を検討する必要があろう。

＜遺物＞壷形土器（319，320，329，336）319は胴部下半を欠くが胴部上半は球形を呈し，ほぼ直立する短かい頸部をもつ。口縁部は二重口縁を呈し，外面には明瞭な稜線が入る。頸部から胴部にかけては刷毛調整ののち，暗文が施されている。胴部内面は篦削りされている。336は口縁端部を欠損するが，内傾する短かめの頸部をもつ。胴部は最大径を中央からやや上部にもち，肩の張らない球形を呈している。底部は広く，丸底を呈す。胴部外面は荒い横方向の叩き目痕が残り，その上から刷毛調整されている。内面は口縁部から頸部にかけて横方向の刷毛調整が成されている。胴部は篦削り，底部から胴部にかけてはナデ調整がそれぞれ成されている。

甕形土器は口縁部が「く」の字状に外反するもの（321），口縁端部が拡張するもの（322～325）がある。後者の口縁部の手法は前述のP－1と同様である。324は肩がほとんど張らず，胴部はやや間延びしており，丸底を呈す。胴部外面は上半部を刷毛で，下半部を篦磨きで調整している。

高杯形土器（330～331）の口縁部は，ともにほとんど反りをもたずに斜め外方に延びている。脚部は筒状を呈し，裾部は外方に折れ曲る。

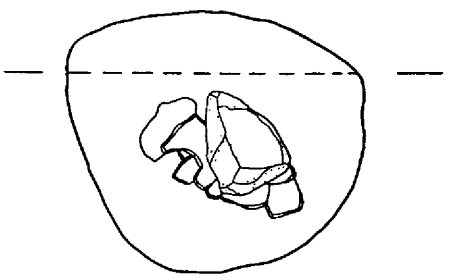
小型坩形土器は口縁部が斜め外方に延びるもの（327），口縁部はあまり延びず，胴部に張りをもつもの（328）がある。前者は水漉し粘土を使用している。

皿形土器（332～335）332は内外面ともに横ナデ及びナデ調整であるが，333～335は外面下半部が篦削りされている。

鉢形土器（326）は各部分の調整及び胎土が壷形土器（319）と同様である。

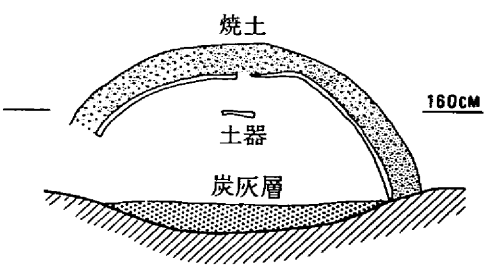
以上，土器の形態は典型的な亀川上層式である。

（江見）

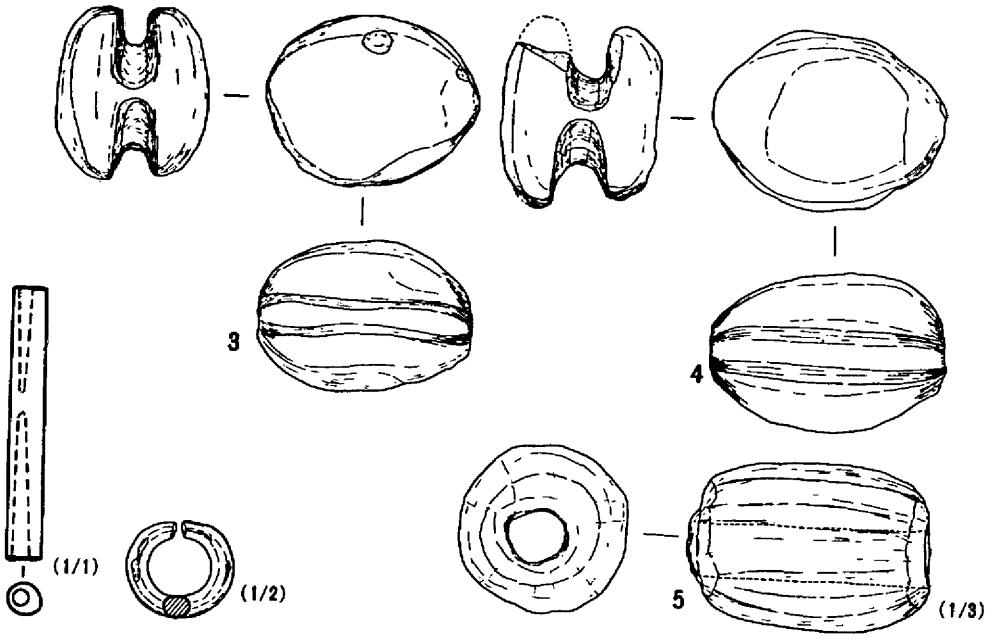


16）焼土遺構

径約35～40cmの不整円形を呈し，高さ20～25cmを測る。厚さ1cmの焼土がドーム状になり，上部の厚さ5cmほどが焼土化している。西側の一方は，焼土がとぎれている。内側の底部はややくぼんだ舟底を呈し，炭，灰，焼土塊が数cmにわたり堆積していた。その上面に土器片と石が検出されている。土器は，才の町Ⅱ式よりやや後出のものであった。大道西Ⅰ焼土遺構とともに性格，時期等については断定しがたい。



第52図　法万寺　焼土遺構
平・断面図（1/10）



第53図　法万寺　東斜面出土遺物

17）土壙及び包含層

銀　環

銀環は大溝上部の第２層から出土したもので最大径2.8㎝，最小径2.5㎝，厚さ0.7×0.5㎝の楕円形を呈す。銅地銀張りのものである。

管　玉

管玉はライン南側から出土したもので，直径0.4㎝，長さ3.6㎝を測る。両方向から穴が穿たれているが，貫通せず，途中で止まっている。緑色の碧玉製品である。

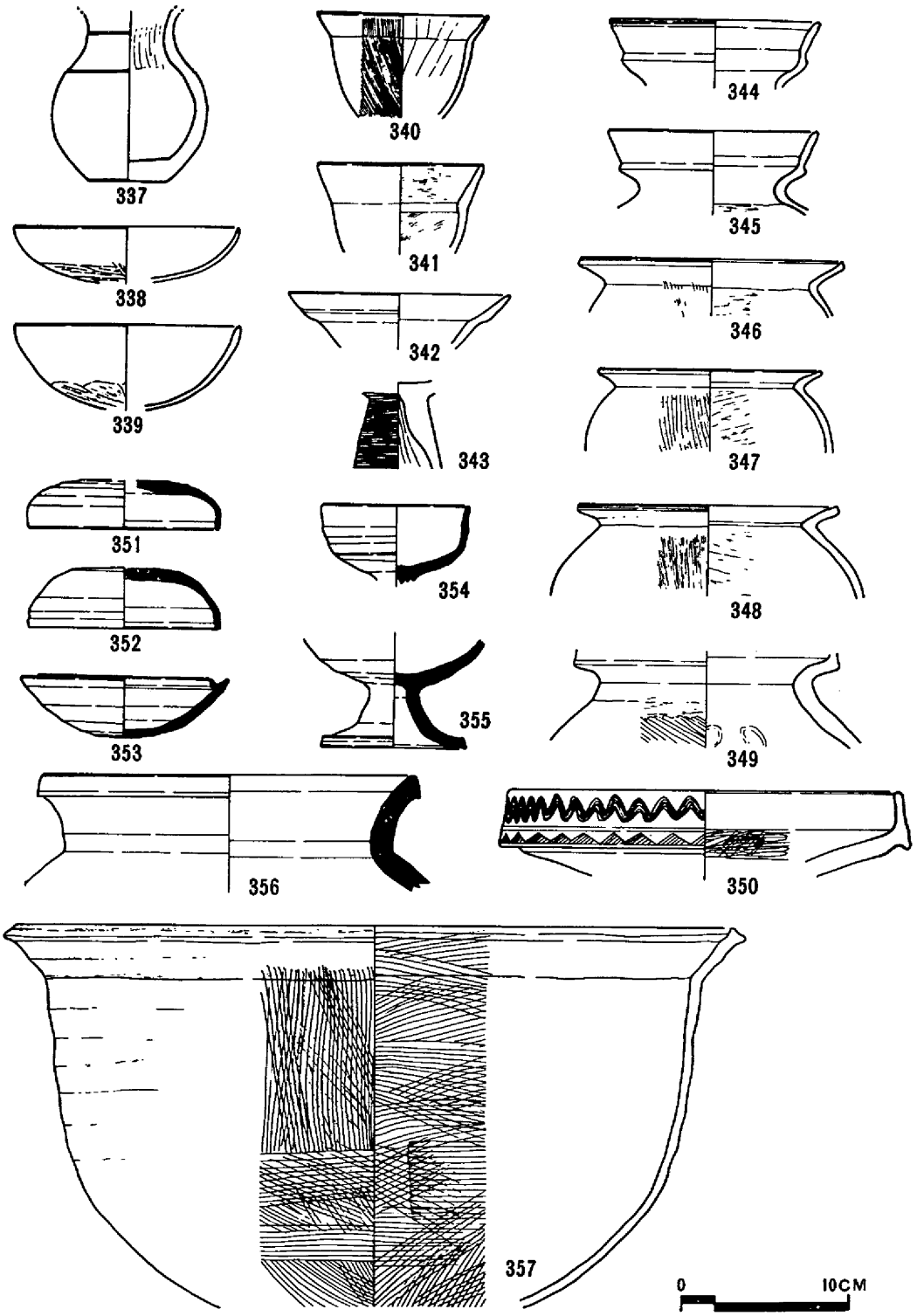
土　錘

これらの土錘は，東斜面の柱穴及び包含層中から出土した。形態は，有溝のもの（3，4），紡錘形のもの（5）の２種類あった。3，4は，茶褐色を呈し胎土には砂粒を多く含んでいた。表面一部には，砂粒が露出していて使用痕とも考えられる。重量は，3が324.5ｇ，4が367.5ｇである。5は，暗灰色を呈し砂粒を多く含む。重量は428ｇを計る。

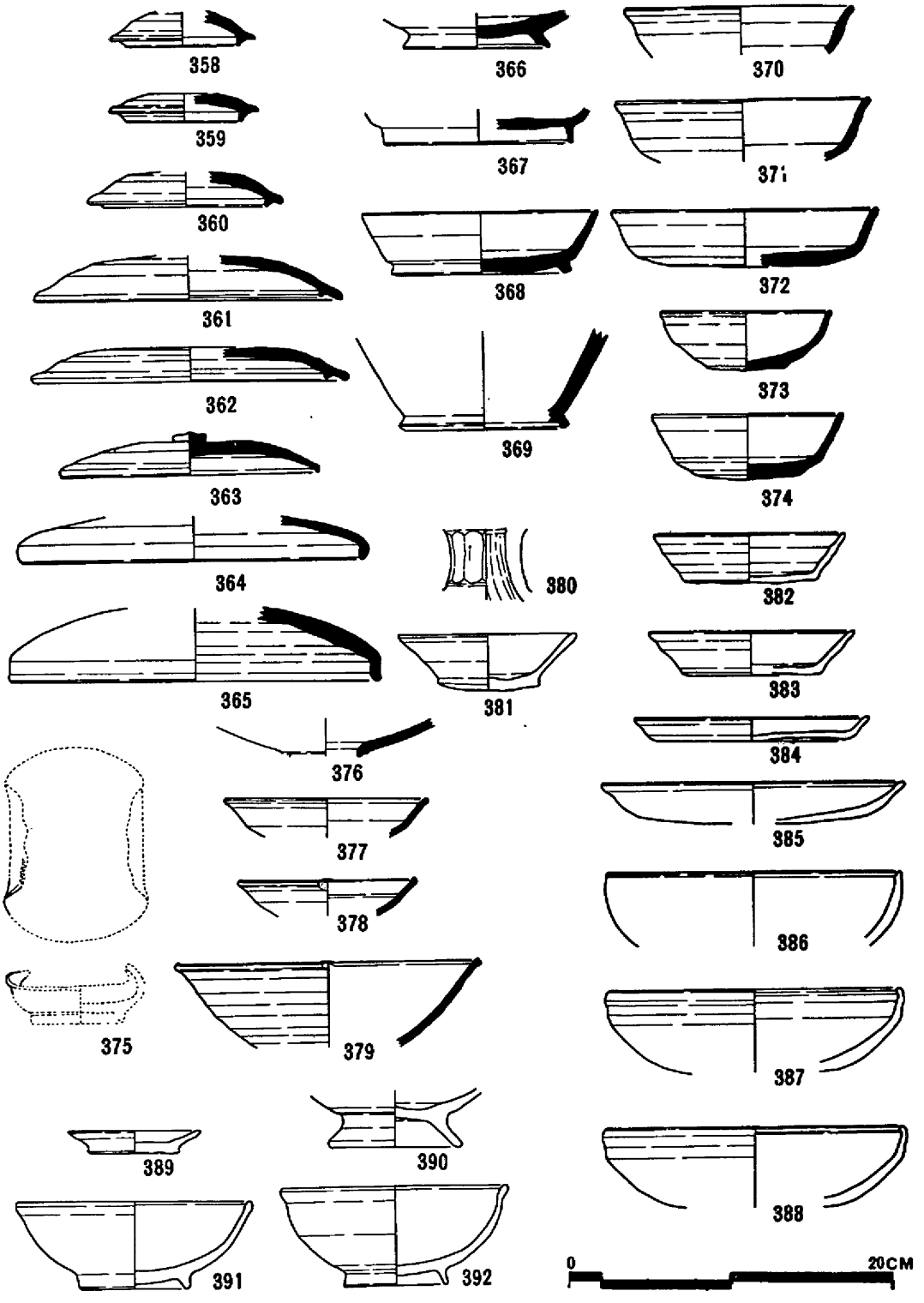
4，5は柱穴から検出されたが，大道西Ⅰ・Ｐ－９出土の椀形土器と類似の土器片を伴っており，このことから土錘の時期は，鎌倉時代初め頃と思われる。　（中野）

18）微高地東斜面

法万寺地区の微高地は，農道西の92ラインから東に傾斜しており，農道までの堆積土（19層～23



第54図　法万寺　土壙及び包含層出土遺物



第55図　法万寺　遊離遺物

層）には，H－4と同時期の土器（338～348）を包含していた。また最下層23層には，弥生時代前期中頃～後半を示す土器が若干量含まれていた。農道の東側の堆積土中には，7層～12層まで351～356などの古墳時代後半～奈良時代までの土器が認められた。

また農道の東6mの地点で再び落ち込む傾斜面を確認した。6層からは357が出土し，この傾斜面は平安時代～鎌倉時代の微高地東端と考えられる。3層は安定した堆積を示し，中世以降の水田を想定させる。しかし，前回調査で確認されていた奈良時代の傾斜面は，農道をはさんでの堆積層とそれに包含する土器からみて農道下に想定できる。

以上のように，この斜面堆積から微高地が古墳時代前半，古墳時代後半～奈良時代，平安時代末～鎌倉時代と徐々に広がっていくようすが認められた。

須恵器，土師器

須恵器（358～374）は，壺蓋（358～359），杯蓋（361～362），杯身（366～368，370～374）を中心に各器種にわたって多量に出土した。365は，口径が22cm前後と大きく，口縁部はやや内傾し端部で肥厚気味に外反する。体部及び頂部は，横ナデで調整されたあと，一方向に篦削りが行われている。胎土には，砂粒を多く含み，焼成は甘く瓦質気味で，暗灰色を呈する。364も同様な諸特常が認められた。器種については，断定しかねるが，ここでは蓋として報告しておく。時期的には，8世紀代を中心として7世紀中頃～9世紀までを示すものが出土している。

土師器は，須恵器と同様に8世紀代を示す386～388の他図示できなかったが，内面に放射状暗文を施す杯などが認められた。380～385，389～392など平安時代全般にわたるものが最も多く出土している。

緑　釉

耳杯（375）（註5），唾壺（376）が各1点，その他は皿（377，378）椀（379）である。378，379には，口縁部に輪花を施す。胎土は，全て堅緻で淡緑色の釉がかかっている。　（中野）

第2章　小　　結

前項では，川入遺跡の遺構，遺物の概略を記してきた。今回の調査は，前回調査同様に東西に細長くトレンチを入れたような形になった。また，今回の調査員が前回と異なること，両調査間の間隔が3年間におよぶことなどの事情により，調査結果の総合的判断においては，若干の相違がある。二度にわたる調査で，沖積平野の集落址としての規模，構造の一端がうかがい知れた。ここで，まず前章の概略をふまえて川入遺跡全般にわたる流れを追って簡単にまとめておきたい。

大道西Ⅰ，法万寺両微高地上で，現在までに確認した遺物は弥生時代前期中頃に遡る。弥生時代中期では，中期前半～中頃の遺物が少量認められるが遺構の存在は明らかでない。中期後半にはいると，大道西Ⅰ微高地では溝4，法万寺微高地ではH－4を始め溝5，5′，6，7が出現し，中期後半

	遺跡名	所在地	遺跡の種類	器形	文献
1	賞田廃寺	岡山市賞田	寺院址	有台椀，器形不明	「賞田廃寺発掘調査報告」1971
2	幡多廃寺	岡山市赤田	寺院址	棺，鉢	「幡多廃寺発掘調査報告」1975
3	備前国府跡	岡山市雄町	官衙跡	皿	「雄町遺跡」「埋蔵文化財発掘調査報告」1972
4	神力寺跡	岡山市一宮町	寺院址		
5	高麗寺跡	岡山市吉備津	寺院址	器形不明	
6	川入遺跡	岡山市川入	寺院址	皿，段皿，耳杯，花瓶，香炉	「川入遺跡の調査」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・第2集」1974
7	陣場山遺跡	赤磐郡瀬戸町江尻	建物群	有台椀，無台椀，小皿，皿，器形不明	近　刊
8	郷地遺跡	赤磐郡瀬戸町笹岡	集落址	器形不明	
9	三蔵畑遺跡	赤磐郡山陽町河木字三蔵畑	生産址	有台椀	「三蔵畑遺跡」「岩田古墳群」1976
10	備前国分寺跡	赤磐郡山陽町馬屋	寺院址	器形不明	「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・10」1975
11	備中国分寺跡	総社市上林	寺院址	器形不明	
12	上東遺跡	倉敷市上東	集落址	有台椀	「上東遺跡の調査」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・第2集」1974
13	酒津遺跡	倉敷市酒津	集落址	器形不明	「水江遺跡」「倉敷考古館研究集報第8号」1971
14	大飛島遺跡	笠岡市大飛島	祭祀遺跡	有台椀，短頸壺大	「倉敷考古館研究小報1」1964
15	平遺跡	勝田郡勝央町平	官衙跡	無台椀，小椀，皿椀器形不明	「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・8」1975
16	楢原廃寺	英田郡美作町楢原中	寺院址	器形不明	「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・13」1976
17	美作国府跡	津山市総社	官衙跡	有台椀，無台椀，皿，段皿，水瓶	「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・6」1975
18	下市瀬遺跡	真庭郡落合町下市瀬	建物群	皿，器形不明	「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・3」1973
19	須之内遺跡	真庭郡落合町鹿田須之内	集落址	器形不明	「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・11」1976
20	宮尾遺跡	久米郡久米町宮尾	官衙跡	器形不明	「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・4」1973
21	領家遺跡	久米郡久米町領家	集落址	有台椀，無台椀，皿，器形不明	「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・8」1975
22	久米廃寺	久米郡久米町宮尾	寺院址	有台椀	「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・4」1978
23	備中平遺跡	上房郡北房町五名平	集落址	器形不明	「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・12」1976
24	桃山遺跡	上房郡北房町砦部	火葬墓	小皿，皿	「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・12」1976
25	宗金遺跡	新見市西方宗金	集落址	器形不明	近　刊

表1　岡山県内緑釉出土地名表（註6）

以降本格的な微高地の占地が始まる。さらに，弥生時代後期～古墳前期にかけては，遺構の密度が最も多くなる。なお，古墳時代後半期における遺構は皆無である。

奈良時代～鎌倉時代における大道西Ⅰ微高地上には，築地状遺構及び瓦などの出土遺物から，寺院址もしくは瓦葺きの建物の存在が推定される。この建物は，天平期の平城宮6225，6663亜型式の瓦を使用し，のち最低一回は瓦が差し変えられている。さらに，平安時代にも建物が存在している。またそれに続く平安時代末～鎌倉時代の遺構は，井戸，火葬墓及び柱穴状土壙（建物）などがある。

法万寺微高地では，古墳時代前期まで遺構が微高地東側にかたより，奈良時代以降は微高地全域に

遺構が広がる傾向を示している。微高地上には，奈良・平安時代の掘立て柱の建物があり，柵列も認められる。また，平安時代末～鎌倉時代初頭の遺構，遺物は大道西Ⅰ微高地に比べて非常に少ない。

いずれにしても川入遺跡は，奈良～平安時代を通じて瓦葺きもしくは掘立て柱の建物が存在していた。それらの建物に伴なって，須恵器や暗文を施す土師器，さらに一般集落址ではみとめられない緑釉が多量に出土しており，公（＝備中国府）と密接に結びついた公共施設あるいは地方豪族層の拠点集落（寺院址）と推定できる。また，川入遺跡は当時河口に近くの泊であった可能性が強く，備中国内から集積された調庸や雑物の輸送拠点と考えられる。

次に大道西Ⅰ微高地より出土した軒丸平とP－9出土の椀，小皿について若干の検討を加えた。

吉備における平城宮型式瓦について

岡山県内には，平城宮推定第2次内裏，朝堂院所用瓦と考えられている同一文様式の軒丸瓦，軒平瓦が多く認められる。それは，平城宮6225型式と呼ばれる軒丸瓦と，それに組合う6663型式の軒平瓦である。美作，備前，備中出土の6225型式の軒丸瓦を諸要素から3類型（Ⅰ～Ⅲ）に類別し，その推移，様相を若干検討し，各類型の特徴を述べてみたい。

1）第Ⅰ類（第56図，1～3）

直径は17㎝前後を測る。外縁は，上面に平坦部をもち，内面は内側に傾斜し，凸鋸歯文が施されている。外区は，二重の隆起線の圏線が廻る。内区は，8葉複弁蓮華文でやや肉厚の各子葉を輪郭線で区画しており，間弁はY字形を呈する。さらに内区と中房は，一重の圏線で区切られ，中房は1＋8の蓮子を配している。以上のように平城宮6225型式と同一文様構成を示すものの若干模倣的要素が強い。

これらの軒丸瓦は，美作，備前にその分布を示すが，美作国府出土のものと備前の賞田廃寺，幡多廃寺出土のものを比較した場合，外縁，蓮華文などに多少の差が認められ，時期的な差が想定できるが，ここでは笵の個体差として同一類型で取り扱いたい。美作では，美作国府，美作国分寺，美作国分尼寺で平城宮6663型式系（以下，6663亜型式）瓦を伴って出土している。さらに，勝田郡衙と推定されている平遺跡からは，6663亜型式瓦のみが出土している。美作では平城宮6225型式系（以下6225亜型式）6663亜型式瓦が官寺，官衙に使用される特徴をもっている（註7）。備前においては，6225亜型式瓦は賞田廃寺，幡多廃寺，網浜廃寺，尾張廃寺，香登廃寺で確認されており，その他6663型式だけ出土している須恵廃寺がある。以上の様に，備前では，その出土地は私寺的寺院址に限られ，官寺・官衙では，確認されていない。これは，美作での分布の在り方と異にする。

2）第Ⅱ類（第56図，4～6）

第Ⅰ類に比べて明らかに退化した様相を示すものを第Ⅱ類として分けた。瓦当の基本的な文様構成は，第Ⅰ類とほとんど変わりはないが，蓮弁と間弁の一部が規則性を失なっていて，瓦当の彫り方も単調で粗雑になっている。当川入遺跡においては，40点近く出土している。他に神力寺，津高南廃寺にその例をみることができる。川入遺跡は別にしても他の二寺はいずれも私寺的寺院址である。

3）第Ⅲ類（第.6図，7～11）

第Ⅰ，第Ⅱ類に比較して，相対的に小振りで径15㎝前後を測る。外縁は，内面が傾斜するが上面に

国　名	遺跡名	所在地	6225亜型式	6663亜型式	文献
美作	国分寺跡	津山市国分寺	○	○	永山卯三郎『岡山県通史』1930
	国分尼寺跡	津山市国分寺古池人神	○	○	永山卯三郎『岡山県通史』1930
	国府跡	津山市総社幸畑	○	○	『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・6』1975
	平遺跡	勝田郡勝央町平		○	『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・8』1973
備前	須恵廃寺	邑久郡長船町西須恵寺村		○	永山卯三郎『岡山県通史』1930
	津高南廃寺	御津町富原	○	○	永山卯三郎『岡山市史』
	尾張(半田)寺跡	邑久郡邑久町山田庄半田	○		永山卯三郎『岡山県通史』1930
	香登廃寺	和気郡備前町大内	○		永山卯三郎『岡山県通史』1930
	賞田廃寺	岡山市賞田	○	○	『賞田廃寺発掘調査報告』1971
	神力寺址	岡山市一宮宮山神	○	○	
	幡多廃寺	岡山市赤田	○	○	『幡多廃寺発掘調査報告』1975
	網浜廃寺	岡山市網浜	○	○	
備中	国分寺跡	総社市上林		○	
	国分尼寺跡	総社市上林法蓮		○	
	日差山廃寺	倉敷市日差山		○	大本遂寿「日差山の瓦」『古代吉備第57号』1943
	矢部廃寺	倉敷市矢部一の坪	○	○	永山卯三郎『岡山県通史』1930
	秣梨堂	岡山市撫川日畑東組	○	○	永山卯三郎『岡山県通史』1930
	賀夜(門満寺)廃寺	総社市南溝手	○	○	永山卯三郎『岡山県通史』1930
	金剛廃寺	吉備郡真備町岡田山の谷		○	玉井伊三郎『吉備古瓦図譜』1941
	八高廃寺	吉備郡真備町呉妹・八高	○	○	永山卯三郎『岡山県通史』1930
	吉備廃寺	吉備郡真備町箭田	○	○	玉井伊三郎『吉備古瓦図譜』1941
	吉備公館跡	小田郡矢掛町畑	○	○	
	占見西廃寺	浅口郡金光町占見寺屋敷		○	永山卯三郎『岡山県通史』1930
	惣爪廃寺	岡山市高町惣爪	○		玉井伊三郎『吉備古瓦図譜』1941
	二子御堂奥窯址	倉敷市二子	○		「二子御堂奥窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』1974
	川入遺跡	岡山市川入	○	○	
	大崎廃寺	岡山市大崎西の前	○		

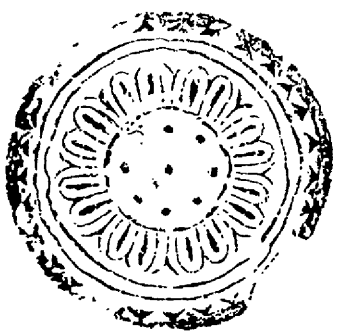
表2　岡山県内瓦出土地名表（平城宮6225，6663亜型式）

平坦部をつくらない三角縁で，内面には線鋸歯文を施す。内区の８葉複弁蓮華文は，蓮弁と間弁が第Ⅱ類と同様に規則性を失なっている。内区と中房の間には，一重の圏線が廻るが，その圏線を削り出すために，花弁の茎部が数㎜ほどとぎれて，花弁と圏線の間には空白帯ができている。中房の蓮子は，他の２類型に比べて大きい。これらの特徴をもった6225亜型式瓦は，矢部廃寺，惣爪廃寺，賀夜廃寺，八高廃寺，大崎廃寺，吉備公館跡などで出土している（註８）。

さらに6663亜型式瓦は，前述した寺址では6225亜型式瓦と伴なっており，他に単独で出土しているのは，備中国分寺，備中国分尼寺，占見西廃寺，金剛廃寺など10箇所近く報告されている。分布は備中に限られ，特に山陽道沿に集中している。在り方として，私寺的寺院址にその分布が認められ，さらに6663亜型式だけだが官寺にも使用されている。

以上，美作，備前，備中に分布する6225亜型式瓦を３類型に分けその特徴を記した。これら３類型の時間的推移は，平城宮推定第２次内裏，朝堂院造営時とさほど時間的差はないものと思われる。また，第Ⅱ類も明らかに第Ⅰ類の後出的要素をもつが，第Ⅰ類ともさほど時間的にかけはなれるものではない。第Ⅲ類類は，瓦当の文様構成において同一様式であるが，平城宮6225型式瓦の文様のモチーフからは明らかに逸脱するものである。さらに外縁の形態，線鋸歯文，蓮弁と間弁の不規則など後出的様相が強い。したがって第１類→第Ⅱ類→第Ⅲ類の移向が考えられる。

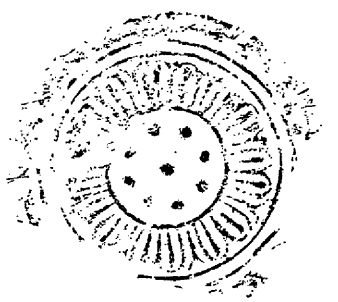
1．美作国府



2．幡多廃寺

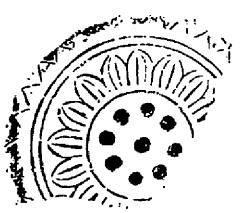
3．賞田廃寺

4．神力寺址

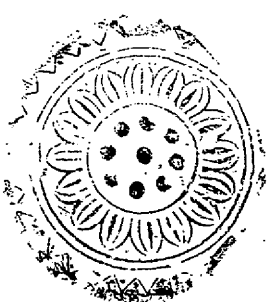


5．津高南廃寺

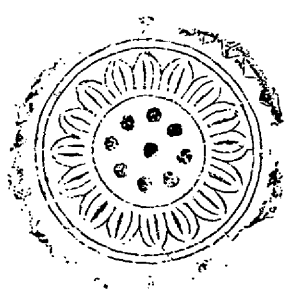
6．川入遺跡



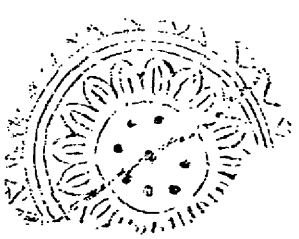
7．二子御堂奥窯址



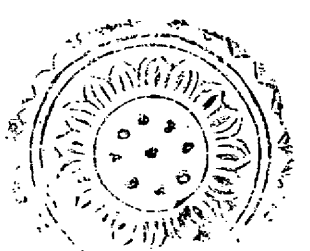
8．柿梨堂



9．矢部廃寺



10．賀夜廃寺



11．吉備寺

第56図　岡山県内出土軒丸瓦集成図

第Ⅰ類，第Ⅱ類は備前に分布し，第Ⅲ類は備中に分布するという結果から，このことが国別の差違として把握できる。しかし，平城宮6225型式瓦は，他に東日本などにその分布が認められるものの，中国地方には前述の３国以外には認められない（註９）。吉備に隣接する伯耆，備後，播磨の国分寺には，平城宮6313型式系瓦が使用されている（註10）。これら平城宮所用系統の瓦が各地で認さられるということは，８世紀における中央政府の国分寺造営という仏教の推進政策とあいまって，諸国郡司階層を国家事業へ組みこみ，律令制度の影響及び強化という施策であったであろう(註11)。このことを前提として，吉備地方における6225亜型式の３類型の分布について若干の推察を加えてみたい。

まず美作における6225亜型式瓦の官衙，官寺への使用は，和銅６（713）年の備前の６郡をさいて分国したことと関係があると思わる。吉備地方は，記紀の雄略期に代表されるように多くの反乱伝承をもち，常に畿内勢力と対抗しうる唯一の地域として存在した。中央政府にとって，この勢力の分割というこことは律令制度の堆進上大きな課題であったであろう。また，出雲街道の要衝として，さらに鉄産出地域を掌握しての美作の分国は，中央政府にとって地方統治上重要な意味をもっであろう。美作分国以来，28年後の天平13（741）年に諸国国分寺建立の詔勅が発せられるが，この時点で美作は新国としての行政上及び機構上などの中央政府の強化施策の直接的影響を受けたことが考えられる。美作における官衙や官寺への6225亜型式瓦の使用も，その表徴とみるべきであろう。また，備前における第Ⅰ類の私寺的寺院址への使用は，律令制度の一施策としての仏教政策における郡司階層級の追随的，追従的動向を示すものと考えられる。さらに第Ⅱ類についても，同様の事の時間的なずれと考えられる。第Ⅱ類出土の神力寺，荒神廃寺は備前に属し，川入遺跡は備中に属する。備前の２寺からは，第Ⅱ類とともに川入遺跡でも出土している平城宮6663亜型式の瓦当文の陰陽逆のものが出土しており，川入遺跡と備前との有機的な関係がうかがえる。さらに正倉院文書の天平11（739）年の「備中国司解・大税負死亡人帳」には上道臣などの名がみえ，旧足守川河口付近への上道臣一族の進出を示唆するものであろう。さらに第Ⅲ類が備中に広く分布するのは，先述したように備前，備中の国別の差違ととらえることができる。しかし備中で使用されるのは，他の類型よりも多少遅れる。

以上，平城宮推定第２次内裏，朝堂院所用系統の瓦について，吉備地方における分布の在り方，特徴を記してきた。個々の要因については，多くの問題点を残しており，今後の課題としたい。

P－９出土の椀・小皿について

前章15)P－９のところで，その概略を述べたが，その中で特に多量に出土し，出土遺物の大半をしめる椀と小皿についてここで詳しく取り上げてみたい。これらの土器は，一部で早島式土器と総称されていた一群であるが，その早島式土器の実態（器形のセット関係，時期の幅など）は，かならずしも今日も明確にはなっていない。そこで，今一度，椀と小皿について詳しく形態，特徴を述べたのち，椀100個体と小皿50個体を抽出して，作成した計測表（表３，４）をもとに若干の検討をしてみたい。

椀：椀は，底部から外上方に内彎しながら立ち上り，体部に稜線を一段もつ。口縁端部は，肥厚させ丸くおさめている。底部は，やや外方に開く７㎜前後の高台を貼り付けている。底部内面には，重

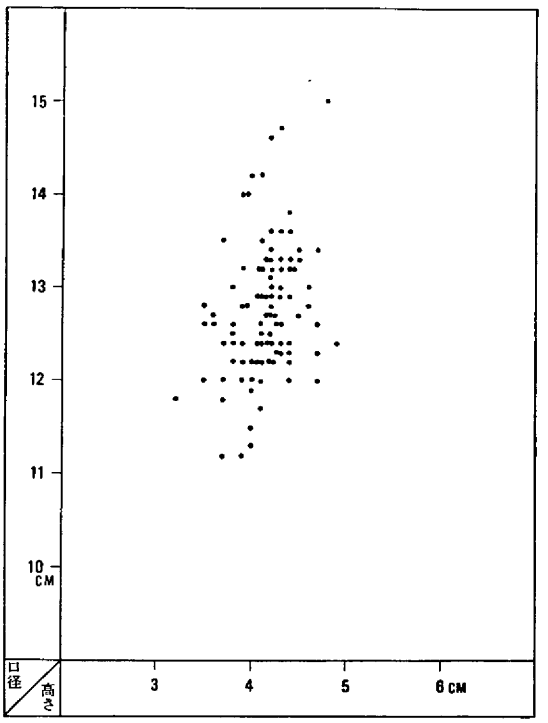


表3　大道西Ⅰ　P－9椀計測表

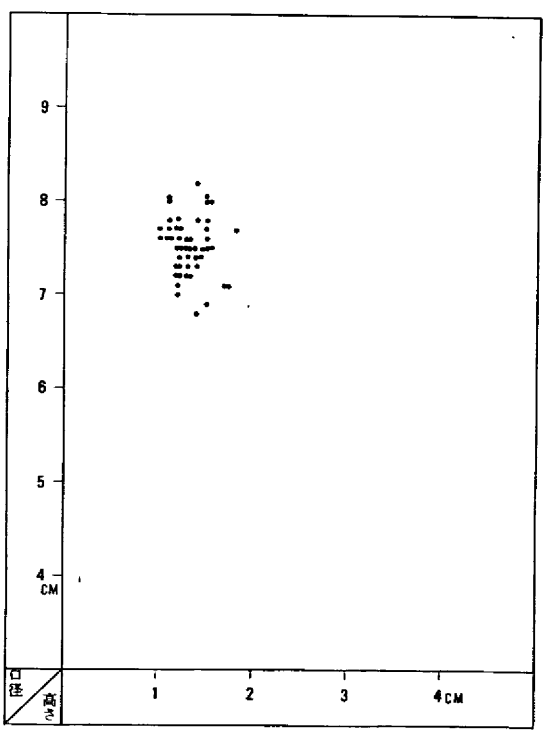


表4　大道西Ⅰ　P－9小皿計測表

ね焼を示す高台と同じ大きさの円形の変色痕跡が認められた。次に製作過程をみてみると，0.5～1㎝の粘土ひもを時計回りにしぼりながら巻き上げ，ナデ・押えなどによって器形を整えたのち，口縁部に横ナデを加えている。さらに，内面は，皮あるいは布などで，ていねいなナデをおこなっている。（篦磨き状を呈する）体部外面は，未調整のままである。高台は，細い粘土ひもを底部に貼り付け，横ナデによよって調整している。抽出した100個体の椀は，全て基本的にはこの成形技法によって作られている。そして大半は，胎土中に砂粒を多く含み，乳白色を呈するが，やや器壁が厚くさほど砂粒を含まず，淡茶褐色を呈するものも若干数認さられた。また，100個体の高さ，口径を計測(表3)してみると高さは3～5㎝の，口径は11～15㎝のそれぞれ幅をもつが，その中で高さ3.8～4.5㎝，口径12～13.5㎝に最も集中する。このことからみて一定の規格性があることが明らかである。

小皿：小皿は，平たい底部から外側上方に外反気味に開き，端部は丸くおさめている。胎土，焼成とも椀と類似する。また，底部内面には，例外なく重ね焼き痕が残っている。製作は，5㎜以下の粘土ひもを時計回りにしぼりながら巻き上げ，口縁部，体部をロクロによる横ナデ調整したのち，底部内面の隆起部を仕上げナデするという過程を経ている。底部は，回転を利用したヘラによる切り離し痕と認められる。さらに底部には，乾燥時についたと思われる板目痕が残存している。抽出した50個体の高さ，口径をみると（表4）高さは1～1.8㎝，口径は6.7～8.2㎝と椀同様に小皿も規格性をもって製作されていることがわかる。

以上抽出した椀・小皿の特徴を述べたが，ここで成形技法について検討が加えられている幡多廃寺出土（註12）のものと比較してみたい。幡多廃寺出土の椀には，粘土巻上げ技法が用いられ，口縁部，内面，高台部は横ナデ調整されているが，底部裏面と体部表面は未調整であるなど，P－9出土のものと同じ成形・調整技法が用いられている。小皿は，幡多廃寺出土のものが，粘土巻上げ成形→口縁部横ナデ調整，粘土巻上げ成形→粘土板張付整形→口縁部横ナデ調整，さらに粘土巻上げ成形→粘土板張付整形→底部叩き締め調整→口縁部横ナデ調整と3種類の製作過程によっている。底部の特異な整形と調整を除けば，基本的には粘土巻上げ成形→口縁部横ナデ調整で製作されている。しかし，P－9出土の小皿は成形段階で粘土巻上げ成形を行なうが，整形段階と調整段階ではロクロの使用が認められる。このことは，幡多廃寺出土の小皿とは明らかに製作技法において差違があることを示している。また，P－9出土の杯も小皿と同様にロクロを使用した整作技法である。草戸千軒遺跡及び周辺の遺跡でも同時期前後の土師器について研究が進んでいるが，P－9出土の椀，小皿，杯と共通した製作技法が報告されている(註13)。岡山県内においても最近報告例が増加しつつあるが，製作技法等についていままで研究の対象とならなかったため明言されているものは少ないのが現状である。次にこれらの窯址の問題であるが，椀や小皿等の焼成及び内面にみられた重ね焼の痕跡からみて構築的な窯址の存在が考えられる。先年，三蔵畑遺跡(註14)で土師器の窯址であると思われるものが報告されている。このような構築窯は，前述した椀，小皿の規格性を生み出すための一因となったであろう。

以上のようにP－9出土の土師器（椀，小皿の大半，杯，台付杯）は，胎土，焼成，製作技法からみて同一生産地（土器製作専業工人集団）で生産されたと考えられ，一元的に川入遺跡へ供給されたものと考えられる。つまり，荘園化が進みつつある歴史的背景からみて，自立的傾向にある小規模な専業工人集団（家族的手工業）もしくは荘園制下に繰り込まれた専業集団と川入遺跡の需要者（組織）とが，契約的な需要・供給の関係にあったことが想起できる。（中野）

註 1　備前焼とは異なる中世陶器
註 2　当溝は前回調査で溝111と呼称されていたものの下部に存在する溝であるが，溝111からは仁伍式及び前山Ⅱ式の2形式にわたる土器が報告されている。しかし，後述する溝5（溝111）には前山Ⅱ式としている土器を全く含んでいない。また前回調査では，今回調査の溝6にあたる遺構は不明であった。これらのことから前回調査報告書溝111の項に記載された前山Ⅱ式の土器は，当溝の伴出遺物である可能性が強い。
註 3　今回調査では実測可能な土器は皆無であった。しかし前回調査で溝314（今回調査では溝4）の混入物として一部記載されている仁伍式土器が，当溝の伴出遺物と考えられる。
註 4　間壁忠彦「岡山県笠岡市走出の祭祀遺跡」『倉敷考古館研究集報・第2号』1966
註 5　細片のため平城宮出土のものを参考にして器形の復元をしたので，器形，高台の有無は明らかでない。
註 6　楢崎彰一「彩釉陶器出土地名表」『日本の三彩と緑釉』を参考にし，補足した。
註 7　伊藤晃「楢原廃寺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告13』岡山県教育委員会 1976
註 8　二子御堂奥窯址から備中の各寺院に配布されたと考えられる。
註 9　森郁夫「平城宮系軒丸瓦と国分寺造営」『古代研究3』1974
註10　註9に同じ。
註11　「賀田廃寺出土瓦の再検討」『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会 1975
註12　根木修「寺院以降の土師器」『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会 1975
註13　志道和直「平安時代の土器生産」『草戸千軒 No.40，45，1976，77』
註14　神原英朗「三蔵畑遺跡」『岩田古墳群』山陽町教育委員会 1976

Ⅳ 上東遺跡

第１章　各調査区の遺構と遺物の概要

今回の調査は，前回調査のすぐ北側に接して行ったもので，各調査区は前回報告「上東遺跡の調査」（註１）の中で使用した小字名を踏襲した。

前回調査で，上東遺跡は大きく立溝地区，才の町地区，東西鬼川市地区，下田所・才の元地区の４つの微高地に分れることが確認されている。今回の調査では，微高地の一部と考えられる程度の立溝地区を除き，古代地形がより明らかになった。つまり，田所調査区における東西鬼川市微高地の西側の下がり及び下田所微高地の東側の下がりの検出と，下田所地区と才の元地区がそれぞれ別の微高地を形成することなどが明確にできたことである。

詳しくは各調査区ごとに述べるが，各微高地上の遺構の在り方は，前回調査とほとんど変わらず，上部を後世の田の地下げで削平され，ほとんど同一面に弥生時代中期後半～中世にかけての遺構が存在していた。おもな遺構は，住居址，溝状遺構，井戸状遺構，土壙墓，柱穴状土壙などで，特に東西鬼川市微高地上に密に検出された。中で，東鬼川市調査区では前回調査の検出遺構に今回調査の検出遺構を加えることにより，住居址と溝の関係など，遺構の配置がかなり明確になった。

以下，調査区ならびに遺構・遺物の概要である。　（柳瀬）

第1節　立　溝　調　査　区

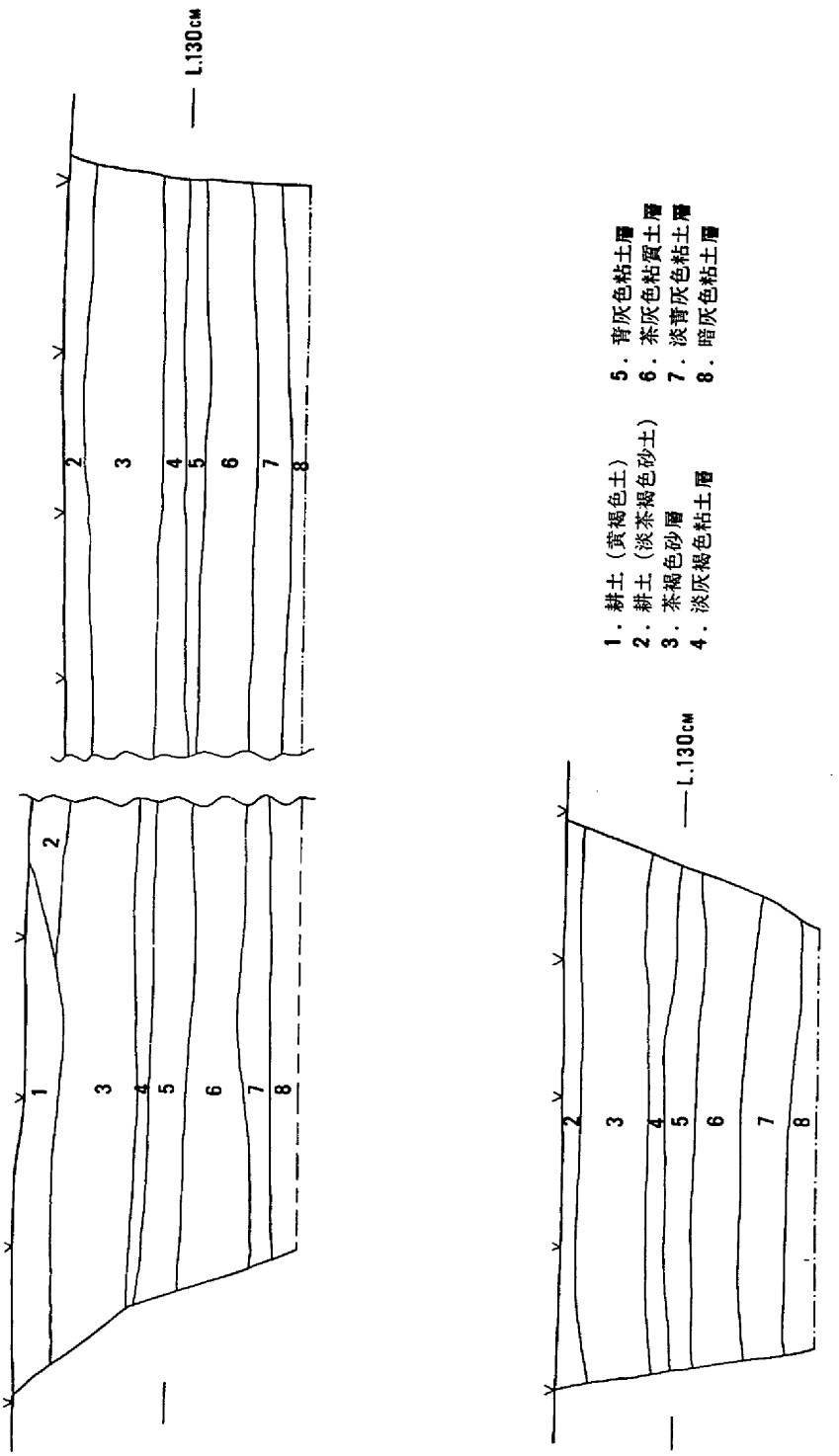
この調査区は，上東遺跡の中にあって最も東に位置する。才楽集落の南側に当たり，足守川堤防下西に約50ｍの地点である。

前回調査では，古墳時代及び平安時代末～鎌倉時代初め頃の包含層が確認されている。今回の調査は，包含層の確認及び広がりを追求するため，まず才楽集落に通じる農道の端を基点として調査区北側沿いに東西19ｍ，幅1.5ｍ，その中間に南北３ｍ，幅1.5ｍのトレンチを設定し，掘り下げた。層位及び出土遺物は次のようであった。

＜**層位**＞基本的な土層堆積は，上から耕土，茶褐色砂層，茶褐色砂泥層，淡灰褐色粘土層，青灰色粘土層，さらに淡青灰色粘土層，暗灰色粘土層と続く。各層ともかなり安定した堆積が続く中で，淡灰褐色粘土層は西から東へ幾分傾斜している。

＜**遺物**＞茶褐色砂層から桃山期の備前焼片及び弥生式土器を，また青灰色粘土層から須恵器片及び土師器片を数片検出したにとどまった。

トレンチ調査の結果は以上のようであったが，調査中トレンチ壁面の崩壊や湧き水によりスムーズに調査を行えず，その段階では遺構らしきものは確認できなかったことで，この調査区はトレンチ観察のみで調査を終えたものである。　（中野）


L.130cm
1
2
3
4
5
6
7
8
1．耕土（黄褐色土）
2．耕土（淡茶褐色砂土）
3．茶褐色砂層
4．淡灰褐色粘土層
5．青灰色粘土層
6．茶灰色粘質土層
7．淡青灰色粘土層
8．暗灰色粘土層

第57図　立溝　断面図

第2節　才の町調査区

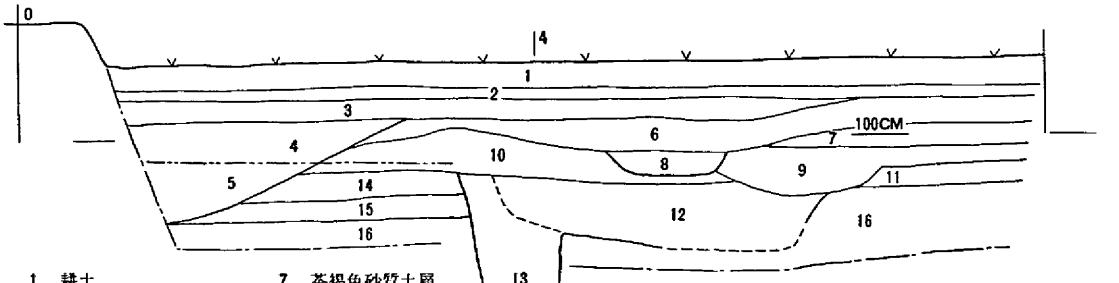
前回調査で，北方の岩倉遺跡から延びる微高地を確認したこの地区は，約40m幅で遺構の検出を見た。微高地の東の下がりは，今回調査においても明確にはしていないが，足守川方向に徐々に下って行くことは上層断面で確認した。微高地北斜面は，亀川用水から西は完全に旧河道内と想定され，肩口付近は第58図に示すとおりである。

弥生期の西の肩と思われる部分は，現在の亀川用水の名残りである4によって切られているため良くわからないが，10及び14層が少し西に下がりぎみであることから，この付近であることは想定される。この付近は遺構の切り合いが複雑な地点であるが，その切り合い関係は次のようである。まず弥生後期の古い段階の13（P－2）を12の不明落ち込みが切り，10の土層堆積の後，9の溝3が削平し，その後中世初期の8（溝W）が掘られ，6のたまりが形成されたとみられる。

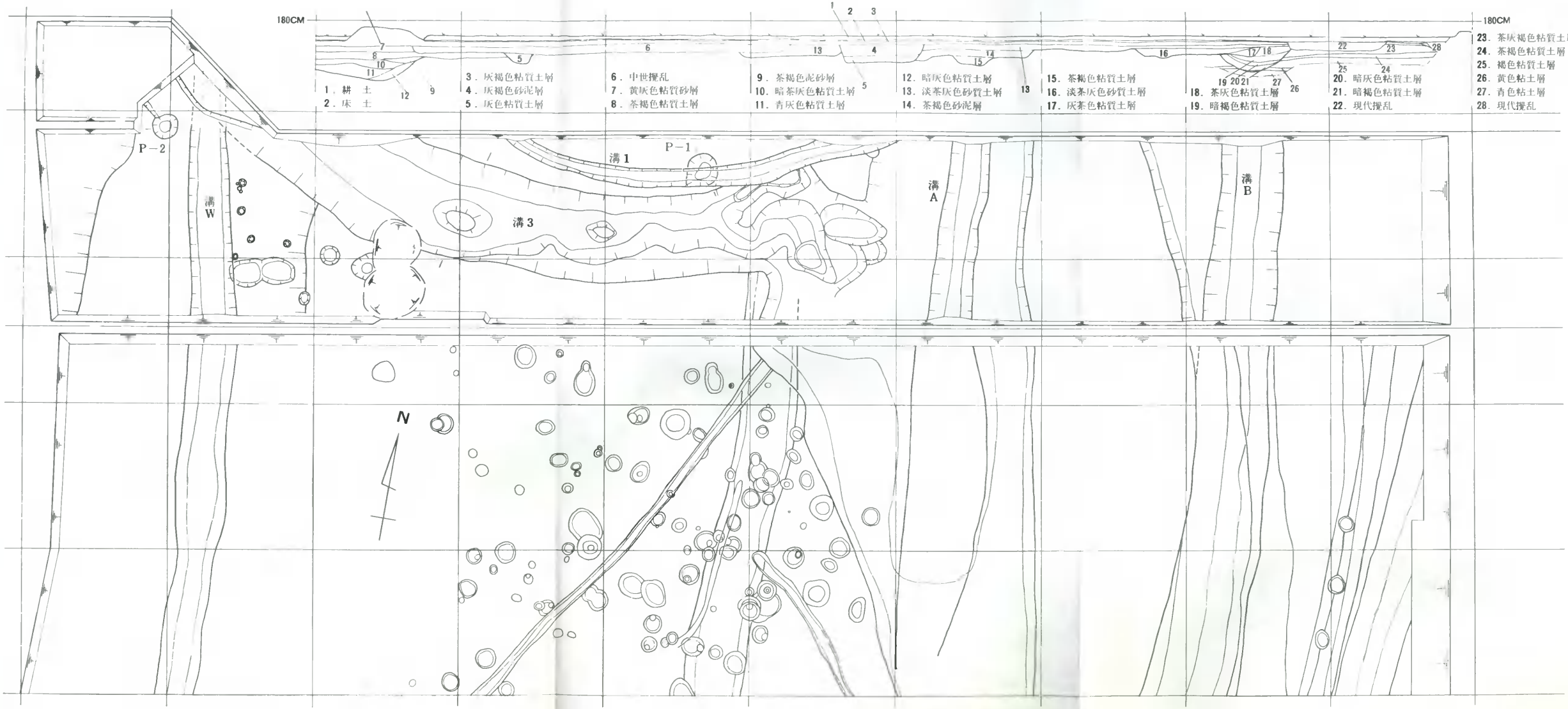
全体遺構配置図（第59図）は，遺構として検出された約40m間について示した。遺構の検出状態は，今回調査にかかる部分を境にして様相を異にし，前回調査の溝Aにあたる溝3が，弥生時代中期末の磨滅した土器から古墳期終りごろの須恵器まで含み，北西隅から中央部にかけて蛇行している。結果的にはこの溝3が今回の調査区のほとんどの部分を占め，想定される小土壙群及び溝Z等を削平して存在している。溝Dは明確には検出し得ず，溝Yは用水下で調査不能であった。新しく検出した遺構は，溝1，小土壙数個，P－1，P－2があげられるのみであった。

以下，遺構。遺物の概略である。

1）溝　B

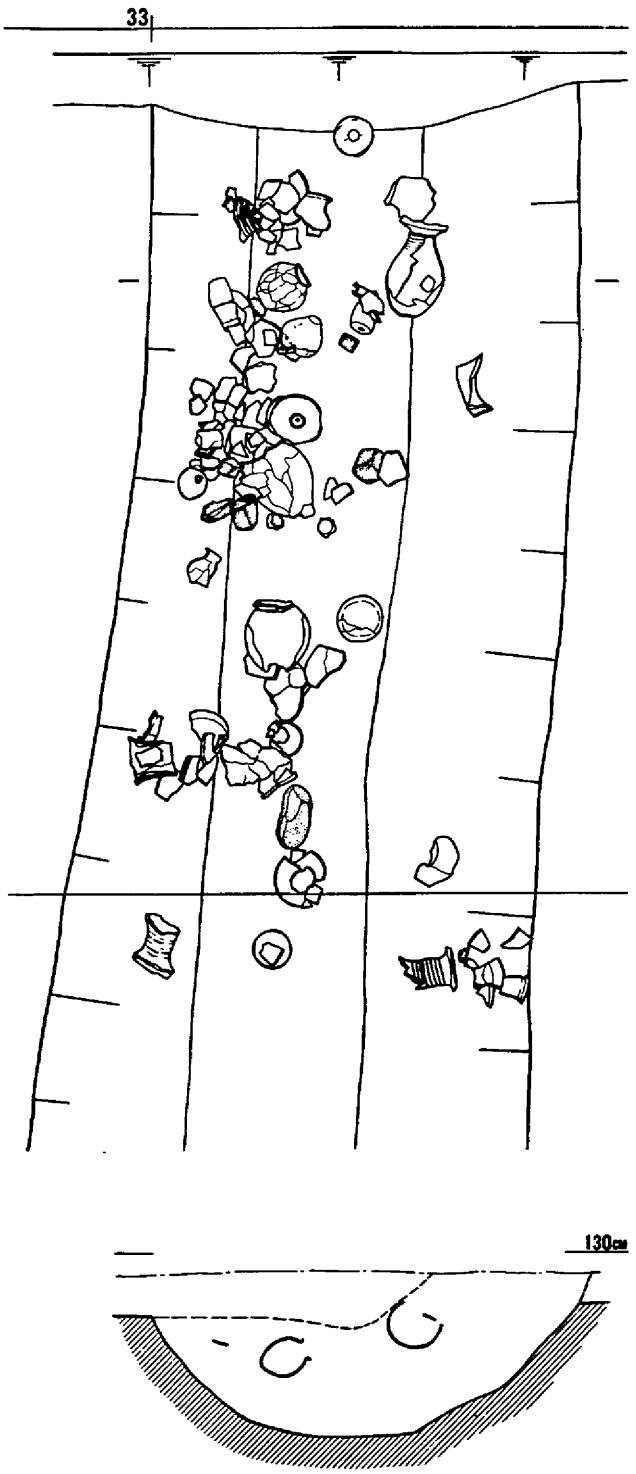


第58図　才の町　西端断面図（1/50）



第59図　才の町　遺構配置図（1／100）

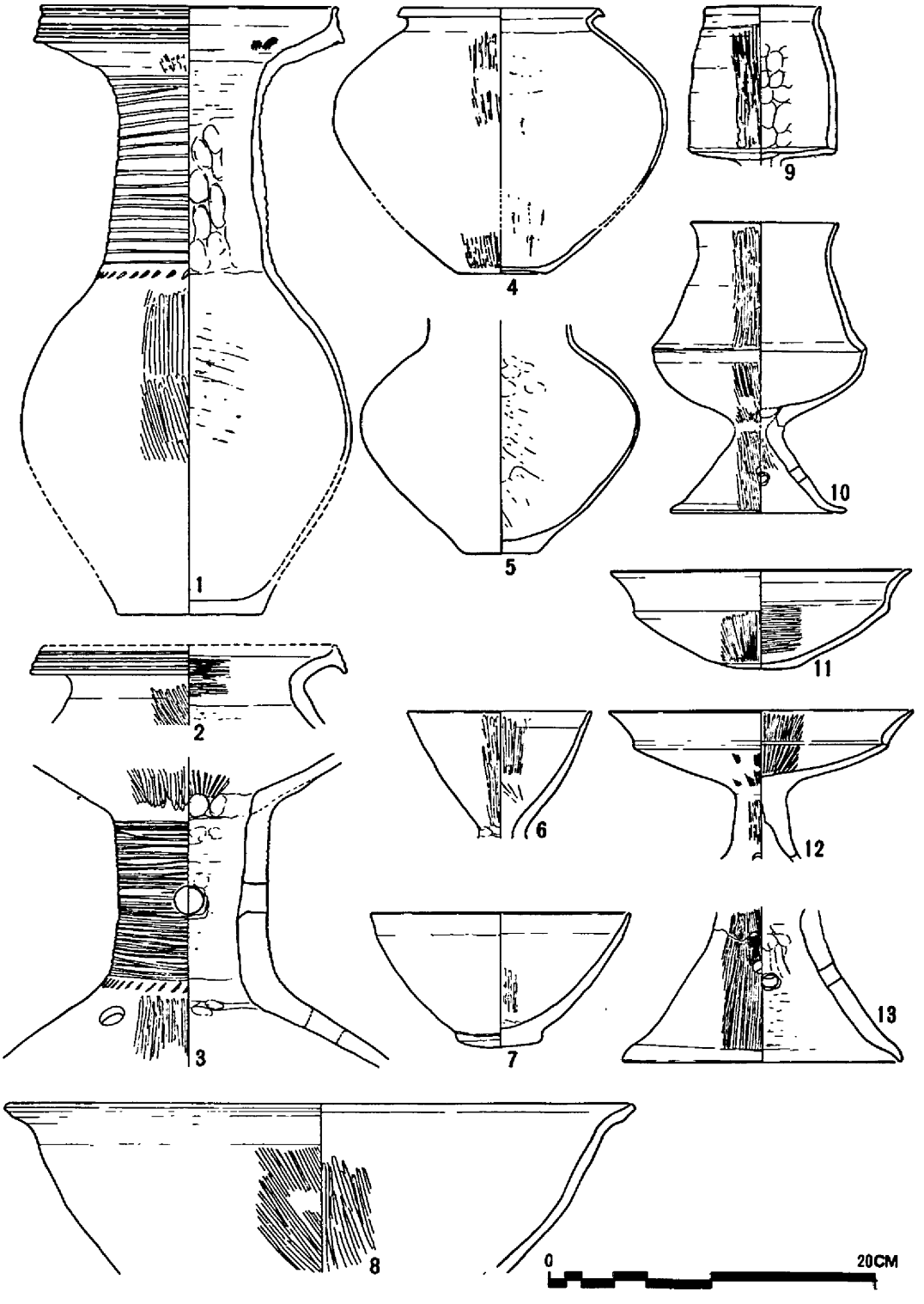
挿頁 7



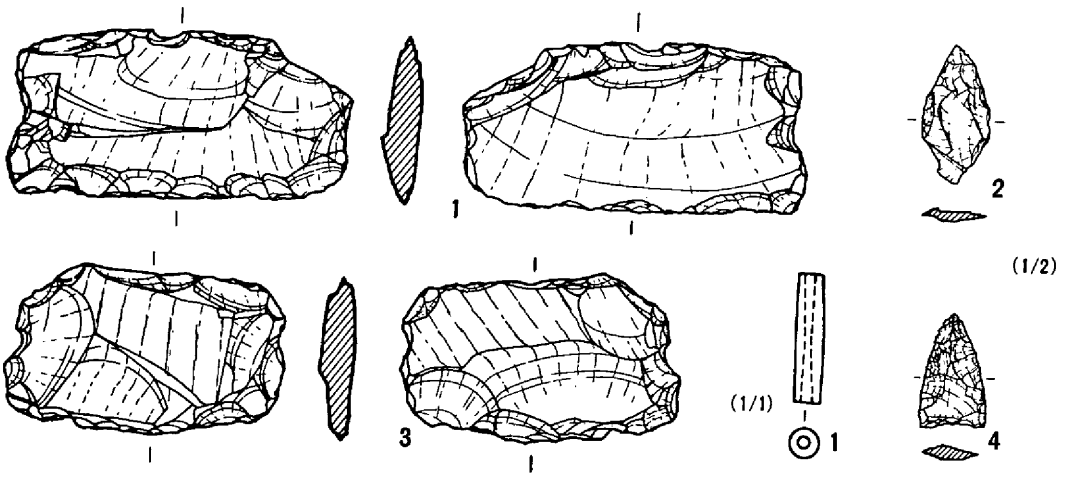
第60図　才の町　溝B遺構平・断面図（1/30）

＜遺構＞幅約 180 ㎝，深さ50㎝を測る。上部を約20㎝位溝Cによって削平され，ほぼ南北方向に検出された。遺物のほとんどは溝の底から30㎝位上部にかたまって出土しており，土器の保存状態は非常に悪い。溝の底のレベルは，北側で60㎝，南側で65㎝，前回調査の南端で70㎝を測り，わずかに北に傾斜が認められる。

＜遺物＞壷形土器（1，5），甕形土器（24），器台形土器（3）鉢形土器（8），高杯形土器（12），台付小型壷形土器（9，10）などと，サヌカイト製の石庖丁（1）と石鏃（2）が出土している。1の長頸壷形土器は，全体にまのびした形で細身である。頸部はほぼ平行して筒状に立ち上がり，急に外反しながら厚さを増し，口縁部をつくる。頸部外面は，沈線が螺旋状に巻き上がっている。口縁端部は上方に拡張がみられ，新しい要素を示している。口縁端内面にはハイガイ圧痕が二箇所に見られる。11の杯形土器，12の高杯形土器ともに口縁部は斜め上方に外反して立ち上がり，12の脚については前回出土の73，74にみられる裾広がりの形態からの転換（円盤充塡法→脚部差し込み法）が見られ，上東・鬼川市Ⅱ式の中でも新しい様相を示している。石庖丁（1）は上層で出土したもので，溝C（全体的には溝3）に伴うものかもしれない。石鏃（2）は，調整の荒さから未成品



第61図　才の町　溝B出土遺物



第62図　才の町　溝B及び溝3出土遺物

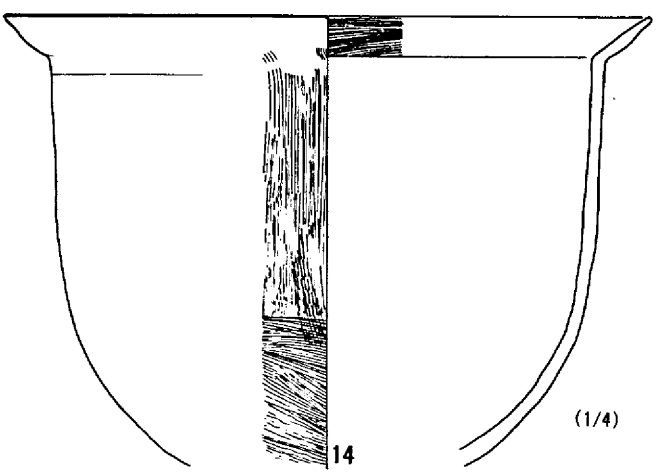
と考えられる。

2）溝3

前回調査の溝Aにあたるもので，今回調査面積の半分近くを占める。幅約250㎝，深さ60～70㎝を測る。遺物は弥生時代中期後半の土器から古墳時代末の須恵器片まで含み，石庖丁（3），石鏃（4），管玉（1）なども出土している。

3）溝1（第63図，14）

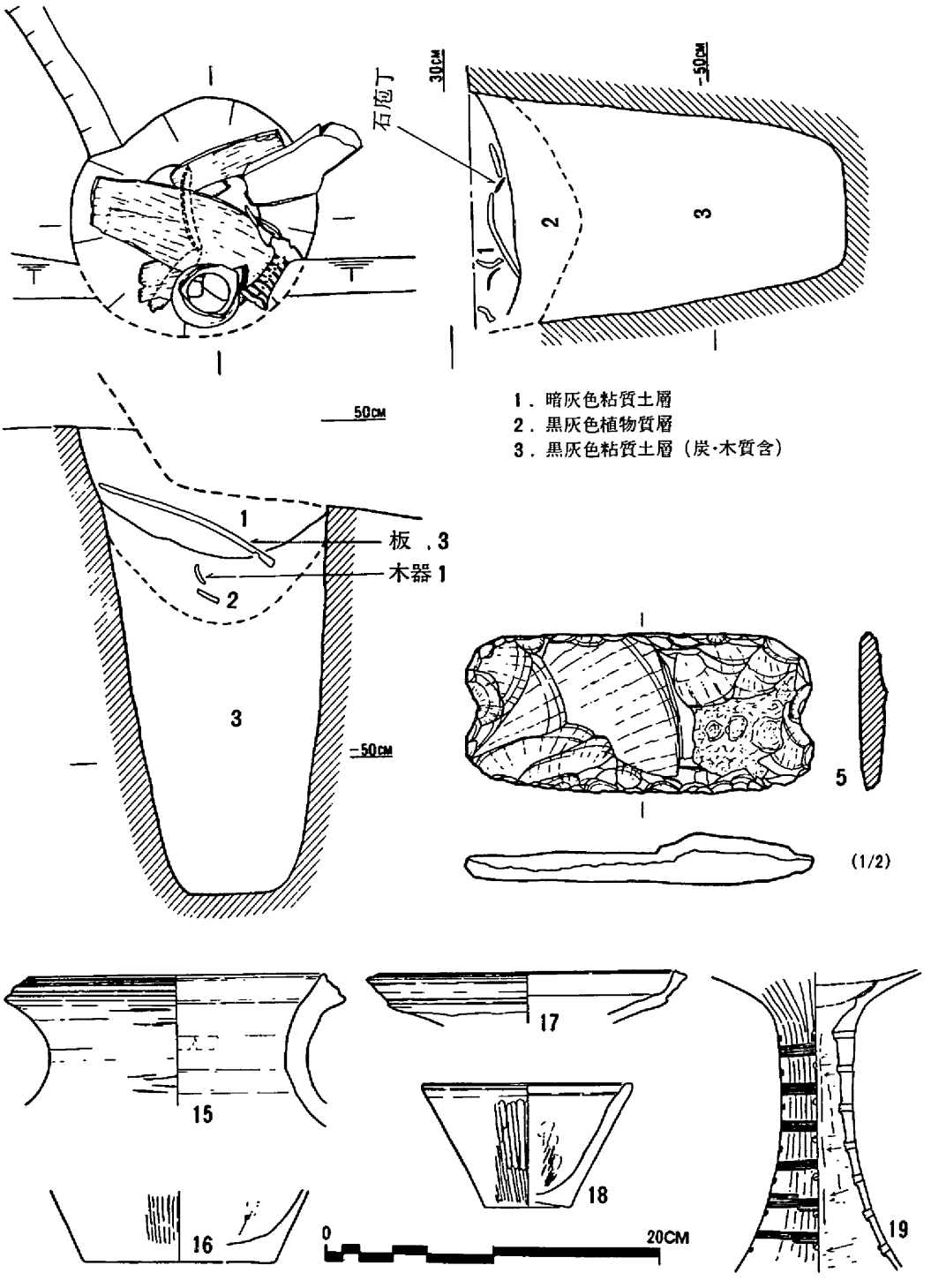
溝3を切って存在する幅50㎝，深さ約50㎝の弧状を呈する溝である。遺物は，鍋（14）と，高台がまだかなりしっかりしている椀の一部が出土しており，平安時代の末に比定できよう。



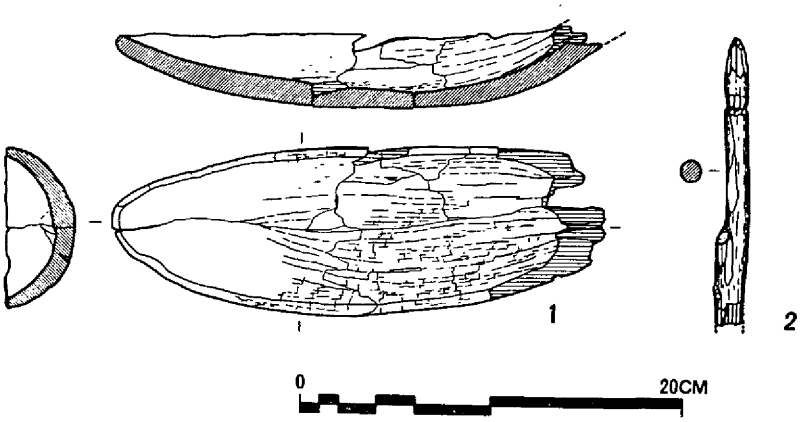
第63図　才の町　溝1出土遺物

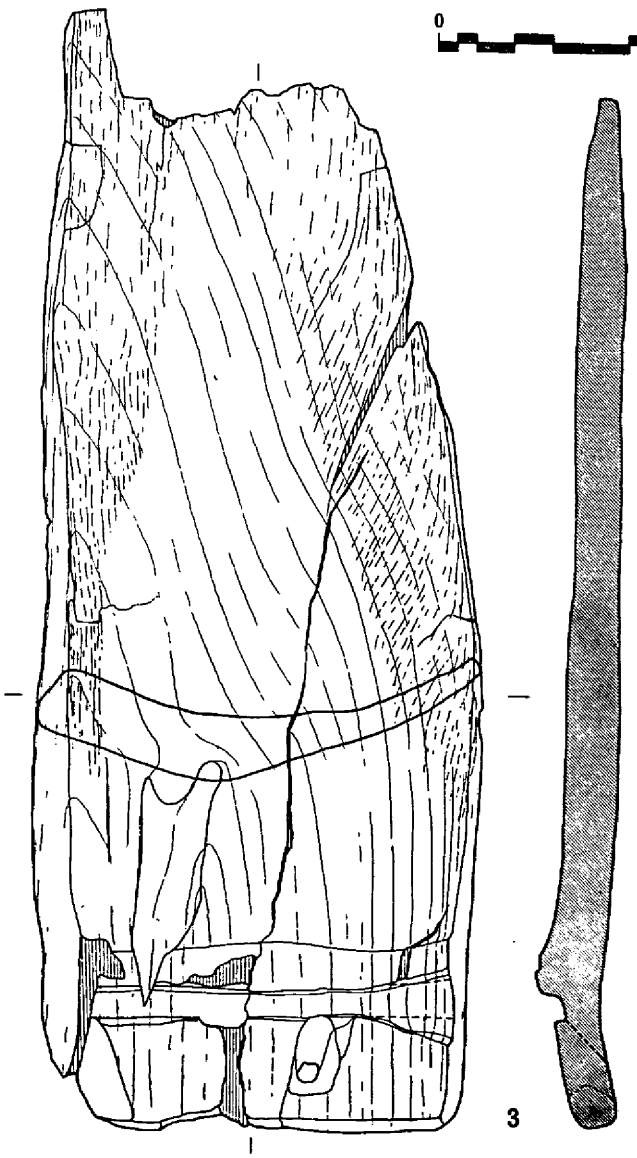
4）溝W

調査区の西端近くにほぼ南北に検出された。幅約120㎝，深さ30～40㎝を測る。前回調査では遺物は出土しなかったが，今回調査では，図示はできなかったが，かなり退化した高台の付く椀形土器片が出土しており，鎌倉時代初期のものと思われる。（柳瀬）



第64図　才の町　P－2遺構図（1/20）及び出土遺物（1）





第65図　才の町　P－2出土遺物（2）

5）P－2

＜**遺構**＞調査区の西端近くに，上面を少し削平を受けて存在する。径70㎝，深さ140㎝を測る。出土遺物のほとんどは第1層中に含まれ，一括して一時期に廃棄された状態で重なって出土している。また，第2層中には，マクワウリ，炭化籾等が含まれていた。この土壙の形態としては，井戸が考えられるが，壁面は粘土質あるいは粘土であり，後述の東鬼川市調査区の井戸状遺構とは様相を異にしている。

＜**遺物**＞遺物の出土状態からみて，かなり短期間の一括遺物として取り扱うことができる。壺形土器（15）は，短かめの頸部をもち，やや外側に反りながら立ち上がり，端部を少し肥厚させ口縁部を作っている。口縁端部には三条の凹線（少し雑）が廻り，内面の箆削りは頸部近くにまで見られる。胎土に長石，石英粒が目だち，整形も雑になっている。17及び19の高杯形土器は，中期的な様相を残しながらも17については，口縁部の立ち上がりにシャ

ープさが見られず，全体にぼってりとして器壁も厚い。19は，杯部の成形には円盤充塡法がとられているが，脚柱部に見られる櫛描平行直線文などの施文に後期の特徴が見られる。鉢形土器（18）は，平底から逆台形に立ち上がるもので，外面は篦磨き，内面下部は篦削り，口頸部近くは横ナデが施されている。

石庖丁（5）は，図版14のように板状木器にはさまれるような状態で出土している。A面の一部は自然の風化面が残っており，それが機能的に握り易くしている。刃の部分は，摩滅痕が顕著である。

木器（1）は，第2層から二つにわれて出土したもので，舟形をしているが，大形のスプーン状木器と呼んだ方が良いかもしれない。内面は部分的に炭化しているが，単に二次的な火を受けたとみるよりも，作成時に中央を刳るために焼いたか，強度を保つために人為的に焼いたとみるべきであろう。樹種はホウノキである。2の木器は，枝の先を加工したもので，用途は不明である。樹種はヒノキである。3の板状の木器は，下部に枘(ほぞ)溝が掘られ，板も反りを持っているため，桶状の容器の一部とも考えられる。樹種はクスノキである。

土器の形態，及び石庖丁を確実に伴うという事実から，これらの一括は，後述東鬼川市8—P—20の一括出土遺物との比較においてはやや後出的ながらも，上東・鬼川市I式にあてはまるものである。（柳瀬）

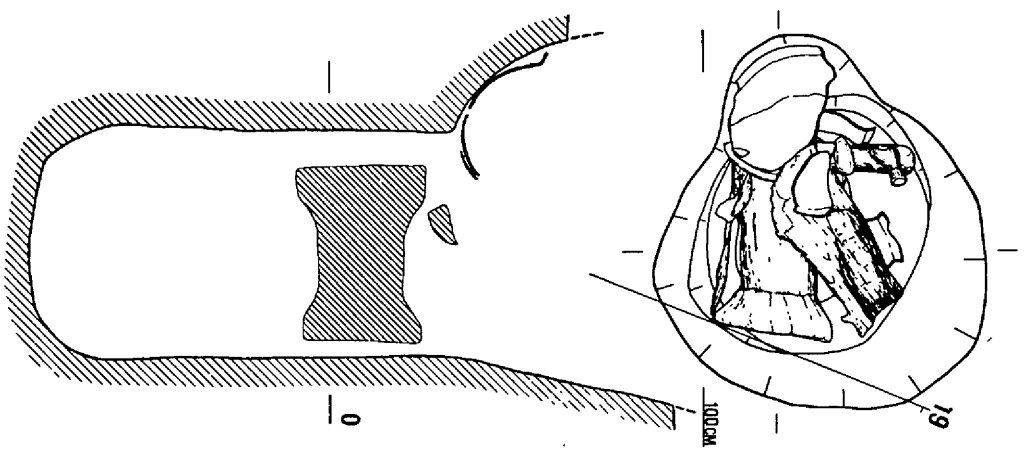
6）P—1

＜**遺構**＞平面プランは径80㎝の円形であるが，20㎝の拡張部をもつため不整円形を呈す。深さは約200㎝を測る。土壙上部では斜めに掘り込んでいるが，中程からはほぼ垂直に下がり始める。底部は円形を呈す。堆積土は3層に大別できる。

第1層にはほとんど遺物を含まず，第2層からは土壙の遺物のうち大半が出土している。拡張部の壁に貼り付いた状態で鉢形土器が，その直下からは曲物の蓋が出土した（図版15—2）。また一部焼痕を持つ自然木の下から台状木製品が，その横からは二又鋤が他の土器などと混じって出土している。第3層は水分を多量に含み半泥化しているため，竪杵以外の遺物は出土状況が明らかでない。しかしその堆積土を水洗した結果，少量の土器片と朱塗り木製品を検出した。また，これら人工遺物に混じって炭化物，モモ，クリ，ソラマメ，ウリなどの種子類も検出している。また，花粉分析の結果においても多種にわたって明らかになっている（註2）。

平面プラン及び深さから井戸と思われるが，壁面は粘土層のため現在では水は僅かに染み出す程度で，いわゆる湧き水を溜めておく井戸としての機能は果たし得ないようである。

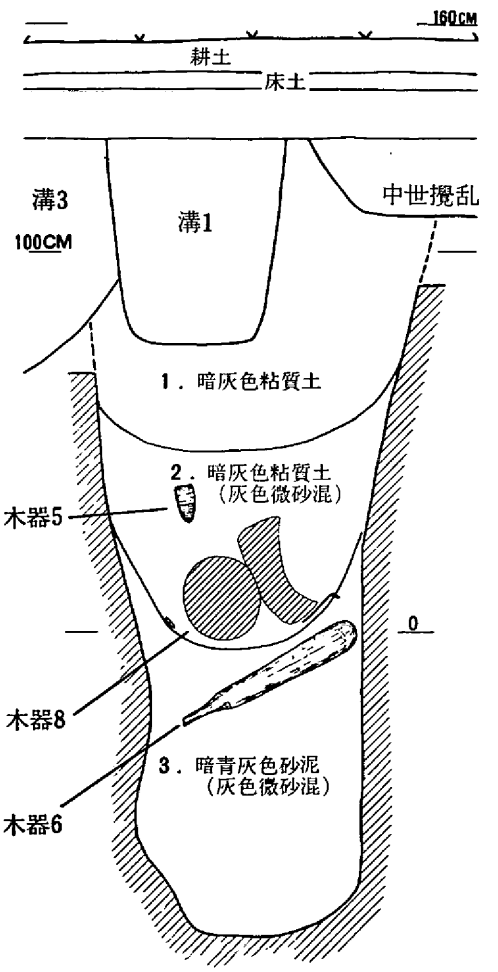
＜**遺物**＞壺形土器は長頸のもの（20，21），短頸のもの（22，24）がある。20，21共にゆるやかに外反する口縁部をもち，口縁端部は内傾し，上下に拡張している。拡張部には三条の退化凹線が施されている。頸部は，20が横ナデによってわずかに凹面をもつのに比べ，21は刷毛調整ののち六条の沈線を施している。また頸部には篦状工具による刺突文を廻らしている。24の外面は胴部を篦磨き，頸部から口縁部にかけては横ナデ仕上げである。内面は胴部を篦削り，頸部から口縁部にかけては横方向の細かな篦磨きで調整している。甕形土器は，単に「く」の字状に外反するもの（23，29）と口縁



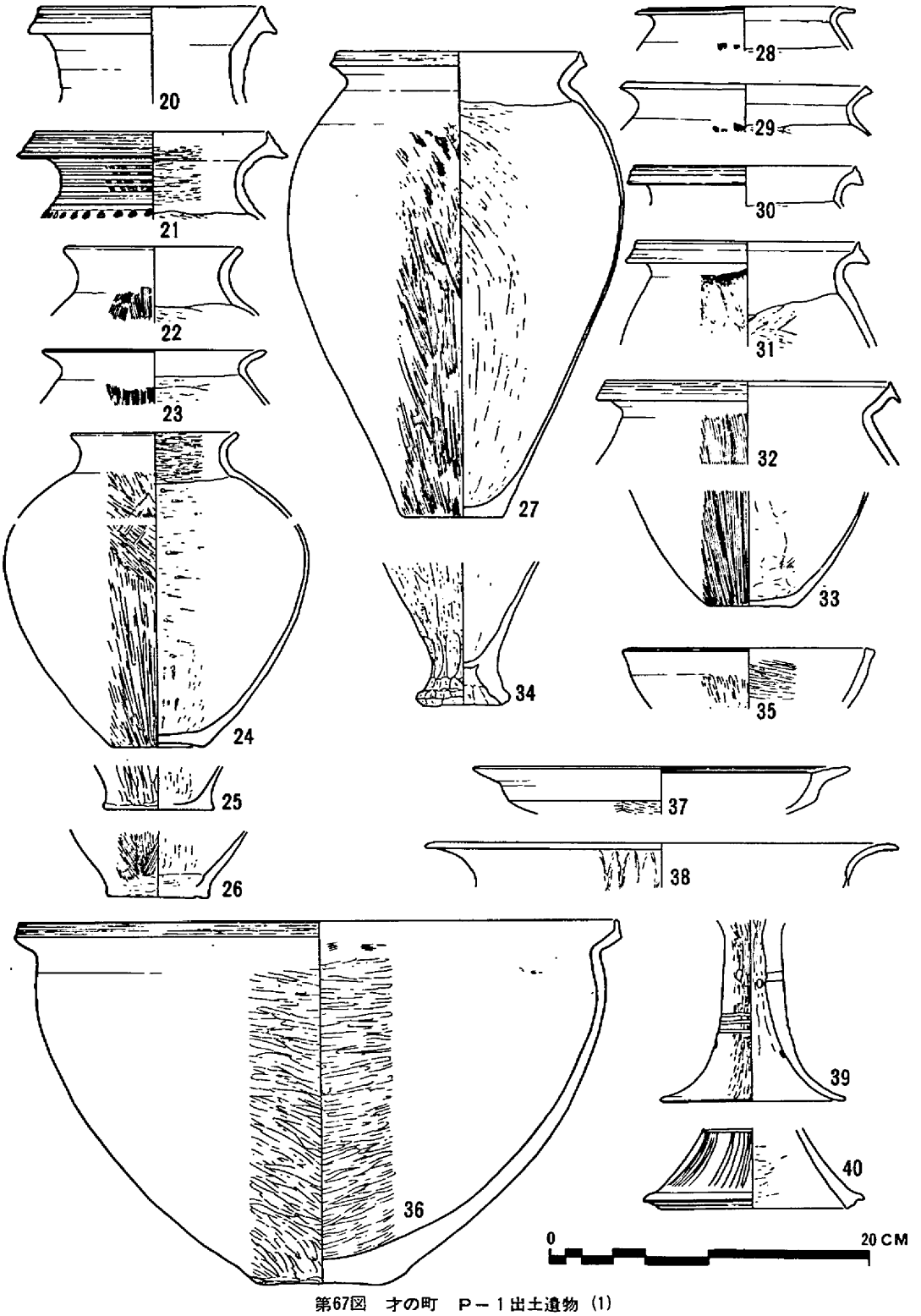
端部に拡張をもつもの（27，30～32）がある。27は器表面全体にススが付着している。完形である。高杯形土器（37）は口縁端部が鋭く外方に拡張し，端面に三条の退化凹線を施している。38は外反する口縁拡張部をもち，外面には暗文風の篦磨きがみられる。39の筒状の脚部は下方に徐々に広がり，脚端部は丸くおさめている。脚部中央付近に三条の篦状工具による刻線を廻らし，その上下に小円孔を穿っている。外面は縦方向に篦磨き，内面は絞り目がみられる。40は「く」の字状に開く脚部に，脚端肥厚部には二条の凹線を施している。鉢形土器（36）は小さいが厚い底部をもち，ややふくらみぎみに胴部が立ち上がる。口縁部は「く」の字状に開き，口縁端部は上方につまみ出している。口縁端面には，三条の凹線状の横ナデが成されている。胴部から底部にかけては，内外面共に篦磨きされている。他に少し大ぶりな製塩土器（34），椀形土器（35）が出土している。

以上，これら一群の土器は上東・鬼川市Ⅰ式の新しい様相あるいは鬼川市Ⅱ式の古い様相を呈している。

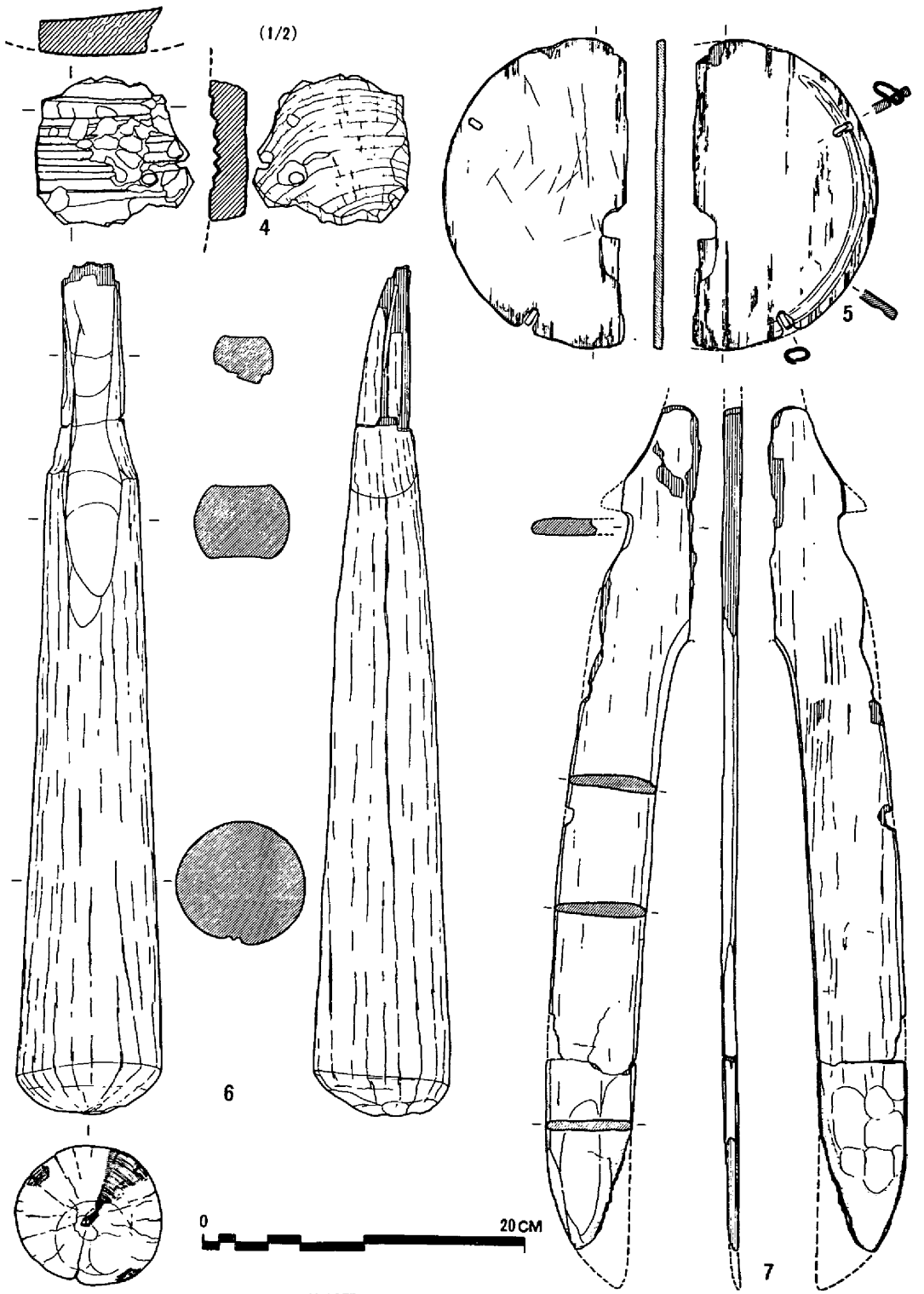
二又鋤状木製品（7）は，ナスビ形をした二又鋤（註3）の破損品であろう。残存長53㎝，基部抉りの部分は推定幅8㎝，厚さ1㎝，刃部は推定45㎝を測る。刃部は刃先にいくに従って薄くなっている。樹種はアベマキである。竪杵（6）は半分欠損しており，



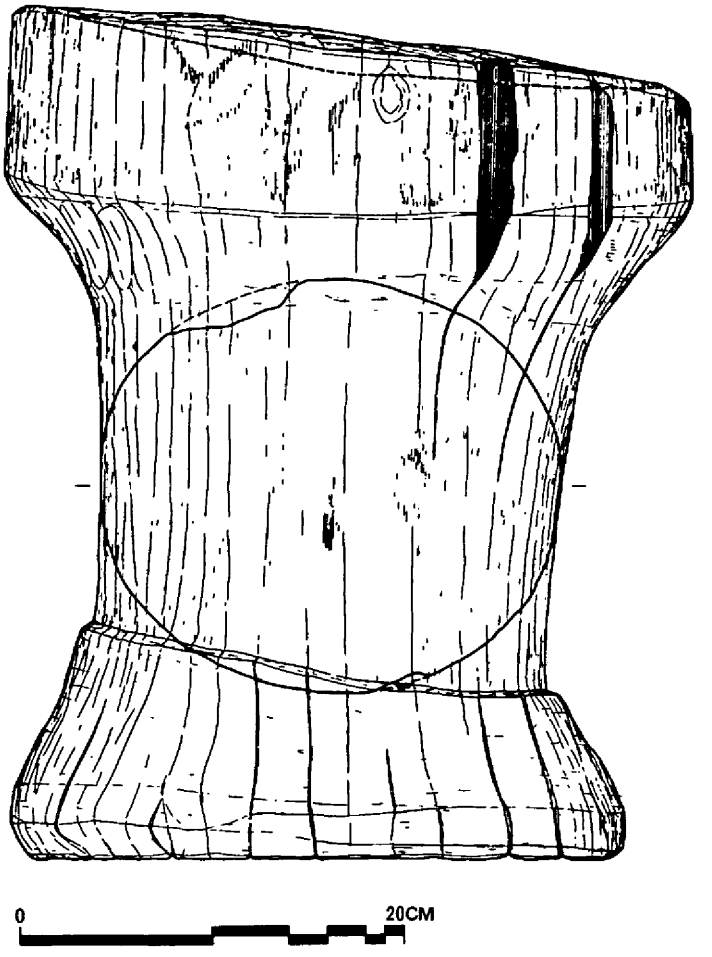
第66図　才の町　P－1
平・断面図（1/20）



第67図　才の町　P－1出土遺物（1）

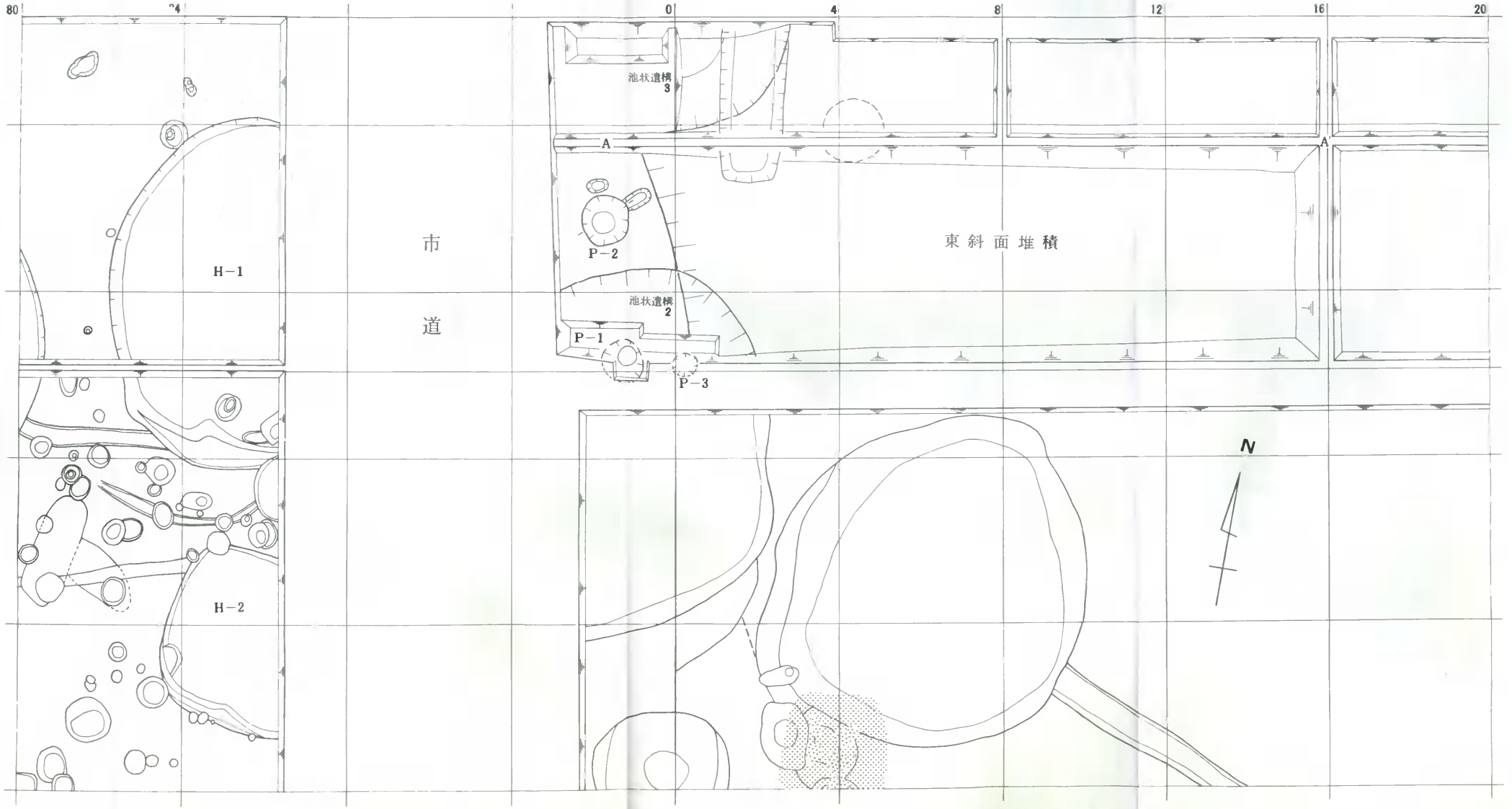


第68図　才の町　P－1出土遺物 (2)

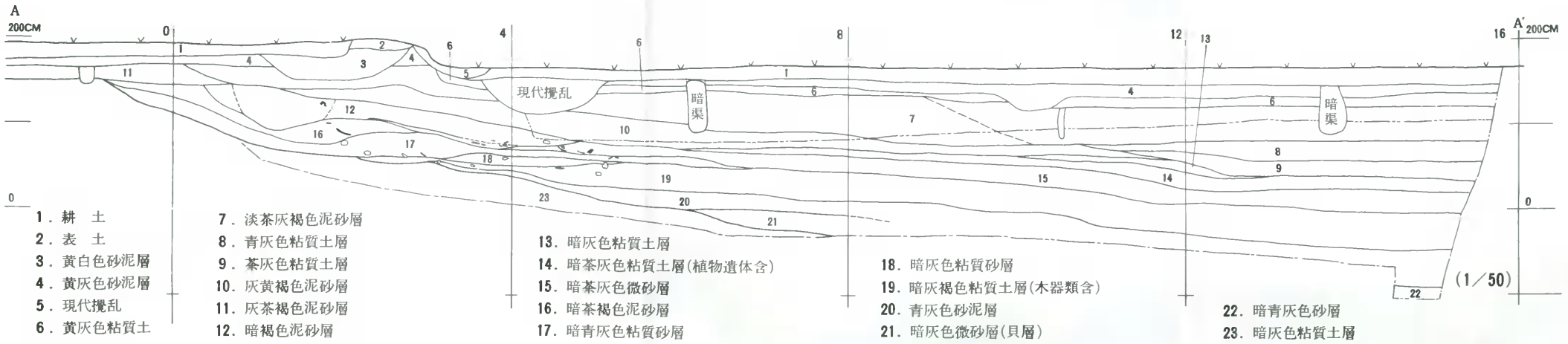


第69図　才の町　P－1出土遺物（3）

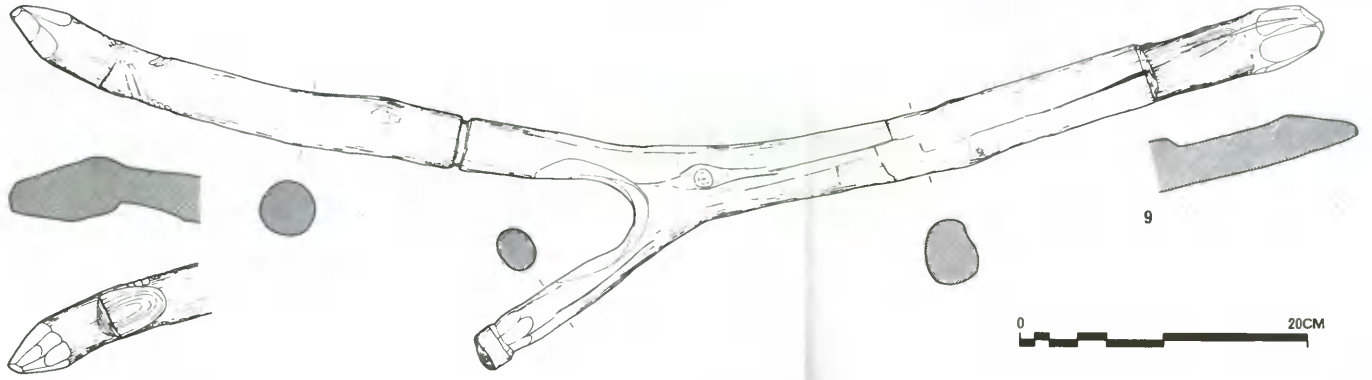
残存長53㎝，先端部径9.5㎝を測る。中央に向って徐々に細くなっていく。握り部は径3.5㎝を測る。かなり使用されたらしく，身部先端は丸く磨滅している。また身部から握り部にかけては，二箇所に大きく削られた部分がみられる（註4）。樹種はモチノキである。曲物の蓋（5）は直径18.5㎝の円形を呈す。上下面は丁寧に削られており，周縁は下面に向ってわずかに外に傾斜して切断されている。上面には不規則な刃物痕がみられ，下面は周縁に添ってわずかに凹みが残る。凹みは側板によるものと思われ，現状で二箇所にみられる「とじ」の部分には，三重に巻きつけた樺皮（註5）が残っている。樹種はヒノキである。朱塗木製品（4）は，縦横5㎝，厚さ1㎝程の破片である。表面は朱が塗られており，施文部分は幅4㎝の間で，まず上下から一段削り下げ，さらに中央2.8㎝間は断面三角形に4条の凸帯を削り出している。表面には各所に穴が開いており，2箇所に裏面まで貫通するものもあるが，そのうち1つを除き虫喰いの可能性が強い。器表面は左右方向で外彎し，上下方向で内彎している。裏面はやや腐蝕しており調整痕はみられないが，三箇所磨滅痕が残ることからこれ以上厚くなるとは考えられない。裏面及び断面に走る木目から，¼に切断された材の中心部に近い所を斜めに木取りされた部分らしい。この木片は，上東式の器台形土器の胴部から裾部にかけての部分に類似していることから，木製器台片と考えている（註6）。樹種はヤナギである。台状木製品（8）は一木を削り込んで作っている。上面直径35㎝の円形を呈すが，下面は径30㎝前後のいびつな円形を呈し，腐蝕が激しい。上面はわずかに傾斜し，中央部に向って多少凹んでいる。胴部は丁寧に削り込まれており，部分的に手斧痕が残る（註7）。樹種はカシワである。（江見）

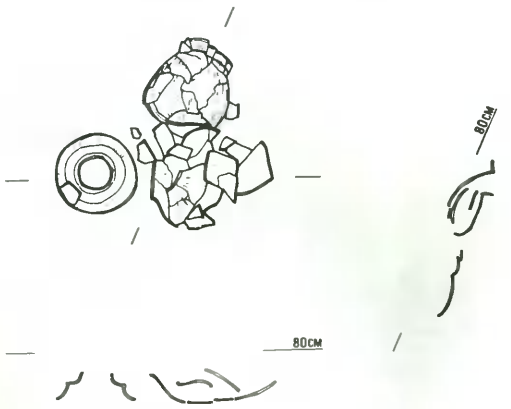


第70図　亀川　遺構配置図（1／100）



1．耕　土
2．表　土
3．黄白色砂泥層
4．黄灰色砂泥層
5．現代攪乱
6．黄灰色粘質土
7．淡茶灰褐色泥砂層
8．青灰色粘質土層
9．茶灰色粘質土層
10．灰黄褐色泥砂層
11．灰茶褐色泥砂層
12．暗褐色泥砂層
13．暗灰色粘質土層
14．暗茶灰色粘質土層(植物遺体含)
15．暗茶灰色微砂層
16．暗茶褐色泥砂層
17．暗青灰色粘質砂層
18．暗灰色粘質砂層
19．暗灰褐色粘質土層(木器類含)
20．青灰色砂泥層
21．暗灰色微砂層(貝層)
22．暗青灰色砂層
23．暗灰色粘質土層





第71図　亀川　平・断面図及び出土木器

挿頁 9

第3節　亀　川　調　査　区

この調査区は，現足守川右岸の４つの微高地を確認したものの一つである東西鬼川市地区の微高地の東端部にあたる。調査上の都合から東鬼川市調査区とは分離して，亀川調査区としたものである。前回調査において，江戸時代の池状遺構，溝状遺構，弥生時代後期の土壙，製塩土器だまり，及び斜面上層，下層の土器群を検出し，微高地斜面での遺構・遺物のあり方が示された。

今回の調査は，前回調査の亀川斜面堆積をもう少し詳しく把握することを目的としたものである。第71図Ａ－Ａ′断面では１～22までの堆積土層にわけることができたが，遺物包含層としては，大きくは上層（８～10），中層（11～20），下層（21）であった。以下で詳しく述べるが，前回調査報告で下層としたものは今回の中層にあたり，中層は整理の結果，上東・鬼川市Ⅱ～才の町Ⅱ式あたりまでの時期幅をもって土器を包含している（量的には鬼川市Ⅱ式が一番多い）ことが判明している。

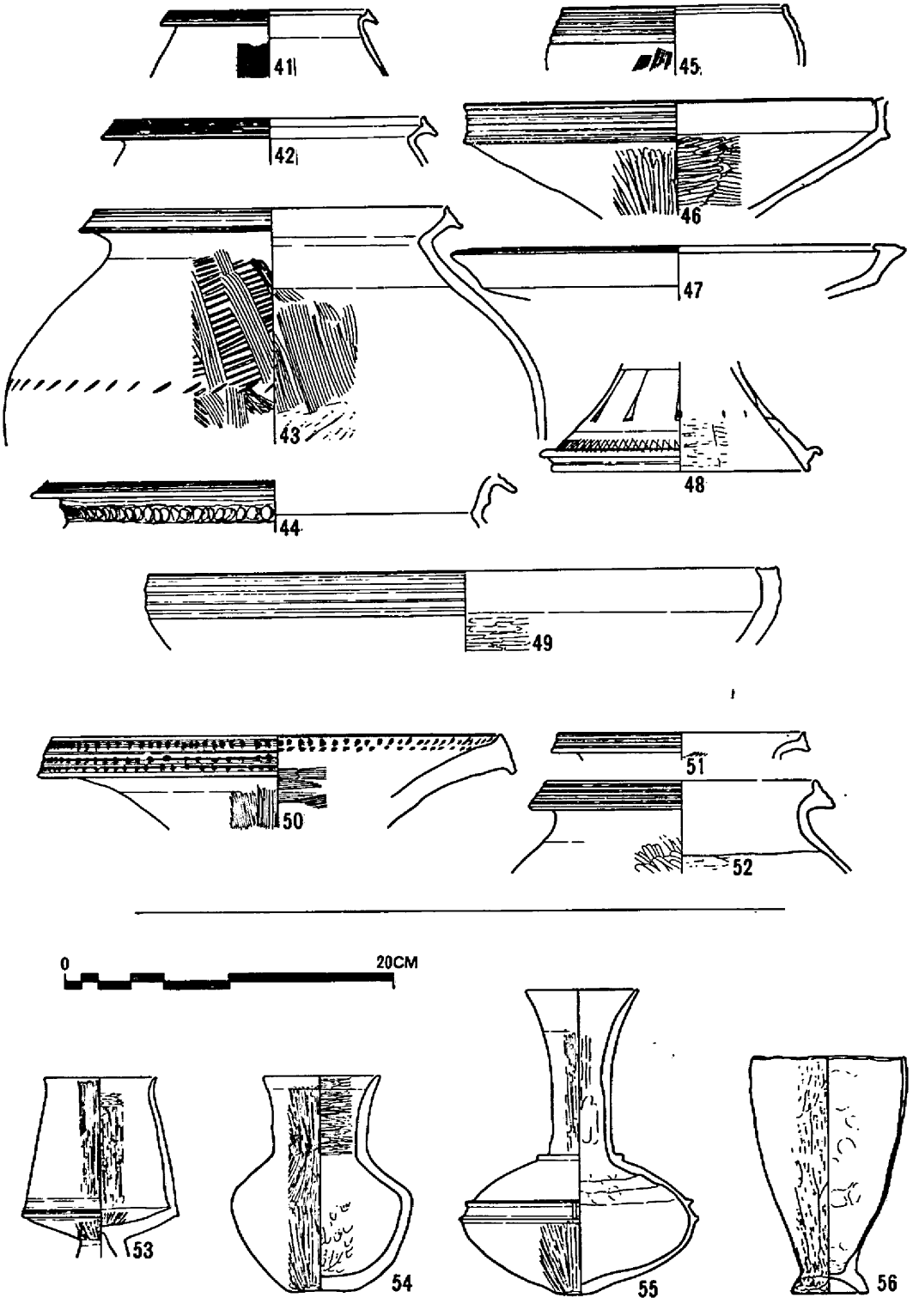
１）斜面下層（貝層）（第72図41～52）（図版47－２）

現地表下約２ｍの深さの所に約20㎝の厚さの貝層を確認した。貝はおもにハイガイとヤマトシジミが占め，カキ，キセルガイなども混じっている。その貝層の中から出土する土器は，弥生時代中期末～後期初頭のものであった。

＜**遺物**＞壷形土器（50～52），甕形土器（41～44），高杯形土器（46～48），鉢形土器（49）などがある。そのうち41～46・48・49は中期末（上東・鬼川市０）の特徴を示し，47・50～52は上東・鬼川市Ⅰの特徴を示している。なかでも，43は頸部から急に「く」の字に外反させ端部を斜め上下に内傾させ，肥厚させる口縁を持ち，外表面に左下がりの細かい叩きを，またその上に荒い刷毛目を持つ。内面は胴部中央まで篦削りがおよぶが，上半は荒い刷毛調整がされている。胎土にはかなり砂粒（長石）が目立ち，上東・鬼川市Ⅰ式との区別はつきにくい。また44の甕形土器は，頸部に指頭圧痕凸帯が廻り，この時期のものとしては古い様相を呈している。土器の比較において時期差を考える時，41・42と51・52の口縁部に特徴が良く表われている。前者が，胴部から急に「く」の字状に折れ，端部を斜め上下に拡張させた口縁部をもち，内面の篦削りが頸部下まで達しないのに比べ，後者は胴部からゆるやかに外反し，端部を上部に少しつまみ上げ全体に肥厚させた口縁部をもち，内面⊖篦削りが頸部下まで達している。50の壷形土器の口縁部は，端面にハイガイ圧痕文を三重に廻らし，内面口縁下に二重に廻らせている。型式的には上東・鬼川市Ⅱ式まで降るかもしれない。

２）斜面中層（第72図53～56，第73図57・58，第74図１・２，第75図）

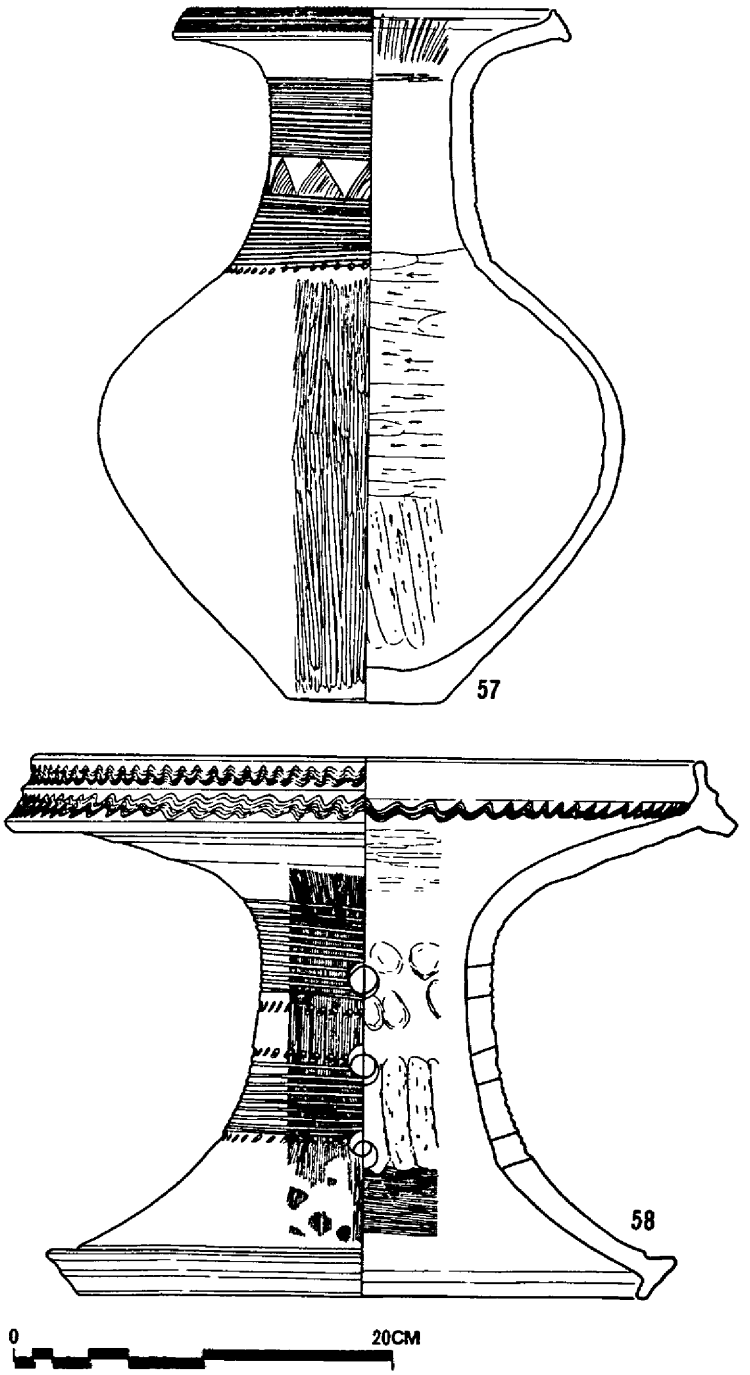
前回調査で包含層下層として報告したもので，今回調査において整理箱100箱以上の土器が出土している。第12層から第20層までの出土土器を断面から層ごとに取り上げ，整理・検討の結果，より下層の方に型式的に新しいものが見られるなど時期幅があった。量的には上東・鬼川市Ⅱ式の新しい要素を持つものが多く，前回調査では古い要素を持つものが量的に多く出土していることから，地点に



第72図　亀川　東斜面出土遺物 (1) (下層上段・中層下段)

よる堆積状況の違いが考えられる。

＜遺物＞遺物は，前述のように多量に出土しているため，全部の土器について整理・実測することは不可能で，紙面の都合もあり一部を載せた。



第73図　亀川　東斜面出土遺物 (2) (中層)

長頸壷形土器（57）は，ほぼ完形で出土したもので，球形の胴部から少し内傾しながら立ち上がる長頸をもち，ゆるやかに外反しながらラッパ状に開き口縁部をつくる。端部は斜め方向に肥厚させ，外面に退化凹線を施す。長頸部にはかなり雑で密な篦描沈線が上部と下部に廻り，中央にこの種の土器にはめずらしく鋸歯文を廻らす。肩部には，刷毛状工具による刺突文が廻る。胴部外面及び口縁部内面は篦磨き，胴部内面は篦削りが成されている。この土器は，従来「上東式」と呼ばれて来たものの典型であり，上東・鬼川市Ⅱ式に比定されるが，頸部沈線の粗雑化，全体的なバランス(胴部の球形化)など新しい要素が見られる。

器台形土器（58）は57とほぼ同レベル同位置で出土した完形に近いものである。円盤状の胴部の上下でほぼ等しく外反する口縁と脚をもち，口縁端部は上下に拡張する。口縁端面には

二～三条の退化凹線があり，その上から７～８本単位の篦状工具による二条の波状文が廻る。波状文は口縁部内面にも一条廻っている。多少裾広がりの胴部には，刷毛目の上から上部と下部に分けて沈線が廻らされ，刷毛状工具による刺突文も三条廻る。円孔は四方に３個ずつ穿たれている。脚部端部は内傾して下方に拡張し，端面には二条のナデによる凹線文が見られる。内面の調整は，波状文の下からくびれ部まで篦磨き，胴部上半は押圧，下半は横方向の篦削り（図では縦方向のように見えるが，横方向にひっかかりながら削った痕跡である），脚部は刷毛目となっている。胎土は57とほぼ同一で砂っぽく，色調は赤みを帯びた褐色を呈す。全体的な器形のバランスは，胴部が口縁径及び脚部径の大きさに比べ細く引きしまった感じを与え，口縁部径が脚部径よりも長いにもかかわらずバランスがとれているのは，器高によるものであろう。時期的には，57と同様上東・鬼川市Ⅱ式に比定されるが，口縁部の拡張，細くしまった胴部など新しい要素が伺える。

直口壺形土器（55）は，前回調査においても破片で散見されていたものであるが，底部から口縁部まで復元実測できるものは初出土である。胴部は隅丸菱形を呈し，細長い円筒状の頸部をもち，端部近くで徐々に外反しラッパ状に開く口縁部を有する。頸部下端及び胴部には貼り付け凸帯が廻る。胴部の２本の凸帯には，２本単位の棒状浮文を施す。底部は径約25㎝ほどの平たい部分がもり上がるように存在している。表面の調整は全体に篦磨きで仕上げ，口縁部近くは横ナデされている。胎土に砂粒はほとんど含まず，かなり精選されている。灰褐色を呈する。

木製品（９～15）は，第19層及び第20層から出土したものである。

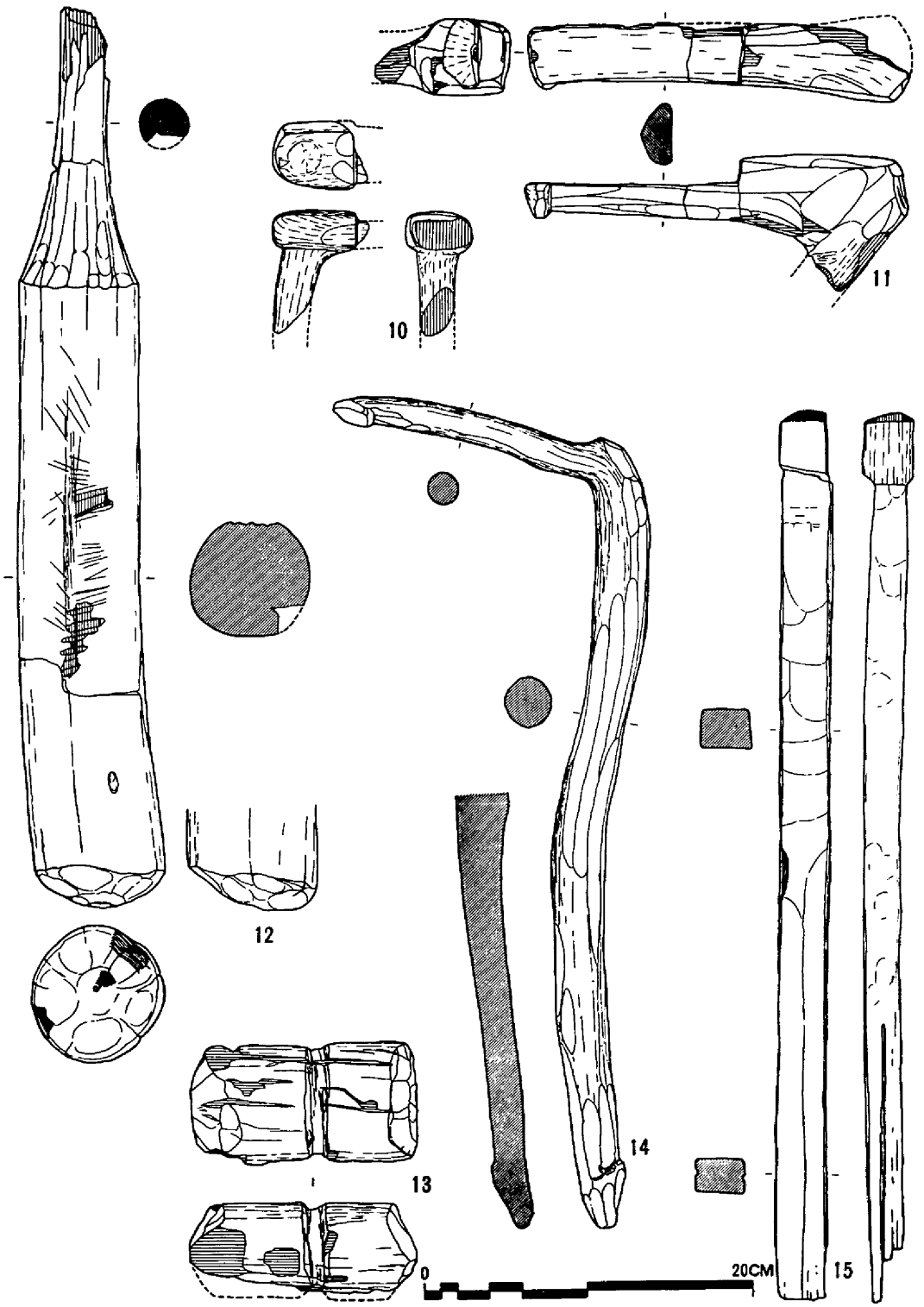
９は，近年まで農家で使用されていた尻枷（しりかせ）に形状が類似している。しかし，尻枷に特有の，綱ですれた痕跡が凸起（枝）の反対側にみられないこと，中央部の凸起と身部との又になった「受け」の部分に顕著な磨滅痕が認められることから尻枷とは別の用途が考えられる。身部の両端は止手状にそれぞれ加工され，上部には紐状のもので十字に縛ったと思われる痕跡がみられ，何かに固定して「受け」の部分で棒状のものが回転運動をする用途が考えられる（註８）。樹種はネズミサシである。

12は直径 7.5 ㎝前後の一木を利用して作られた竪杵である。現存長53㎝，握部17㎝，身部38㎝を測る。身部から握部にかけては丸く丁寧に削っており握部直径 2.2 ㎝を測る。身部先端は磨滅（使用痕）が著しい。一方，身部中央には幅３㎝，長さ20㎝にわたり多くの打撃痕が認められ，竪杵破損後二次的に使用された可能性が強い。樹種はクロバイである。

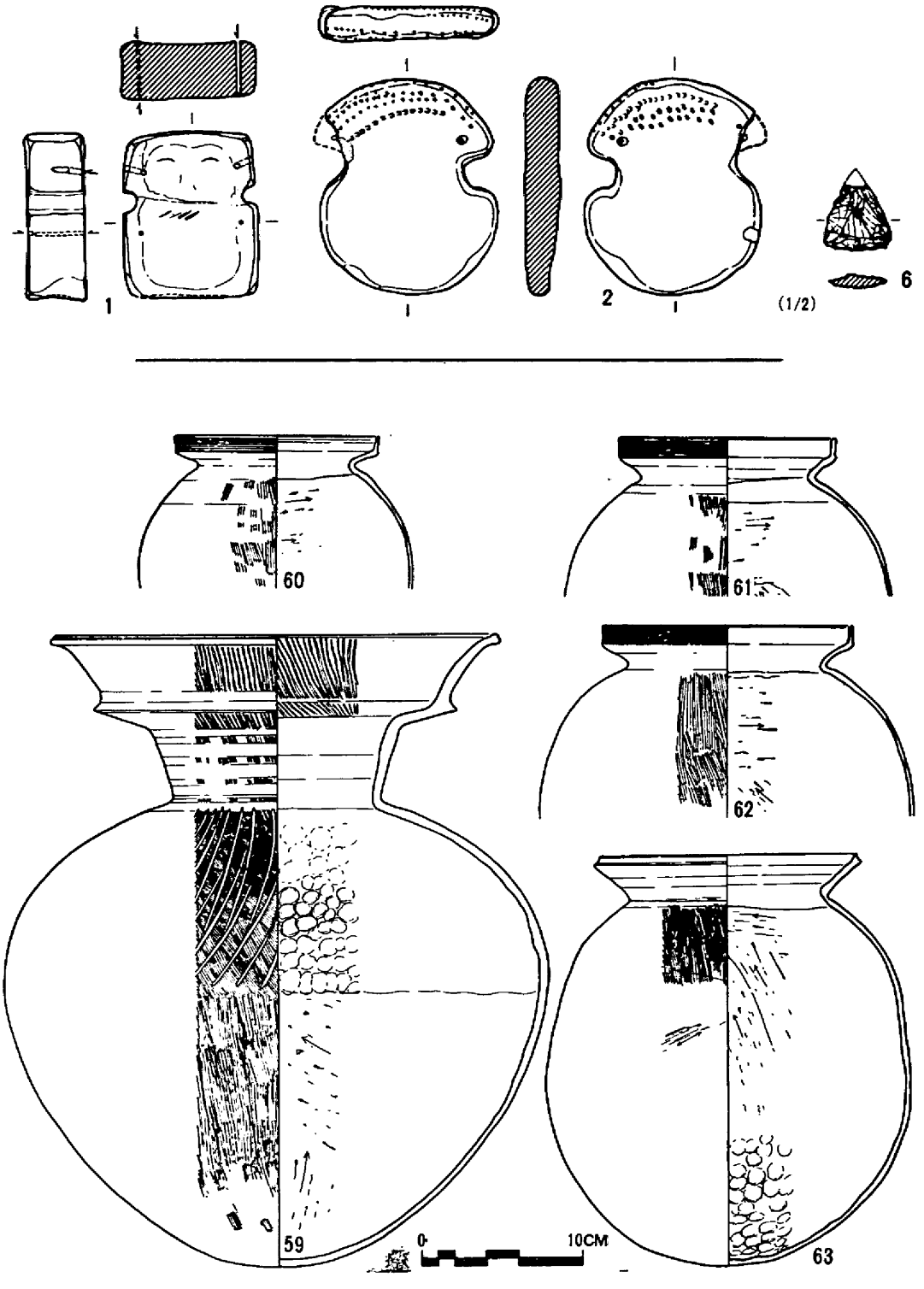
11は木の又部を利用して作られたもので手斧柄と考えられる。柄部と身部が成す角度は55度である。身部の長さ23㎝，幅３～５㎝で，斧の着装部は平らに削っており長さは13㎝である。身部先端には突起をもつ（註９）。樹種はクリノキである。10も11と同じく手斧柄と思われる。柄部と身部が成す角度は95度である。身部は幅 2.3 ㎝で丸く丁寧に削っているが，斧の着装部は破損しているため明らかでない。角度の大きさから別の用途に使われた可能性もある。樹種はアラカシである。

13はこもあみ具と考えられる。直径７㎝の丸材を利用して作られたもので，中央に幅 1.2 ㎝，深さ 0.3 ㎝の溝が走る。樹種はネズミサシである。

14は「く」の字状に折れ曲った枝部を利用して作られたもので完形品である。全体に加工痕がみられ，両先端には突起をもつ。下端部裏側は意識的に半分近く削っている。非常にマジカルな様相を呈



第74図　亀川　東斜面出土遺物 (3) (中層)



第75図　亀川　東斜面出土遺物 (4) (中層上段・上層下段)

すが用途は全く不明である。樹種はヤブツバキである。

15は一部斜めに切り込みをもち，幅2.5×3㎝の断面四角形を呈す加工木材である。下端中央部には両側に幅，深さともに0.2㎝の溝が掘られている。用途は不明である。樹種はヤブツバキである。

分銅形土製品は2点（1，2）出土している。1，2ともに第20層のあたりで出土したものである。1は分銅形というよりも，隅丸長方形のプランを呈し，側面に小さな抉りを施しくびれ部を作っている。上部表面には，爪による刺突痕が二箇所にみられ，「顔」が意識されている。耳にあたる部分には，それぞれ二箇所に表面から側面に向って小円孔が穿たれているが，下半部縁辺の小円孔は二箇所とも貫通してはいない。全面に細かな篦磨きが成され，黒灰色を呈す。胎土は土器にみられるものとほとんど差はないが，多少砂が少ない。2は，全体に雑な作りで，厚さも一定していない。表裏面とも上縁部には，竹管及び半截竹管様の二種類の工具による刺突文が施され，くびれ部近くの両端には，それぞれ円孔が貫通している。胎土は土器類と似るが，1同様に砂粒が少なく褐色を呈す。

1，2ともに従来の弥生時代後期とされているもの（註10）に比定でき，器形・文様形態に退化がみられることから上東・鬼川市Ⅲの時期くらいまで降るかもしれない。

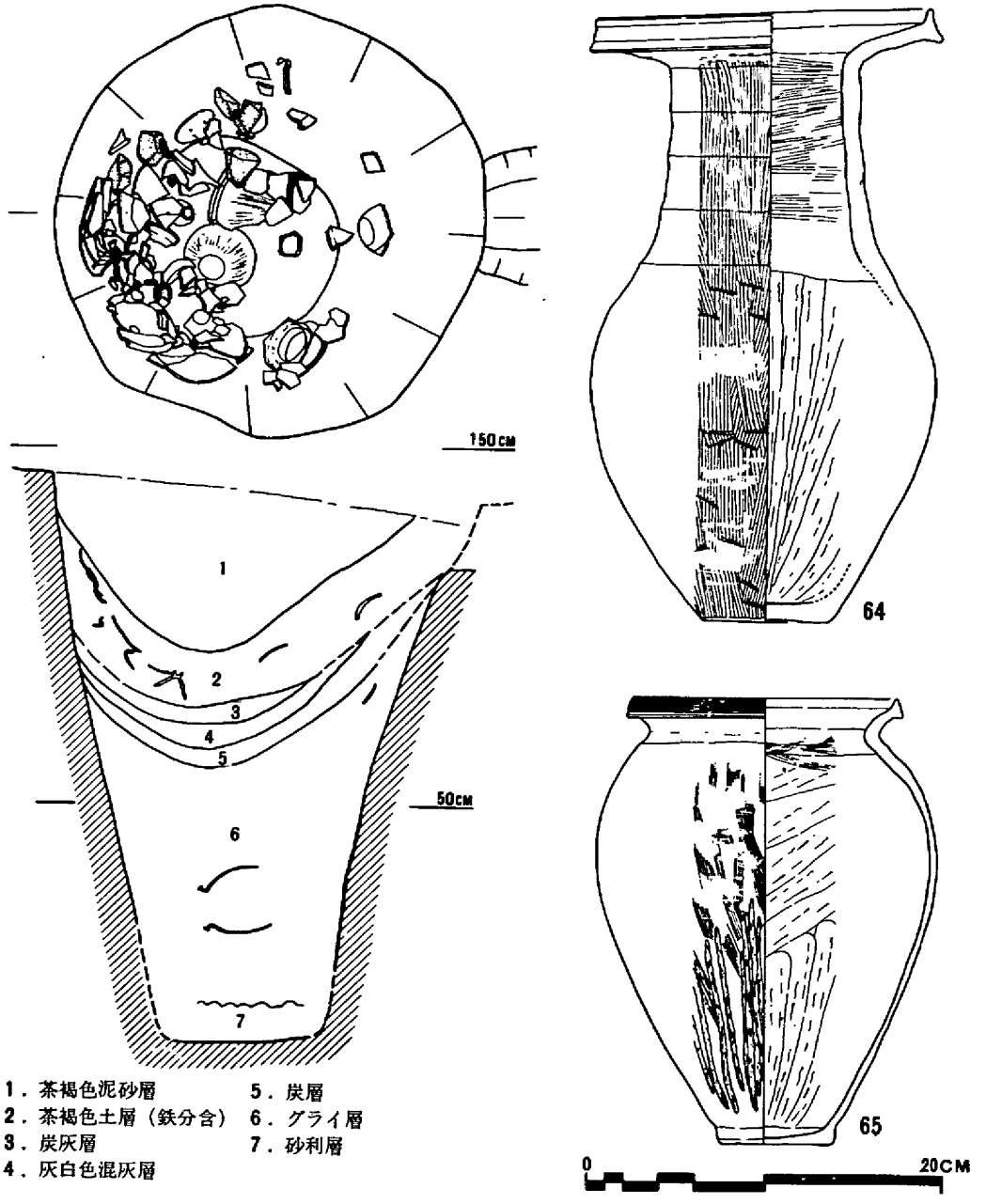
3）斜面上層（第71図出土状況，第74図59～63）

前回調査報告の出土遺物（亀川上層土器）と今回の土器出土地点は異るが，層的には同一と考えられる。壷形土器（59）と甕形土器（63）は，第8層中で一括して出土したものである。また，60～62の甕形土器も少し東側の同一層から出土したものである。

59は，ほぼ球形で底部に近づくにつれて多少すぼまる胴部をもち，底部はほとんど丸底を呈す。頸部は胴肩部から急に外傾して立ち上がり，二段に開きながら外反して口縁部をつくる。口縁端面はわずかに肥厚し，一本の沈線が廻る。口縁部内外面とも暗文（註11）を施し，頸部外面は縦方向の刷毛目の上から横ナデ調整している。胴部外面上半は細かい刷毛目の上からやや細かい刷毛目で再度調整し，その上から縦方向のジグザグの暗文が口部を中心に方射状にかなり整然と施されている。下半は少し荒めの刷毛で調整されているが，底部及び底部近くではほとんどみられない。内面下半は，上または斜め上方向の篦削りが，上半は指頭圧痕が顕著である。胎土に長石粒が少し目立つが，緻密で良く焼きしまっている。色調は暗茶褐色を呈し，この時期の出土土器に類似するものはない。

63は，中央部で少し間のびした球形を呈す胴部をもち，底部は完全な丸底である。口縁部は肩部から急に「く」の字状に立ち上がり，端部はわずかに肥厚し端面をつくる。器表面の調整は，肩部に刷毛目，口縁部が横ナデ，胴部と底部はていねいな押圧とナデによって仕上げている。内面は，口縁部が横ナデ胴部は下半から底部にかけて指頭圧，上半はていねいな篦削りで仕上げている。外面にはほとんど全面にススの付着がみられ，内面底部の指頭圧痕のくぼみに炭化物の付着がみられる。胎土は59に近いが緻密ではない。60～62はいずれも球形と思われる胴部をもち，肩部から急に外反し端部が上方に拡張する口縁部を有する。口縁端面には，六～七条の櫛描平行沈線文を施している。胴部器表面は刷毛目，内面は篦削り，口縁部及び頸部は横ナデの各調整がみられる。胎土は全体に砂っぽい。

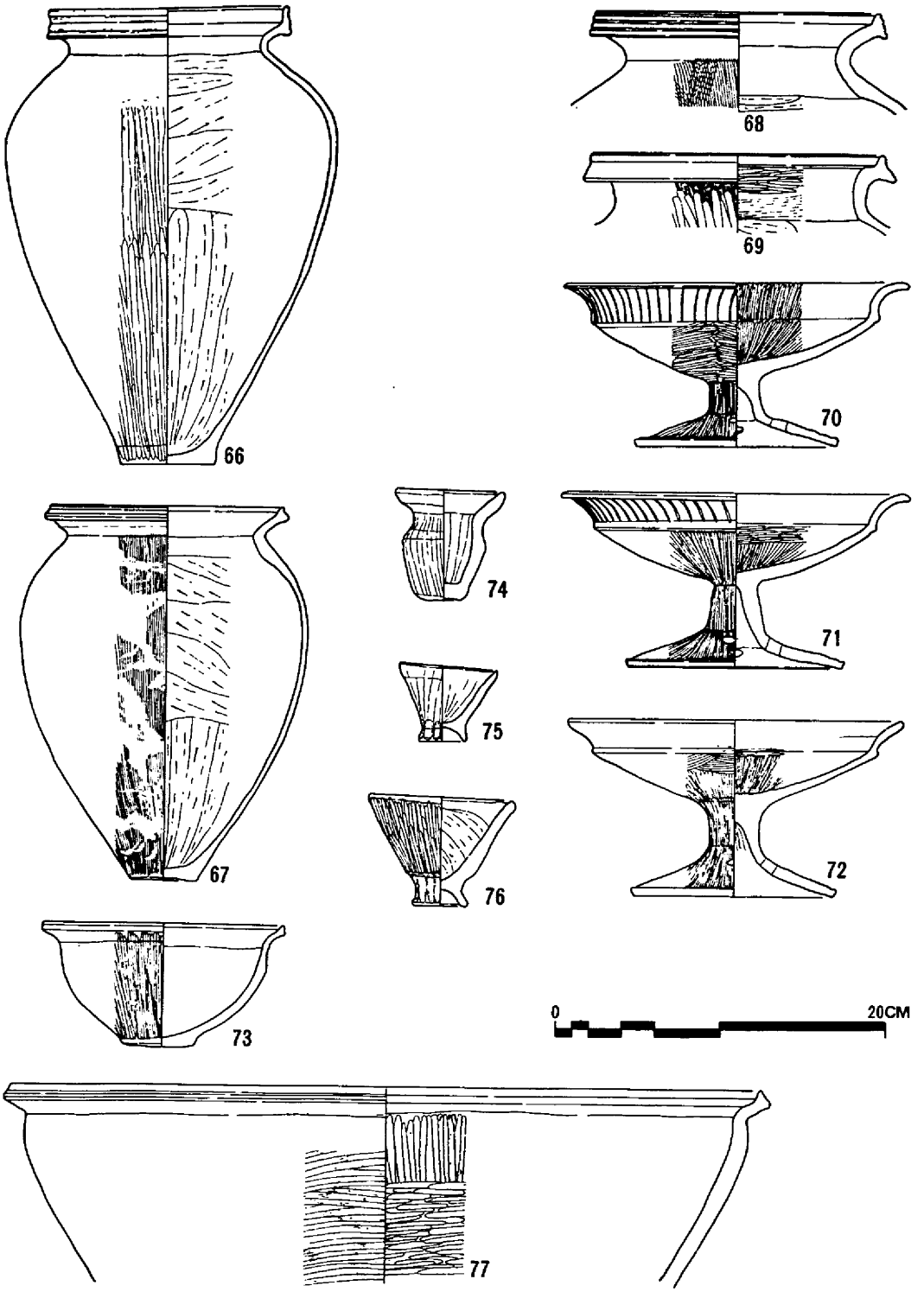
これらの土器は，いわゆる亀川上層式の形態・特徴を示す。（柳瀬）



第76図　亀川　P－2遺構図（1/20）及び出土遺物

4）P－2

＜**遺構**＞東斜面の肩口に，他の井戸状遺構（P－1，3）とともに検出したものである。径約120㎝，深さ約150㎝を測る。堆積層は6層に大別でき，土器は第2層に多量に出土した。出土状況は第



第77図　亀川　P－2出土遺物

76図にみられるように，中央部に向って落ち込んだ状態を示していた。第３～５層は，炭または灰が互層になって検出された。第６層中の底近くからは，完形の64，65の二つの土器が出土しており，後述のように，上層の土器との時期差もあまりみられないことから，短期間に人為的に埋められた可能性が強い。底は湧水砂層を突き抜け，７の砂利層まで至っている。本来井戸と考えられるが，遺構の状況は前回調査才の町Ｐ一へと酷似しており，遺構廃棄時の祭祀的な様相が伺える。

＜遺物＞一下層一壷形土器（64）は，口縁部が，ほぼ垂直に立ち上がる頸部から急にラッパ状に開く長頸壷である。端部は，やや内傾して上下に拡張する。胴部はあまり張りを持たず，底部に移行する。外面は，頸部から下を荒い刷毛目調整で下から上方向に行なう。内面下半は篦削り，頸部は横方向の刷毛目調整ののちナデで仕上げている。

甕形土器（65）は，口縁部が外反し端部がやや内傾して上下に拡張する。端面には数条の退化凹線をもつ。外面は細かい刷毛目を施した後，胴部下半を篦磨き（一部繊維状の工具によるナデ）で調整している。内面は，頸部近くまで篦削り，口縁部を刷毛調整ののちナデで仕上げている。

一上層一壷形土器（68，69）口縁部が頸部から大きく外反するもの（68）とほぼ垂直に立ち上がる短かい頸部から鋭く外側に開くもの（69）とがある。両方とも，口縁端部は上下に拡張する。68は，端面に退化凹線をもつ。外面は，刷毛調整を行う。69は，外面を刷毛目ののち荒い篦磨きで調整している。

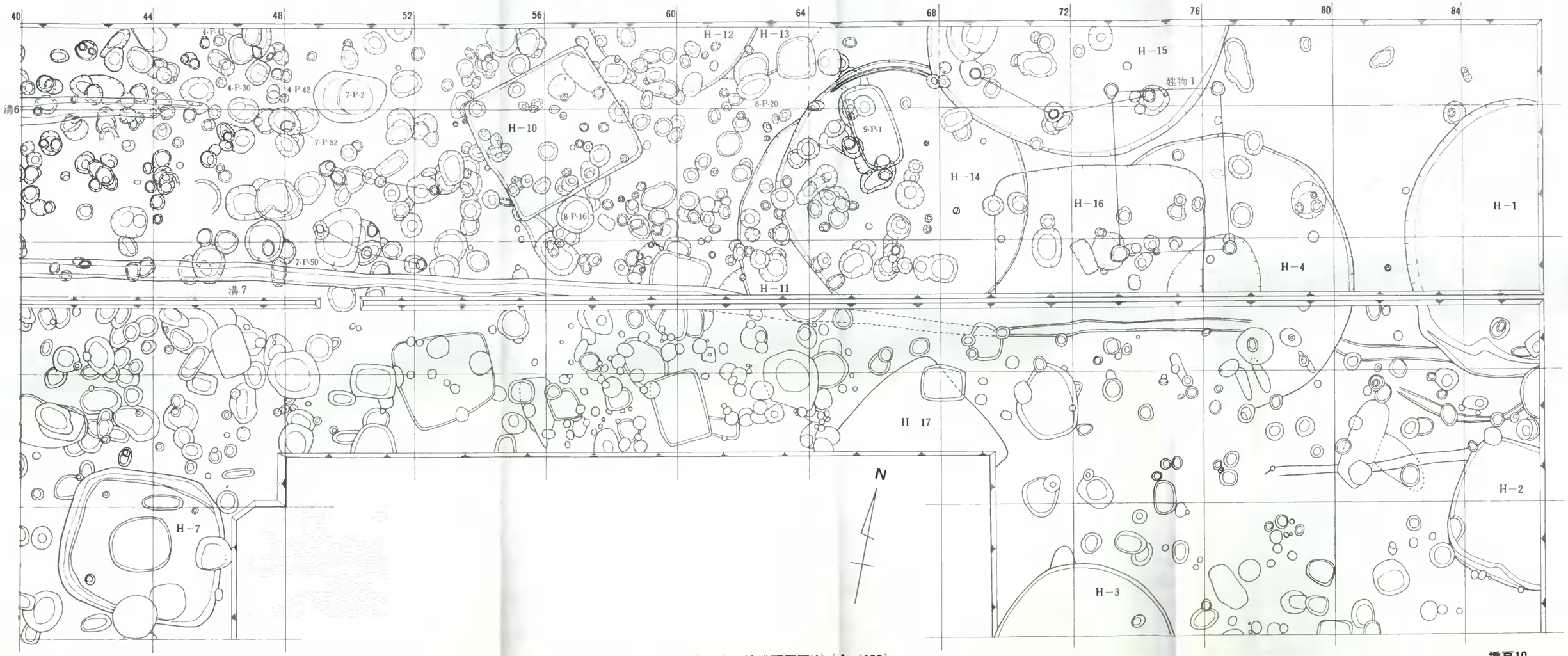
甕形土器（66，67）口縁部が肩部から「く」の字状に外反し，端部が垂直に立ち上がるもの（66）と端部が上下に少し拡張するもの（67）とがある。67は，外面を篦磨き，内面を篦削りで仕上げる。66は，外面を細かい刷毛目で調整ののち部分的にナデ，内面を篦削りで調整する。

鉢形土器（73，77）73は小型で，口縁部はゆるやかに外反し，胴部がやや張り気味で，安定した底部に移行する。77は大型で，口縁部が「く」の字状に屈曲し，端部はやや拡張を持つ。内外面とも丁寧な篦磨きを行う。

高杯形土器（70～72）は，口縁部が斜め上方に大きく外反し，口縁外面に暗文（註10）をもつもの（70，71）とあまり外反せず端部を多少肥厚させておさめるもの（72）とがある。72は，口縁部の特徴に加え，脚部がゆるやかに裾広がりに開き，70・71のように稜線をもち屈曲しない点など古い様相をもつ。三点とも完形で，脚部に４孔の透しをもち，内外面とも丁寧な篦磨きを施すが，全て調整の方向が異なる。また杯部と脚部の接合は，三点とも「差し込み法」を用いている。

小型土器（74，75，76）74は壷形土器，75・76は台付鉢形土器である。全て完形で，器壁の厚い手捏の土器である。

以上の土器は，上層と下層に型式的な差違は認められず，上東・鬼川市Ⅱ式とⅢ式の中間的な相様をもつ一括土器である。（中野）



第78図　東鬼川市　遺構配置図(1)（1／100）

挿頁10

第4節　東鬼川市調査区

当調査区は亀川調査区から田所調査区に続く東西幅約180ｍの，上東遺跡中最大の微高地上に位置し，その約半分にあたる90ｍ近くを占めている。

遺構は後世による削平が激しく，床土直下から多時期にわたる遺構・遺物が検出された。また，後述する住居址などはわずかに床面を残すものがほとんどであった。なお遺構の基盤となる層は0～68付近までは黄褐色の安定した泥砂層であるが，68から東にかけては遺構壁が崩れ易い暗灰色の砂層であり，黄褐色泥砂層はその下部に堆積していた。

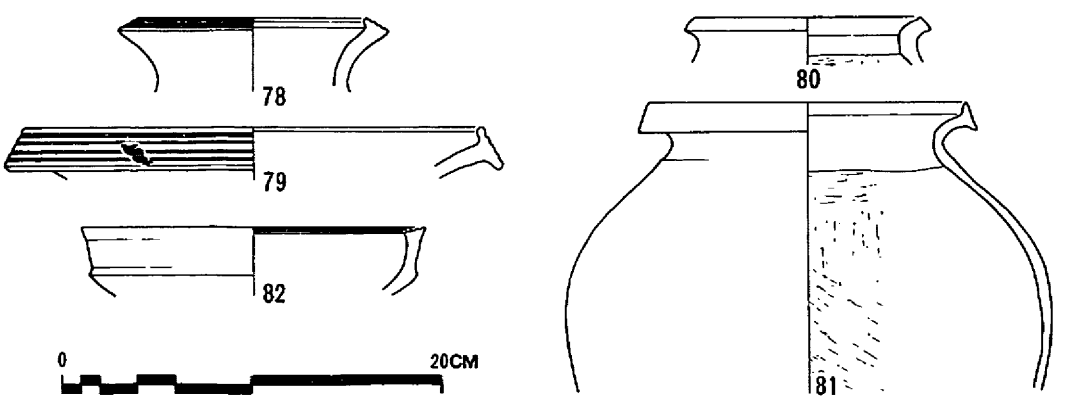
遺構は，弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての住居址（9軒）が調査区東側から集中して検出されており，調査区西側からは中世の住居址，建物址，柱穴状土壙などが検出されている。また当微高地最高所にあたる調査区中央部分からは，南北に走る弥生時代後期の溝2本を検出しており，これらの溝から東，住居址群から西にかけては，弥生時代後期前半を中心とする数百に及ぶ大小様々な柱穴状土壙，井戸状土壙，性格不明の不整円形土壙など，一大土壙群を検出している。

以下，代表的な遺構・遺物の概略を記す。

1）　H－1

＜**遺構**＞調査区東端に位置し，前回調査で確認された住居址の西側半分を検出した。住居址の東部分は，県道が縦断しているため調査は不可能であった。推定径約800㎝の円形プランを呈し，現存壁高15㎝を測るが，覆土（灰褐色砂泥）を掘り下げたところ，基盤層（暗灰色砂）からの出水のため，柱穴及び内部施設不明のまま調査を中止した。

＜**遺物**＞　壷形土器（78）は外反ぎみに立ち上がる口縁部をもち，端部は内傾して上部に少し拡張する。口縁端面には三条の退化凹線をもつ。甕形土器は「く」の字状にゆるく外反する口縁部をもつ小型のもの（80）と，端面が内傾して上下に拡張する大型のもの（81）がある。高杯形土器（82）は



第79図　東鬼川市　H－1出土遺物

ほぼ垂直に立ち上がる口縁部をもち，端部はわずかに肥厚させ端面には三条の退化凹線をもつ。79は器台形土器の口縁部と思われる。

いずれも前回調査出土のものと同様，上東・鬼川市Ⅰ式の特徴をもつものである。

2）　H－4

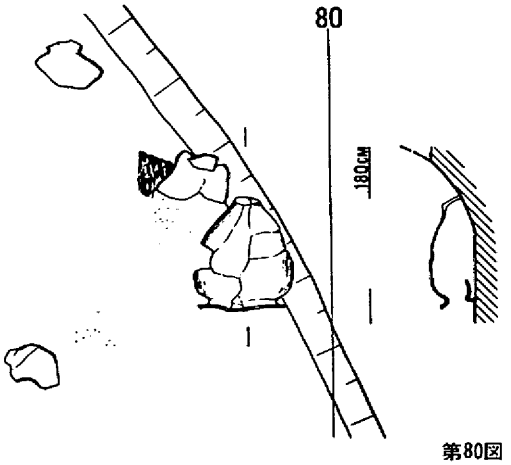
＜遺構＞　H－16に一部切られて検出されたもので，前回調査でも一部報告されているものである。推定径約850㎝の円形を呈し，床面のみを残していた。床面には炭化木及び炭が散在しており，火災に会った可能性が強い。柱穴は全く確認できなかったが，住居址中央から直径約300㎝，深さ約50㎝，の擂鉢状に落ち込む土壙を検出しており，土壙内には炭を多分に含む暗灰色の泥砂が堆積していた。

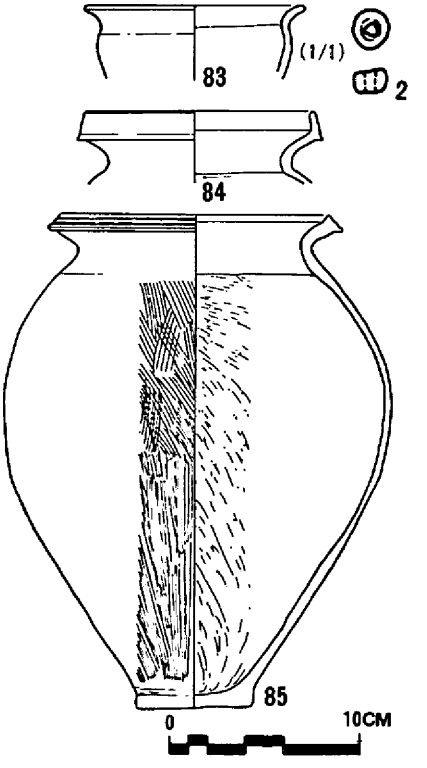
＜遺物＞　83～85は住居址東隅から，床面に押し潰された状態で検出されたもので，ガラス小玉（2）は覆土中から出土したものである。85の甕形土器は「く」の字状に外反する口縁部をもち，端部は内傾して肥厚させている。口縁端面には三条の退化凹線が施されている。最大径は胴中央よりやや上部に位置し，肩は張りがない。胴下半は斜め下方に，ほぼ直線的にすぼまり，底部は突出させている。胴部外面は刷毛調整，内面は篦削りされている。ガラス小玉（2）は径約0.5㎝，孔の径0.11㎝，長さ約0.3㎝を測り，淡青色を呈す。前回出土土器と比較検討した結果，この住居址は上東・鬼川市Ⅰ～Ⅱ併行期のものと考えられる。

3）　H－12，13

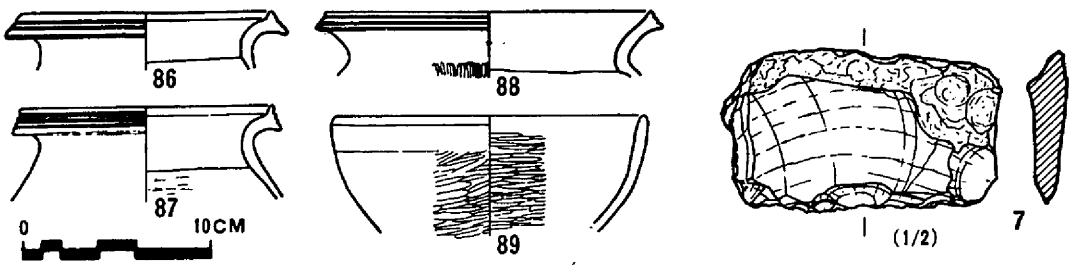
H－15の西に位置し，住居址の南側一部分を検出している。いずれも床面のみを残すものであるが，柱穴は確認できなかった。H－12は推定径600㎝前後の円形プランを呈すものと思われる。

遺物は床面直上から出土したものであるが，H－12，





第80図　東鬼川市　H－4遺構図（1/20）及び出土遺物



第81図　東鬼川市　H－12·13出土遺物

13のいずれに属するものかは不明である。甕形土器（86～88）は外反する口縁部をもち，端部は肥厚し，内傾する端面をもつ。端面には二～三条の退化凹線が施されている。鉢形土器89はボウル状を呈し，口縁端部は丸くおさめられている。口縁部内外面は横ナデ，以下横方向の雑な篦磨きで調整している。打製石庖丁（7）はH—13から出土したものである。A面上部に風化面を残し，下端部に刃をつけており，摩滅痕が顕著である。左右両端の抉りはわずかに認められる程度である。材質はサヌカイトである。

以上の出土遺物からH—12は上東・鬼川市Ⅱの時期と思われ，H—12に切られているH—13は，石庖丁の出土から鬼川市Ⅰの時期まで遡るかもしれない。

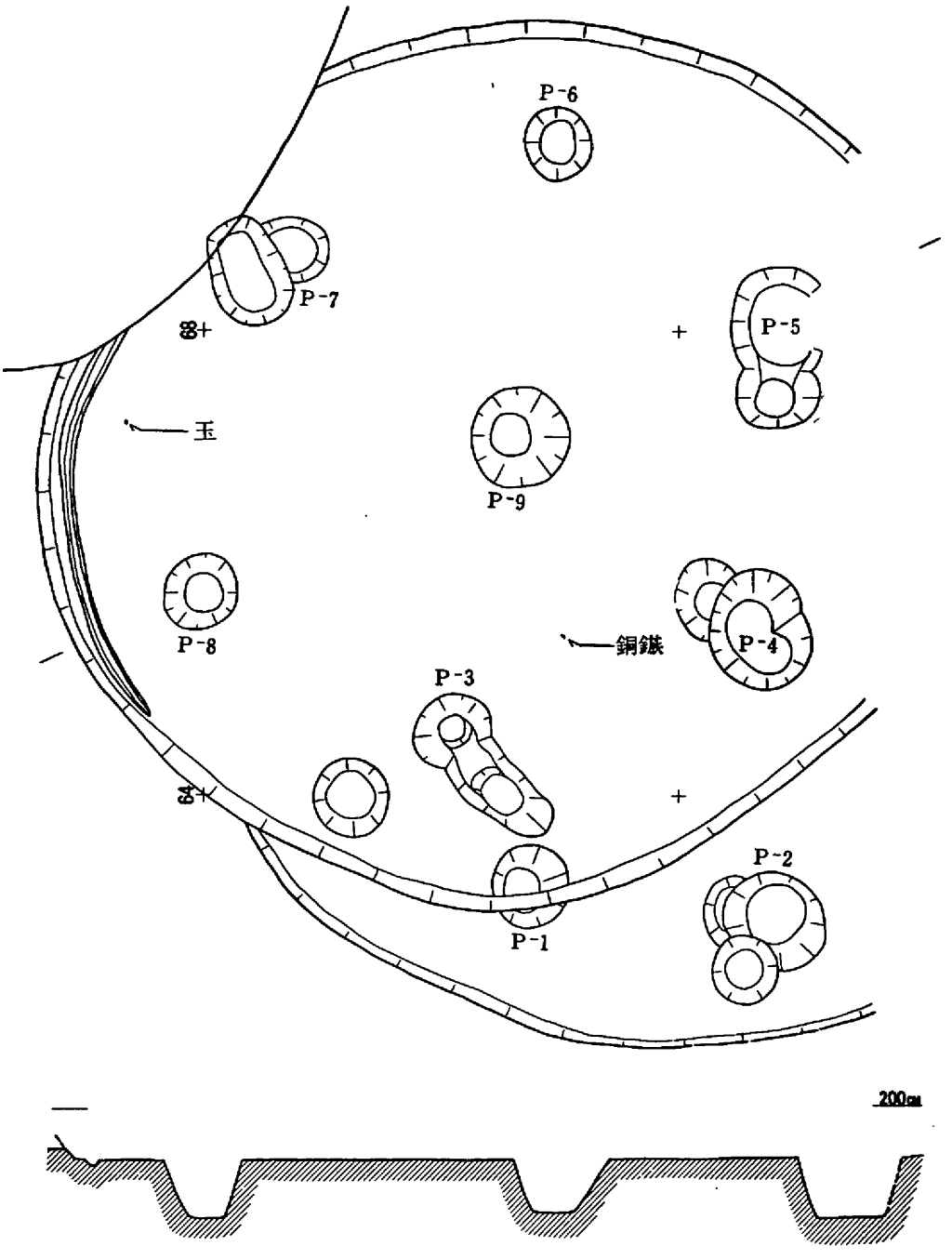
4）　H—11

H—14に切られており，住居址の西側一部分を残すものである。平面プランは他の住居址同様，径800㎝前後の円形プランを呈するものと思われる。残存する壁高は約10㎝を測る。柱穴は2本（P—1，2）を検出したが，他は不明である。覆土は暗灰色の泥砂層で，遺物はほとんど含んでいない。

遺物はいずれも柱穴から出土したものである。壺形土器（90）は若干古い様相を呈しているが，高杯形土器（91），鉢形土器（92）などの形態特徴から，上東・鬼川市Ⅰ併行期のものと考えられる。また，これらの土器に伴って分銅形土製品（3）が出土している。縦5.5㎝，横5.0㎝，厚さ1.3㎝の破片で，上下の区別はつかない。わずかに表面は凸状を，裏面は凹状を呈す。表面には3本の櫛状工具による雑な簾状文が，くびれ部から下方に二条，縁辺部に右→左方向に一条施されている。黄褐色を呈し，砂粒を多く含む。

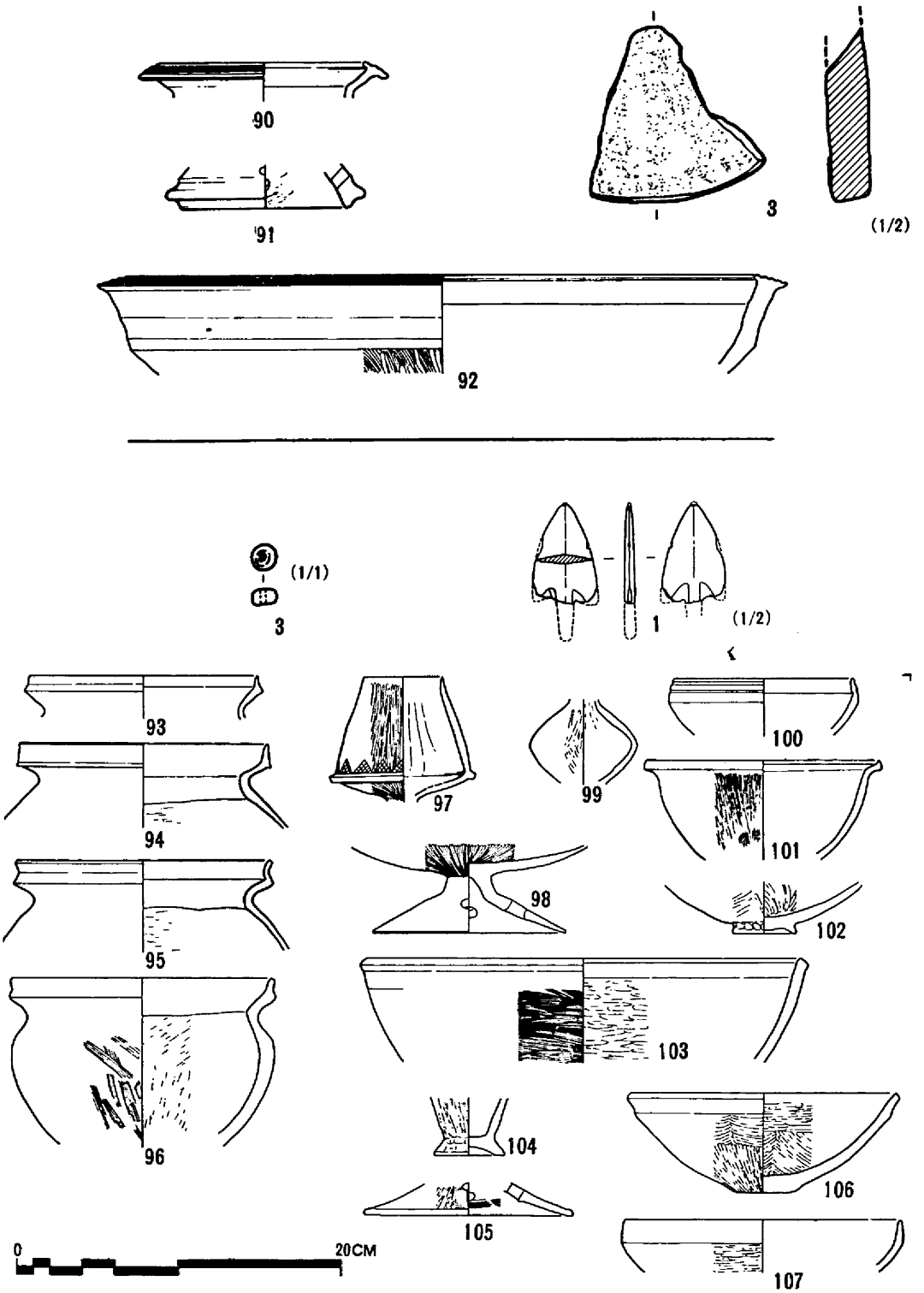
5）　H—14

H—15及び16に一部切られているが，ほぼ全容をとらえることのできた住居址である。平面プランは長径800㎝，短径750㎝の楕円形を呈し，現存壁高は10㎝を残す。柱穴は壁から内側約100㎝のところに6個（P—3～8）検出された。柱穴間の距離は住居址北側のP—7，8間のみ300㎝を測り，他は250㎝を測る。柱穴の深さは50～55㎝を測る。また住居址中央からは直径約80㎝，深さ約50㎝の土壙を検出した。土壙内には炭混じりの暗灰色混砂が堆積していた。



第82図　東鬼川市　H－11·14遺構平・断面図（1/60）

遺物は覆土（暗灰色砂）中から93～103，P－4から104，105，P－9から106，107が出土しており，ガラス小玉（3），銅鏃（1）はいずれも床面直上から出土している。甕形土器（93～96）はいずれも口縁端部が上方に拡張するもので，拡張面は横ナデ調整されている。高杯形土器105は低く



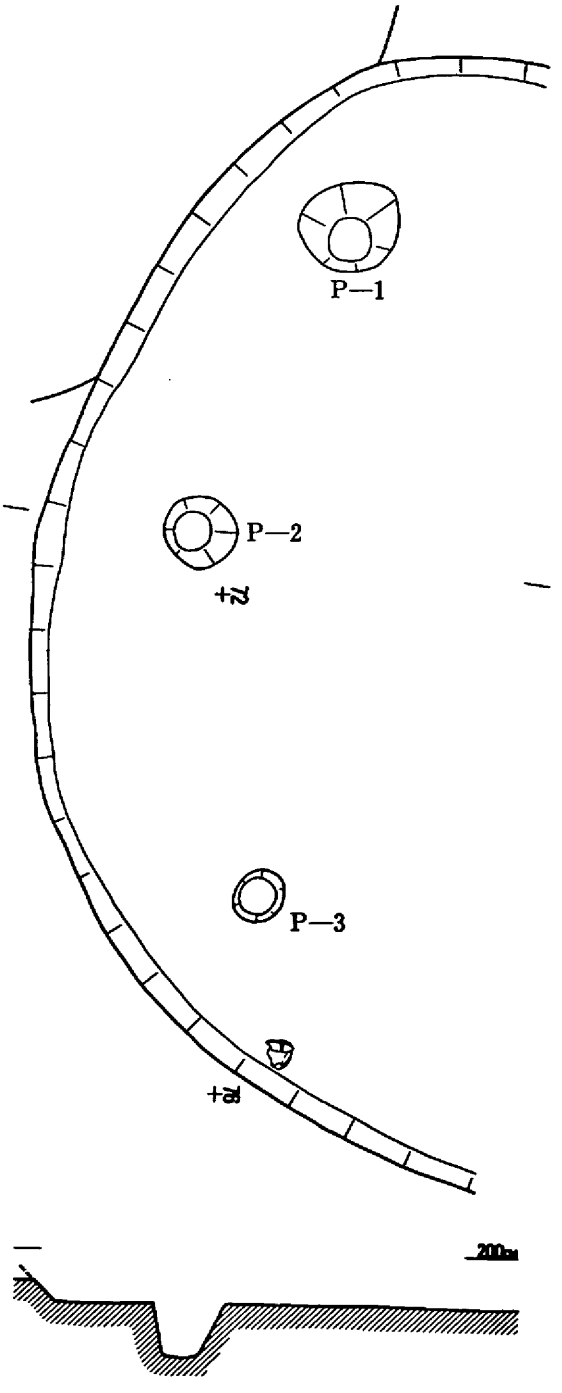
第83図　東鬼川市　H－11・14出土遺物

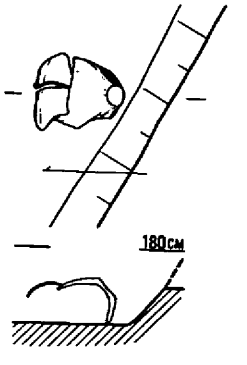
「ハ」の字状に広がる裾部をもち，端部はわずかに肥厚し，丸くおさめられている。98は新しい様相をもつもので，まぎれ込みの可能性が強い。鉢形土器は大型のもの（103）と，小型のもの（100～102，106，107）がある。106は内外面の調整に古い様相を残している。ガラス小玉（3）は径0.38㎝，孔の径0.08㎝，長さ0.24㎝を測り，淡青色を呈す。銅鏃（1）は茎部を欠損するが有茎式のもので，現存長3.1㎝，最大幅2㎝，最大厚0.3㎝を測る。基部中央に稜線をもち，断面菱形を呈すもので，両側を薄く仕上げている。

以上，出土遺物からこの住居址は上東・鬼川市Ⅱの時期のものと思われる。

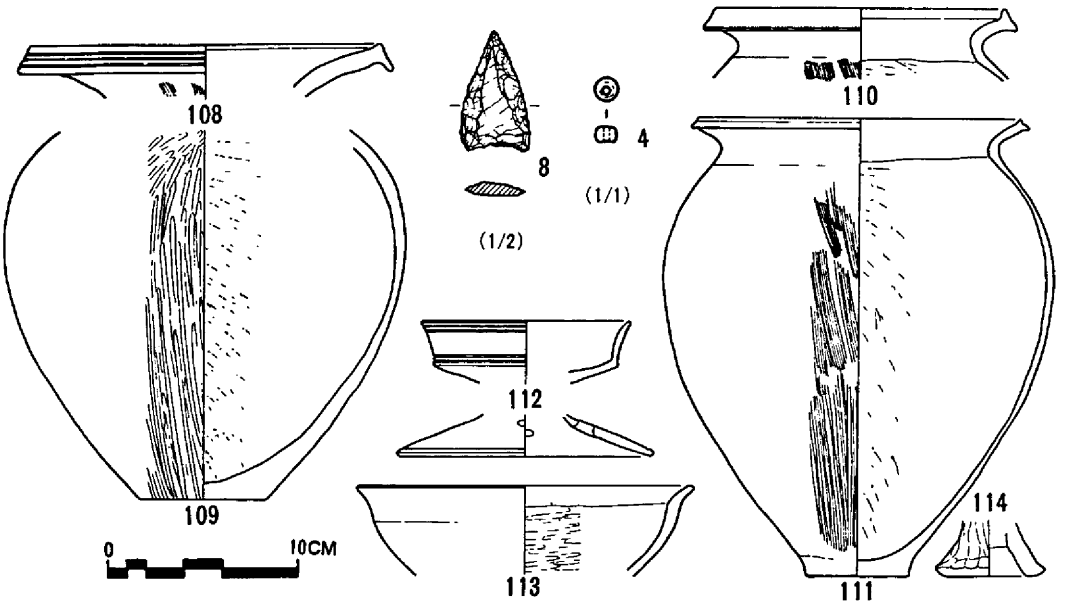
6）　H－15

＜遺構＞　H－14の北東に位置し，住居址の南側約半分を検出した。北側は用地外に延びている。平面プランは，径約900㎝の円形を呈すものと思われる。現存壁高は15㎝を残す。柱穴は3個検出しており，径40～70㎝，深さ40㎝を測り，柱穴内には暗褐色砂泥が堆積していた。各々柱穴間の距離は250㎝及び300㎝を測り，住居址全体では6～7個の柱





第84図　東鬼川市　H－15遺構平・断面図（1/60・1/20）



第85図　東鬼川市　H－15出土遺物

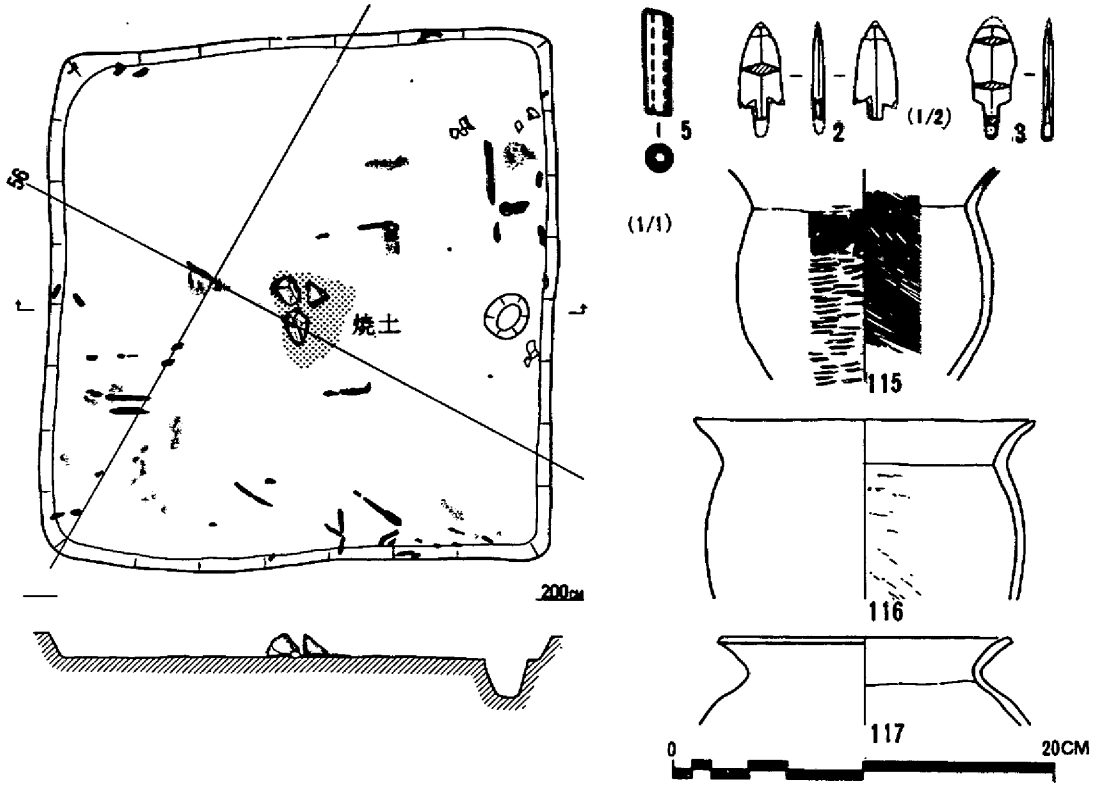
穴が想定される。住居址南東隅からは前記のH－4と同様，床面に密着した状態で土器及びガラス小玉が出土している。

＜遺物＞　108の壷形土器は朝顔状に開く口縁部をもち，端部は内傾して斜め下方に拡張されている。端面には三条の退化凹線が施されている。口縁部内面は横方向の篦磨き，外面は刷毛調整が成されている。甕形土器（110，111）は口縁部が「く」の字状に外反し，端部が肥厚するものである。端面はわずかに凹む。111は胴上半部に最大径をもち，ゆるやかなカーブを描きながらすぼまり，底部は突出している。胴部外面は刷毛で，内面は篦削りで調整されている。高杯形土器（112）は斜め上方に立ち上がる口縁部をもち，上下端部には二条づつ，計四条の沈線が施されている。脚裾部は低く「ハ」の字状に広がり，端部は丸くおさめられている。また，端部上面には一条の沈線が施されている。精製粘土を使用している。この他に小型の鉢形土器（113），製塩土器（114）なども出土している。石鏃（8）は覆土から出土したもので，長さ3㎝，最大幅1.9㎝，最大厚0.35㎝を測り，重量は2.0ｇの凹基無茎式のものである。材質はサヌカイトである。ガラス小玉（4）は径0.3㎝，孔の径0.08㎝，長さ0.2㎝を測り，淡青色を呈す。

以上の出土遺物から，この住居址は上東・鬼川市Ⅱの時期のものと考えられる。

7）　H－10

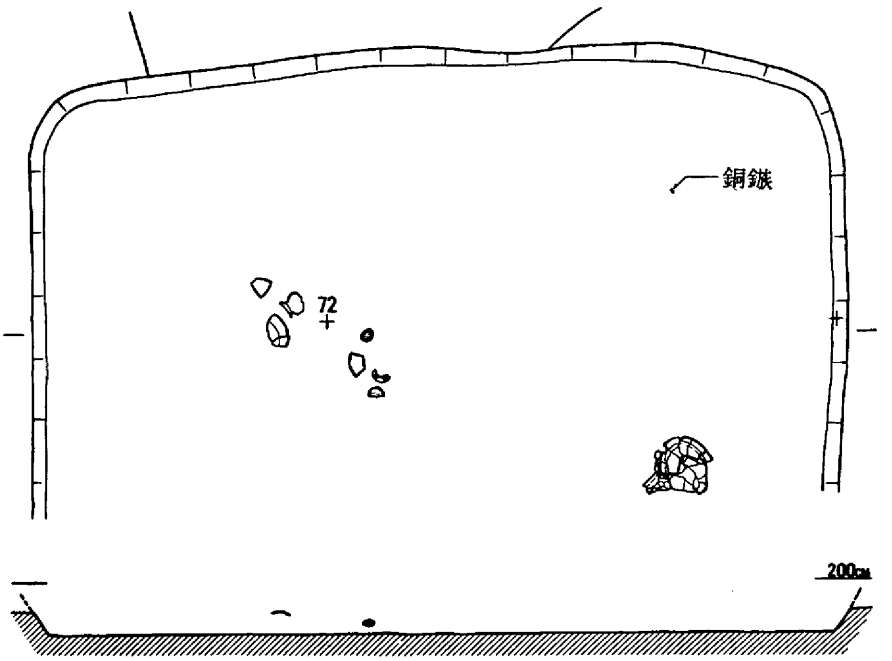
＜遺構＞　H－12の南西に位置し，平面プランは長辺420㎝，短辺400㎝の方形を呈す。現存壁高は20㎝を残す。住居址中央からは径25㎝前後の焼けた礫が3個検出され，そのまわりには80×60㎝，厚さ3㎝の焼土が広がっていた。炉としての機能を果したものと思われる。住居址内には直径3㎝前

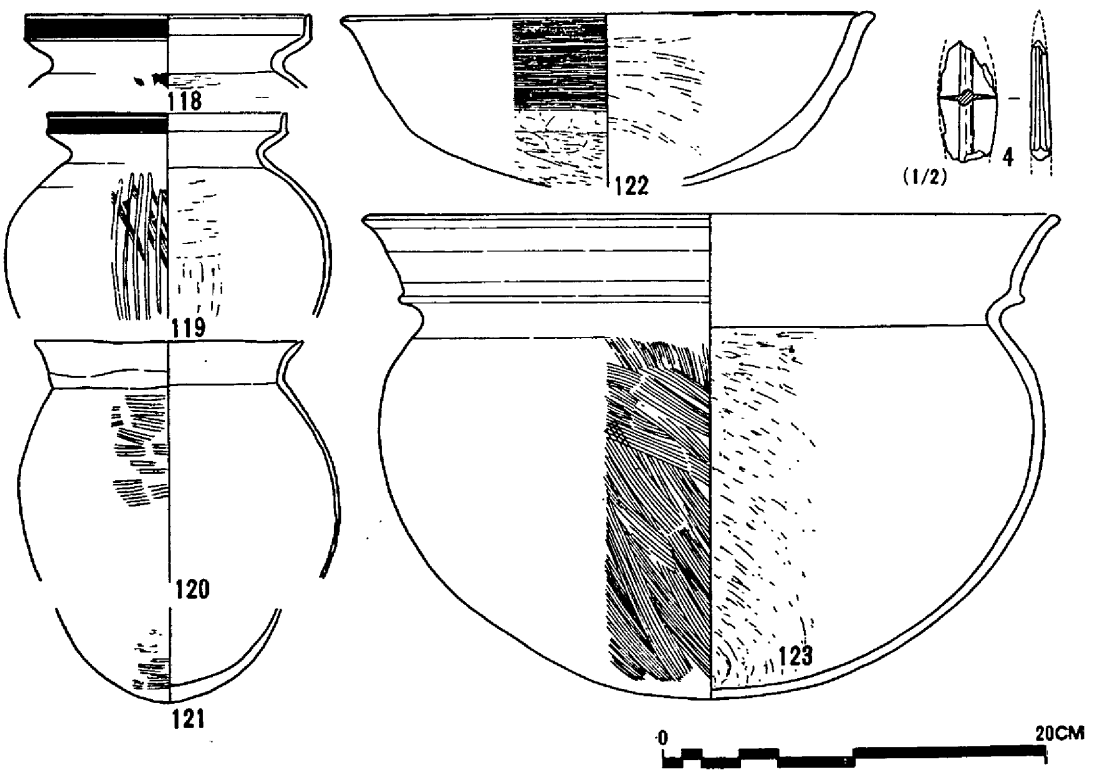


第86図　東鬼川市　H－10遺構図(1/60)及び出土遺物

後，長さ２～50㎝の炭化木（註12）及び炭が散在しており，火災に会った可能性が強いが，主柱と成り得るほどの木材は確認されなかった。また住居址床面からは土器片及び銅鏃２本，管玉１個が出土している。床面は住居址中央を中心に，基盤層である黄褐色の泥砂層をしっかりと踏みかためられているが，住居址の隅にむかうに従い，やわらかくなっている。柱穴は２ないし４個を予想し調査を進めたが，わずかに住居址南辺中央から直径約30㎝，深さ約30㎝の柱穴状を呈す土壙１を検出したのみである。なお第78図の当住居址内検出の土壙は，全て弥生時代後期前半のものである。

＜遺物＞　甕形土器（115～117）はいずれも「く」の字状に外反する口縁部をもつものであるが，116の口縁端部は薄くなっているのに対し，117のそれはほとんど厚みに変化はない。115の胴部外面は横方向の荒い叩き目が残り，上半部は叩き成形ののち，縦方向の細かい刷毛調整がされている。内面は外面と同様の工具と思われるもので刷毛調整されている。116，117は器面全体が磨滅しているが叩き成形された可能性が強く，内面は篦削りされている。銅鏃（２）は上下端部を欠損している。現存長2.5㎝，最大幅1.15㎝，厚さ0.35㎝を測る。有茎式のもので基部中央には稜線をもち，断面菱形を呈す。銅鏃（３）は上端部を欠損している。現存長2.9㎝（推定3.3㎝），最大幅1.8㎝，厚さ0.25㎝を測る。有茎式のもので基部中央には稜線をもち，断面菱形を呈すものである。管玉（５）は直径約0.35㎝，孔の径約0.18㎝，長さ約1.4㎝を測る。灰褐色を呈しており，獣骨で作られたものと思わ





第87図　東鬼川市　H－16遺構図（1/60）及び出土遺物

れる。

以上，時期を確定できるほど出土土器の量は多くないが，亀川上層期くらいに考えている。

8）　H－16

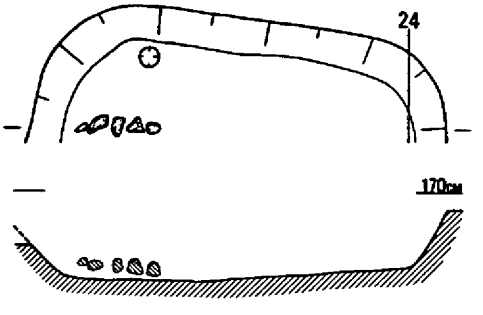
＜遺構＞　H－4及びH－14を切って存在するもので，住居址南側は用地外に延びている。平面プランは一辺600㎝前後の方形を呈すものと思われるが，柱穴及び内部施設は確認できなかった。しかし床面には遺物が散在しており，特に住居址南東部からは甕形土器（120）及び鉢形土器（123）が押し潰された状態で出土している。また住居址北東からは銅鏃（4）が出土している。

＜遺物＞　118，119の甕形土器は口縁端部に拡張面をもつもので，拡張面には櫛描平行沈線文が施されている。119の胴部は球形を呈しており，丸底になるものと思われる。外面は刷毛調整の後，暗文風の篦磨きが成されており，内面は篦削りされている。120は「く」の字状に外反する口縁をもつもので，胴部は前記のものほど張りがなく，作りも全体に不均整である。胴上半部には横方向の荒い叩き目が残る。胴下半部の調整は明確ではないが，上半部と同様，叩き成形された可能性が強い。内面は特に調整痕が認められないものの，器壁は非常に薄い。鉢形土器122はボウル状を呈し，口縁端部は斜め外方につまみ出されている。外面上半は整然とした横方向の刷毛調整が成されており，下半は篦削りされている。内面は丁寧な篦削りののち，丹が塗られている。123は二重口縁を呈しているが川入遺跡出土のもの（註13）に比べシャープさはない。胴部は球形を呈し，丸底をなす。胴部外面は刷毛調整，内面は篦削りされている。銅鏃（4）は上下端部を欠損している。現存長3.2㎝，最大幅1.5㎝を測り，基部中央には幅0.3㎝，厚さ0.4㎝の背（むね）を鋳だしており，左右両側の非常に薄く仕上げている。

以上，出土土器からこの住居址は亀川上層期と考えられる。

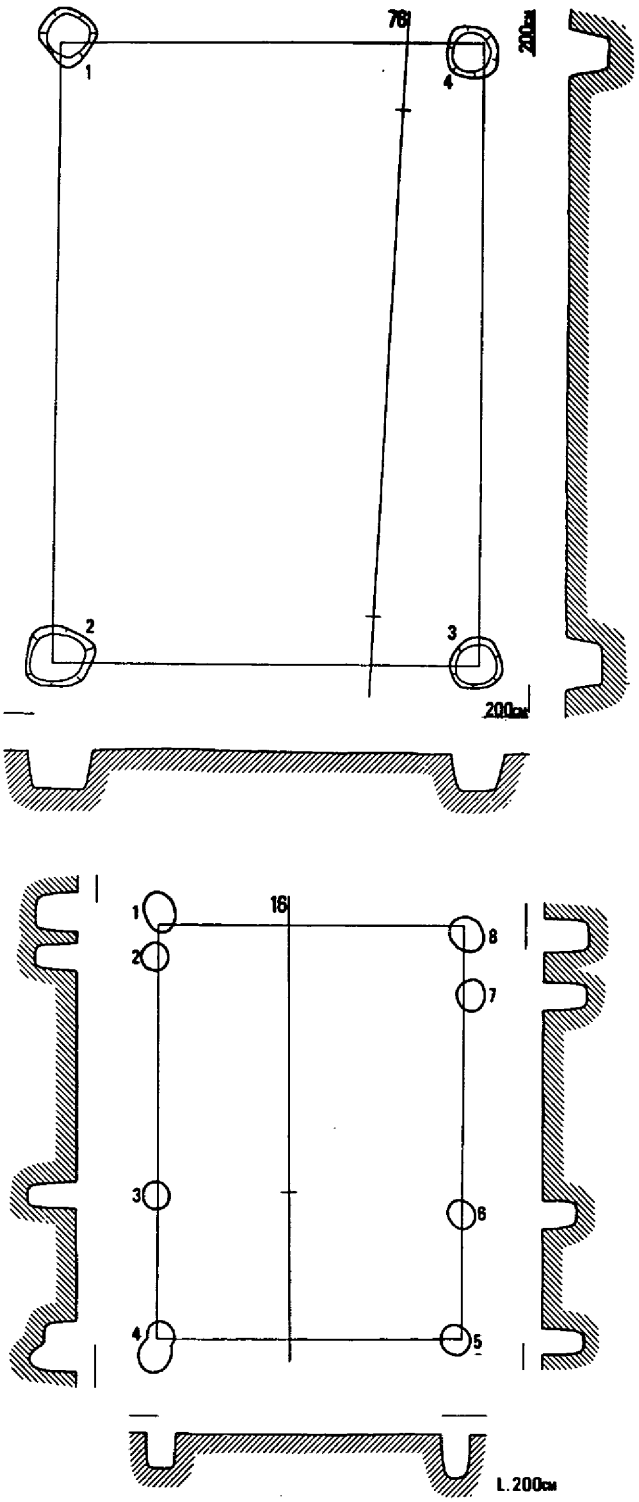
9）　H－9

調査区西寄りに位置する。前回調査において約$\frac{2}{3}$ほど検出されていたもので，今回調査によって全体が明らかになった。平面プランは長辺400㎝，短辺300㎝の隅丸不整方形を呈す。覆土は淡黄灰色砂泥で，土師器，土師質椀などが出土している。現存壁高は40㎝を残すが，壁面は傾斜しながら床面に達する。住居址西側には径8～15㎝前後の礫5個が床面にそって並べられていた。そのうち砥石を再利用したものが含まれるが，石列の機能は不明である。また住居址北西部からは径15㎝，深さ20㎝の柱穴状土壙を検出している。



第88図　東鬼川市　H－9遺構
平・断面図（1/60）

以上，出土遺物は僅少であるが，前回調査との比較検討の結果，当遺構は鎌倉時代における調理



場のようなものと考えている。

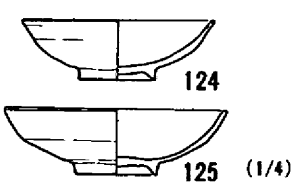
10)　建物Ⅱ

調査区東寄りに検出されたものである。柱穴は4個検出され，いずれも径約40㎝，深さ約30㎝を測る。柱穴内はいずれも黒灰色泥などが堆積していた。梁行柱間490㎝，桁行柱間340㎝を測る。遺物は土師質椀片が出土しており，下記の建物1とほぼ同時期のものと思われる。

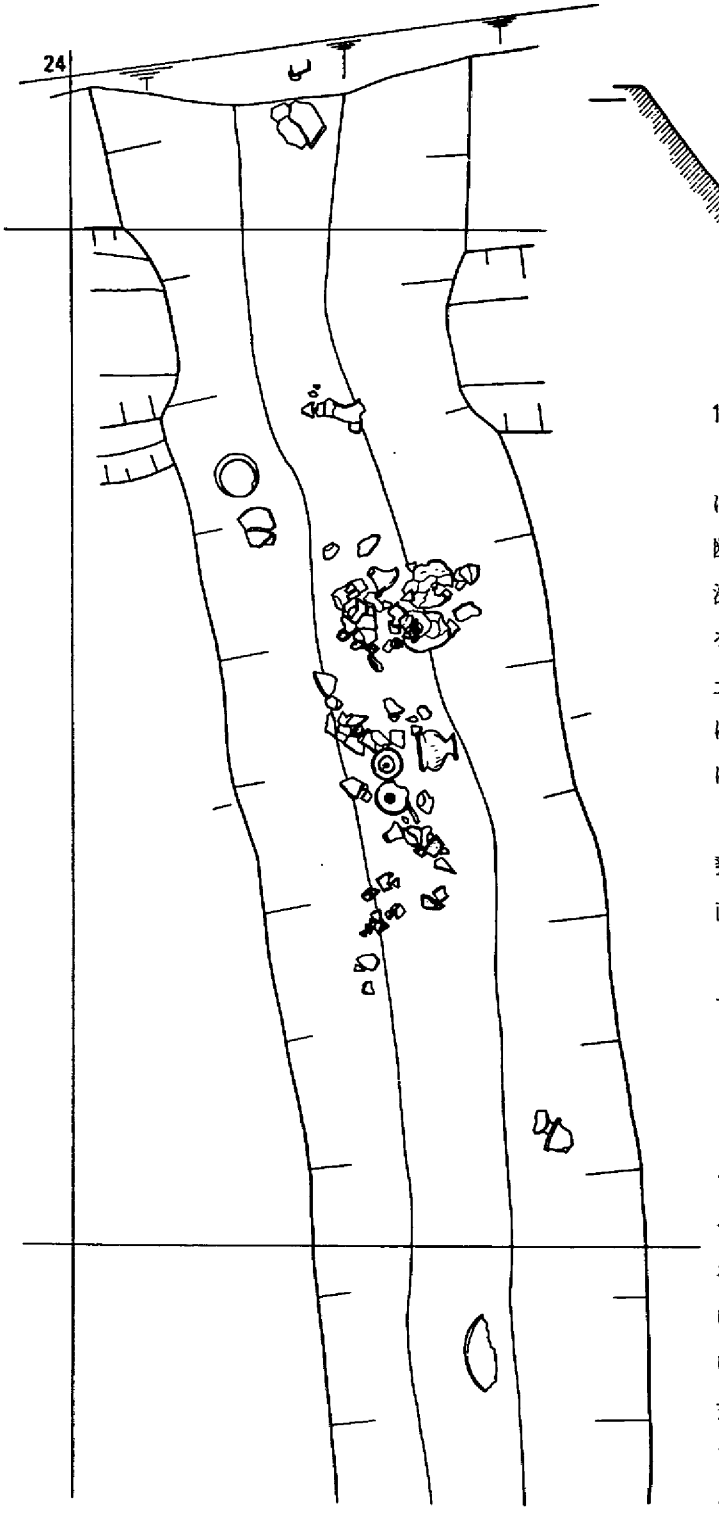
11)　建物Ⅰ

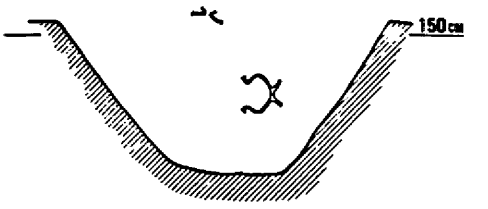
調査区西寄りに存在し，柱穴が8個検出された。柱穴はそれぞれ20～30㎝，深さ25～35㎝を測り，柱穴内にはいずれも黄灰色砂泥が堆積していた。遺物はP－7から土師質椀（124，125）が出土している。遺物はいずれも断面三角形を呈す簡単な高台を貼り付けているもので，乳白色を呈す。

以上，出土遺物からこの建物は鎌倉時代のものと思われるが，川入遺跡大道西Ⅰ調査区P－9出土の椀より少し小ぶりで，高台にいくぶん退化がみられるなど，鎌倉時代でも中頃以降の可能性もある。　（江見）



第89図　東鬼川市　建物Ⅰ・Ⅱ遺構図（1/60）及び建物Ⅱ出土遺物





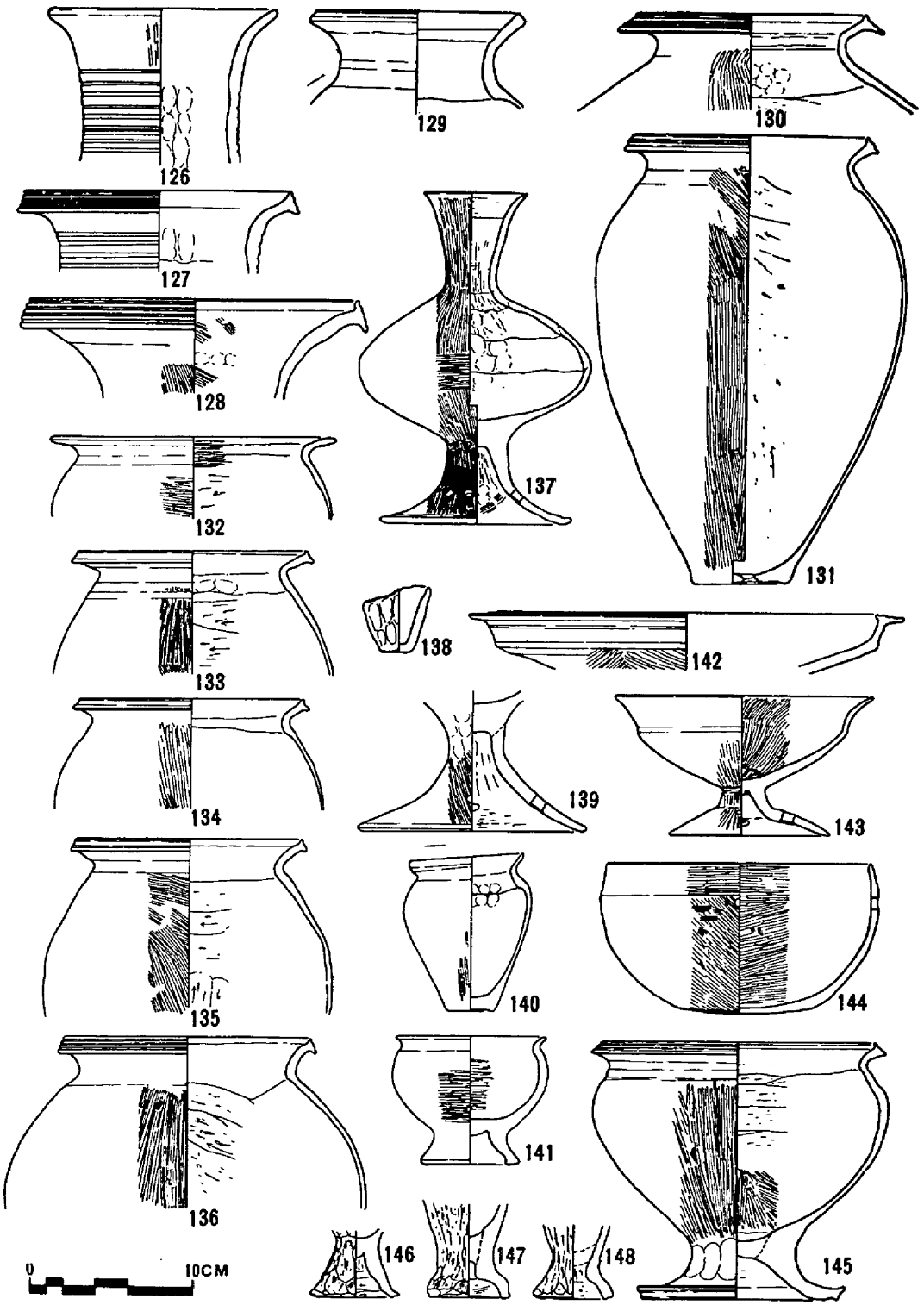
第90図　東鬼川市　溝３遺構平・断面図（1/30）

12)　溝　3

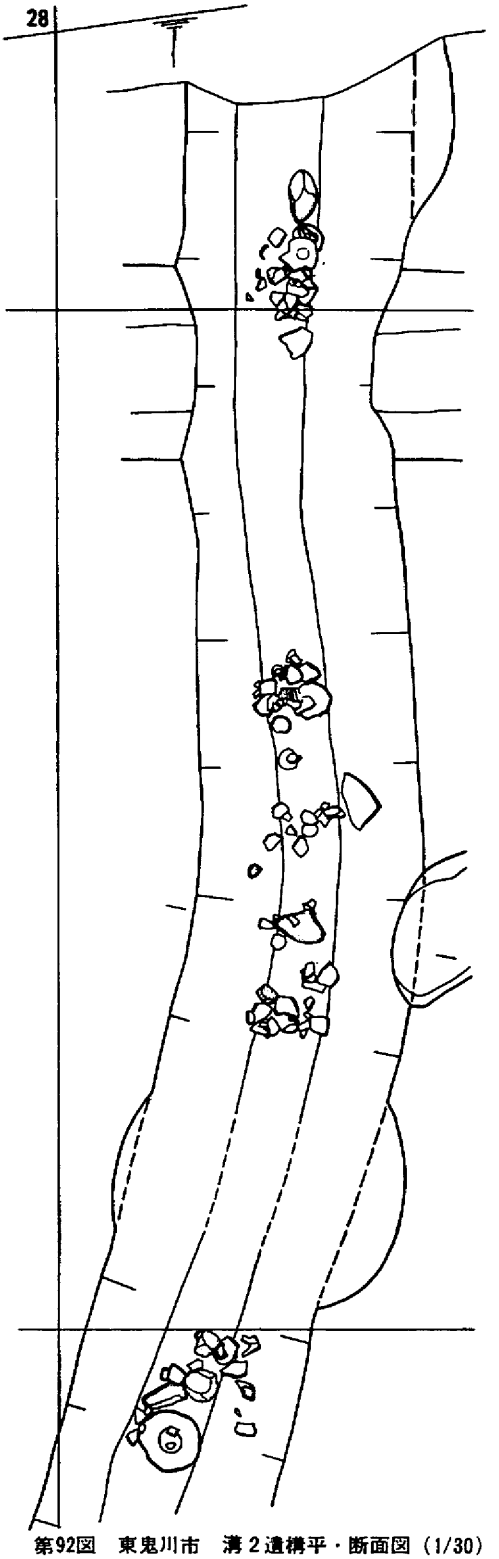
＜遺構＞　前回調査に引き続きほぼ南北方向に検出されたこの溝は，断面「U」字形を呈し幅約 130 ㎝，深さ約60㎝を測る。遺物は完形土器を含み，ほぼ中央部にかたまって出土している。出土土器のほとんどは，底から少し浮いたところから上に検出された。

＜遺物＞　壺形土器(126～130)，甕形土器（131，133～136），脚付直口壺形土器（137），高杯形土器（142，143），鉢形土器（144），台付甕形土器（145），製塩土器（146～148）などがある。

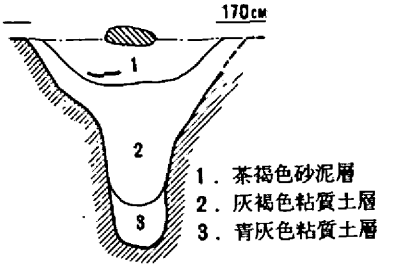
全体的に整形手法や形態から上東・鬼川市Ⅱ式に比定できるが，中で130の壺形土器と142の高杯形土器については他のものと比べて古い様相を残し，また143の高杯形土器については深い杯部や短い脚柱部が新しい様相を呈している。130，142は型式的には上東・鬼川市Ⅰ式であり，143は才の町Ⅰ式に比定できる。143については，まぎれ込みの可能性がある。



第91図　東鬼川市　溝３出土遺物



第92図　東鬼川市　溝２遺構平・断面図（1/30）



13）　溝　2

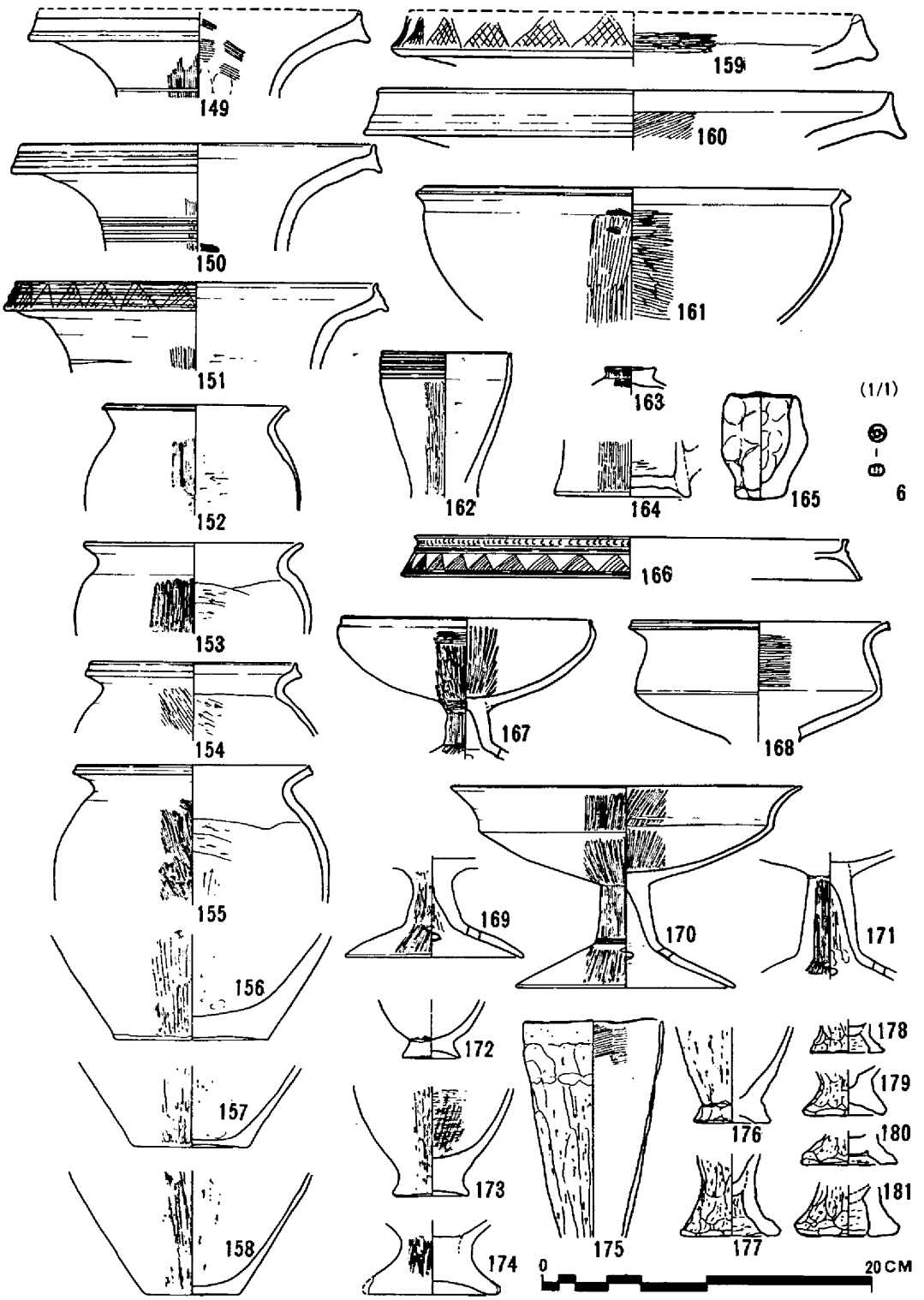
＜遺構＞　この溝は溝３のすぐ東側に位置し，前回調査に引き続きほぼ南北に少し蛇行して検出された，上幅約90cm，底幅約20cm，深さ約80cmの「Ｖ」字に近い溝である。遺物はおもに第１層中に含まれるが，全体的に量は多くない。

＜遺物＞　長頸壺形土器（149～151，156），甕形土器（152～155，157，158），器台形土器（159～160），鉢形土器（161），高杯形土器（166～171），小型台付鉢形土器（172～174），ジョッキ形土器（164），製塩土器（175～181），ガラス小玉（６）などがある。

長頸壺形土器はいずれもラッパ状に開く口縁部をもち，端部が内傾して上下に少し拡張をもつもので，端面には退化凹線が二～五条みられ，鋸歯文をもつもの（151）もある。

甕形土器は，ほとんどが「く」の字状に外反する口縁部をもち端部は少し内傾して肥厚させている。いずれも外面は刷毛調整されている。

166は中央部で円形に少し落ち込む杯部をもつもので，口縁端面を半截竹管文や鋸歯文で飾るものが多い。普通の高杯と区別するために装飾高杯と呼びたい。他に高杯形土器は杯部が少し内彎しながら立ち上がり，口縁部にいたるもの（167），断面が「Ｓ」字状を呈し，口縁端部に小さな肥厚をもつもの（168），一般的な二重口縁を示すもの（170）が



第93図　東鬼川市　溝２出土遺物

ある。いずれも面の調整は篦磨きが多い。

ガラス小玉は溝のほぼ中央の第１層中から出土したもので，径2.7㎜，厚さ２㎜を測る。

以上，高杯形土器に杯部の深化，脚柱部の短化などの新しい傾向が少し見られるが，他の器種については，たとえば，口縁端部の上部拡張化がみられないなどの，いわゆる上東・鬼川市Ⅱ式の様相を呈している。しかしながら，前回調査で検出された付け変え用水トレンチの土器だまりは，明らかに上東・鬼川市Ⅰ式に比定されるもので，溝２の遺構そのものはⅠの時期に掘られ，Ⅱの時期にはほとんど埋ってしまって，溝としての機能を失ってしまったと想定される。

14)　溝　5

H－９の西側に接して，ほぼ南北方向に検出された幅50～80㎝，深さ５～10㎝の浅い溝である。埋土は灰褐色の粘質土で，遺物は細片しか含まない。細片はおもに白っぽい土師質の椀形土器片と思われ，建物Ⅱとほぼ同時期が与えられ，位置的にも建物Ⅱに関連溝である可能性が強い。

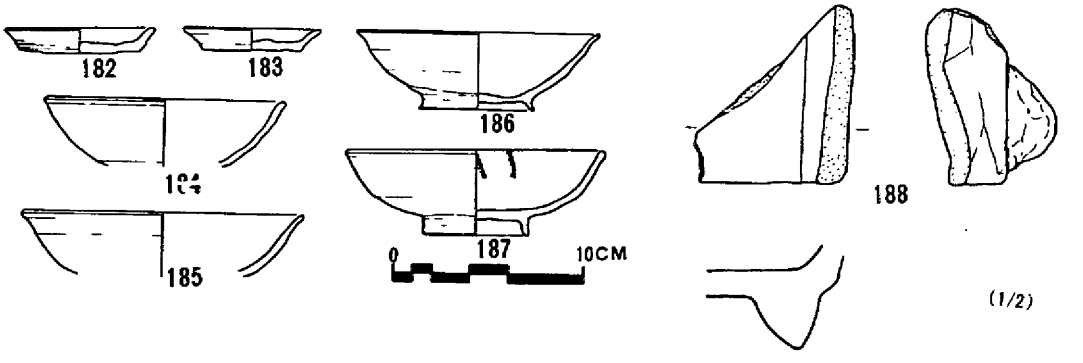
15)　溝　6

調査区の北寄りに，ほぼ東西方向に検出された幅約80㎝，深さ約50㎝を測る溝である。埋土は灰褐色の粘質土で，32ラインのあたりにかたまって皿形土器（182，183），椀形土器（184～187）が出土している。土器はいずれも白っぽい土師質のもので，川入遺跡大道西ＩＰ－９出土のものと比べて少し小ぶりである。Ｐ－９のものよりやや後出的で，建物Ⅱとほぼ同時期と考えられる。

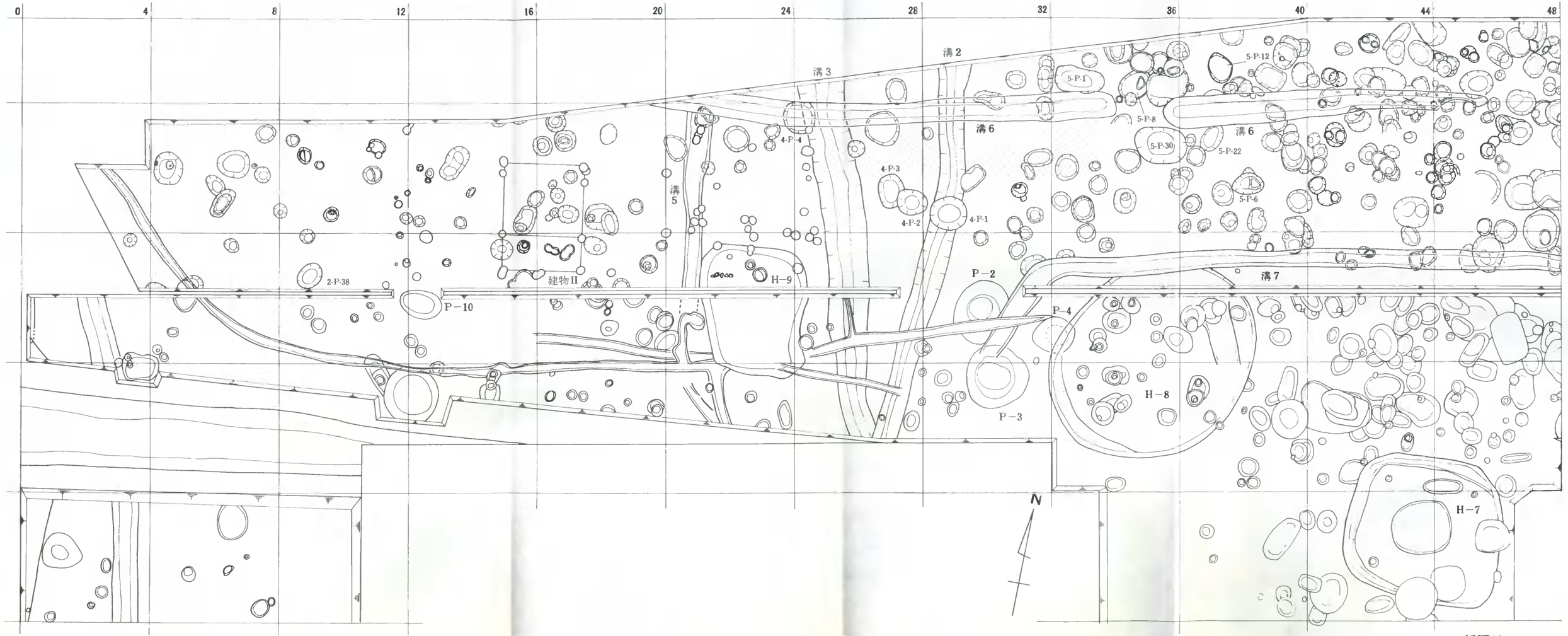
16)　溝　7

溝６とほぼ平行し，東西方向に検出された。前回調査区で検出されている溝とつながり，幅約60㎝，深さ約50㎝を測る。遺物は188をはじめ須恵器片を含み，溝６出土の土師質の椀などの鎌倉時代のものは出土していない。188の風字硯は須恵器製で，右隅部の破片である。上縁部は0.5～１㎝近く欠損し，底部には，断面2.8×1.8㎝の楕円形で先端が丸くすぼまる高さ約1.3㎝の突起状の脚を有す。

以上，出土遺物からは溝の時期は奈良時代と思われるが，溝６との位置関係などを考えれば鎌倉時代まで降る可能性もある。　（柳瀬）



第94図　東鬼川市　溝６・７出土遺物



第95図　東鬼川市　遺構配置図(2)（1／100）

挿頁11

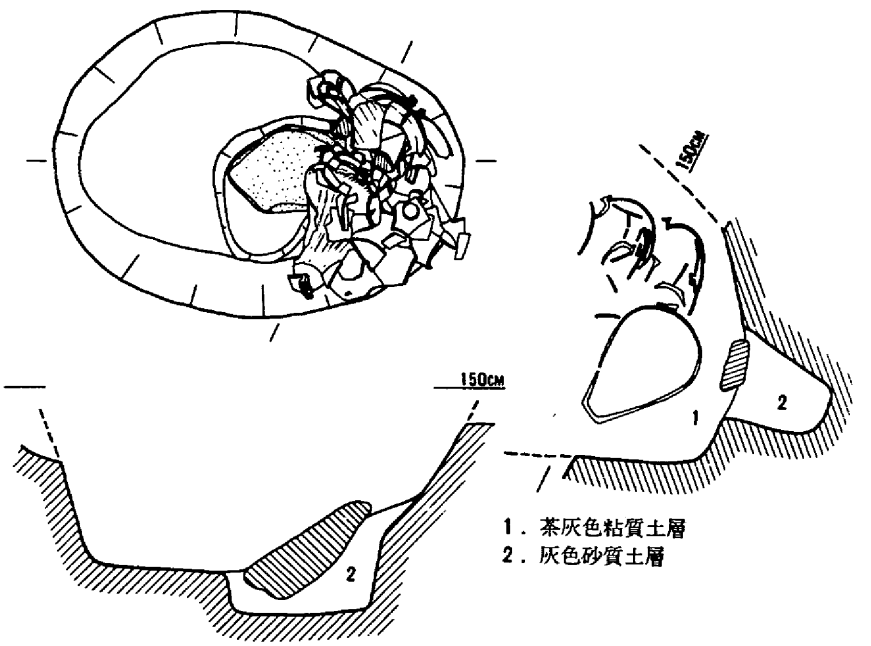
17)　7－P－52

＜遺構＞　当調査区のほぼ中央の48ライン下に検出した，長軸約 110 m，短軸約80cmを測る土壙である。この土壙は二段掘りで，それぞれ柱穴の掘り方及び抜き方と，柱痕部と考えられ，前者が約40cmの後者が約50cmの深さを測る。周辺には，後出の時期（上東・鬼川市Ⅱ～Ⅲ）の土壙が数多くみられるが，当土壙と同時期のものは１～２個しか検出しえなかった。また，この時期の土壙の上面は前回調査Ｐ－151 のようにプランがはっきりしない状態であった。

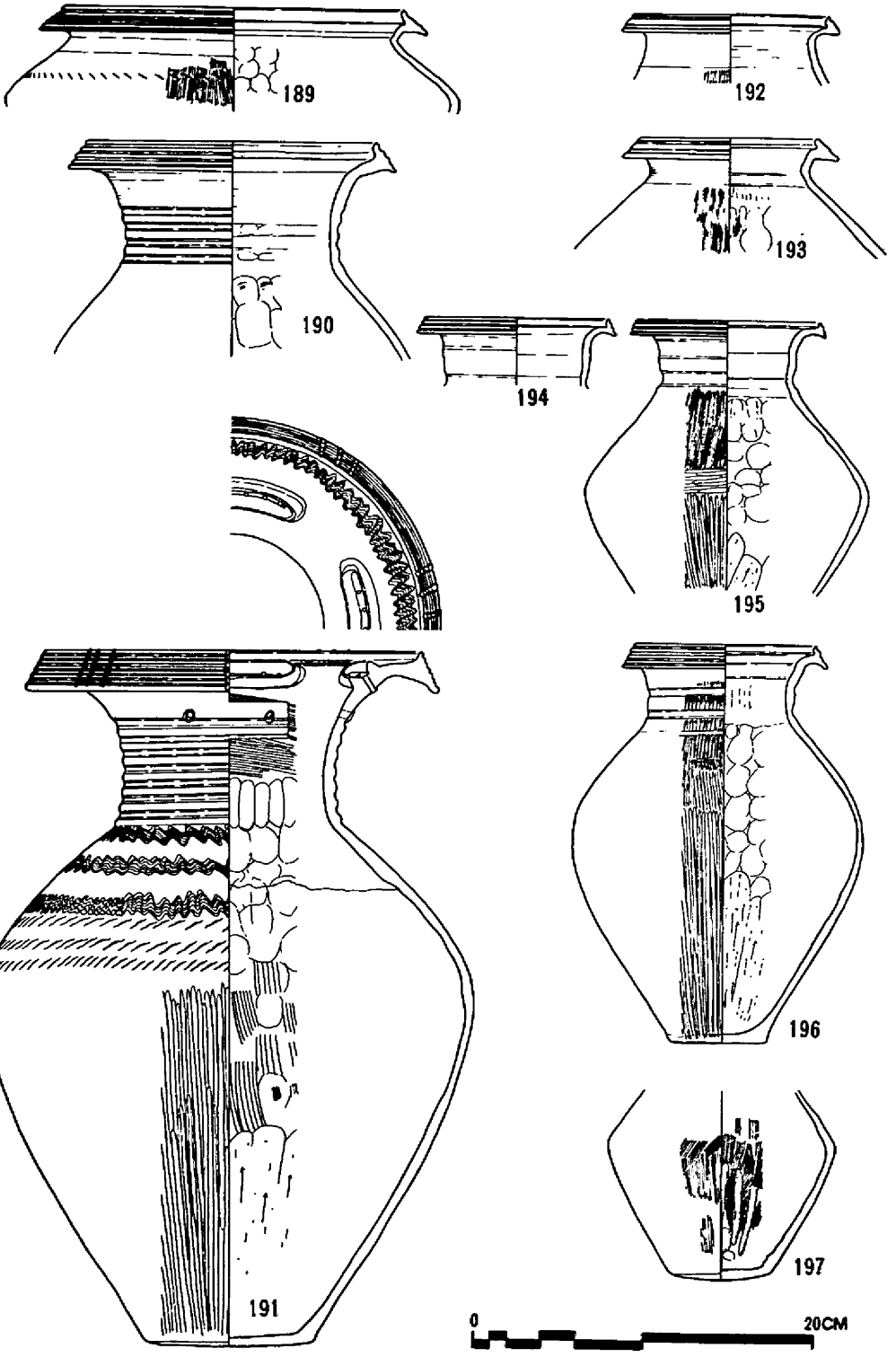
遺物は土壙の東南隅に折り重なるようにして出土していることから，その部分が抜き方と考えられる。また下部の柱穴をふさぐように，長さ約40cmの石がずり落ちた状態で検出された。

＜遺物＞　壷形土器，甕形土器，高杯形土器などが出土している。図示したもののほかにも実測不能の土器片が多量に出土している。

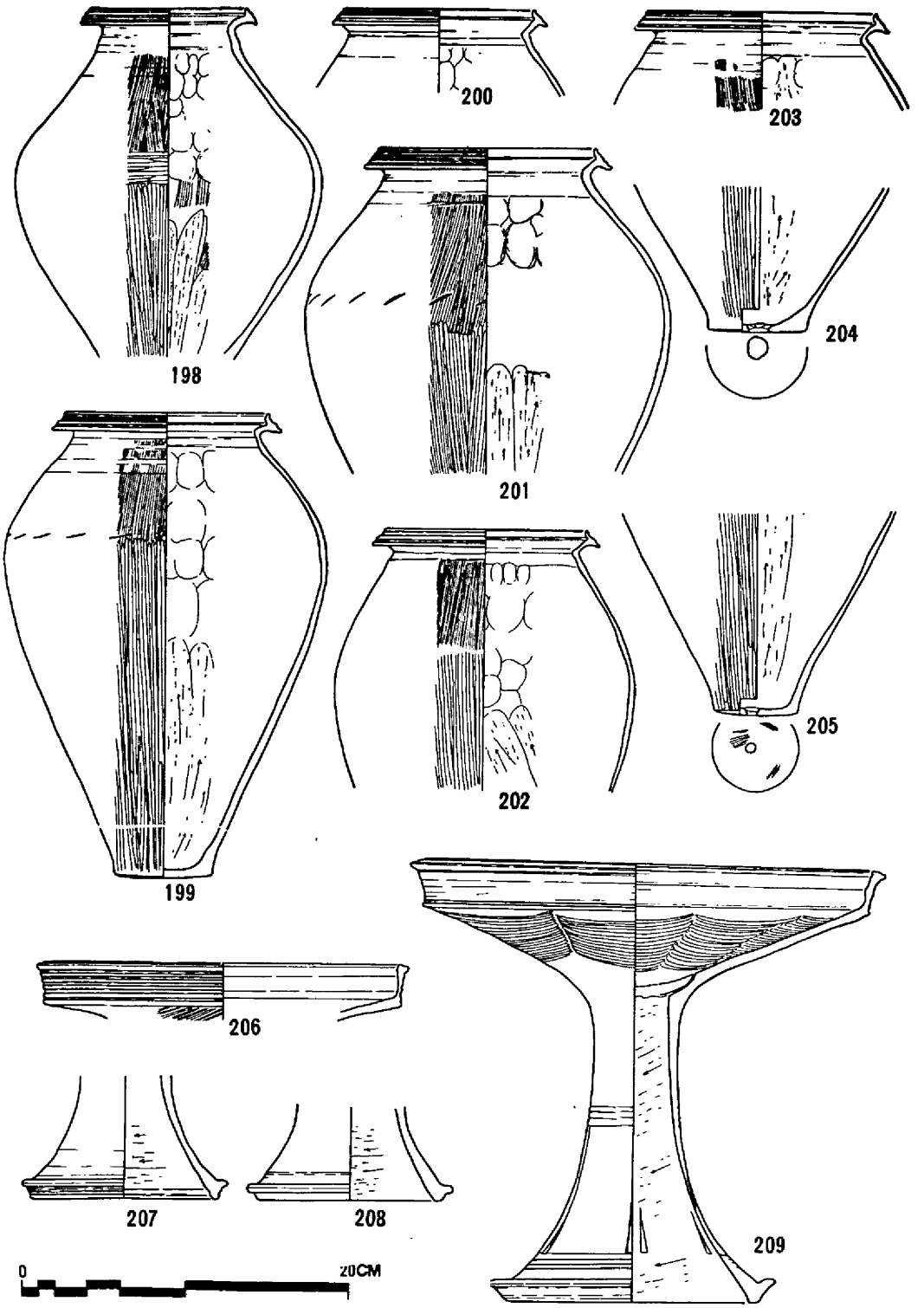
壷形土器は，比較的大ぶりの長頸壷形土器（**190**，**191**）と小ぶりの長頸壷形土器（**194～196**）などがある。**189**は胴部が菱形を呈す台付壷形土器と思われる。**191**はほぼ完形の装飾の豊かな土器である。ナデ肩で，最大幅をやや上部にもつ胴部と，多少開きぎみに立ち上がる頸部にラッパ状に開く口縁部をもつ。口縁端部は内傾して上下に拡張し，端面に７本の浅い凹線を廻らせ，ほぼ等間隔で７箇所に３本単位の棒状浮文を施す。口縁内部には断面三角形の凸帯が約 3.5 cm幅を残して上下二重に廻り，それぞれ弧を成して上下帯がつながる。２本の凸帯間には約１cm間隔で径 1.5～２mmの穿孔が廻る。また，凸帯と口唇部の間には７～８本単位の櫛状工具による波状文が廻る。頸部には７本の凹線を廻らせ，最上部の凹線付近に一対の貫孔（径約４mm）を穿つ。肩部には口縁内面と同様の櫛描波状



第96図　東鬼川市　7－P－52遺構平・断面図（1/20）



第97図　東鬼川市　7－P－52出土遺物（1）



第98図　東鬼川市　7－P－52出土遺物 (2)

文と貝殻圧痕文がそれぞれ三条ずつ廻らされ，胴部下半は縦方向の篦磨き調整で仕上げている。内面は，頸部上半が横方向の荒い刷毛で，胴部中ほどから上部にかけてが縦方向の荒い刷毛と押圧で，下半が篦削りでそれぞれていねいに調整している。胎土は多少粘土っぽく，焼成も良好である。色調は膚色を呈している。190は一般的にみられる長頸壷で，頸部に４本の凹線を廻らせている。

194～196は菱形に近い胴部に，多少外傾して立ち上がる頸部と急に外方に開く口縁部をもち，端部は内傾して上下に拡張させ，端面には３～４本の浅い凹線を施している。頸部には横ナデによる凹部または凹線が二条廻る。195は胴部上半を刷毛で，中程を横方向の下半を縦方向の篦磨きで調整し，196は頸部から胴部上半を繊維状の工具によるナデ，下半を篦磨きで調整している。内面は頸部から上を横ナデ，胴部のほとんどを押圧，底部近くを篦削りで調整している。197のように内面に粗い刷毛調整が残るものもある。また192，193，198は，器形のバランス，器厚などから壷形土器とした。いずれも小さめの径部で細めの頸部をもつもので，成形，調整ともに194～196と変わりはない。

甕形土器は，小ぶりでずんぐりした様相の壷形土器よりも口径が大きめで，胴部下半で反りが反転して底部に至る長くスマートな様相を呈する。底部は比較的小さく，ゆるやかなふくらみをもつ。口縁部は「ハ」の字状のナデ肩部から急に外方に開き，端部は小ぶりの壷形土器と同様の特徴をもつ。いずれも胴部上半に刷毛で調整したのち，下半を篦磨きでていねいに調整し，肩部付近は刷毛の上を横ナデにより再度調整している。胴部（肩部）に板状工具による刺突文が廻るもの（199，201）もある。また，底部に穿孔のみられる204，205もある。胎土は精選された粘土っぽいもので，色調は灰褐色を呈するものが多い。

高杯形土器は図示した４点が出土したのみである。209はほぼ完形で，長脚のスマートな土器である。杯部は多少外反しながら開き，ほぼ垂直に立ち上がり端面に多少の肥厚をもつ口縁部に至る。杯部底は円盤充填法によっている。脚部は細長い柱部から徐々に裾広がりに開き，端部を肥厚させて斜め外方につまみ上げている。脚柱部ほぼ中央と裾部にそれぞれ４本ずつの篦描平行線を，両者の間に６個の三角透しを施している。口縁部は内外面ともにていねいに横ナデで，杯部は内外面ともに弧状の篦磨きで，脚部内面はていねいな篦削りでそれぞれ調整している。206は口縁部外面に浅い凹線を廻らすもので，他の特徴は209とほとんど変わりはない。いずれ胎土は精選された粘土を用い，焼成もよく，白っぽい色を呈す。

以上，遺構の性格から一括資料として取り上げることが可能な一群である。これらの一群は胎土・成形・調整手法・形態などの諸特徴から一時期を与えることができ，仮称であるが上東・鬼川市Ｏ式とした。これらは前回調査で出土している。Ｊ－10・Ｐ－151のものと類似するもので，前山Ⅱ式の範疇で大きく捕えていたが，後出の８－Ｐ－20出土の土器との比較などから，この一群の土器を弥生時代中期末の時期と考える。

18)　8－P－20

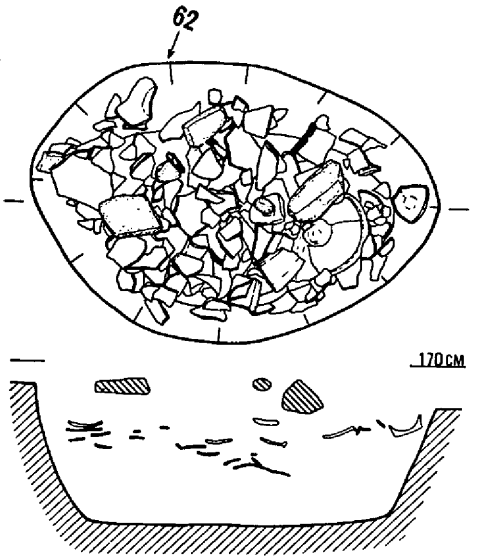
＜遺構＞　長軸約100㎝，短軸約75㎝の楕円形のプランを呈し，深さ約30㎝を測る。土器はすべて破損した状態で，土壙の中位に薄い層をなして検出された。土器片の上面には10㎝大の礫が点在し，

この中には石錘3点も混じっていた。

以上，遺構の形態・遺物のあり方から，この土壙は墓の可能性もある。

＜遺物＞　出土遺物は，図示したものが全てである。

壷形土器は長頸のもの(210)と，短頸のもの（211・213）がある。内傾する口縁端は，わずかであるが上方に拡張され，端面には3～5本の細く浅い凹線が廻っている。210はやや下細りの長い頸部に細く浅い篦描沈線が少なくとも7本あるが，最終的には横ナデを加えて，口縁部の凹線とほとんど区別できない。短頸のものも頸部の横ナデ調整痕が顕著に残っている。胴部外面は刷毛調整，内面は胴最大径部よりやや上まで篦削りされている。215は胴張りが強く，胴下半の形状も不明であり，あるいは壷形土器の類に加えられるべきかも知れない。



第99図　東鬼川市　8－P－20
遺構図（1/20）

甕形土器は，口縁部から底部まで接合できたもの（216・218）のほか，一応全形を推測できるもの（219）もある。後者は前二者に比べて，胴張りがやや強くなる可能性がある。全体を通して，鋭く内傾する口縁端部は上下に拡張され，216・218では上方拡張部の内面に明瞭な屈曲部をもつ。口縁端面には壷形土器と同様の凹線が4～5本廻らされている。口縁部から急にすぼまる頸部はていねいに横ナデが加えられ，くびれ部のすぐ下にわずかに外ぶくらみになるクセをもち，最大径部のやや上方で，器胴の反りが反転するクセも共通している。最大径は胴中程からやや上位にある。また底部のすぐ上でも，器胴の彎曲が急に反転している。器面調整は，刷毛目の幅に粗密があるが，おもに縦方向の刷毛目が外面に加えられている。内面の篦削りは胴部上半にも及んでいるが，頸部直下には達していない。この肩部内面には押圧痕がよく残っており，刷毛目が観察されるもの（219）もある。

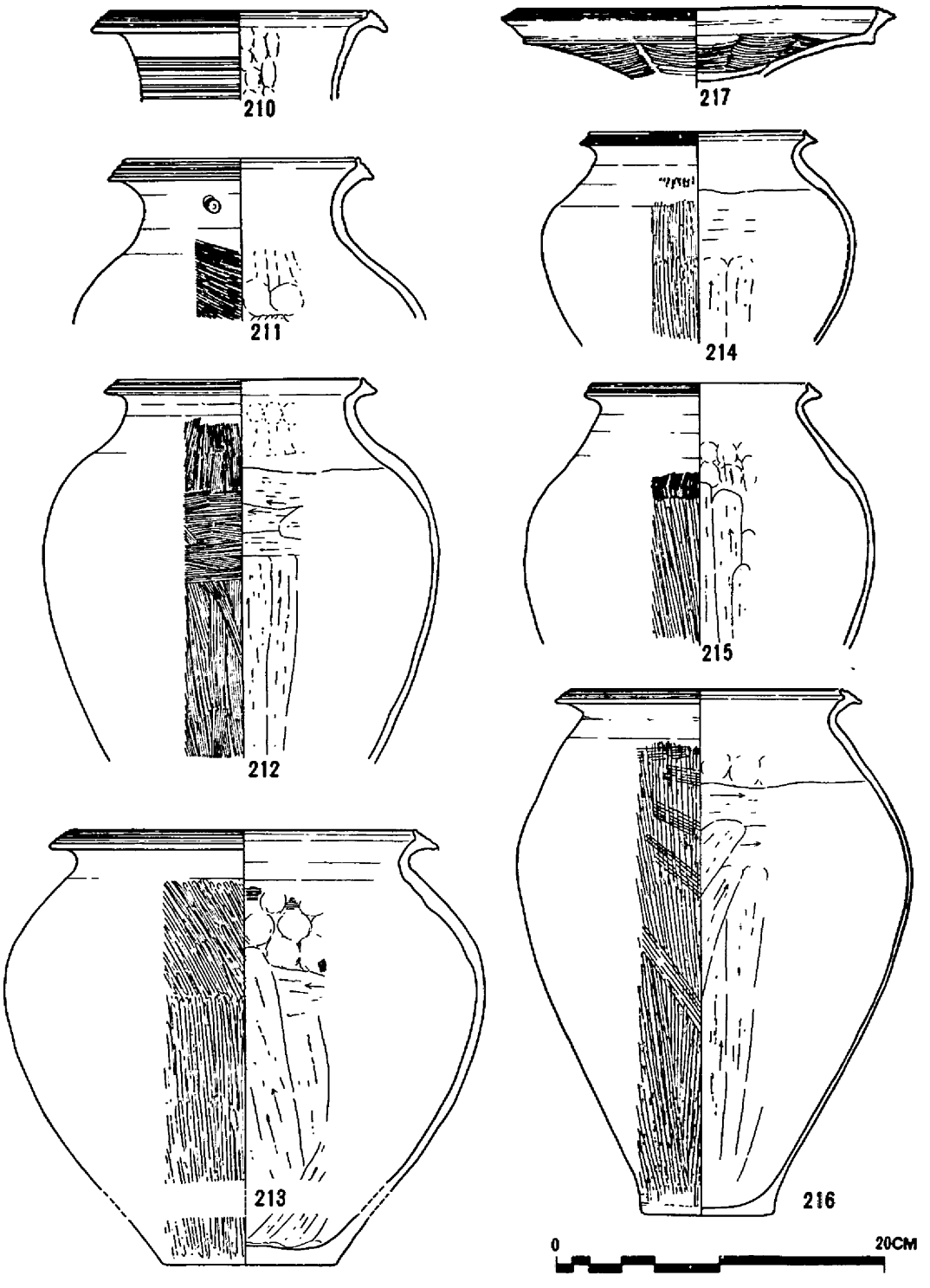
高杯形土器は脚部を欠失している。浅く反りあがった径の広い杯部から，外傾して短かく立ち上がる口縁部をもっている。口縁端部はやや肥厚し，端面に2～3本の細い凹線を廻らせている。杯部底は，円板充填法によっている。杯部の内外面には，ともに篦磨き痕が顕著に認められる。

以上，どの土器も褐色を基調にした色合いをもち，高杯を除いて，砂粒を含んでザラついた感触をもつ。高杯は篦磨き調整の影響で，器表は粘質を帯びて滑らかな仕上がりになっている。

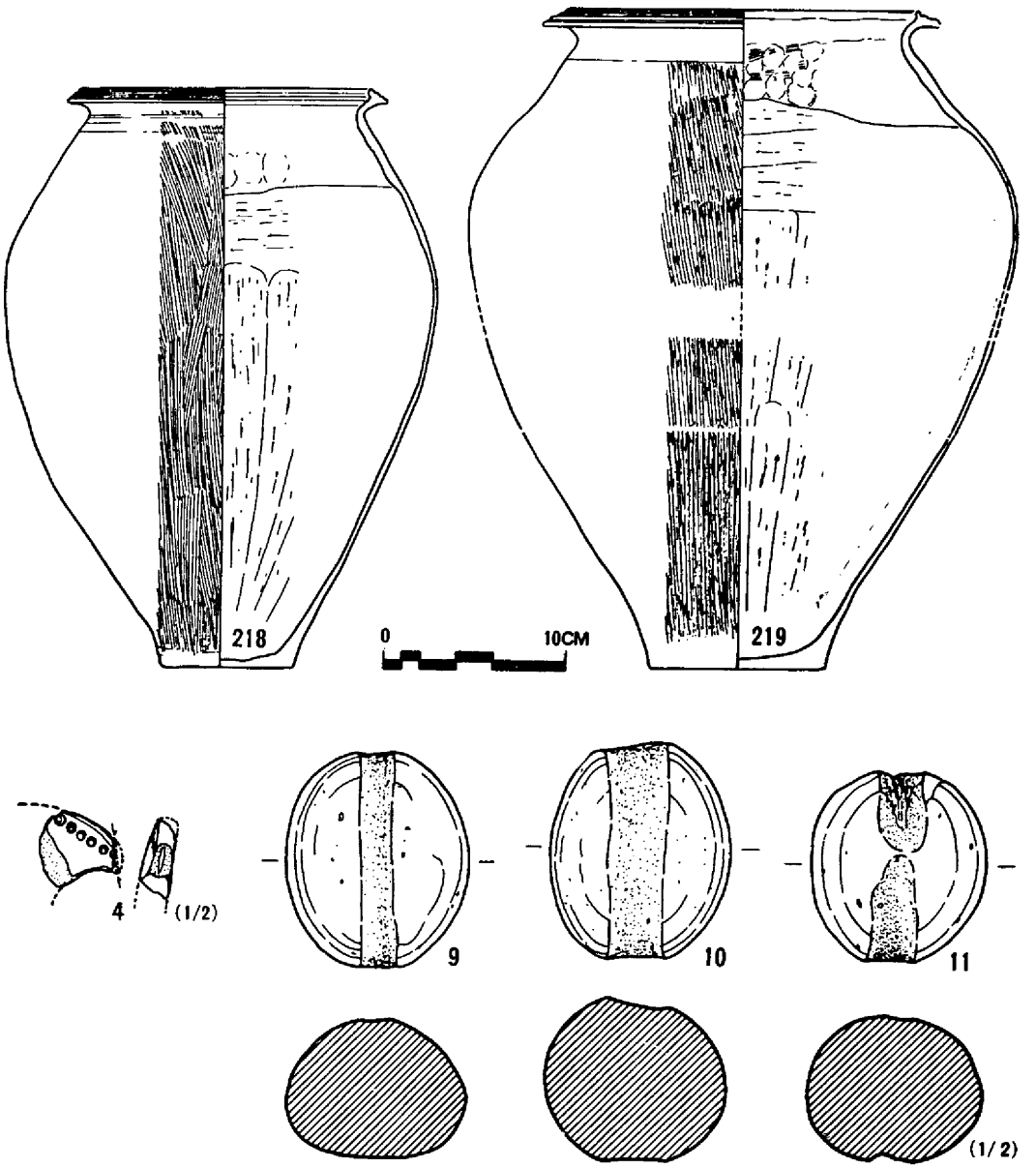
分銅形土製品（4）は，現存幅2.1㎝，高さ2㎝の小片である。外縁に添って径約2㎜の小さな刺突文が配列され，縁端部には側面からの貫孔がみられる。胎土に砂粒を含み，茶褐色を呈している。

石錘はいずれも5～6㎝の円礫を加工して，紐かけ部分を溝状に打ち欠き，一周させている。重さは，9が164.5g，10が219.5g，11が168.5gある。

以上の一括出土土器は，上東・鬼川市O式の要素をもちながらも，胎土，成形・調整手法，形態などにいわゆる「上東式土器」の特徴をそなえており，上東・鬼川市I式に比定できる。　（柳瀬）



第100図　東鬼川市　8－Ｐ－20出土遺物（1）



第101図　東鬼川市　8－P－20出土遺物（2）

19)　5－P－22

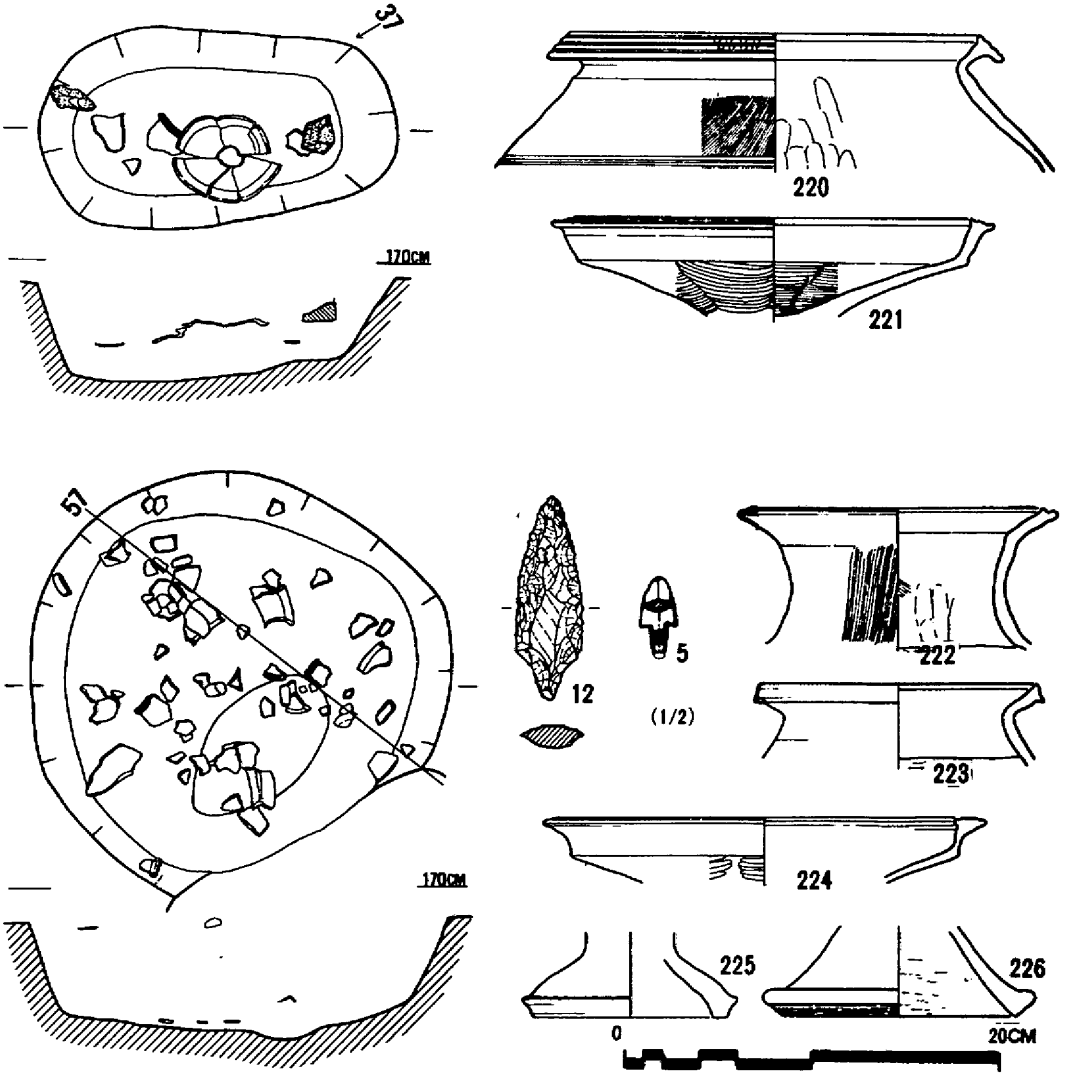
185×100㎝の楕円形を呈し，深さ54㎝を測る。土壙中央から高杯形土器の杯部と，その下部からは甕形土器片が出土している。

甕形土器（220）は斜め外方に立ち上がる口縁部をもち，端部は内傾して上下に拡張している。拡

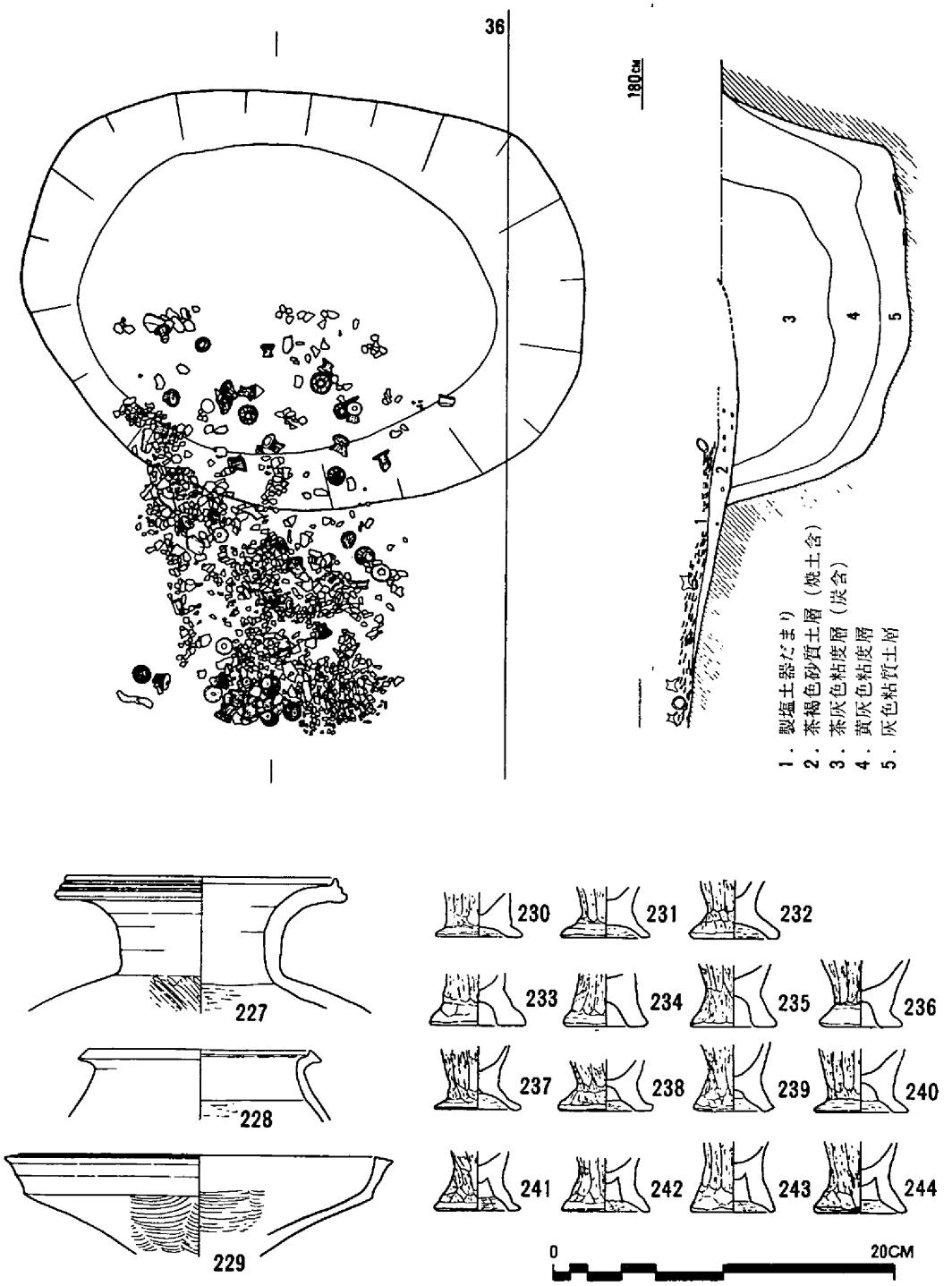
張面には三条の凹線が施され，一箇所，竹管による浅い刺突が成されている。高杯形土器（221）は前述の８－Ｐ－20出土のものと全く同一の特徴をもっており，これら出土遺物は上東・鬼川市Ⅰ併行と考えられる。（江見）

20)　８－Ｐ－16

径 110 ㎝の不整円形を呈し，深さ30㎝を測る。土壙内には暗褐色砂泥が堆積しており，遺物は小礫とともに土壙全体に散在していた。石鏃（12）はサヌカイト製で，全長5.4㎝，最大幅1.8㎝，重さ5.5ｇの凸基有茎式のものである。銅鏃（５）は全長２㎝，最大幅１㎝の凹基有茎式のもので，身部中央に稜線をもち断面菱形を成している。茎部は丸く仕上げられている。



第102図　東鬼川市　5－Ｐ－22(上)，8－Ｐ－16(下) 遺構図（1/20）及び出土遺物



第103図　東鬼川市　5－Ｐ－30遺構図（1/20）及び上面出土遺物

出土土器（222～226）の形態・特徴から上東・鬼川市Ⅰ併行のものと考えられる。

21)　製塩土器溜り及び5－P－30

調査区のほぼ中央から，約130㎝四方にわたって製塩土器片及び焼土塊が散在していたものである。検出当初は後述する5－P－30の関連遺物と考えていたが，断面図から明らかなように両者は全く堆積状況を異にしており，製塩土器は微高地のわずかな凹みに廃棄されたもののようである。

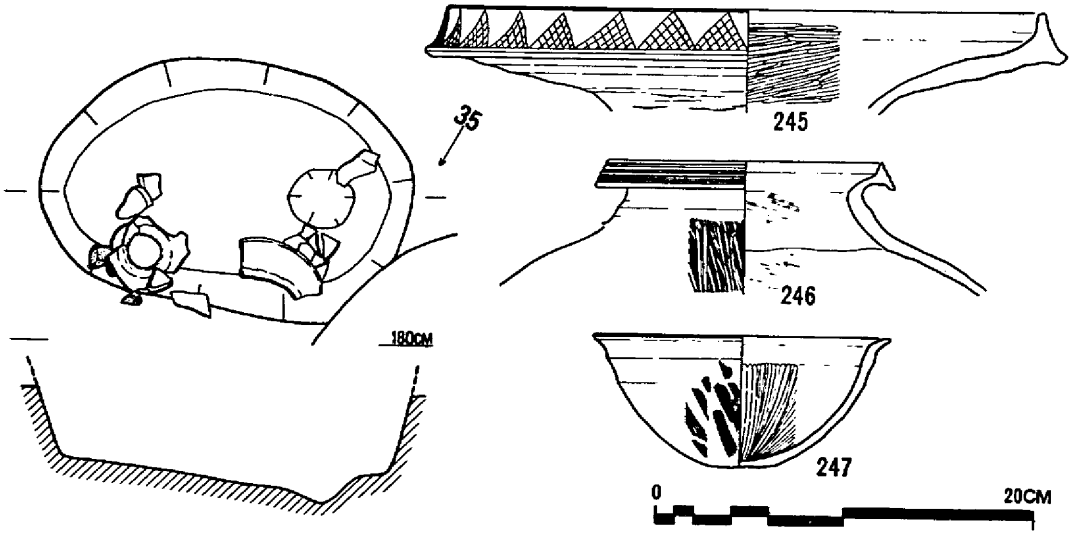
製塩土器（230～244）は脚部から胴部にかけて，外面はいずれも押圧及び篦削りされているが，脚部の成形及び調整方法の違いから次の4つに分類することが出来る。a類（230～232）は脚部が低く，脚部内面はナデによって浅い凹みをもつ。b類（233～236）はa類に比べて脚部はやや高くなり，端部はやや厚くなる。脚部内面はa類と同様，ナデ調整されている。c類（237～240）はb類と同様の脚部をもつが，さらに脚端部内面を斜めに篦削りしている。これらa～c類は粘土塊から脚部及び鉢部を同時に作り出したものと考えられるが，d類（241～244）は高杯形土器などにみられる円板充填方法をとっているものである。脚端部はc類同様篦削りしている。

以上a～d類に分類された製塩土器は新旧の様相をもっていることが明らかになったが，遺物の出土状態からは他時期にわたるものとは考えられず，上東・鬼川市Ⅱ併行のものと思われる。

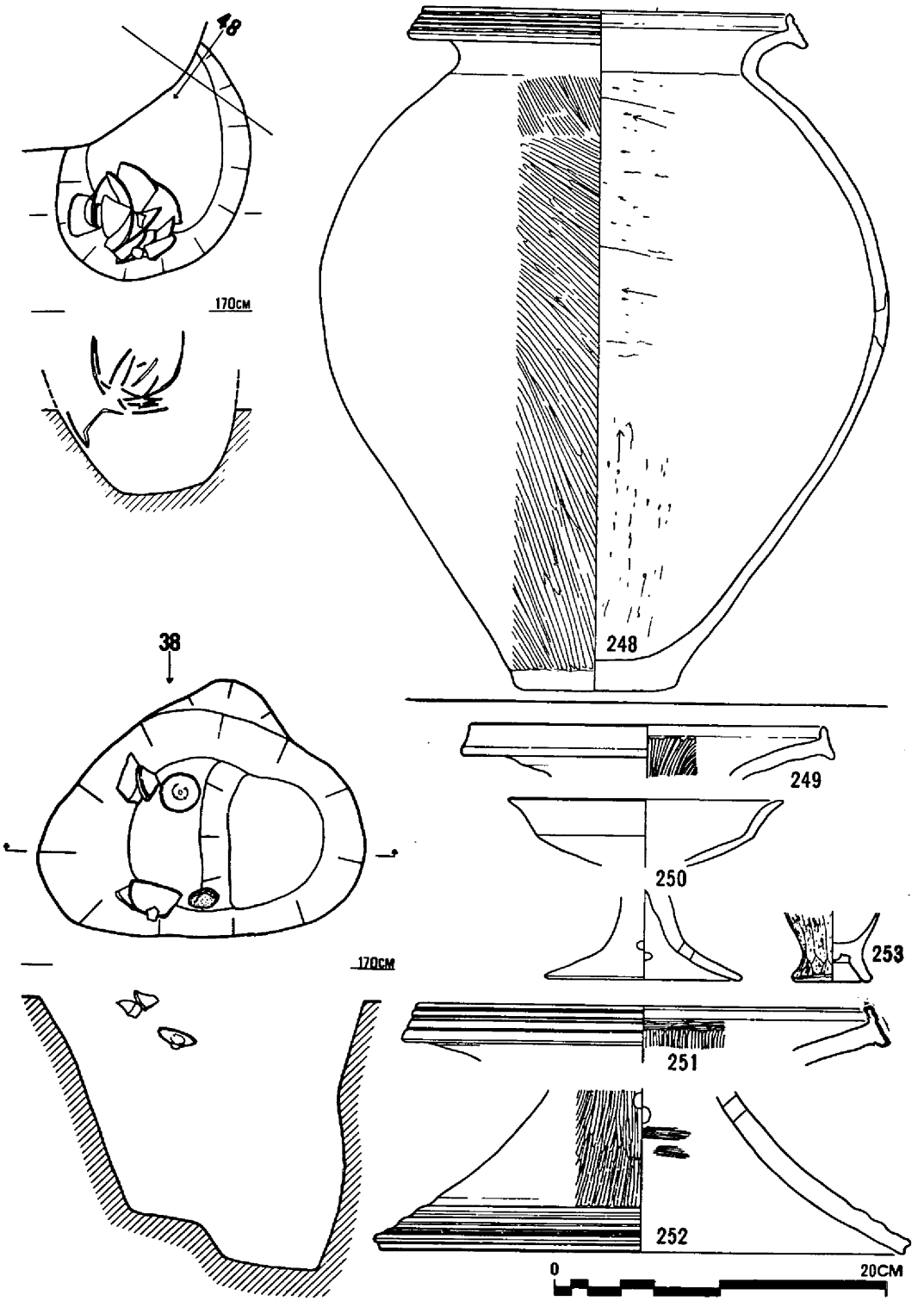
5－P－30は，径170×120㎝，深さ55㎝を測る大型のしっかりした土壙であるが，遺物はわずかに3片（227～229）出土しているのみである。上東・鬼川市Ⅰ併行のものと考えられる。

22)　5－P－8

土壙は97×65㎝の楕円形を呈し，深さ25㎝を測る。出土土器（245～247）の形態・特徴から上東・鬼川市Ⅰ～Ⅱ式にかけてのものと考えられる。



第104図　東鬼川市　5－P－8遺構図（1/20）及び出土遺物



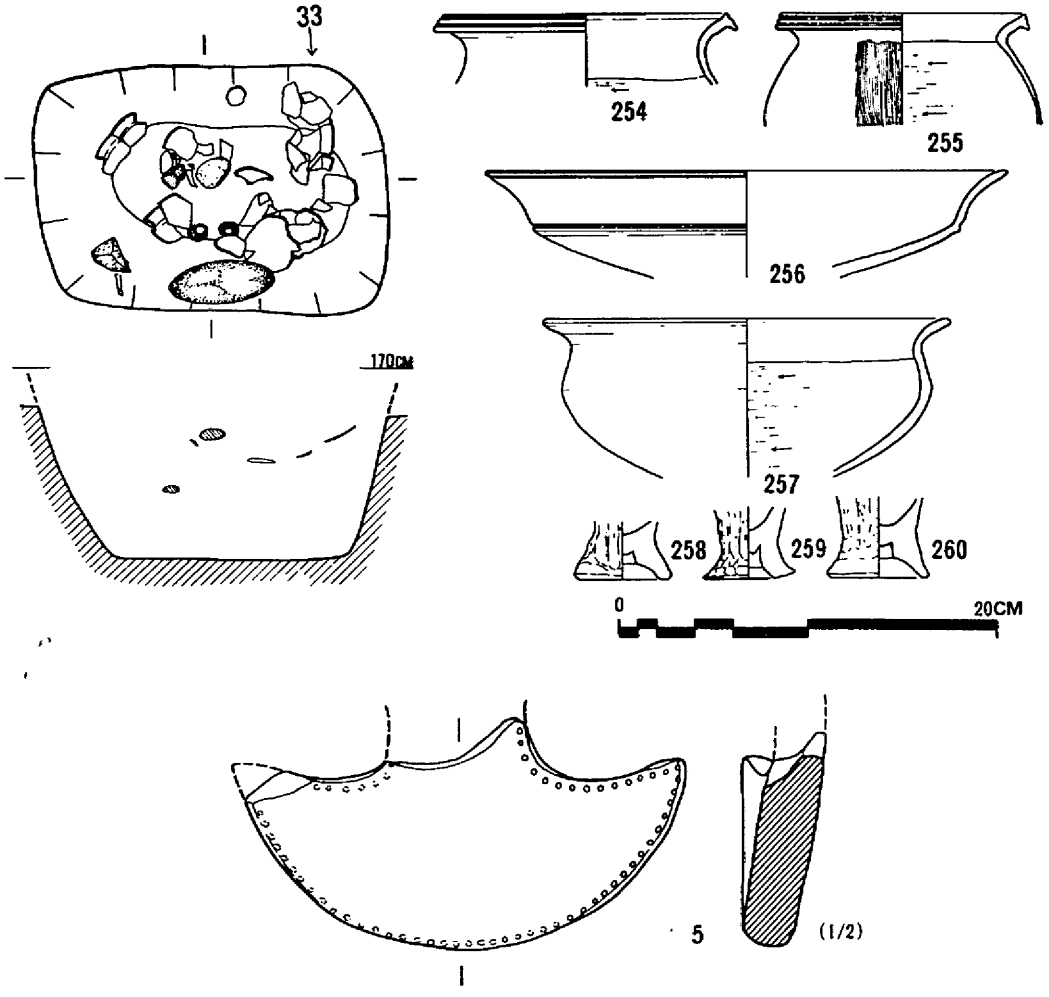
第105図　東鬼川市　7－P－50(上)，5－P－6(下) 遺構図 (1/20) 及び出土遺物

23)　7—P—50

別の土壙によって西側一部を切られているが，径75×55cmの楕円形を呈し，深さ50cmを測る。土壙の南から，一個体分の甕形土器（248）が押し潰された状態で出土した。口縁部は「く」の字状に外反し，さらに端部は内傾して上下に拡張している。拡張面には四条の凹線が施されている。肩は張りがなく，胴部中央に最大径をもつ。底部は厚く，しっかりしている。外面は口縁部下，約4cmを刷毛調整，以下底部まで箆磨き調整している。内面は胴最上部まで箆削りされている。なお胴部中央には直径0.7cmの孔が焼成後に穿たれている。

上東・鬼川市Ⅱ併行のものと考えられ，遺物のあり方から甕棺として使用されたものと考えられる。

24)　5—P—6



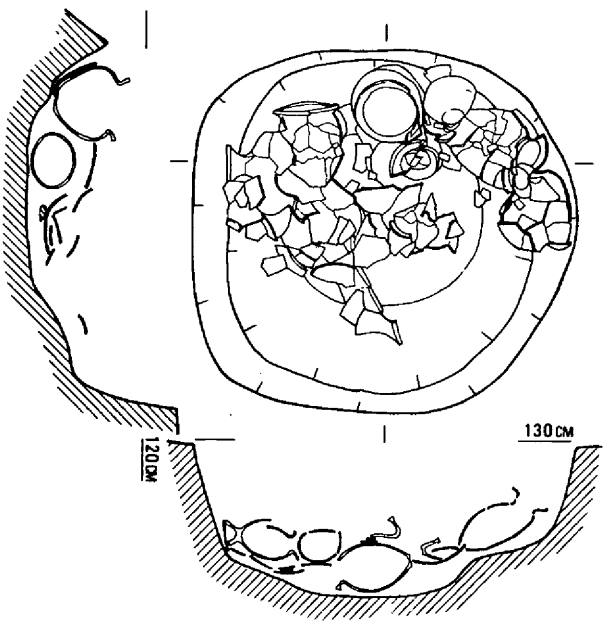
第106図　東鬼川市　5—P—1遺構図（1/20）及び出土遺物

土壙は200×140㎝の楕円形を呈し，深さ170㎝を測る。底部は東半分をさらに掘り下げている。出土遺物の形態・特徴から上東・鬼川市Ⅱ併行のものと考えられる。

25)　5－P－1

土壙は90×65㎝の隅丸方形を呈し，深さ40㎝を測る。土壙全体にわたり，礫に混じって遺物（254～266）が散在していた。また土壙中央からは分銅形土製品（5）が出土している。分銅形土製品は横11.5㎝，縦6㎝を測る大形のもので，下半部の破片と思われる。表面は凸，裏面は凹状を呈し，厚さは1.5㎝でほぼ一定しており，端部は丸くおさめられている。表面の縁辺部には竹管状の工具による浅い刺突文が廻らされている。茶褐色を呈し，砂粒を多分に含んでおり，表面は荒れている。

出土遺物の形態・特徴から上東・鬼川市Ⅱ併行のものと考えられる。　（江見）



第107図　東鬼川市　4－P－4遺構平・断面図（1/20）

26)　4－P－4

＜遺構＞　この土壙は溝3の西肩の一部を切り，上部を溝6で削られて検出された。径約100㎝の不整円形を呈し，深さは35～40㎝を測る。中央部は径約50㎝の円形に，深さ10㎝位くぼんでいる。土壙内は暗褐色の粘質土で埋まり，遺物は底近くに一括して重なるように出土している。土器は完形のものが多く，土壙の東側の壁下に添って出土していることから，人為的に並べて置かれた可能性もある。

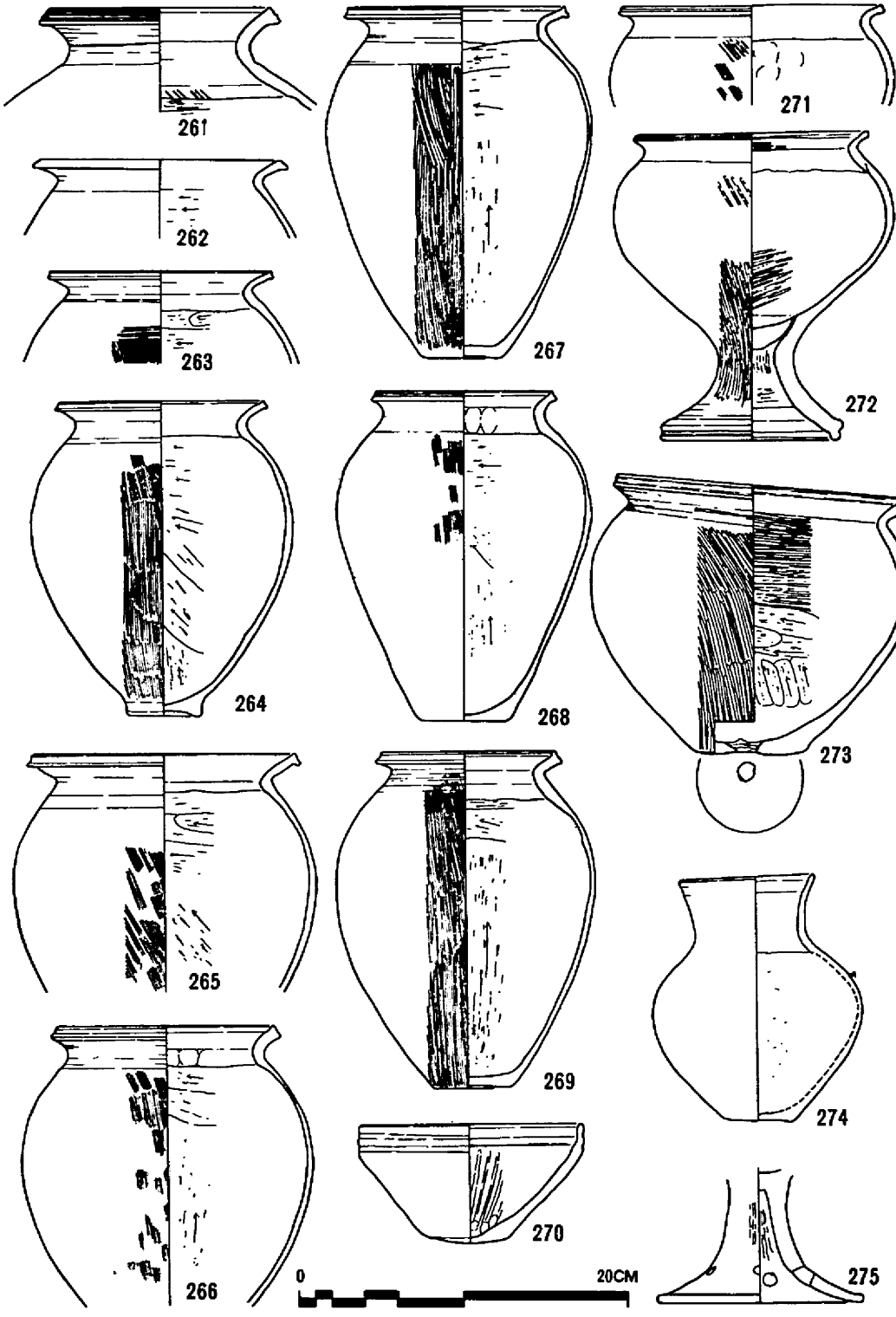
以上，遺構のあり方からすれば，土壙墓とも考えられる。

＜遺物＞　図示したものは出土遺物のうちそのほとんどである。

壺形土器（261）はゆるやかに外反しながら開く口縁部をもち，内傾して肥厚させた端面に三条の退化凹線を施す。胴部内面には粗い刷毛調整ののちの篦削り痕がみられる。

甕形土器（262～269）は，いずれも丸みを帯びた胴部に「く」の字状に外反する口縁部をもち，端部を肥厚させわずかな端面をつくり出している。底部は全体を突起させ中央部をへこませたもの（264），単に中央を少しへこませたもの（267，269），平たいもの（268）の三種類がある。いずれも胴部外面は刷毛で，内面は篦削りで調整し，胎土に砂粒を多く含み，茶褐色または褐色を呈す。

鉢形土器は斜め上方に開く胴部から，短かく上方に立ち上がる口縁部をもつ小型の270，「く」の

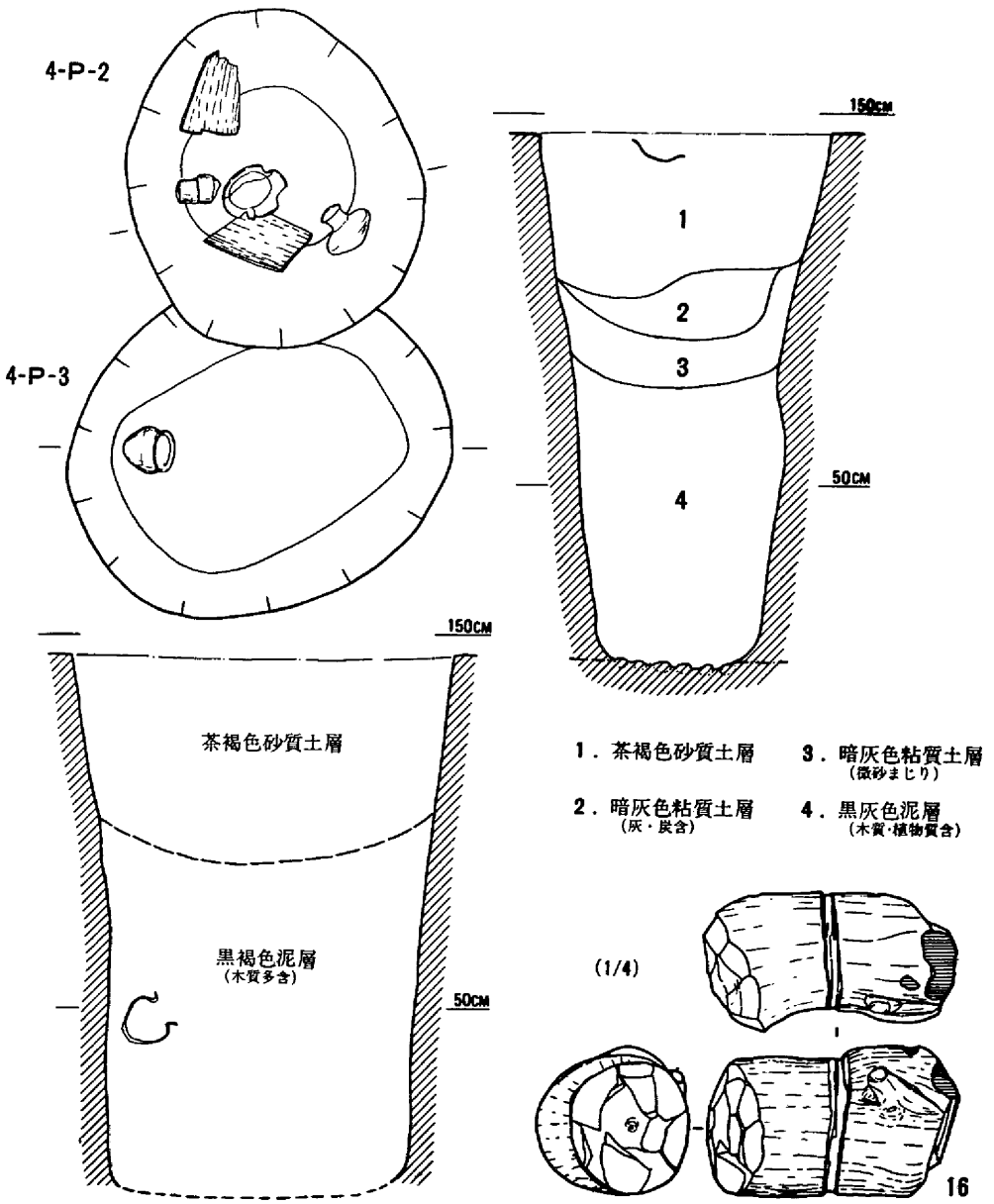


第108図　東鬼川市　4－P－4出土遺物

字状に短く立ち上がる口縁部に端部を多少肥厚させてわずかな端面をもつ台付きの271・272，口径が広く，底部穿孔のみられる273の3種類がある。これらの土器はおもに内外面ともに篦磨きで調整し，特に273の内面は篦削りの後，上半部を篦磨きで仕上げている。

これらの一括土器はその形態・特徴から上東・鬼川市Ⅱ式に比定できる。

27)　4－P－2

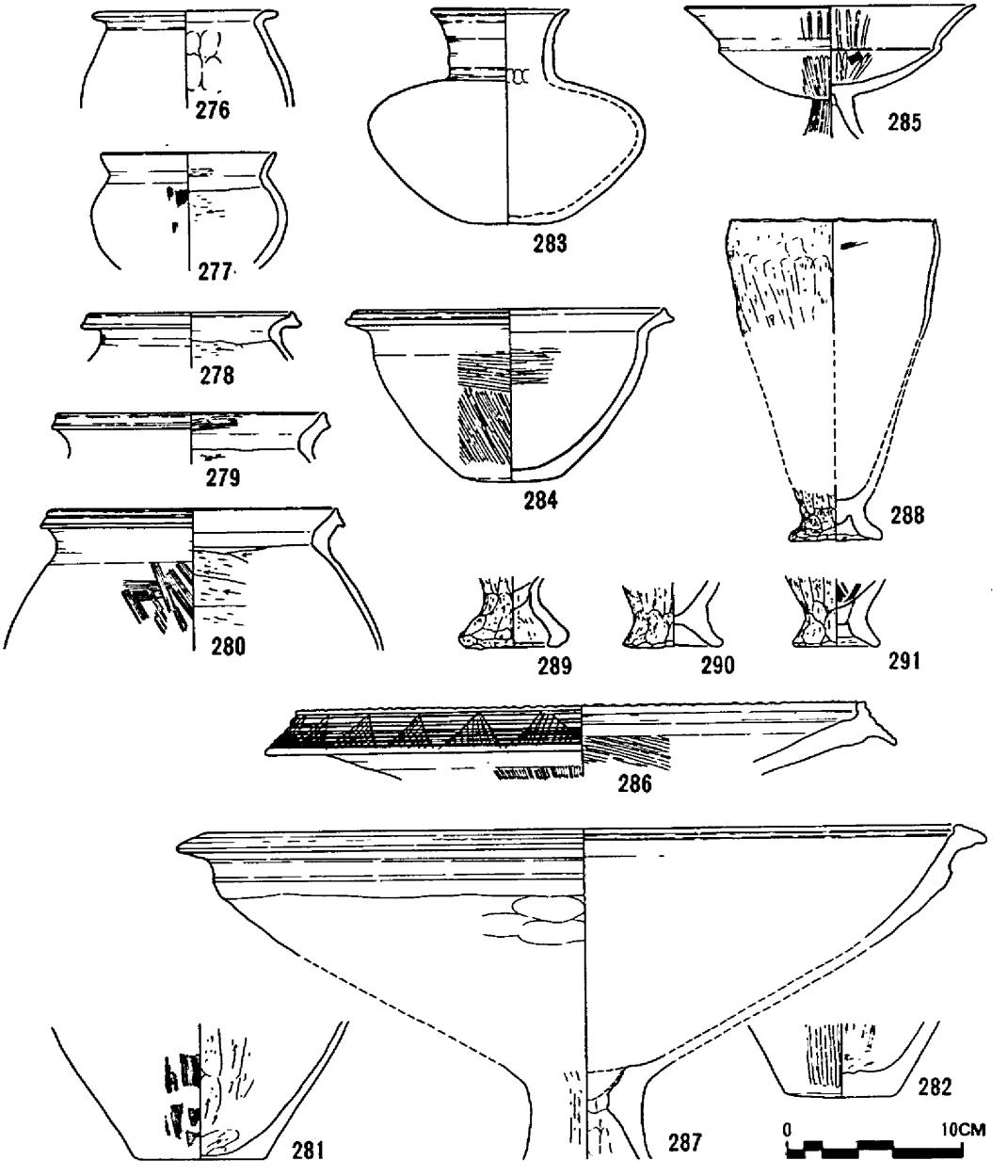


第109図　東鬼川市　4－P－2・3遺構図（1/20）及び4－P－2出土遺物

＜遺構＞　この土壙は溝２と溝３にはさまれた28ライン付近に，４－Ｐ－３を切って存在する。径約80～90㎝のほぼ円形を呈し，深さ約140㎝を測る。土層は４層に大別でき，底近くからは木器が出土している。底は湧水砂層まで達し，また形状からもこの土壙は井戸と考えられる。

＜遺物＞　土器はおもに第１層～３層中から出土したものである。壷形土器，甕形土器，鉢形土器，高杯形土器，器台形土器，製塩土器などが出土している。

全体的には上東・鬼川市Ⅱ式の形態・特徴をもっているが，中で287が鬼川市Ⅰ式に，285が鬼川市



第110図　東鬼川市・4－Ｐ－2出土遺物

Ⅲ式に比定されるもので，多少の時期幅が認められる。287の内面にはかなりのススの付着が認められる。製塩土器の台脚部は，形状が数タイプにわかれ，290に内面横ナデで仕上げる新しい要素がみられるほかは特に時期差はないと思われる。

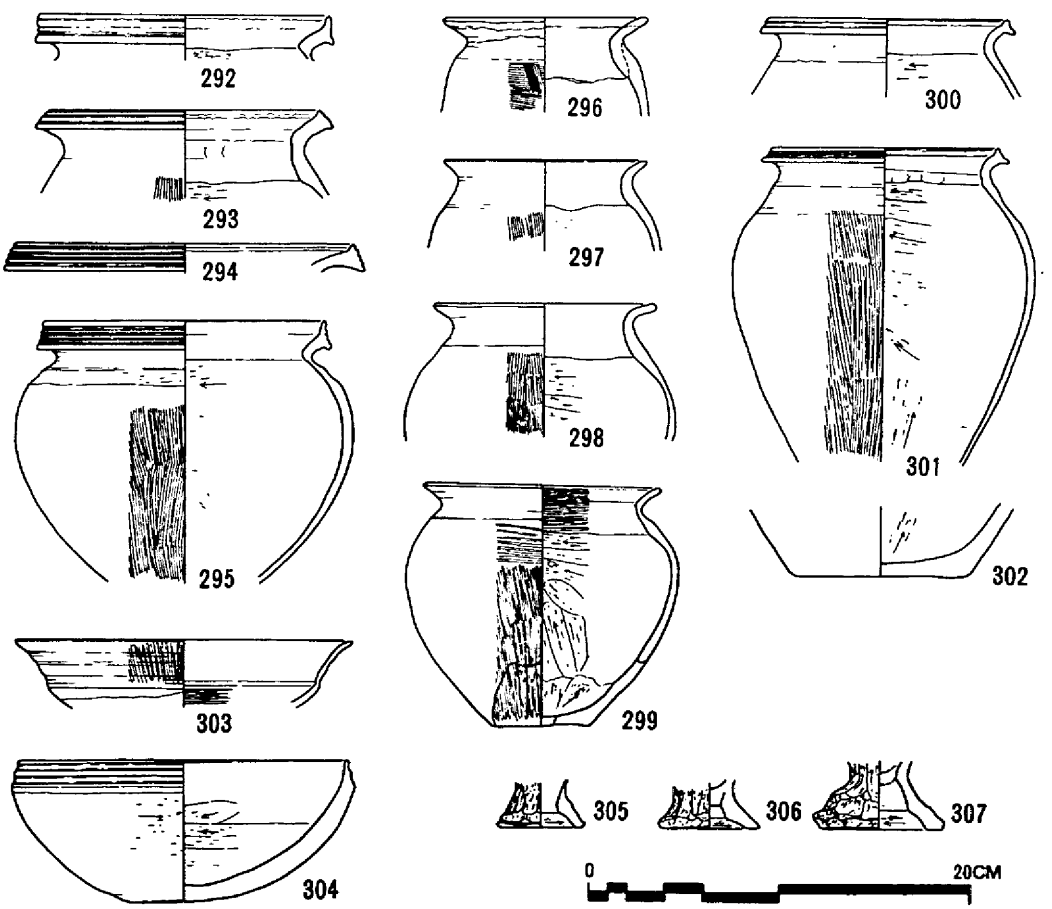
おもり状木製品（16）は径約7㎝の幹を長さ14㎝に切断し，両端を加工して中央部に幅約8㎜，深さ2～3㎜の溝を廻らせただけのものである。こもあみのおもりであろう。樹種はカマツカである。

28)　4－P－3

＜遺構＞　4－P－2に東側の一部を切られて検出された，径約100㎝，深さ約140㎝を測る土壙である。底では75×50㎝の隅丸方形のプランを呈し，土層は二層に大別できる。遺構検出面のレベルで304が，深さ約100㎝のところで299が出土している。

4－P－2と同様に，井戸と考えられる。

＜遺物＞　壷形土器，甕形土器，鉢形土器，製塩土器が出土している。確実に壷形土器といえるの



第111図　東鬼川市　4－P－3出土遺物

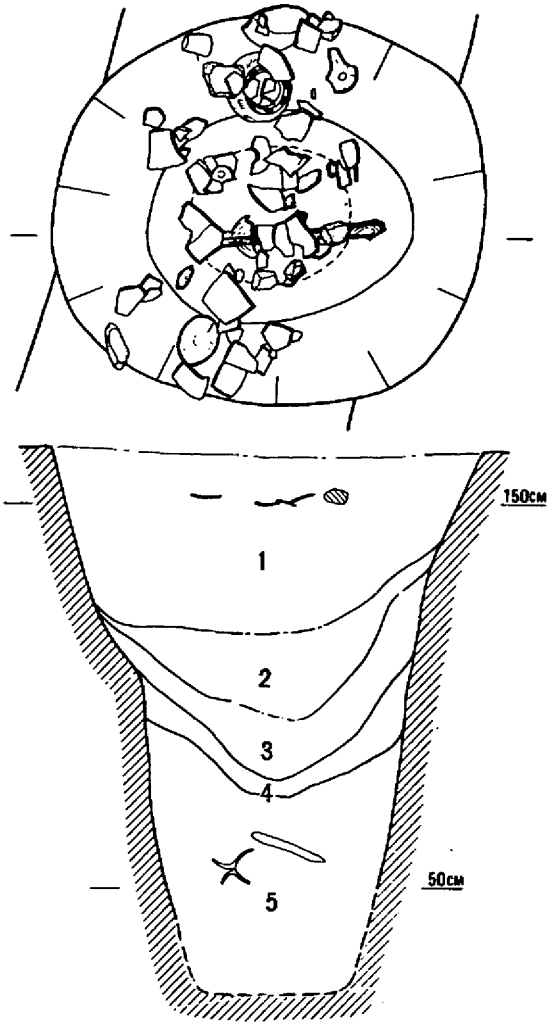
は294の一点のみで，口縁端部に拡張をもつ292・293・295・300・301と，もたない296～299の甕形土器がほとんどをしめる。299は底部から胴の一部にかけて大きな穿孔がみられる。

以上，甕形土器に内面の箆削りが口縁部近くまで達していないなど，古い様相がうかがえるが，全体に上東・鬼川市Ⅱ式に比定できる。

29)　4－P－1

＜遺構＞　溝2のほぼ中央部を切って検出された径約110㎝の円形を呈し，深さ推定150㎝を測る土壙である。堆積層は5層にわかれ，第1層中からは312，320などの完形に近い土器が，また第5層の深さ約110㎝のところから313，319及び製塩土器の大部分と木器（17）が出土している。

4－P－2・3と同様に，井戸と考えられる。



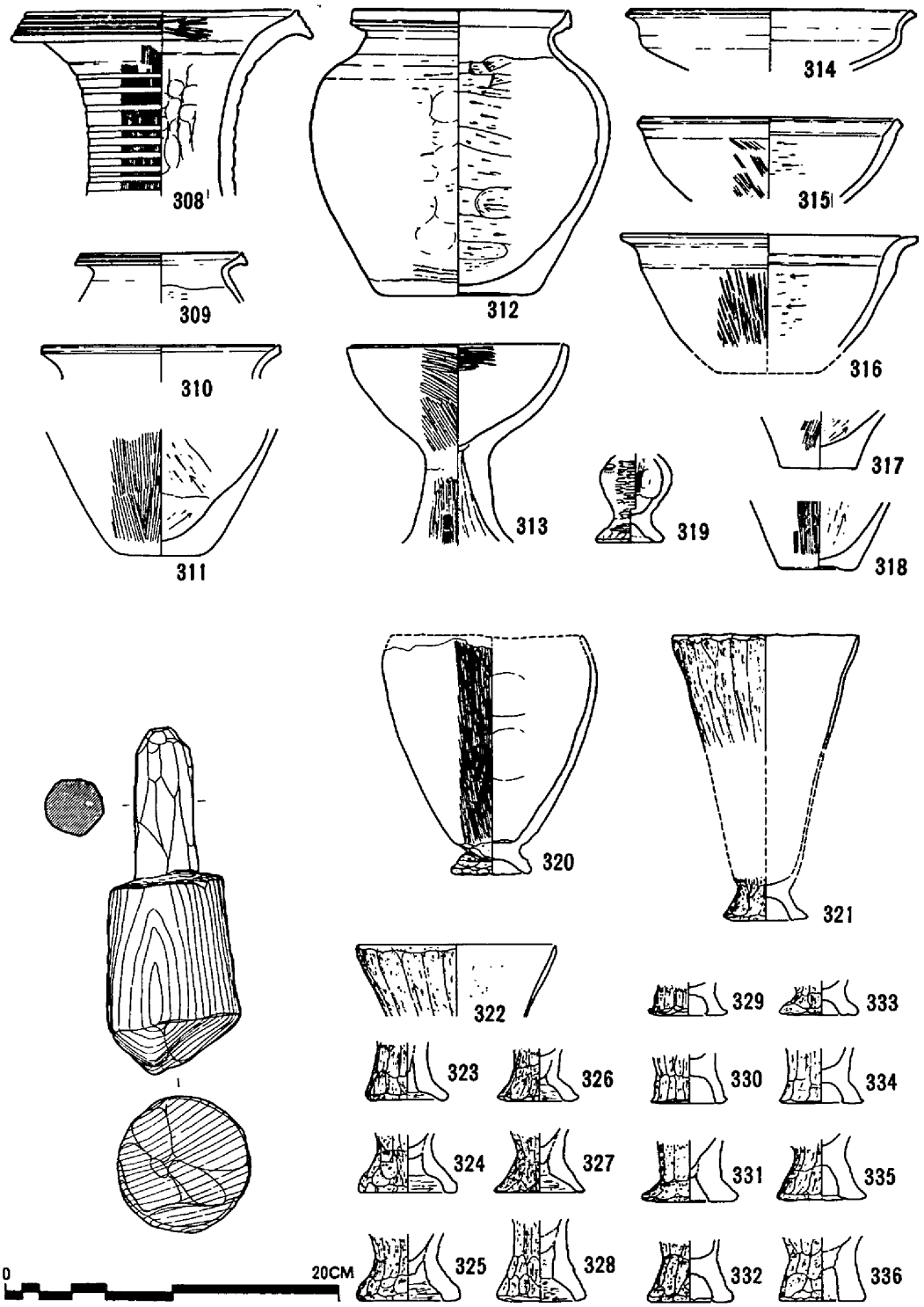
＜遺物＞　壺形土器（308，312），甕形土器（309～311，317，318），高杯形土器（313，314），鉢形土器（315，316），手捏の壺形土器（319）などが出土している。土器の形態・特徴から，上東・鬼川市Ⅱ式に比定できる。

製塩土器（320）は「ハ」の字状の少し小ぶりの脚に口縁部近くで内彎する鉢部をもつ。器外面は繊維状の工具による刷毛で，内面は押圧とナデで調整している。脚部は押圧とナデのみで仕上げている。323～328は5－P－30上面の製塩土器溜り出土のd類にあたり，321・329～336はb類にあたる。

木製品（17）は幹をそのまま利用したのではなく，½位に切断したものからの木取りであることが年輪から推定できる。柄部は径約3.5㎝，長さ約9㎝，基部は径12～13㎝，長さ約13㎝を測る。基部は先端にいくほど太さを増し，先端約3㎝ほどは三角形に撮り減っている。杵として使用されたものであろう。樹種はアラカシである。　（柳瀬）

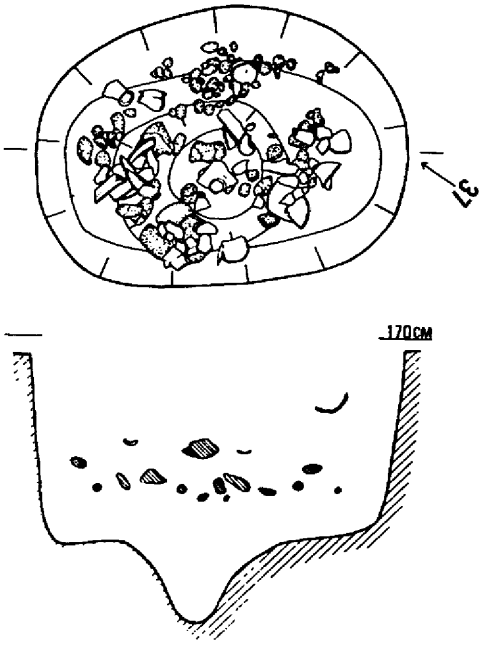
1．灰茶褐色粘質土層
2．灰褐色土層
3．灰褐色粘質土層
4．茶褐色砂質土層
5．暗灰色粘土層

第112図　東鬼川市　4－P－1遺構平・断面図（1/20）



第113図　東鬼川市　4－P－1出土遺物

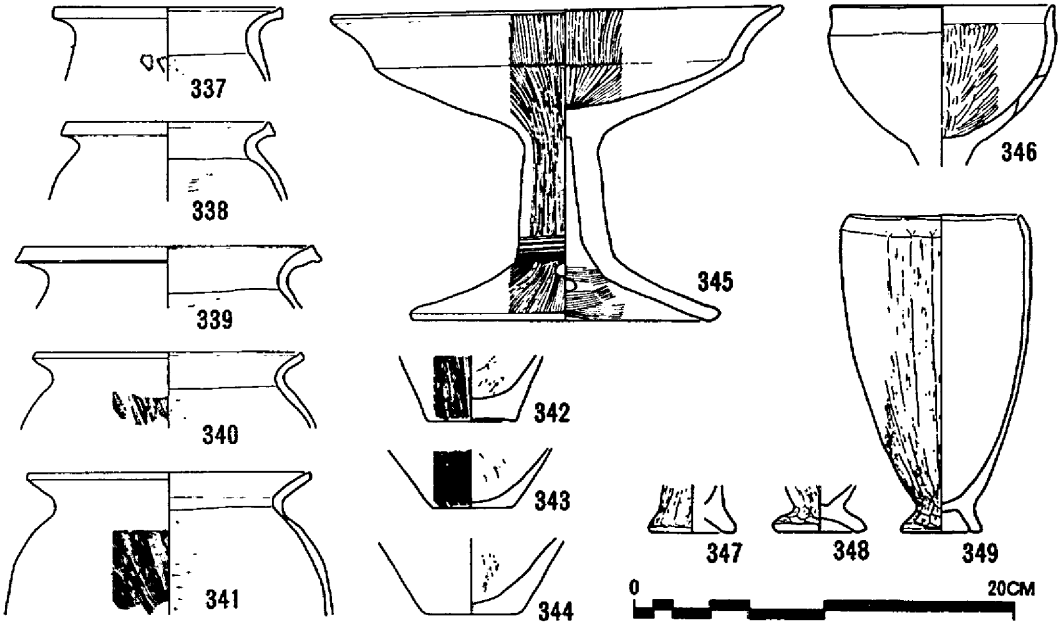
30)　5－P－12



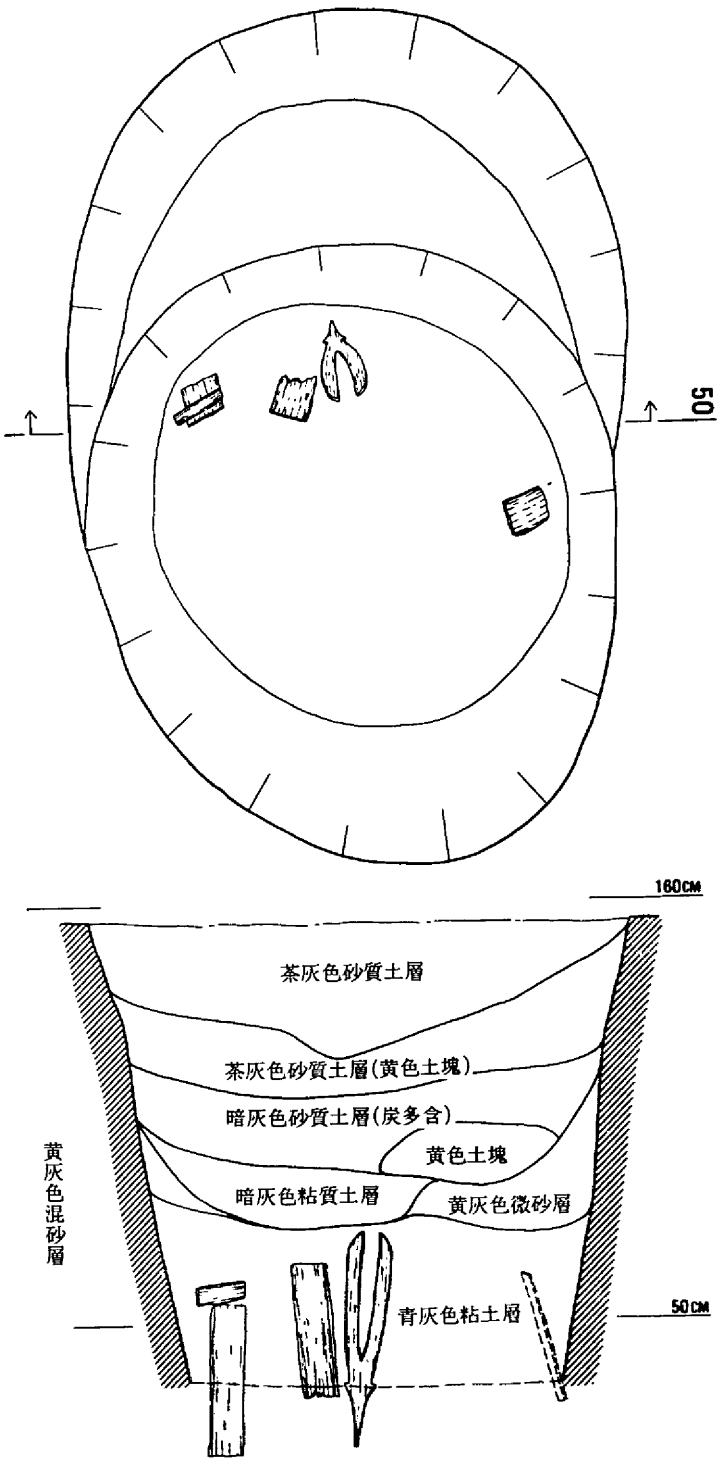
＜遺構＞　この土壙は97×75㎝の楕円形を呈し，深さ20㎝を測る。さらに土壙中央には直径25㎝，深さ20㎝の掘り込みがみられる。土壙の中程には小さな玉砂利がぎっしりと詰まっており，土器はおもにその上層から出土している。埋土は，底まで暗褐色粘質土の単一層であった。

＜遺物＞　壺形土器はまったく含まれず，甕形土器（337～344），高杯形土器（345，346），製塩土器（347～349）が出土している。甕形土器は口縁部が「く」の字状に外反して端部に少し肥厚をもつものが多い。345は外反する口縁部をもち，浅い杯部に長い脚柱部をもつ。脚部内面をのぞき，内外面ともに篦磨き調整されている。346は杯の腹部に一箇所，直径約1㎝の穴が穿たれている。349は口縁端部及び内面がナデ，外面が篦削りでそれぞれ調整されている。

これらの遺物は，高杯形土器と製塩土器に新しい要素がみられるが，全体的に上東・鬼川市Ⅱ式



第114図　東鬼川市　5－P－12遺構図（1/20）及び出土遺物



第115図　東鬼川市　7－P－2平・断面図（1/20）

に比定できる。

31)　7－P－2

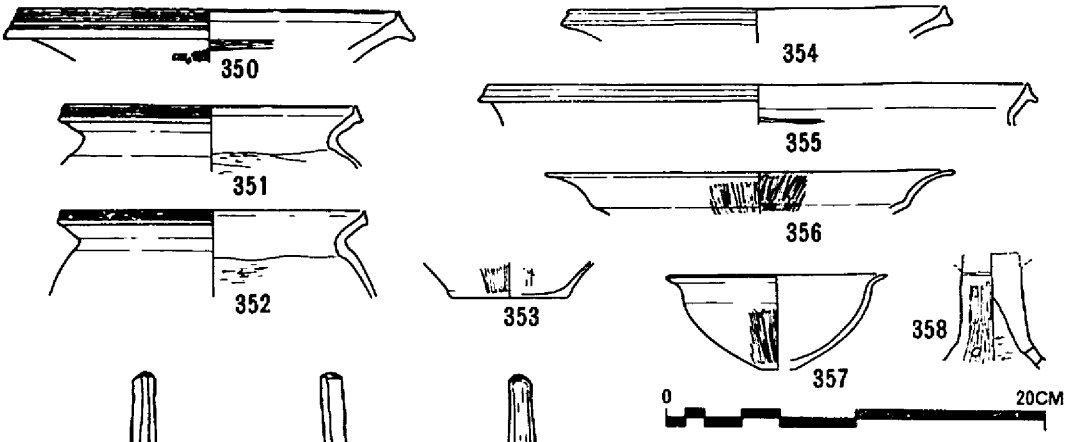
＜遺構＞　当調査区50ラインの北寄りに検出された，径145～160cmのほぼ円形を呈し，深さ120cmの井戸状土壙である。西側に約60cm張り出してもう一つの土壙があるが，土層観察によれば切り合い関係は認められず，同一土壙の二段掘りによるものと思われる。土層は大きく５層に分かれ，土器類はおもに第４層から上で出土し，下層のグライ層からはその下の砂層に打ち込まれて矢板３枚と完形の二又鋤状木製品が検出されている。

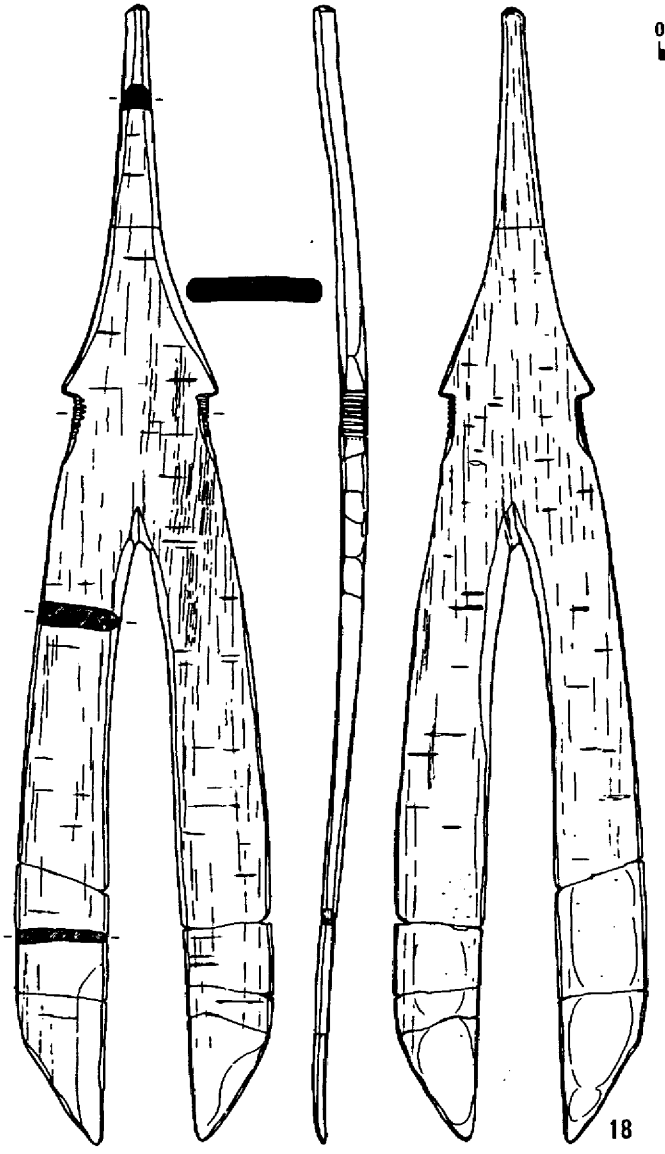
この土壙は，湧水砂層まで達し，また矢板などの施設をもつことなどから井戸と思われる。

＜遺物＞　土器はいずれも破片のみで，量的にも少ない。図示したものは実測可能なものだけである。

壷形土器は350一点のみである。長頸壷形土器の口縁部と思われ，端部は内傾して上下に拡張をもち，端面に三条の浅い退化凹線を廻らせている。

甕形土器は，「く」の字状に外方に折れ曲がる口縁部をもち，端部を肥厚させわずかに上下に拡張をもつ。端面に二～三条の退化凹線をもつ351・352とナデによる凹状のくぼみをもつ354がある。351・





第116図　東鬼川市　7－P－2出土遺物

352にみられるように，内面の篦削りは口縁部下まで成されている。

高杯形土器は，口縁部が外反して斜め上方に立ち上がり端部を丸くおさめ（356），少し長めの脚柱部をもち（355），杯部は浅いと思われるものが出土している。鉢形土器（357）は小型のもので，口縁部をゆるやかに外反させ，その内外面を横ナデで，器外面を刷毛で調整している。

以上，高杯形土器を除き，いずれも胎土は砂っぽく，形態から上東・鬼川市Ⅱ式に比定できる。

二又鋤状木製品（18）は完形のもので，長さ60㎝を測る。柄部の途中から身部先端にかけてゆるやかな反りをもつが，これは後世の歪みによるものではなく，木取り（板目）によるものである。柄部は表面にのみ面取りが成され，くびれ部の両側面には幅約24㎝間に七～八条の縛り痕が顕著に残る。樹種はアラカシと思われる。（柳瀬）

32)　2－P－38

＜遺構＞　調査区の西方寄りに検出したもので，径80×70cm，深さ推定130 cmを測る井戸状を呈す土壙である。土壙は約70cmの深さまではほぼ垂直に落ち込み，以下底部までやや角度を変え斜めに落ち込む。土層は上層（暗褐色砂泥），下層（暗灰色粘質土）の２層に分けられたが，遺物は上・下層にまたがって出土した。上層出土の土器は褐色を呈しているのに対し，下層出土の土器は全て灰色をおびていたが，これら上・下層の土器片が接合できることから一度に廃棄されたことが想定できる。なお途中から湧水が激しく，土壙底部に自然層である砂礫層の存在を確認した後，調査を終了した。

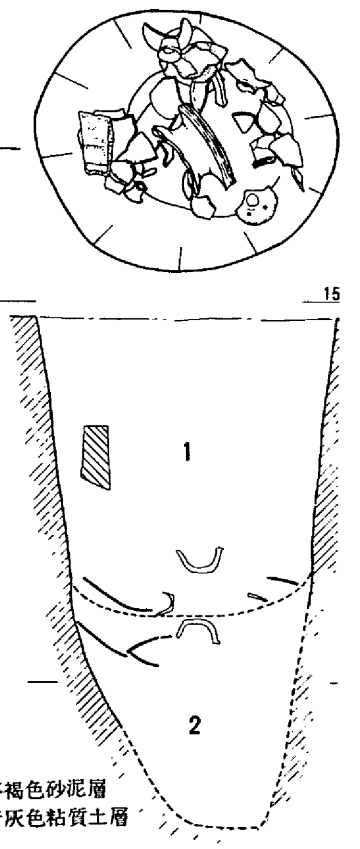
＜遺物＞　壷形土器（359，360）360は器壁が厚く調整もていねいな，重厚な大型の土器である。頸部はほぼ垂直に立ち上がり，口縁部は外方に強く開き，内面ではゆるやかな弧を描く。口縁端部はやや内傾して上下に拡張し，端面には四条の退化凹線が廻らされている。外面は頸部に細かな刷毛調整，肩部にかけては篦磨き調整されている。内面は口縁部から頸部にかけて横方向の篦磨き，以下刷毛調整している。

甕形土器（361～363）361は肩部付近に最大径をもつと思われるが，胴部下半はゆるく内彎しながら底部に至る。底部中央はわずかに凹む。口縁部は「く」の字状に外反し，口縁端部は上下に拡張しており，三条の退化凹線が施されている。胴部は外面を刷毛調整，内面を篦削りしている。363は他に類似例の少ない底部の径の広い割りには器高の低い土器で，「く」の字状に開く口縁部をもち，ずんぐりしている。胴部外面は刷毛調整，内面は篦削りしている。

高杯形土器（366～370）360は手捏の稚拙なものである。367は深い杯部に，やや内傾して立ち上がる口縁部をもち，端部にわずかな凹みをもつ。368，369はゆるく外彎する深い杯部に，口縁部はやや内傾して立ち上がり，さらに斜め外方に開く。370は浅い杯部に斜め外方に外反して立ち上がる口縁部をもつ。脚部は長く棒状を呈し，途中から「ハ」の字状に低く広がるものと思われる。

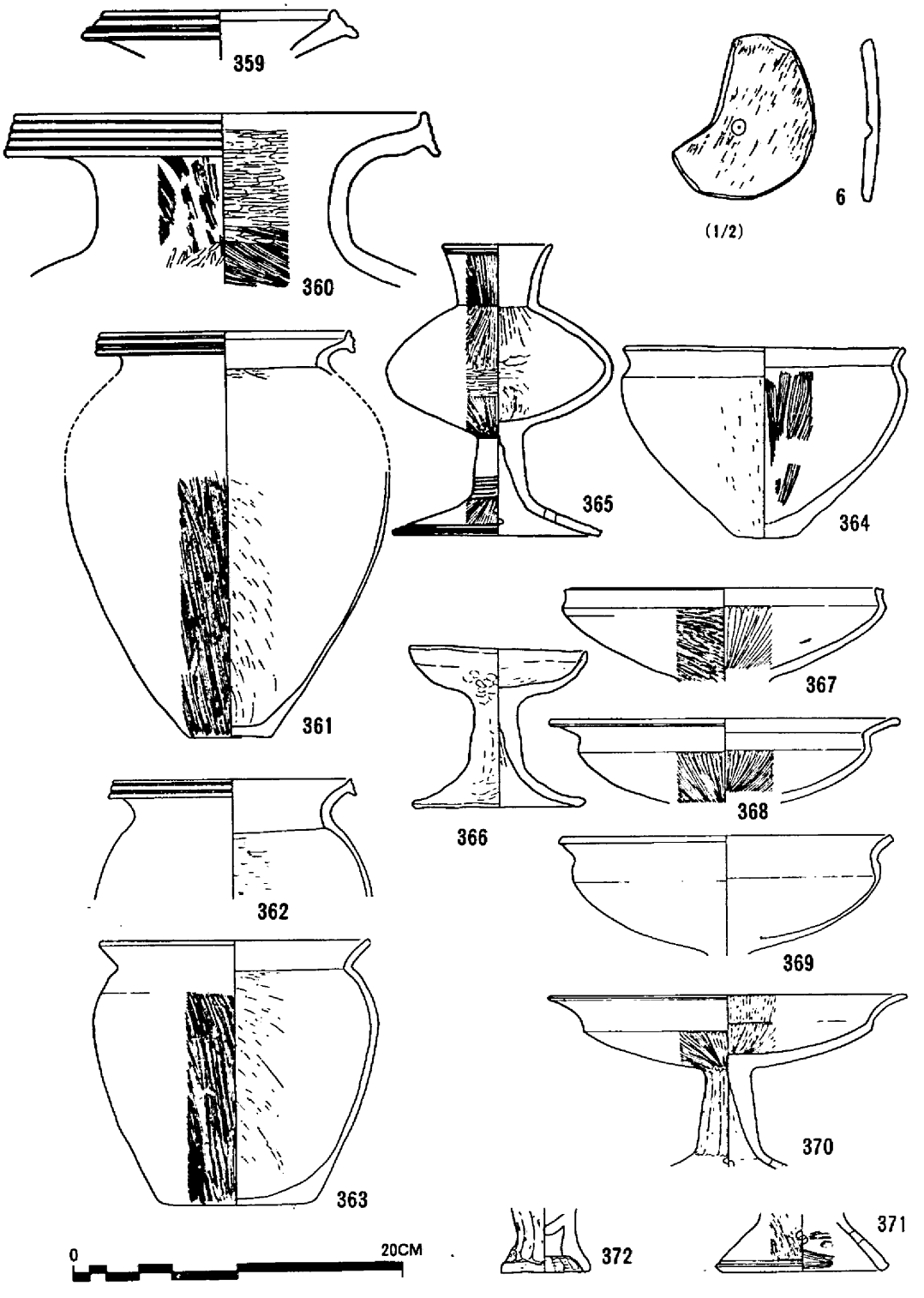
杯部・脚部の接合方法は367，369が円盤充填法であるのに対し370は脚部の差し込み法である。

台付直口壷形土器（365）わずかに斜め外方に開く口縁部をもち，端面に二条の凹線を廻らせている。胴部は隅丸菱形を呈し胴部中央に最大径をもつ。脚部は370と同様であるが，途中五条の沈線が螺旋状に廻らされ，脚端部にも

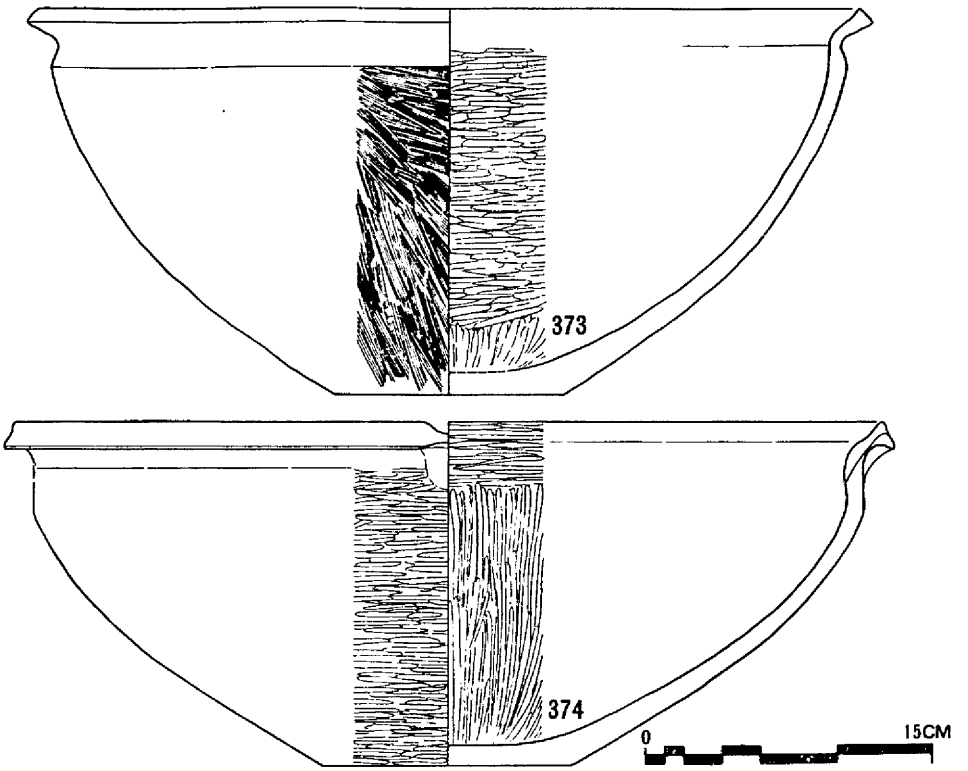


1．茶褐色砂泥層
2．青灰色粘質土層

第117図　東鬼川市　2－P－38
遺構図（1/20）



第118図　東鬼川市　2－P－38出土遺物（1）



第119図　東鬼川市　2－P－38出土遺物（2）

二条の凹線が廻らされている。器表面は全てていねいな篦磨き調整が成されている。

小型鉢形土器（364）は，「く」の字状にゆるく外反する短かい口縁部をもつ。肩部に最大径をもち，胴部下半にかけてゆるく弧を描きすぼまるが，底部付近では逆に反って終わる。全体に雑な作りで，内面に荒い刷毛調整痕が残る。

鉢形土器（373，374）373は斜め外方に開く口縁部をもち，端部がわずかに肥厚する。胴部はゆるく弧を描きながら底部に至る。374は斜め外方に開く口縁部をもち，端部は下方に拡張し口縁部の一箇所には指で強くナデて片口部を作り出している。胴部はゆるく弧を描きすぼまりながら，底部に至る。373とくらべて浅い。373は外面は刷毛調整であるのに，374は内外面ともに篦磨きであり，胎土も前者に比べ砂粒が少なく，ていねいな作りの土器である。なお，374内面にはスス状の黒い付着物が確認される。

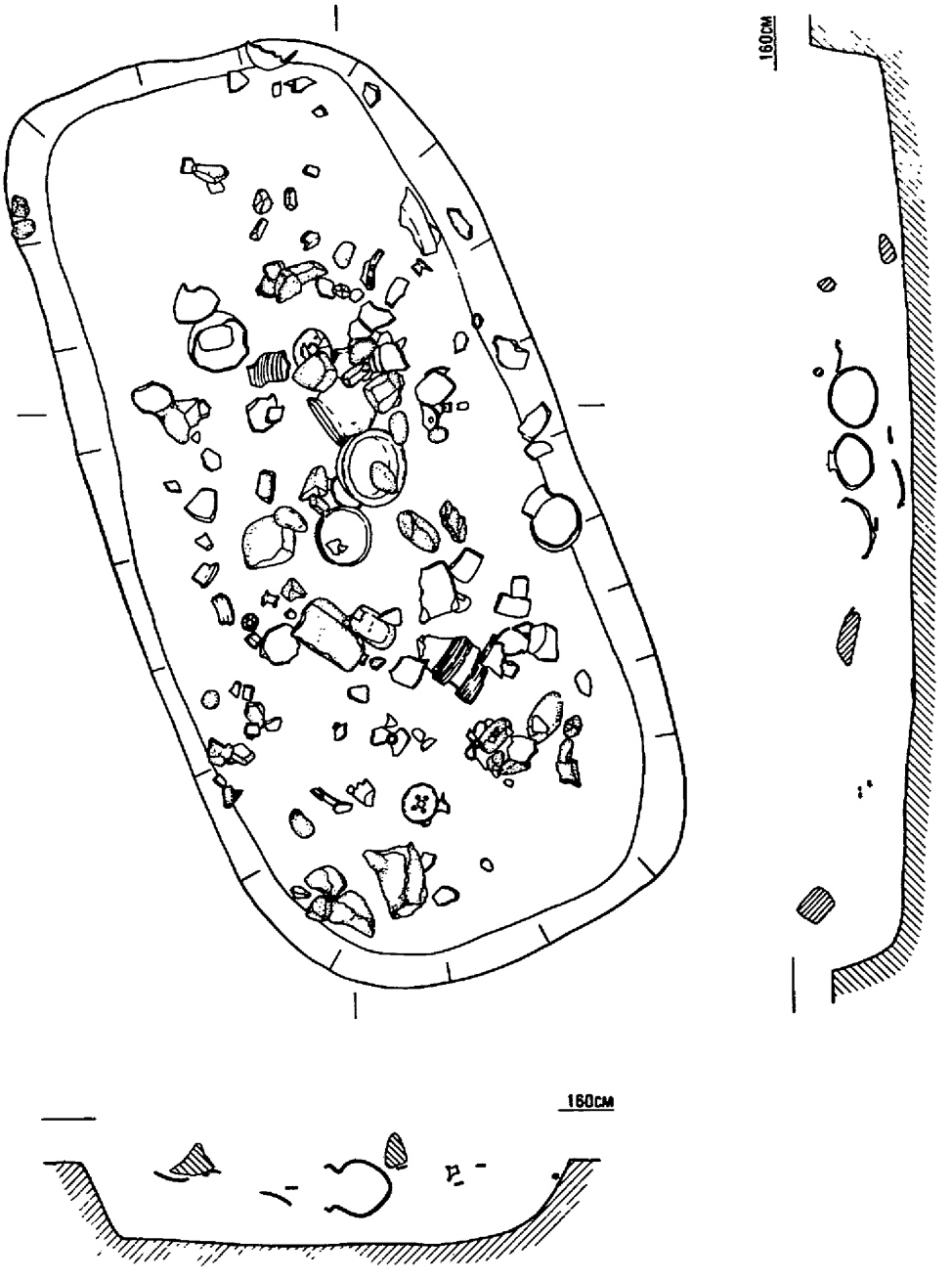
この他に，土器片を丸く削り取った紡垂車（6）が出土したが，円孔を穿つ途中で放棄されたものらしい。

以上，伴出遺物の形態から上東・鬼川市Ⅱ式～上東・鬼川市Ⅲ式にかかるものと考えられる。

（江見）

33)　9－P－1

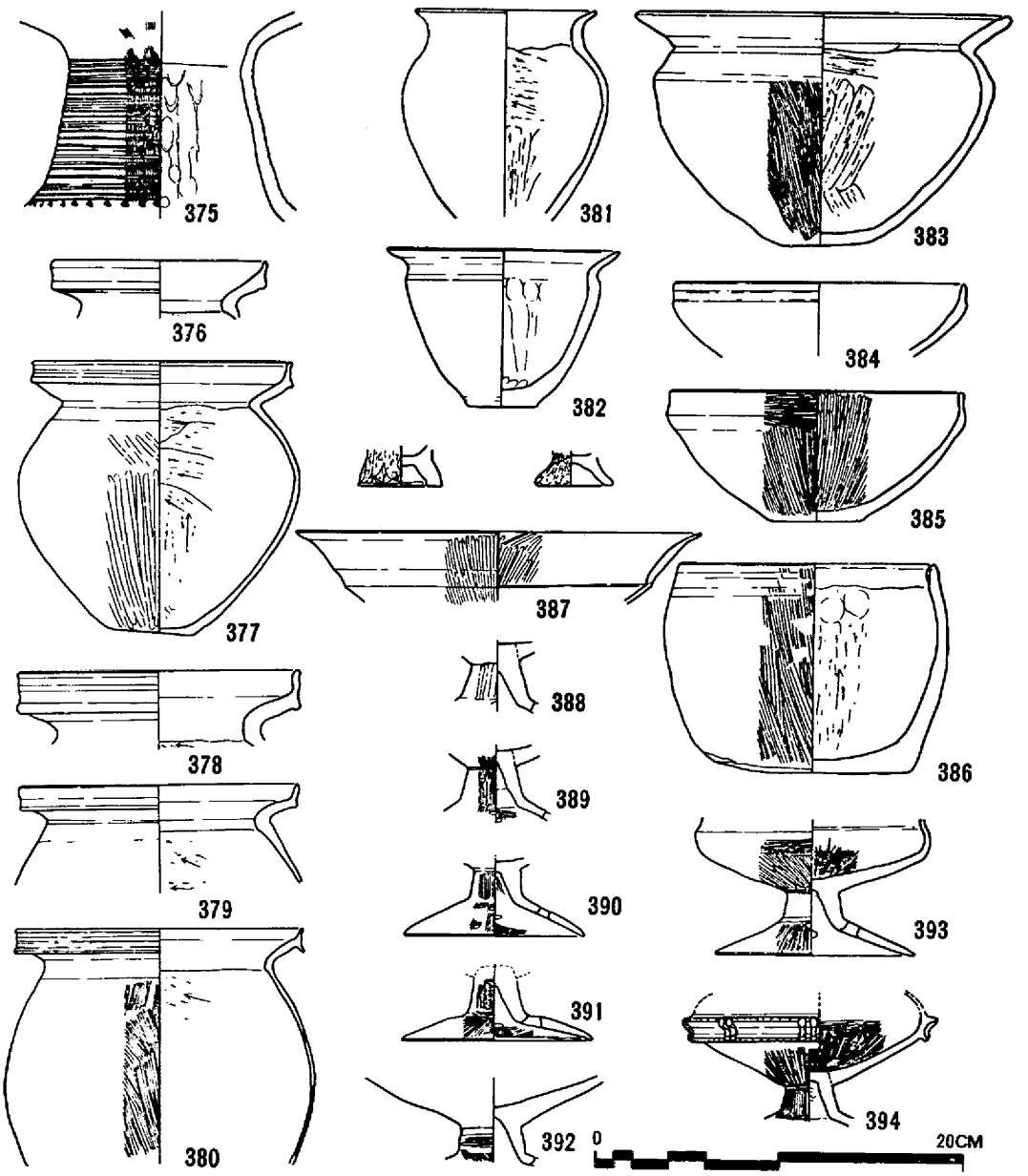
＜遺構＞　H－14を切って検出されたもので，510×215cmの隅丸長方形を呈し，深さ40cmを測る。



第120図　東鬼川市　9－P－1遺構平・断面図（1/20）

遺物は径３～30㎝の礫とともに土壙全体に散在しており，中央付近からは完形品が数点出土した。土壙の平面プラン及び遺物の出土状態から何らかの内部構造施設を想定したが，断面観察では暗灰色砂泥土が一様に堆積しており，全く土層の変化は認められなかった。前述の不整方形のプランを呈す土壙と同じく，当土壙もその性格は不明である。

＜**遺物**＞　壺形土器（375，381）375は長頸を呈すものであるが，頸部に廻らされた沈線は浅く，



第121図　東鬼川市　9－P－1出土遺物

数箇所途切れた部分がみられるなど，作りが雑になっている。

甕形土器（376～380）いずれも「く」の字状に外反する口縁部をもち，端部は上方ないし上・下方に拡張させている。端面は横ナデによって凹線文に仕上げられている。377は胴部中央よりもやや上部に最大径をもち，ふくらみぎみに底部に至る。外面は箆磨き調整，内面は箆削りがされている。380は胴部中央に最大径をもち，やや間延びした胴部を作っている。

高杯形土器（387～392）いずれも短かい脚をもつもので，脚部外面は箆磨き調整されており，内面には刷毛目が残る。水漉し粘土を使用している。

台付直口壷形土器（393，394）394は胴部中央に二条の凸帯を廻らせており，さらに箆状工具による刻み目が施されている。また凸帯間には２本一対の棒状浮文が８箇所に配されている。脚部は高杯形土器と同様である。

鉢形土器（382～385）383は斜め外方にするどく開く口縁部をもち，張りのある肩部からふくらみながら底部に至る。胴部外面は刷毛調整，内面は箆削りされている。385は直立する口縁部をもつ浅い小型のものである。内外面とも細かい箆磨き調整されている。

他に，製塩土器（395，396）や鉢形土器（386）が出土している。

以上，これらの土器は古い様相を呈す土器も何点か見られるが，高杯形土器の特徴から才の町Ⅰ式よりやや先行する時期のものであると考えられる。（江見）

34)　6－P－41

＜遺構＞　当調査区の47ライン北寄りに検出された径約80cm，深さ約25cmを測る土壙である。東南隅を約¼位６－Ｐ－40によって切断されている。

＜遺物＞　小型壷形土器（402），甕形土器（397～401）が出土している。

402は口縁部が短く立ち上がるもので，端部は丸くおさめ，口縁下部に一対の円孔（径約3.5mm）を穿つ。口縁部内外面ともに横ナデ，器外面は箆磨き，器内面は押圧でそれぞれ調整している。

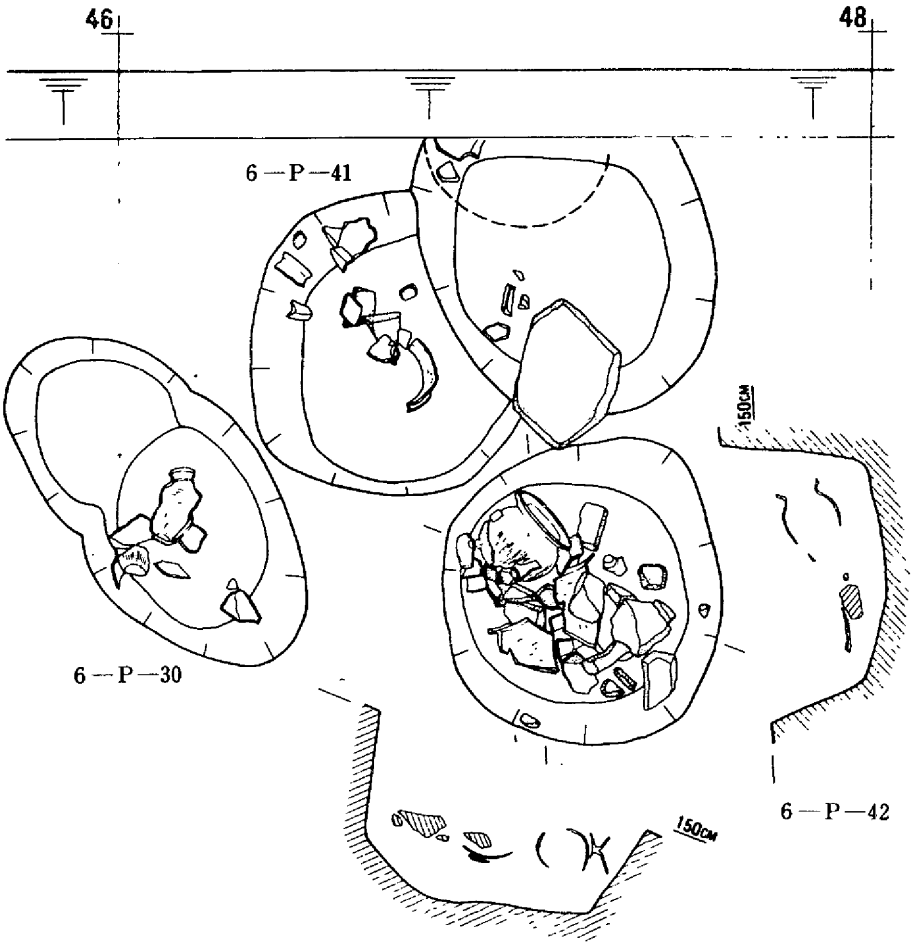
甕形土器は，口縁端部を内傾させ上下に拡張をもつ397・400と多少肥厚させた398・399の二種類がある。前者は端面に二～三条の浅い凹線を廻らせている。内面箆削りはいずれも口縁部までは至っていない。胎土は砂っぽく茶褐色を呈すものが多い。

これらの土器の形態・特徴から，上東・鬼川市Ⅰ～Ⅱ式に比定される。

35)　6－P－30

６－Ｐ－40に近接して検出された，約70×55cmの不整円形を呈し深さ約25cmを測る土壙である。遺物は，403の甕形土器が一点のみ破損した状態で出土している。

403は口縁端部がわずかに内傾して上下に拡張する口縁部をもち，端面には凹状のナデによるくぼみがみられる。口縁部内外面ともに横ナデ，胴部外面は荒い刷毛で調整している。胴部内面は箆削りが全体に行われ，そののち上半部のみその上から細かな横方向の箆磨きで調整している。この土器の形態・特徴から上東・鬼川市Ⅱ～Ⅲ式に比定できる。



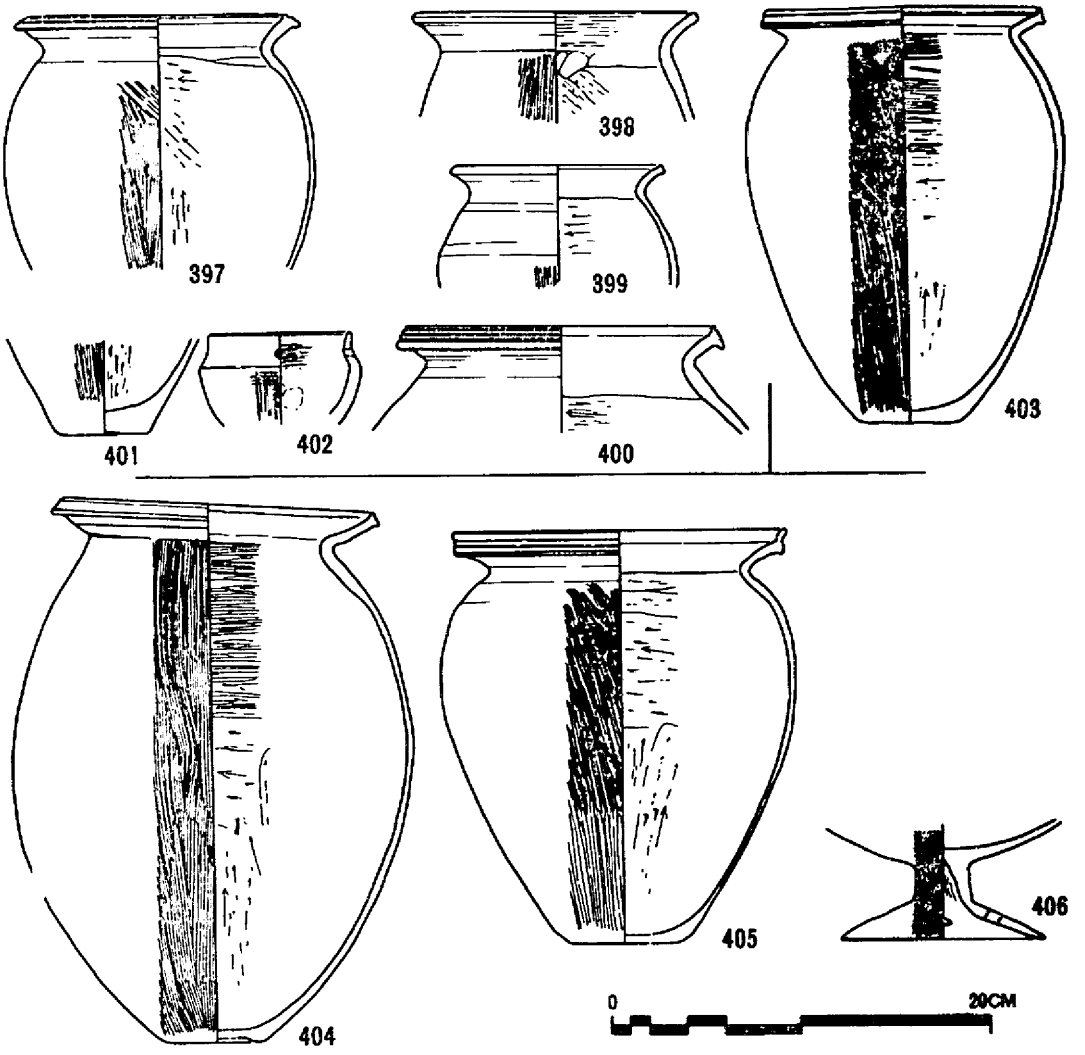
第122図　東鬼川市　6－P－30・41・42遺構平・断面図（1/20）

36)　6—P—42

＜遺構＞　6－P－40に南接して検出された径70～80cm，深さ約40cmのほぼ円形を呈する土壙である。遺物は底から少し浮いた状態で，完形を含み出土している。土器の上には，5～15cmの角礫が数個散在していた。

＜遺物＞　404は胴部が細長く，最大幅をほぼ中央かそれ以下にもち，「く」の字状に折れ曲がる口縁部はわずかに内彎しながら立ち上がり，端部を肥厚させている。外面は細かな刷毛で調整しているが，内面は403と同様に篦磨きがみられる。色調は黄色っぽく，また胎土も粘土っぽく従来の上東式土器にはみられないものである。405は，徐々に下すぼまりになる胴部をもち，口縁端部がほぼ垂直に立ち上がり，端面にナデによる細い凹みをもつ。外面は繊維状工具によるナデ，内面は篦削りで調整している。406は，短かい脚柱をもち，裾部界に屈曲をもつ。

405，406の特徴から，上東・鬼川市Ⅱ～才の町Ⅰ式に比定できる。　（柳瀬）



第123図　東鬼川市　6－P－30・41・42出土遺物

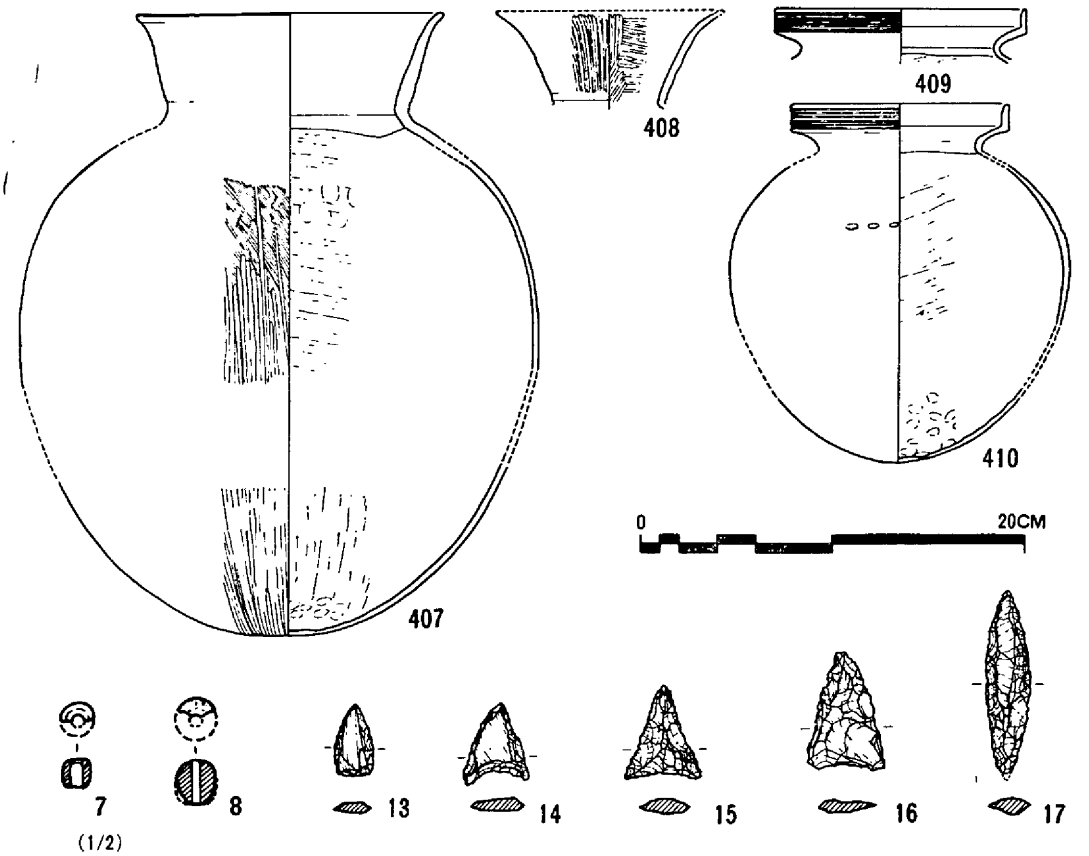
37)　各種土壙出土遺物

上記の代表的な土壙の他に，単独に出土した土器，あるいはガラス小玉や石鏃をもつ土壙がいくつか存在しているので，以下簡単に記しておく。

407～410は遺構の確認ができなかったものの，H－15の中央上部から一括して出土したものである。壷形土器407は斜め外方に立ち上がる口縁をもち，端部をわずかに外方につまみ出している。甕形土器410は口縁端部に拡張面をもつもので，端面には櫛描平行沈線文が施されている。

壷形・甕形両土器ともに胴部は球形を呈し，丸底を示す。いずれも亀川上層期のものと考えられる。

なお，ガラス小玉及び石鏃は表5にその概要を記す。　（江見）



第124図　東鬼川市　各種土壙出土遺物

ガラス玉

番号	出土土壙	最大径	孔の径	長さ	色調	時期
		cm				
7	9－P－2	0.45	0.15	0.35	淡青色	上東・鬼川市Ⅱ
8	7－P－6	0.55	0.15	0.6	淡青色	上東・鬼川市Ⅱ

石鏃

番号	出土土壙	型式	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量	時期
						cm	g	
13	6－P－23	平基無茎式	サヌカイト	1.9	1.0	0.2	0.5	上東・鬼川市Ⅱ
14	6－P－8	凹基無茎式	サヌカイト	1.8	1.7	0.3	0.9	上東・鬼川市Ⅱ
15	7－P－46	凹基無茎式	サヌカイト	2.3	2.0	0.4	1.4	上東・鬼川市Ⅱ
16	6－P－43	凹基無茎式	サヌカイト	3.0	2.0	0.3	2.5	上東・鬼川市Ⅱ
17	7－P－46	凸基無茎式	サヌカイト	4.8	1.1	0.4	2.8	上東・鬼川市Ⅱ

表5　東鬼川市各種土壙出土ガラス玉及び石鏃一覧表

第5節　西鬼川市調査区

西鬼川市調査区は，東を東鬼川市地区との境の用水から西を田所地区との間の農道までの約70mを言う。東端を亀川地区，西端を西鬼川市地区とする南北にのびる幅約 180 mの上東遺跡中最も遺跡の密度の高い微高地の西側部をしめる調査区である。

今回の調査では，田所地区との間の農道から東約10m地点から西にゆるやかに微高地が下り始めるのを確認した。微高地上は，耕土，床土と続き，その下に10～20cmの茶褐色泥砂土包含層が堆積し，その下に基盤層である黄褐色泥砂層が続く。

遺構については，調査区西側で前回調査で検出した弥生時代後期前半を中心とする南北に走る数本の溝，柱穴土壙群の続きを確認するとともに，溝２，溝４の間に南北に走る新たな溝７を検出した。調査区東側は，前回調査で幅 2.5 mの現代溝が斜めに走り調査の対象とならなかったために遺構の存在を予想しながらも確認されていなかった。しかし，今回の調査では，弥生時代後期前半のほぼ南北に走る数本の溝，土壙さらに鎌倉時代初め頃と考えられる溝，土壙，池状遺構，柱穴状土壙などを検出した。今回の調査で検出した大部分の遺構は，弥生時代後期前半の時期に限られた。その他遊離遺物には，弥生時代中期末～後期後半の土器，須恵器など出土したが少量にすぎなかった。　（中野）

１）溝　１

＜**遺構**＞微高地の西寄りに溝が集中する中にあって一番西端に位置する。今回の調査では，南北方向に曲りながら続いており幅200～250cm，深さ70～75cmを測る。

土層は，最下層が灰褐色粘質土層で，灰茶色粘質土層，灰黄褐色泥砂層，茶褐色泥砂層，灰茶褐色粘質土層，灰褐色砂泥層，灰茶褐色泥砂層，茶褐色土層の順で堆積が見られた。土器の包含はあまり見られず上層の２層から図示した土器の他少量の土器片が出土したにすぎない。また最下層からは，後述する溝６と同じように自然木がみられた。

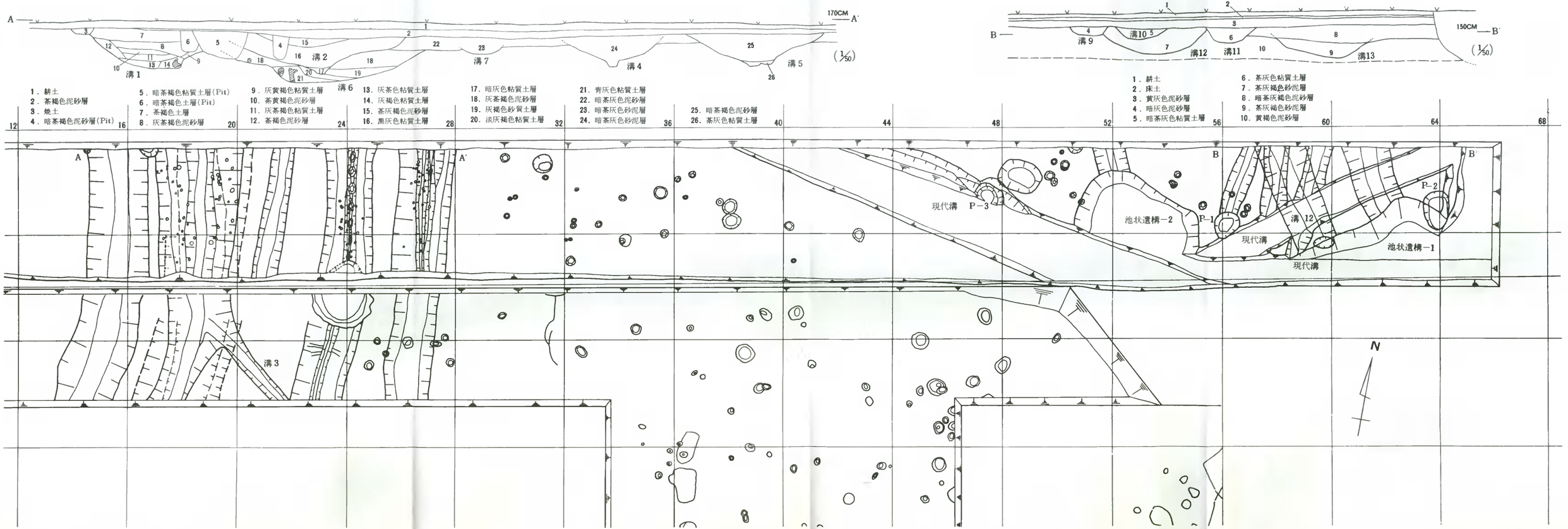
＜**遺物**＞甕形土器（412）は，上半部が欠損しているが，外面は箆磨き，内面は下部を縦方向の，その上部を横方向の箆削りを行っている。

台付鉢形土器（411）は，黄褐色を呈し胎土は砂粒を少し含むものの，精良な粘土を使用している。口縁端部は内傾し，上下に拡張する。口縁端面には三条の凹線をもつ。肩部には刺突文が廻り，胴部下半には横方向の箆磨き，さらに脚部にかけて幅広い縦方向の箆磨きを行っている。脚部器表には，四条の櫛描平行直線文，さらに裾部には透しを簡略化した箆描沈線文が施されている。

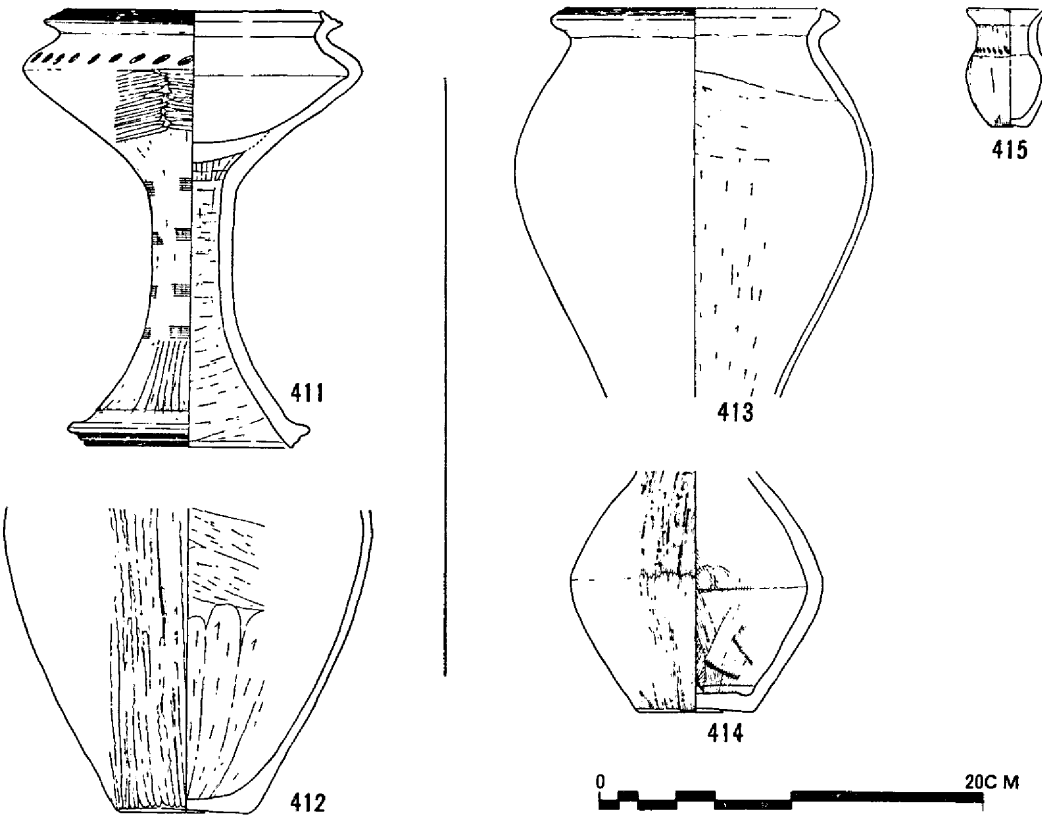
これらの土器は，上東・鬼川市Ⅰ式に比定できる。

２）溝　２

＜**遺構**＞溝１の東に隣接して存在する。下にある溝６と重複し，溝６を切りこんでいる。幅260～300cm，深さ60cmを測り，南北方向に延びる。溝は２段になっており，何度かの川ざらえが行われた



第125図　西鬼川市　遺構配置図（1／100）



第126図　西鬼川市　溝１及び６出土遺物

と考えられる。

土層は，溝底に暗灰色粘質土層，その上に黒灰色粘質土層が厚く堆積し，茶灰褐色泥砂層と続き凹レンズ状堆積を示す。また，両肩部からは，５～10㎝の杭痕と思われるものを10数本確認した。

遺物は，前回調査である程度出土したが，今回は各層から細片が少量検出したにすぎず，図化にたえ得るものはなかった。

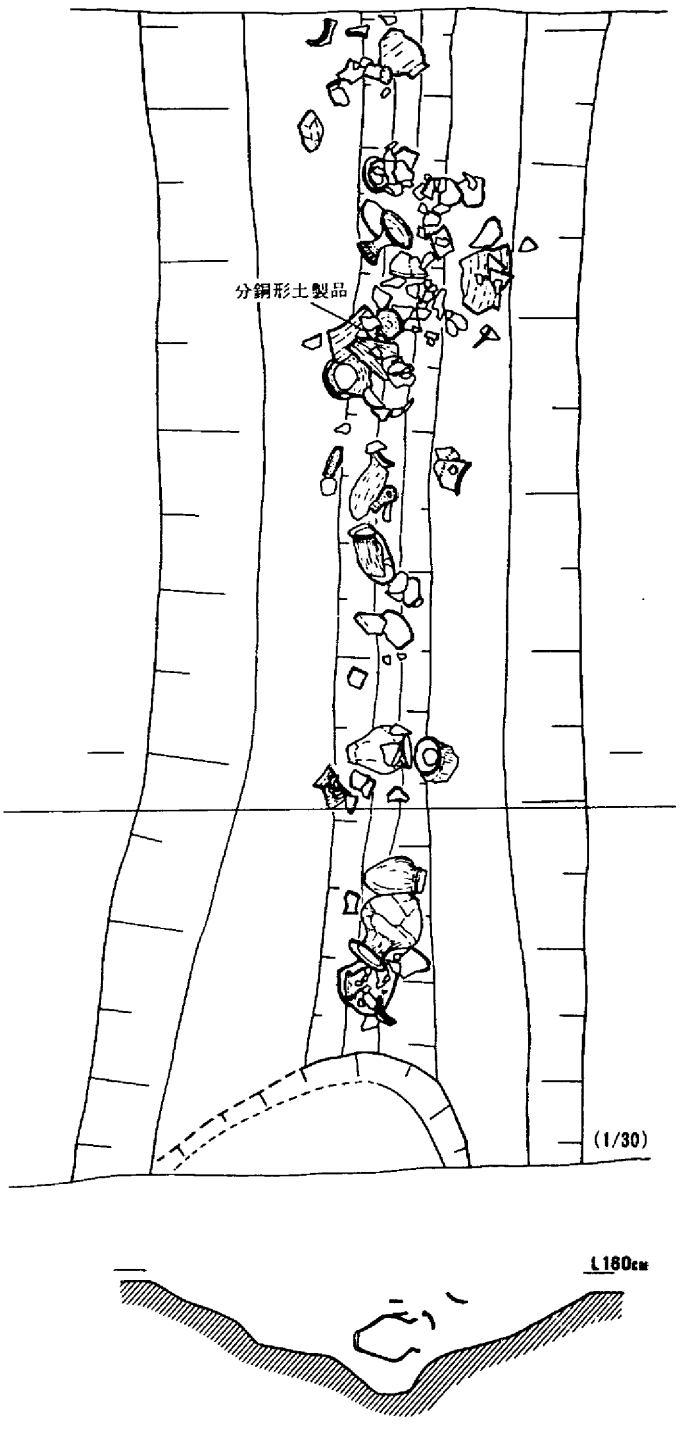
3）溝　6

＜遺構＞溝２の下層に位置する。ほとんど溝１，溝２と重複するため，肩部は確実にはおさえることができにくい。しかし，溝の底部は残っているのでほぼ南北方向に続く。

土層は最下層が青灰色粘質土層で，焼土を含んでおり，流木もみられた。次の淡灰褐色粘質土層にも焼土，炭化物の含有が多かった。さらに，灰褐色粘土層，灰茶褐色泥砂層と堆積する。最下層の青灰色粘土層には不自然な段があり，これは改修が行われたことを示唆するものであろう。

遺物は，青灰色粘土層から数点出土している。

＜遺物＞壺形土器（414）は，外面が二段に分けて篦磨きされ，内面下半には刷毛目が残り器壁は



第127図　西鬼川市　溝４遺構平・断面図（1/30）

厚い。

甕形土器（413）は，口縁端部が内傾し上部に多少肥厚させ，口縁端面に二条の凹線文を施す。外面の整形は剝離が激しく不明であるが，内面は下半に縦方向，上半に横方向の箆削りが認められる。小型の長頸壺形土器（415）も出土している。

溝１とさほど時期的な差はない。

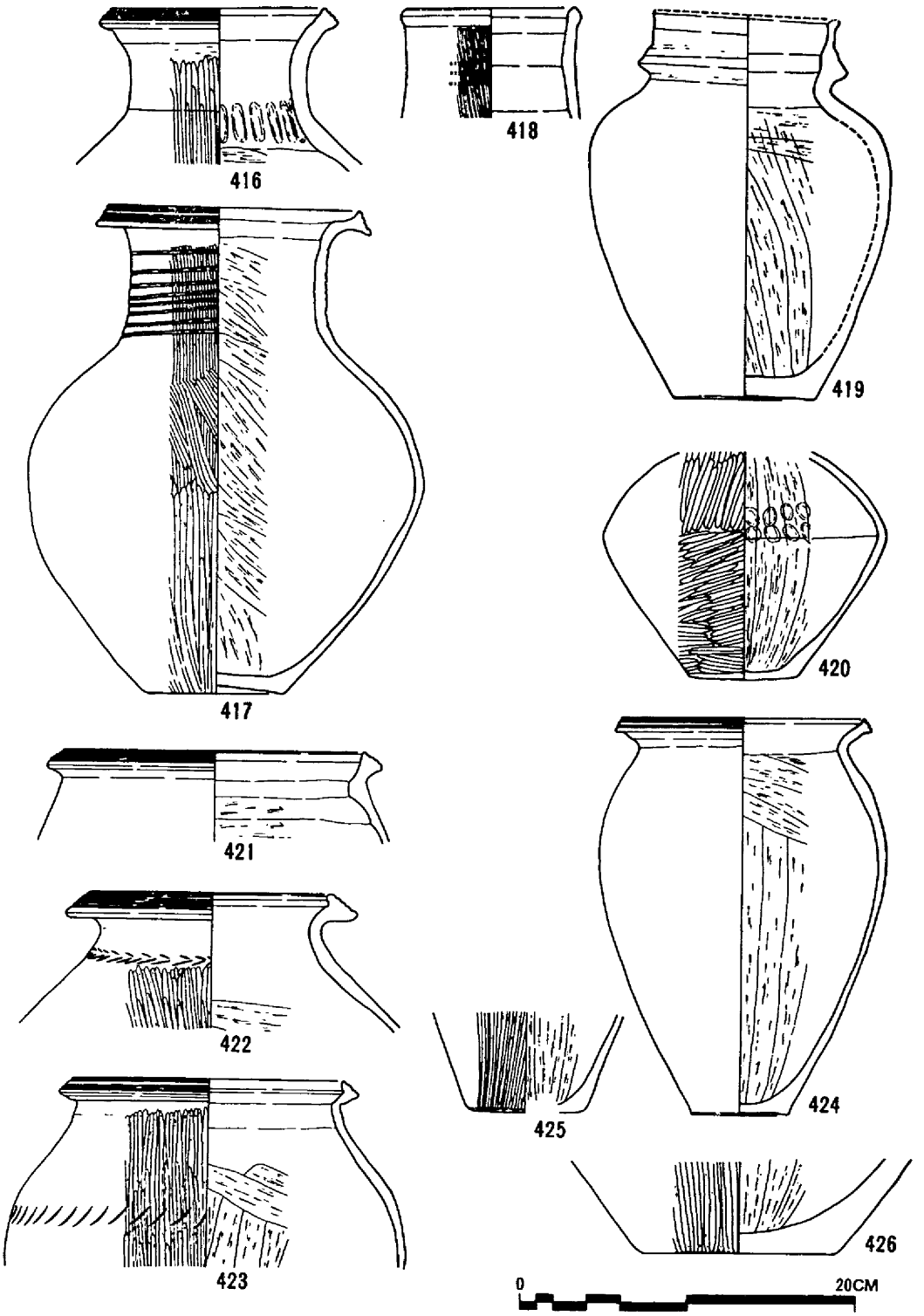
4）溝　4

＜**遺構**＞溝５の西側に隣接して検出した。幅160～200㎝，深さ50～60㎝で，溝５と平行してほぼ南北方向に続く。溝は，２段掘りになっており，溝底には約60㎝間隔ごとに深さ５～10㎝の楕円形の落ち込みが存在する。何度か行われたと考えられる改修の際のものであろう。また，肩部と底部には５～10㎝の杭痕と思われるものが多数検出された。

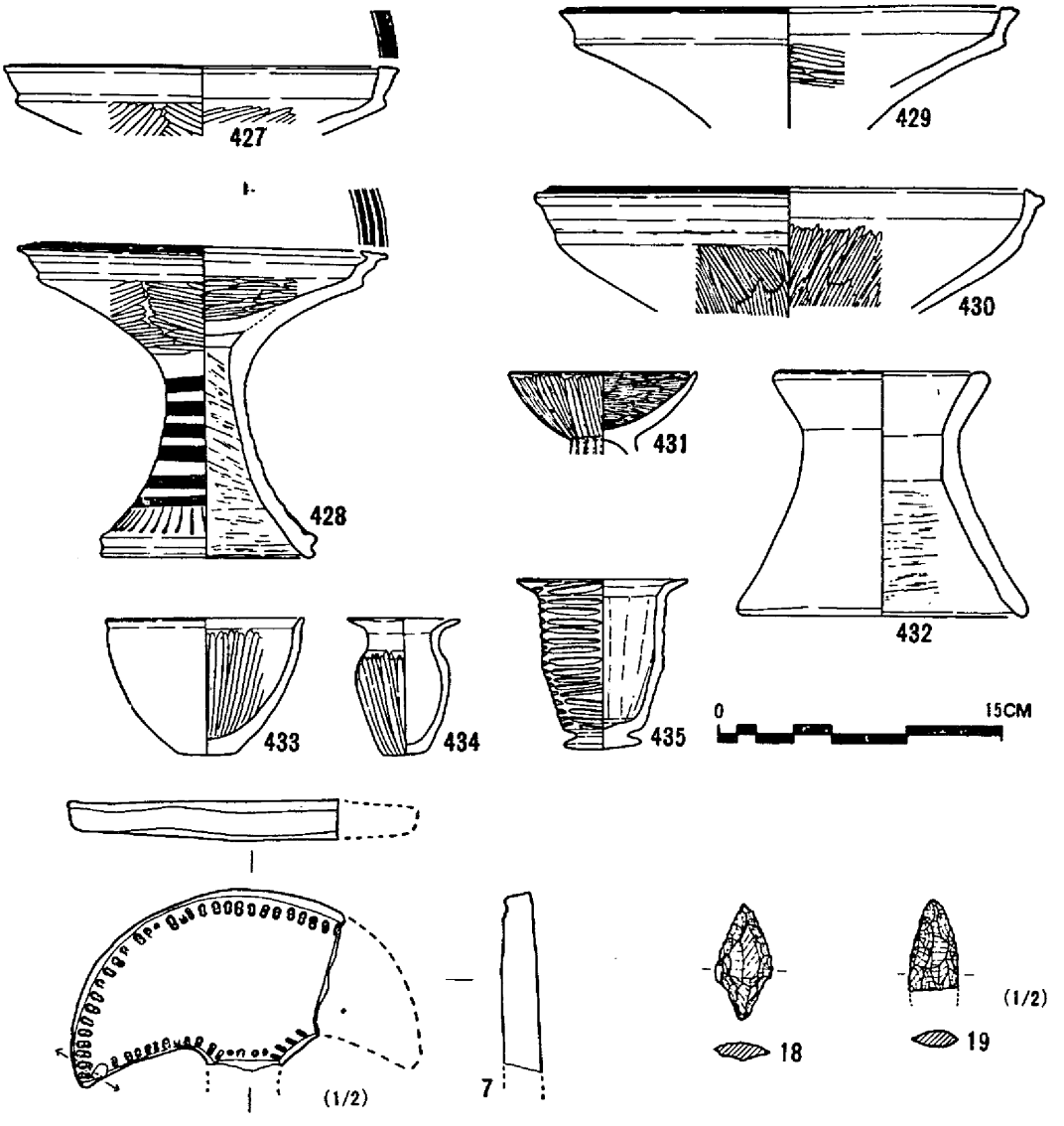
堆積土は，暗茶褐色泥砂層の単一層で，下層の方はやや粘質を帯びており，炭化物の混入がみられた。

遺物は，溝底から10～20㎝浮いた状態で帯状に一括して出土した。431，433，435と石鏃（18，19）は溝の発見面から，分銅形土製品や他の土器は下層から出土した。

＜**遺物**＞壺形土器（416～420，422）416，417は，いわゆる長頸壺である。口縁部が大きく外へ開き，口縁端部は内傾し，上下に拡張する。頸部に箆描沈線をもつ417と，口縁部は外反し内傾するが上下にそれほど拡張がな



第128図　西鬼川市　溝4出土遺物（1）



第129図　西鬼川市　溝4出土遺物 (2)

く，頸部に篦描沈線をもたない416がある。420は，小型の壺で胴部が「く」の字状に張る。外面下半に横方向の，上半に縦方向の篦磨きを施し，内面を縦方向の篦削りで仕上げている。418は，直口壺で口縁部はやや外反気味で，端部は丸くおさめている。外面は，縦の篦磨きをしたのち数条の篦描き沈線を施す。419は，口縁部が上下に拡張し，直立気味に立つ。端部は，破損しているがほぼ点線ぐらいで終ると思われる。表面は，剝離が激しく観察しがたい。内面は縦方向の篦削りで成形している。全体に器壁が厚く，底部もしっかりしている。色調は黄褐色を呈し，胎土は砂粒を多く含み，他の土器群との差違が認められる。形態においても，弥生時代中期末からの系譜では追いがたく，上東

遺跡で製作されたものと認められがたい土器である。422は，口縁端部が肥厚し，内傾して上部に拡張する。口縁端面は凹線文をもつ。「ハ」の字に開いた肩口には，綾杉状に列点文を施し，外面を縦方向の篦磨きで仕上げている。内面は，頸部まで横方向の篦削りである。

甕形土器（421，423，424）は，口縁端部が上下に拡張し，数条の凹線文をもつ。424は，「く」の字に屈曲する口縁部をもち，肩部の張り出しがすくなく胴長である。423は，肩部下に篦状工具による列点文がめぐらされている。

高杯形土器（427～430）杯部は，やや外反しながら開き，口縁部がほぼ垂直に立ち上がり口縁端部が横に鋭く拡張する428と，端部を肥厚させるだけの427，429，430がある。428は，杯部外面を横方向の篦磨きで調整し，脚部には五条の櫛描平行沈線文，透しの簡略化したものが施文されている。脚部端部は，肥厚気味に拡張している。

器台形土器（432）は，脚部を「ハ」の字形に開き，口縁部は斜め上方に立ち上がり，端部は多少肥厚する。内面は，下部を篦削り，上部をナデによって仕上げている。外面については，剝離が激しく観察しがたい。口縁部から脚部に一箇所黒斑が認められる。また，淡黄褐色を呈し，胎土中には砂粒を多く含む。上層から出土した435は，口縁部が大きく外反し，不安定な底部をもつ。外面は水平方向に大きな叩きを施す。

分銅形土製品（7）は，上半部片である。胎土は緻密な粘土に細かい砂粒を多く含み，表裏面とも暗茶褐色を呈する。表面は，やや凸面をなし，表裏面ともナデによって仕上げられている。表面外縁部には，小口な竹管文を2つ組み合わせて施文されている。

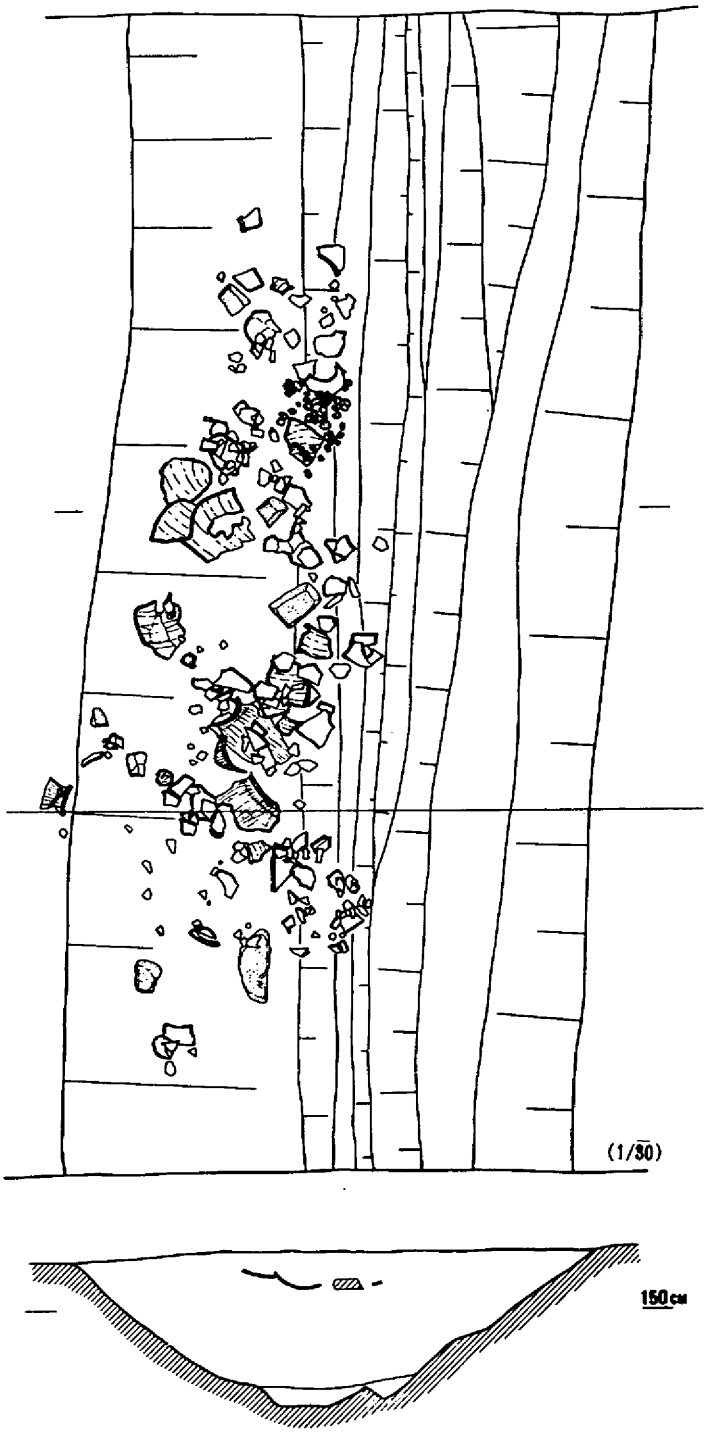
石鏃（18，19）は，サヌカイト製である。18は，重量が，1.7 g で凸基式である。19は，一部破損しているが重量1.5 g を計り，凸基式であろう。

5）溝　5

＜遺構＞溝4の西側に平行して南北に続き，幅200 cm，深さ60cmを測る。北側では，溝底が二重になり改修が行われたことをものがたっている。肩部，底部には，杭痕状のものが認められた。

堆積土は，最上層に茶灰色粘質土層，その上層には厚く暗茶褐色泥砂層が堆積する。両層とも少量の炭化物の混入がみられた。遺物は，ほとんど上層より一括して多量に出土した。下層からは，図示した446の他細片が少量出土したにすぎない。

＜遺物＞壺形土器（436～440，442）436は，いわゆる長頸壺である。口縁部は直立する円筒状の頸部から急に外反し，口縁端部は，上方に拡張して内傾する。口縁端面には六条の凹線をもつ。頸部には，しっかりした凹線文が施されている。437，438は，頸部が短く肩部が大きく張る。外面は，頸部から特徴的な篦磨きが施され，内面は頸部近くまで横方向の篦削り，その上部から口縁端部までを横ナデによって仕上げている。440，442は，甕形土器との区別が難しいが，一応ここでは壺形土器として報告する。口縁部は頸部からゆるやかに外反し端部はやや上下に拡張し数条の凹線文をもつ。頸部は，短くゆるやかに胴部に移行する。442は，肩口に三列に列点文を施し，底部に径1 cmの穿孔があり甑に使用されたと考えられる。



第130図　西鬼川市　溝５遺構平・断面図（1/30）

甕形土器（441）は，弥生時代中期末～後期前半にかけてよくみられるものである。前述した溝４の423も同様の土器である。

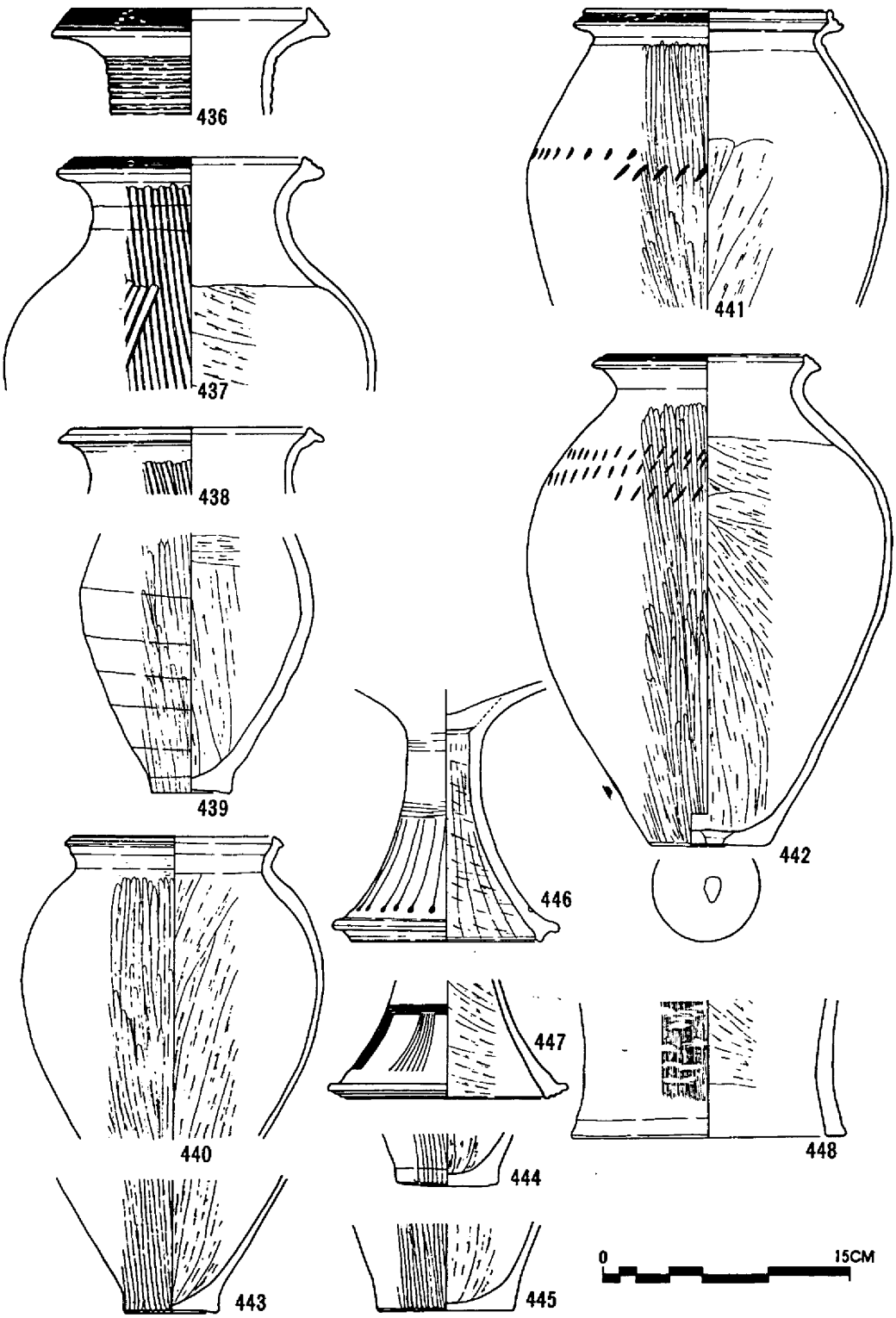
脚台形土器（446～448）　446，447は，おそらく高杯形土器か台付鉢形土器になるであろう。446は，脚部端部が拡張し，粗雑な箆描平行直線文，垂下する箆描沈線の下端に刺突を施す。448は，脚部端部がやや ふんばり気味で，外面を細かい縦方向の刷毛，内面を上から下へ箆削りで調整されている。この土器は，いわゆる回転台形土器と称されるものであろう。用途については，前記の回転台，供献台などと推定されるが断定的なものではない。

6）溝　7

＜遺構＞溝２と溝４との間に，新たに検出した溝である。肩口は，明瞭でなかったが幅80～100㎝，深さ15㎝とほぼ南北方向に延びている。堆積層は，暗茶褐色泥砂層の単層で遺物の包含はなかった。

前述した溝（１～２，４～７）は，溝７を除いて何回かの改修（川ざらえ）が行われたことが推察できる。また，杭痕と思われるものが溝の肩部，底部から多数検出され，用水施設の管理維持の一端がうかがえる。

前回調査では，溝の時期を弥生時代中期末と比定していた。しかし，今回調査の結果では，明らかに弥生



第131図　西鬼川市　溝5出土遺物

時代中期末を示す土器片は溝４，５から少量検出されるのみで，いづれの土器も磨滅しており，溝の時期を決定できるものではない。溝からの土器の大半は，いずれも形態及び施文方法などから見て上東・鬼川市Ⅰの時期を示すものである。

7）溝　8

＜遺構＞調査区東寄りに位置し，南北側は池状遺構１によって切断されている幅100㎝，深さ30㎝前後南北方向から北東方向に延びている。基盤層である黄褐色土層を切りこみ，堆積土は淡茶褐色泥砂層が堆積していた。池状遺構１との前後関係は，プランでは確認できなかった。

＜遺物＞溝内上層に少量の土器片を包含していた。土器片は，椀，小皿等の細片で，川入遺跡大道西Ⅰ調査のＰ－９出土の土器に手法，形態とも類似しており従来からの編年に従えば鎌倉時代初頭という時期があたえられる。

8）溝　9

＜遺構＞調査区西寄りに溝が集中する中にあって，西端の溝10に近接して存在する。溝は，ほぼ南北方向に延びＰ－１及び現代溝に切断されている。幅70～80㎝，深さ約20㎝を測り，暗茶褐色泥砂層が堆積している。また堆積層には，少量の炭化物が混入していた。遺物はまったく認められなかった。

9）溝　10

＜遺構＞溝９と溝11との間に位置し，溝９とほぼ平行に流れている。南側は，溝９と同様に現代溝に切られている。溝は，幅約100㎝，深さ約20㎝を測り，暗茶灰色粘質土層が堆積している。遺物は，溝９と同様に検出されなかった。

10）溝　11

＜遺構＞溝９，溝10とほぼ平行に走り，南側は底部が確認できるものの現代溝によって切断されている。幅約90㎝，深さ約30㎝を測る。土層は，茶灰色粘土層で炭化物が混入していた。遺物は，少量ながら弥生時代後期の土器片を包含していた。

11）溝　12

＜遺構＞溝９，10，11の下層に存在し，南西から北東の方向に検出された。溝は，溝９～11，池状遺構２，現在溝によって分断されており，残存状態は良くなかった。堆積土は茶灰色砂泥層で，遺物は弥生時代後期前半を示す土器片が数片出土しているのみである。

12）溝　13

＜遺構＞調査区の東端に溝12とほぼ平行して検出された。溝12と同様に現代溝，池状遺構２によって分断されている。幅150～170㎝で深さについては，この溝が溝12から東にかけて堆積する茶灰褐色

砂泥層から切りこんでいるのか否かは明らかではない。しかし，北壁際では茶灰褐色砂泥層から切り込みの可能性もある。遺物は溝底から若干の土器が出土しており，弥生時代後期前半の様相を示す。

堆積層は，上層の包含層である茶灰褐色砂泥層とほとんど区別がつかないが，若干明るい色調を示している。

断面及び包含遺物から，調査区東寄りに集中する溝の新旧関係は，溝13→溝12→溝９，10，11→溝８が考えられる。

13）P－1

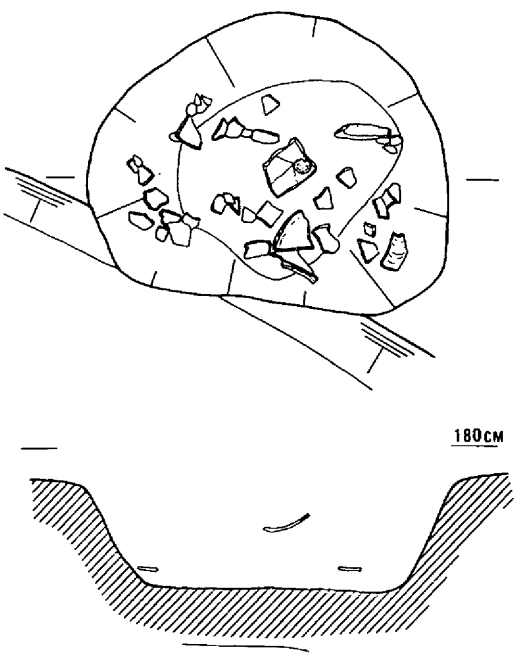
＜**遺構**＞調査区東側の溝９と重複して存在する。平面プランは長軸約 100 ㎝，短軸約80㎝の楕円形を呈し，深さ約30㎝を測る。埋土は暗茶褐色泥砂層で，遺物は底部より約10㎝前後浮いた状態で検出された。

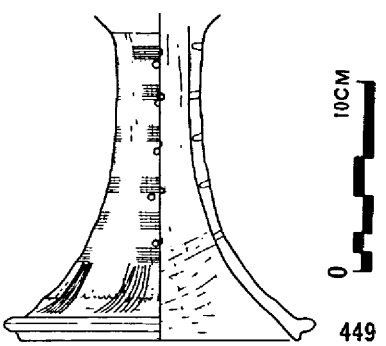
＜**遺物**＞復原図示できたのは，脚部（**449**）のみである。他には甕形土器の胴部片が出土している。**449** は，器表面を櫛描平行直線文を５帯，それに重なるように円孔透しを横４孔に５列に施していて，内側に通るものと通らないものがある。また透しの簡略化した沈線文も認められる。脚部端部は拡張し，古い様相を残すが前述した文様の施文は弥生時代後期前半を示すものである。

14）P－2

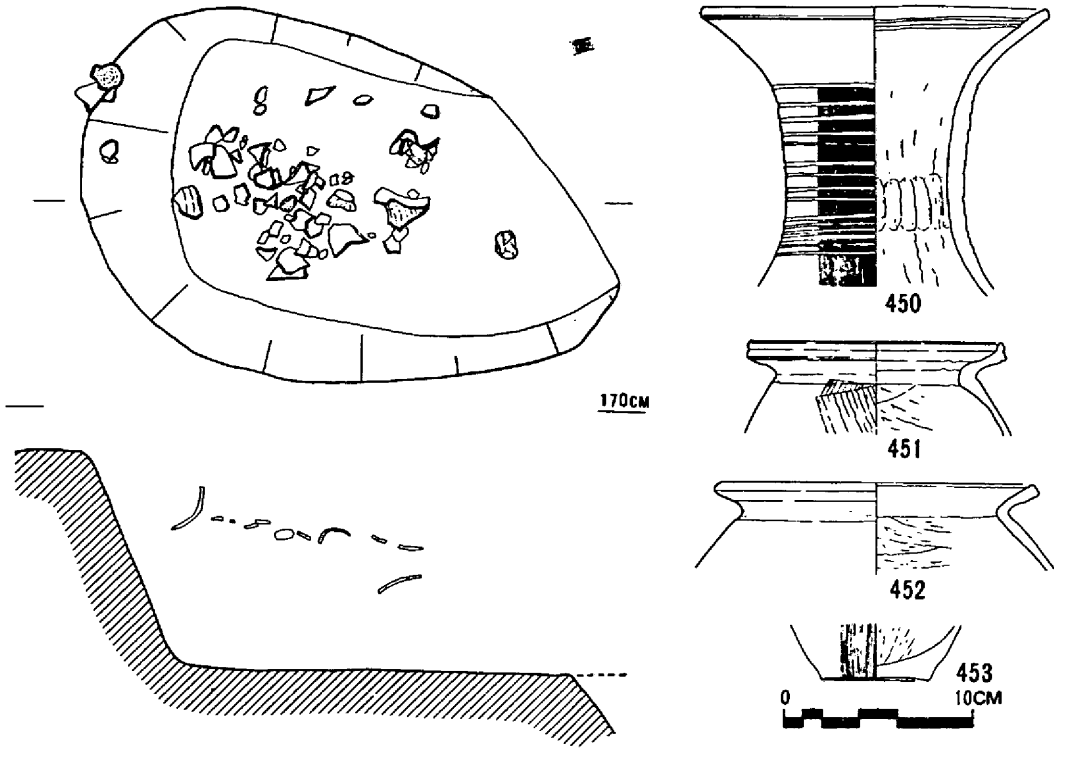
＜**遺構**＞調査区東端に，池状遺構２と現代溝に切られて検出した。推定長軸 150 ㎝前後，深さ約55㎝を測る。埋土は暗茶褐色土層が堆積しており，遺物は底部から30㎝程浮いた状態で出土した。

＜**遺物**＞壷形土器（**450**）は，長頸壷で口縁部がゆるやかに外反し，端部は肥厚，拡張をもたない。頸部には縦方向に細かい刷毛目を施し，篦描きの沈線が多数廻り，内面端部にも篦描き沈線を持ち，頸部にかけてはナデと指頭に



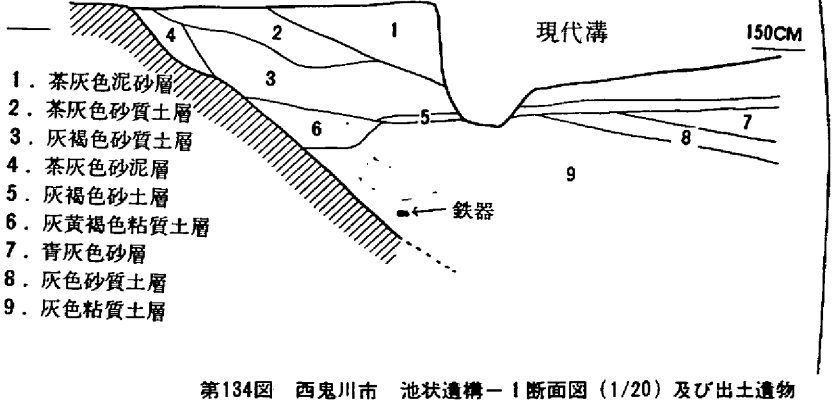


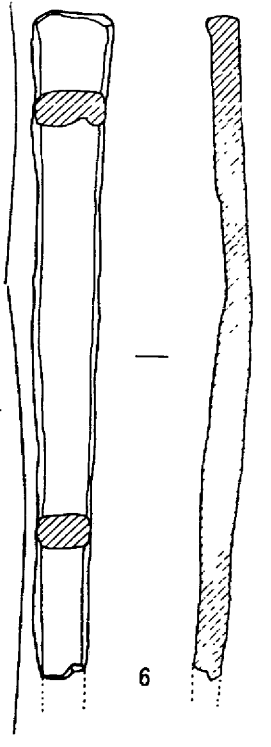
第132図　西鬼川市　P－1遺構図（1/20）及び出土遺物



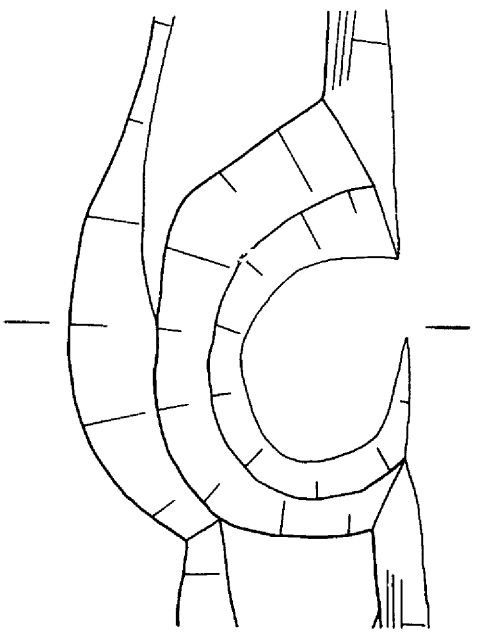
第133図　西鬼川市　P－2遺構図（1 20）及び出土遺物

よる押圧で調整されている。甕形土器（451，452）451は口縁部が上部に拡張し，器外面を板状工具で内面を横方向の篦削りで仕上げている。452の口縁は「く」の字形に外反し，端部は肥厚する。図示できなかったが他にも鬼川市Ⅱ式に比定される土器片が伴って出土している。

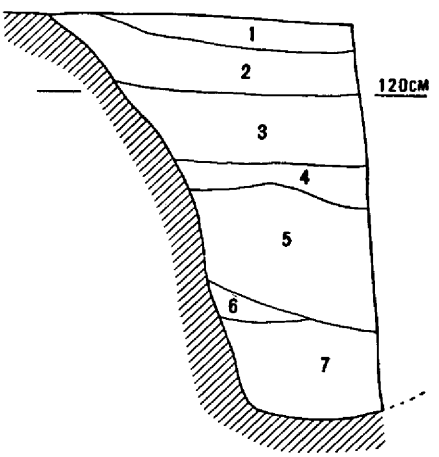




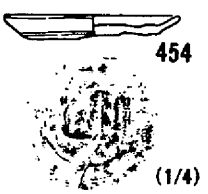
第134図　西鬼川市　池状遺構－1断面図（1/20）及び出土遺物



(1/20)



1．黄灰褐色泥砂層
2．淡茶灰色泥砂層
3．灰黄褐色泥砂層
4．灰青色砂質土層
5．暗青灰色粘質土層
6．青灰色砂層
7．暗青灰色粘土層



(1/4)

第135図　西鬼川市　池状遺構－2
平・断面図（1/20）及び出土遺物

15）池状遺構－1

＜遺構＞現代溝によって切断されており，残存する径 450 ㎝の不整円形を呈する。深さは約60㎝を測る。堆積土は，ほぼ均等に最下層から灰褐色泥砂層，茶灰泥色泥砂層，茶灰褐色砂泥層と，凹レンズ状に堆積していた。遺物は各層から少量ずつ，早島式土器と称される土器片を検出した。

16）池状遺構－2

＜遺構＞P－2及び溝（11～13）と重複して検出した。池状遺構1によって南側を切られており，また湧水のため底部まで確認し得なかったので，全容を明らかにしがたいが，多分池状遺構1と同じ規模のものであろう。検出面より約60㎝までは灰色粘土層が厚く堆積し，早島式土器の細片と共に「たがね」状の鉄器（6）を検出した。その上層の各層からは，弥生時代後期の土器から鎌倉時代初め頃にいたるまでの土器が出土している。

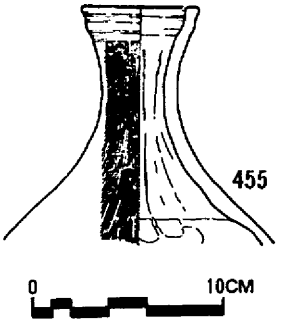
17）P－3

＜遺構＞現代溝に一部を切断された状態で検出した。この土壙は，径 100 ㎝前後の不整円形を呈し，深さ約 110 ㎝を測る。井戸に使用されたと思われる。遺物は最下層から 454 が出土した。　（中野）

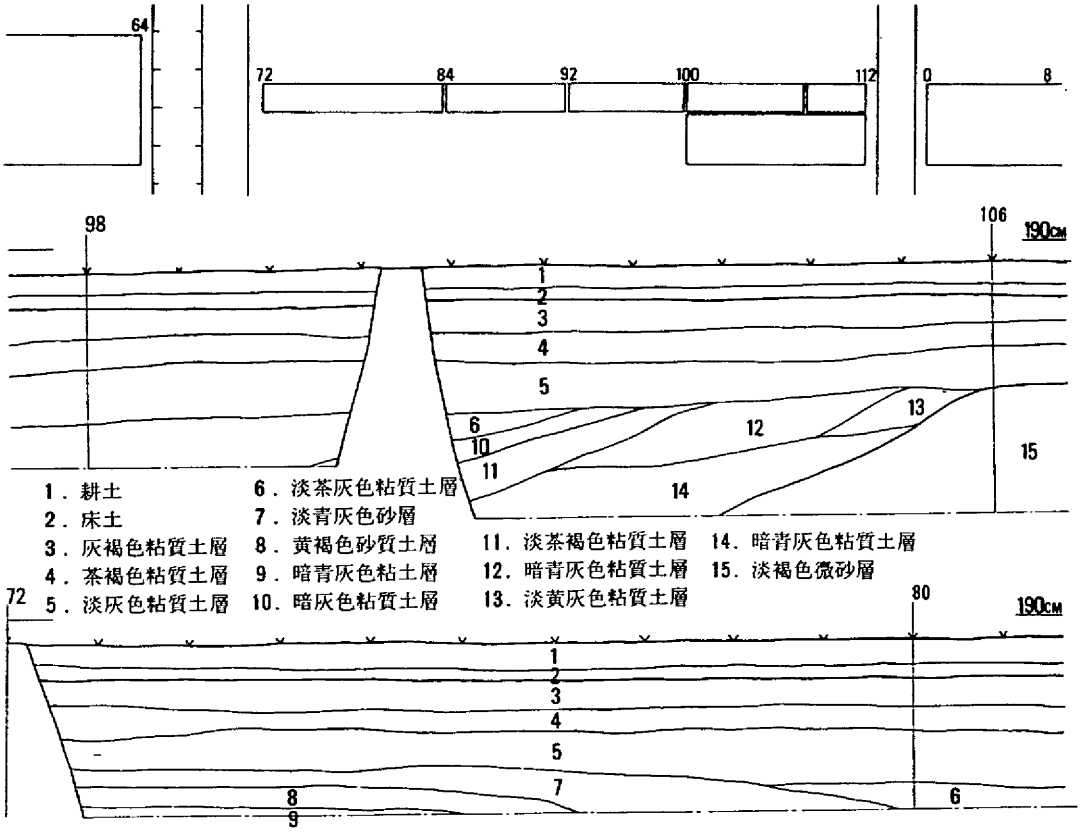
第6節　田　所　調　査　区

当調査区においては断面観察の結果，東西鬼川市微高地西斜面と下田所微高地東斜面を確認し，調査区全体が旧河道に当たることが判明した。

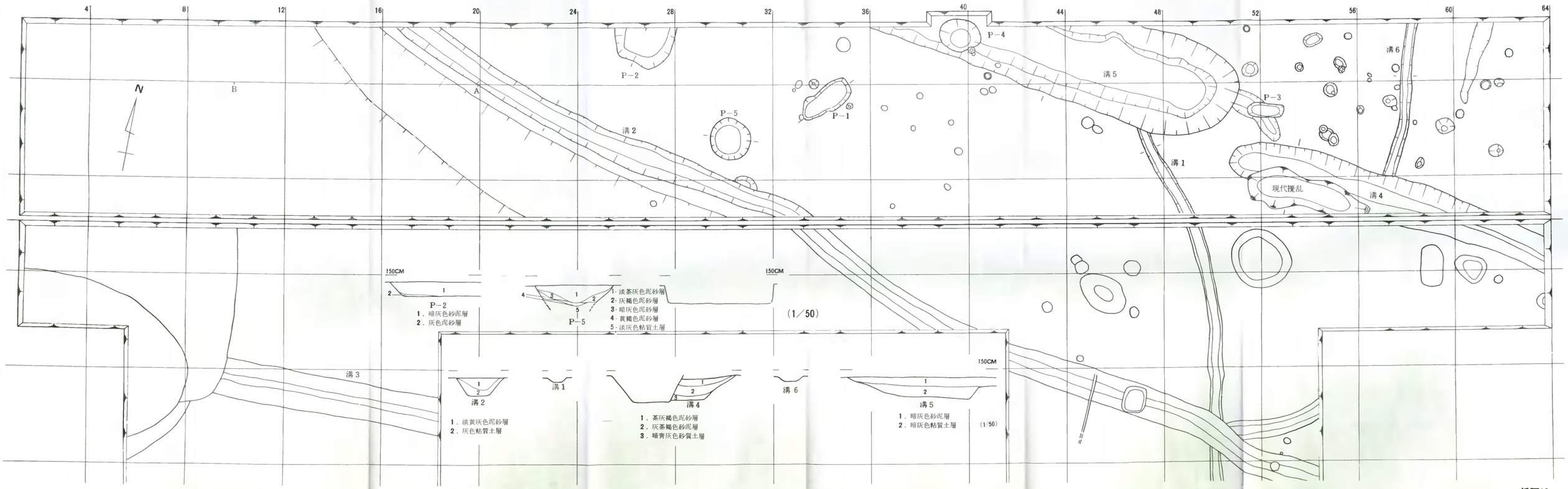
東西鬼川市微高地を形成している土層は12～15層である。そのうち15層は二層に大別でき，下部に灰色粘土層が水平堆積している。12～14層は堆積状況を異にするが，微高地形成の二次的な堆積と考えられる。これに対して下田所微高地を形成している土層は７～９層である。当トレンチにおいては基盤層の一部分しか確認できなかったが，下田所調査区東端は完全に微高地上に位置していることから，微高地は用水付近に肩を持ち徐々に下がっていくものと考えられる。



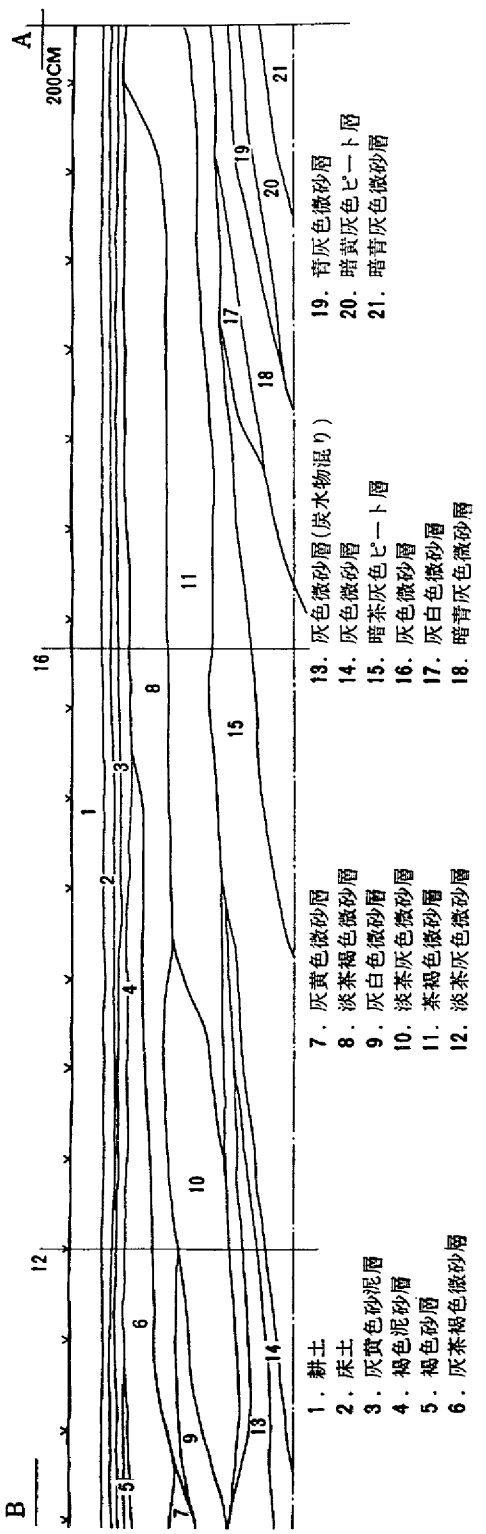
以上のように両微高地斜面間には残存幅約25mの河道を確認したが現在，当調査区は西鬼川市と農道を境にして水田面が一段低くなって

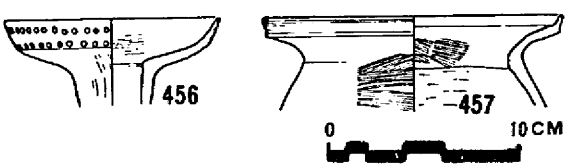


第136図　田所　全体図（1′500）・断面図（1′50）及び出土遺物



第137図　下田所　遺構配置図（1／100）





第138図　下田所　西斜面断面図（1/50）及び出土遺物

いる。このことと第２図の地形図から，河道はほぼ南北に流れていたものと考えられる。

＜**遺物**＞第６層から壷形土器 455 が出土している。胴部下半を欠くが，わずかに外反ぎみの口縁部には二条の凹線を配す。胴部から頸部にかけては細かい縦方向の刷毛調整が施されている。胴部内面は押圧による成形が成され，胴部から頸部にかけては絞り目がみられる。弥生時代中期後半のものと考えられる。なお，河道より上層においては５層より磨滅した土師器片を確認したのみで，あとは耕土から須恵器・土師器・平瓦などの破片をわずかに採取したにとどまった。

以上，河道の埋没時期は伴出遺物が僅少のため決めがたいが，前述の亀川斜面堆積とあまり時期を隔ることなく，弥生時代後期後半以降に徐々に陸地化（耕作地化）していったものと思われる。　（江見）

第7節　下田所調査区

田所調査区の西端の農道及び用水路から西の約70*m*間を下田所調査区と呼んでいる。前回調査により，微高地の確認及び弥生時代～江戸時代にかけての遺構を検出している。

今回調査においても，微高地上から近世以降の水田による削平を受けた状態で，弥生時代～中世にかけての溝６，土壙５を検出し，また，微高地西斜面が明らかになった。

以下，微高地斜面状況及び遺物の概略を記す。

当微高地は幾度もの微砂層の堆積（第 137 図８～21層）によって形成されており，他の微高地とは様相を

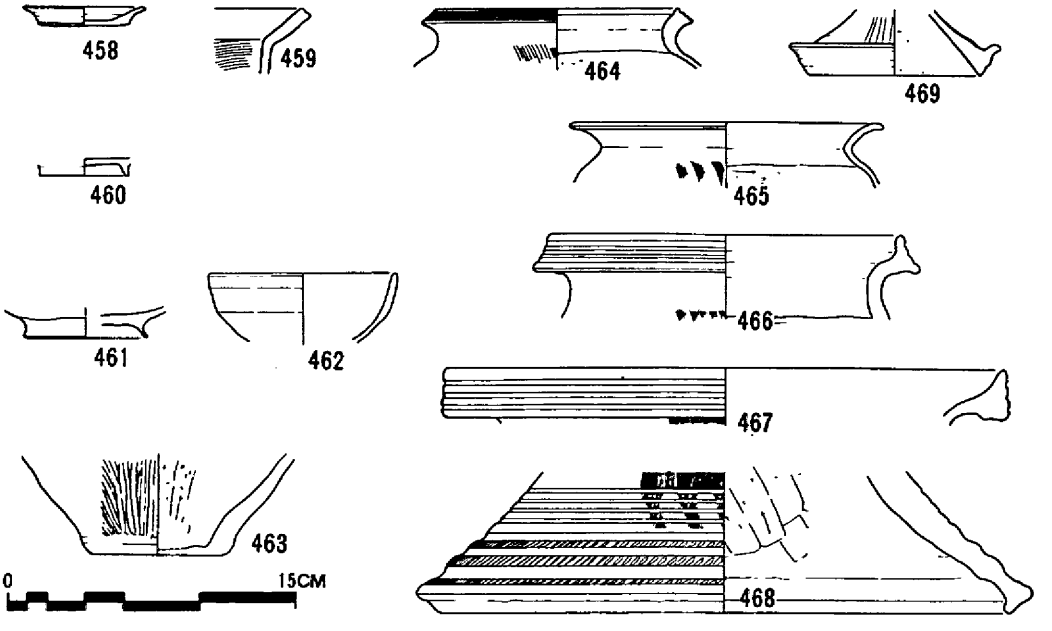
異にしている。斜面堆積にあたる第５～７層からの出土遺物は非常に少ないが，第７層より456・457が共に出土している。456は壺形土器の一部と思われ，頸部はほぼ垂直に立ち上がり，急激に外方に延びる口縁部に，ゆるやかに立ち上がる拡張部を持つ。内外面共に横ナデ仕上げで，口縁拡張部の端面には竹管による２段の施文を廻らしている。457は甕形土器で，「く」の字状に外反する口縁部の端部をつまみ上げて横ナデしている。甕形土器の特徴から才の町Ⅰ式併行期のものと思われる。一方，第137図に示すように微高地は北西に延びており，これより南西に向って傾斜をしている。そして後述する溝２が微高地斜面を意識したように，平行して開溝されていることから，当微高地は中世に至るまでは存続していたと考えられる。

１）溝　1

前回調査において確認しているもので，微高地中央，やや北西に振った状態で検出した。北側は溝５によって切られている。幅約35㎝，深さ約10㎝を測る。溝内は暗茶褐色砂泥が堆積しており，壺形土器の底部（463）が出土している。弥生時代後期前半のものと思われる。

２）溝　5

微高地のほぼ中央から始まり，北西に延びる溝である。幅約400㎝，深さ約40を測る。溝内は２層に分れるが，遺物（464～468）はほとんど上層の暗灰色砂泥層から出土したもので，上東・鬼川市Ⅰ～Ⅲ式にわたる時期のものと思われる。



第139図　下田所　溝1・2・4・5・6出土遺物

3）溝　6

微高地の東端近くに南北方向に検出された溝で，南側は溝４によって切られている。幅約50㎝，深さ約10㎝を測る。溝内は灰色砂泥が堆積しており土師質椀の高台部(460)が出土している。

4）溝　4

微高地のやや東に位置した所から始まり，南東方向に延びており，前回調査で確認している溝である。溝南肩の一部は現代撹乱にあっているが幅約 200 ㎝，深さ約45㎝を測る。溝内より土師質椀（461，462）が出土している。

5）溝　2

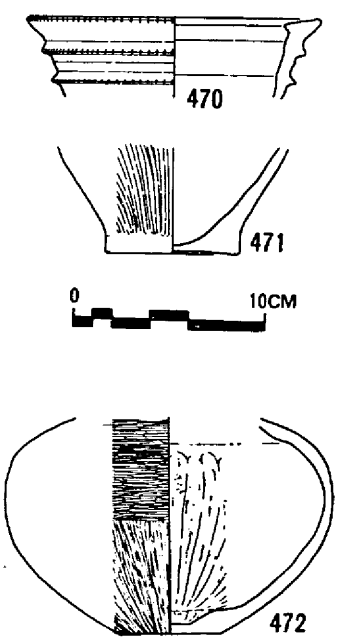
微高地斜面に平行する南東方向に延びる溝で，前回調査で確認された延長部分である。幅約100㎝，深さ約40㎝を測る。溝内より土師質の小皿（458），鍋（459），高台付きの椀などが出土している。

以上，溝６・４・２はいずれも土師質椀の特徴が，川入遺跡大道西調査区Ｐ－９出土のそれと類似しており，鎌倉期に埋没した溝と考えられる。なお溝７はわずかに凹んでいるだけで，単なる落ち込みか，溝の底部のみを残しているものかは不明である。出土遺物は皆無であった。

6）Ｐ－１

微高地のやや西側に寄った所から検出された。土壙は暗灰色の砂層を掘り込んでおり，埋土もほぼ同様の土であるため，そのプラン及び掘り上げに困難を来した。長軸約 230 ㎝，短軸約80㎝，深さ約40㎝を測る。土器は土壙中央付近の，若干炭混じりの暗灰色泥砂から出土した。470 は壷形土器の口縁部と思われる。淡茶褐色を呈す。わずかに外反する口縁部は断面三角形の凸帯を二段廻らせ，口縁端部は左右に肥厚させ，やや内傾する面をもつ。また口縁端部及び二つの凸帯には，篦状工具による刻み目を廻らしている。内外面共に横ナデ仕上げである。471は470の底部と思われるが明らかでない。外面は底部をナデたのち上方に向って篦磨きが施されている。

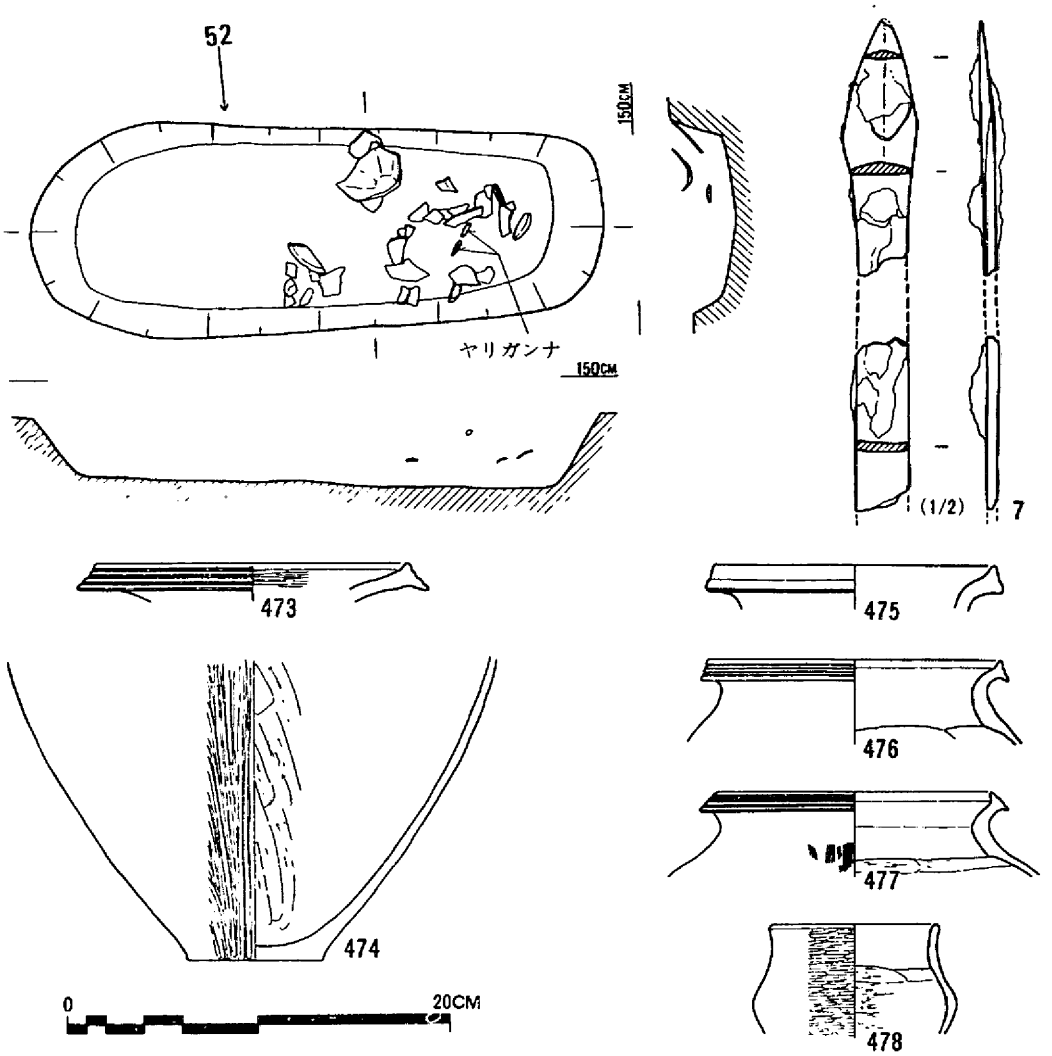
470 は岡山県高本遺跡（註14），岡山県ケンギョウ田遺跡（註15）などから類似したものが出土しており，弥生時代中期中葉のものと考えられる。（江見）



第140図　下田所　Ｐ－１・Ｐ－２出土遺物

7）Ｐ－２

北側の一部が用地外に延びているため全体は明らかではない

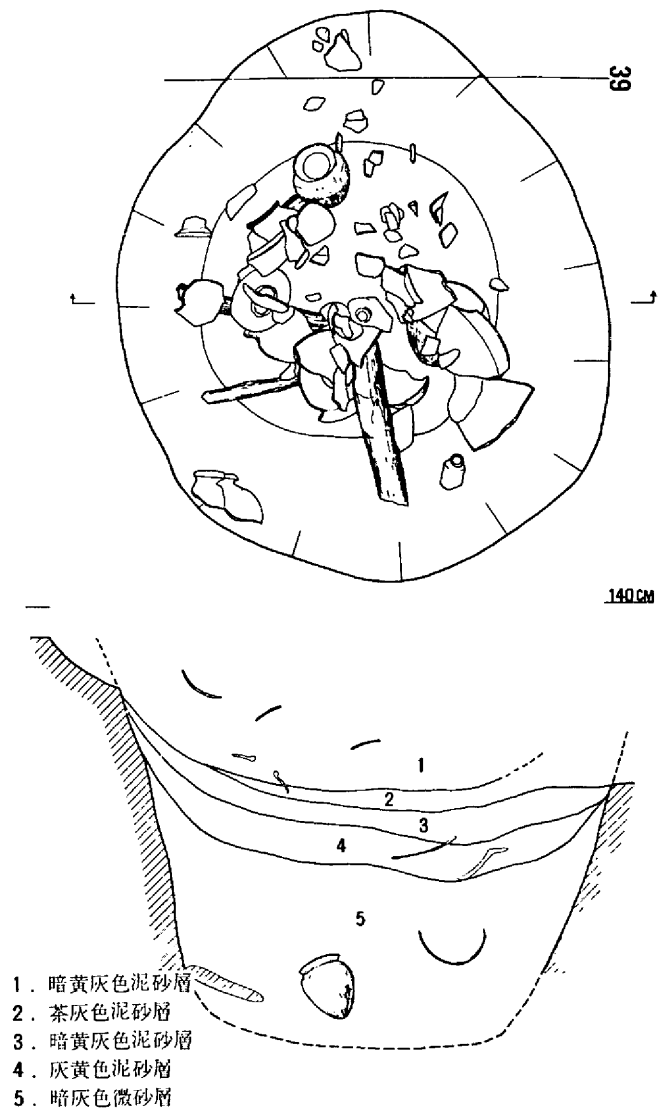


第141図　下田所　P－3遺構図（1/20）及び出土遺物

が，短軸250㎝，深さ約30㎝を測る。P－1と同様に暗灰色泥砂層から掘り込まれており，土壙内には暗灰色砂泥が堆積していた。遺物は土壙南東の肩部から一点出土したのみである。壺形土器(472)は頸部から上が欠損している。胴部外面は中央から上部にかけては横方向，底部にかけては縦方向の細かい篦磨きで調整されている。内面は底部より上部にかけて，抉り取るように篦削りされている。弥生時代後期前半のものであろう。

8）P－3

＜遺構＞溝5から南東に延びた溝状の落ち込みを切り込んだ状態で検出された。長軸150㎝，短軸



第142図　下田所　P－4遺構平・断面図（1/20）

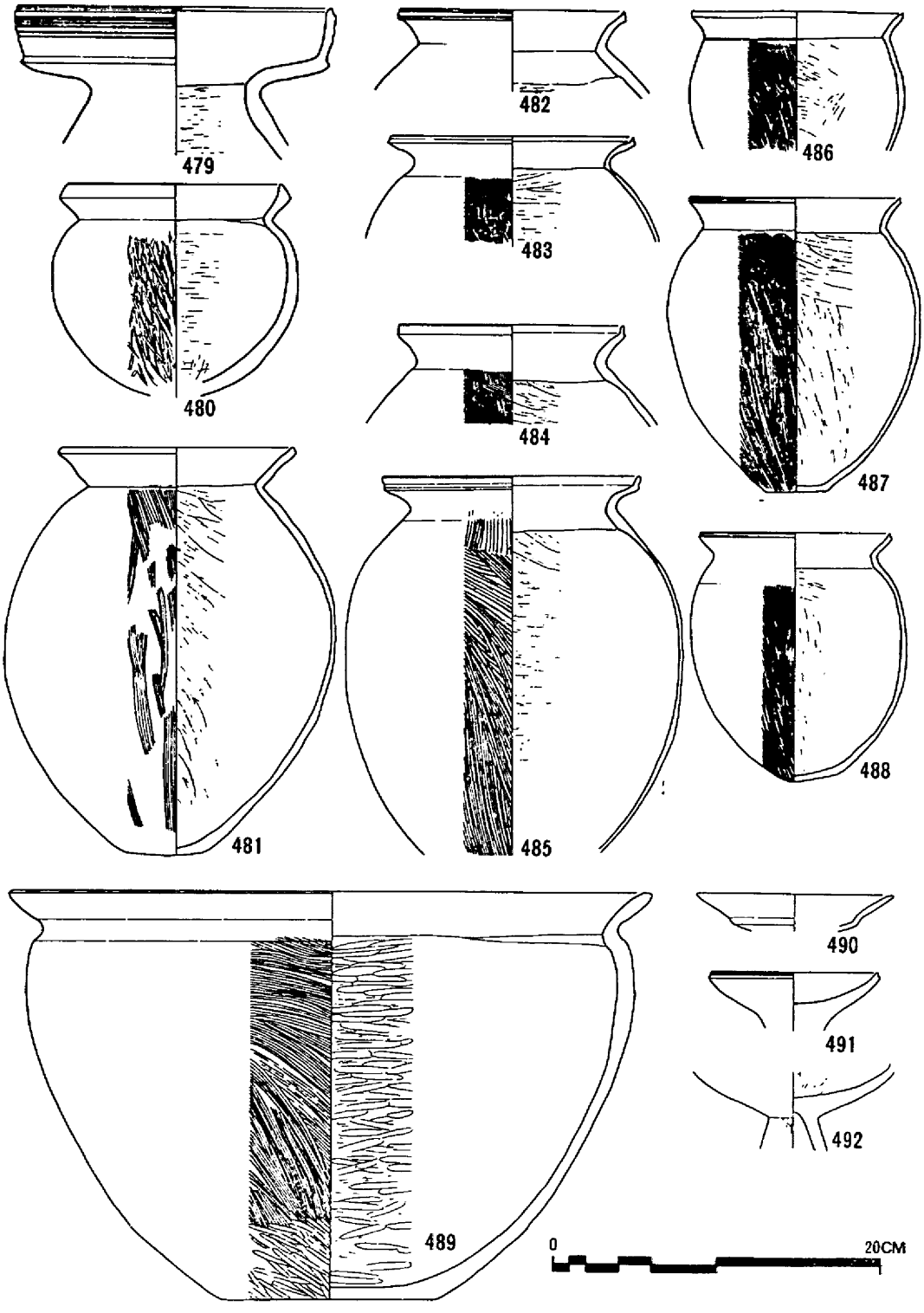
55cm，深さ20cmを測り，隅丸長方形を呈す土壙である。堆積土は，基盤層とは明確に区別される暗褐色泥砂であった。遺物は第141図のように，土壙東側から集中して出土しており，それらに混じって鉇（ヤリガンナ）が1本出土した。遺物を取り除いた後，断面及び床面の精査により木棺痕跡の有無を追求したが，それらしい痕跡は全く認められなかった。しかし土壙のプラン及び出土遺物から，墓壙であった可能性が強いと考えられる。

＜**遺物**＞壷形土器（**473**）はラッパ状に大きく開く口縁部をもち，端部は内傾し上下に拡張している。口縁端面には3条の退化凹線を施している。内面は横方向に細かい篦磨きで調整されている。**478**は小形の直口壷で，外面は口縁端部まで横方向の細かい篦磨きで，内面は横ナデ及び篦削り（頸部下半）で調整されている。

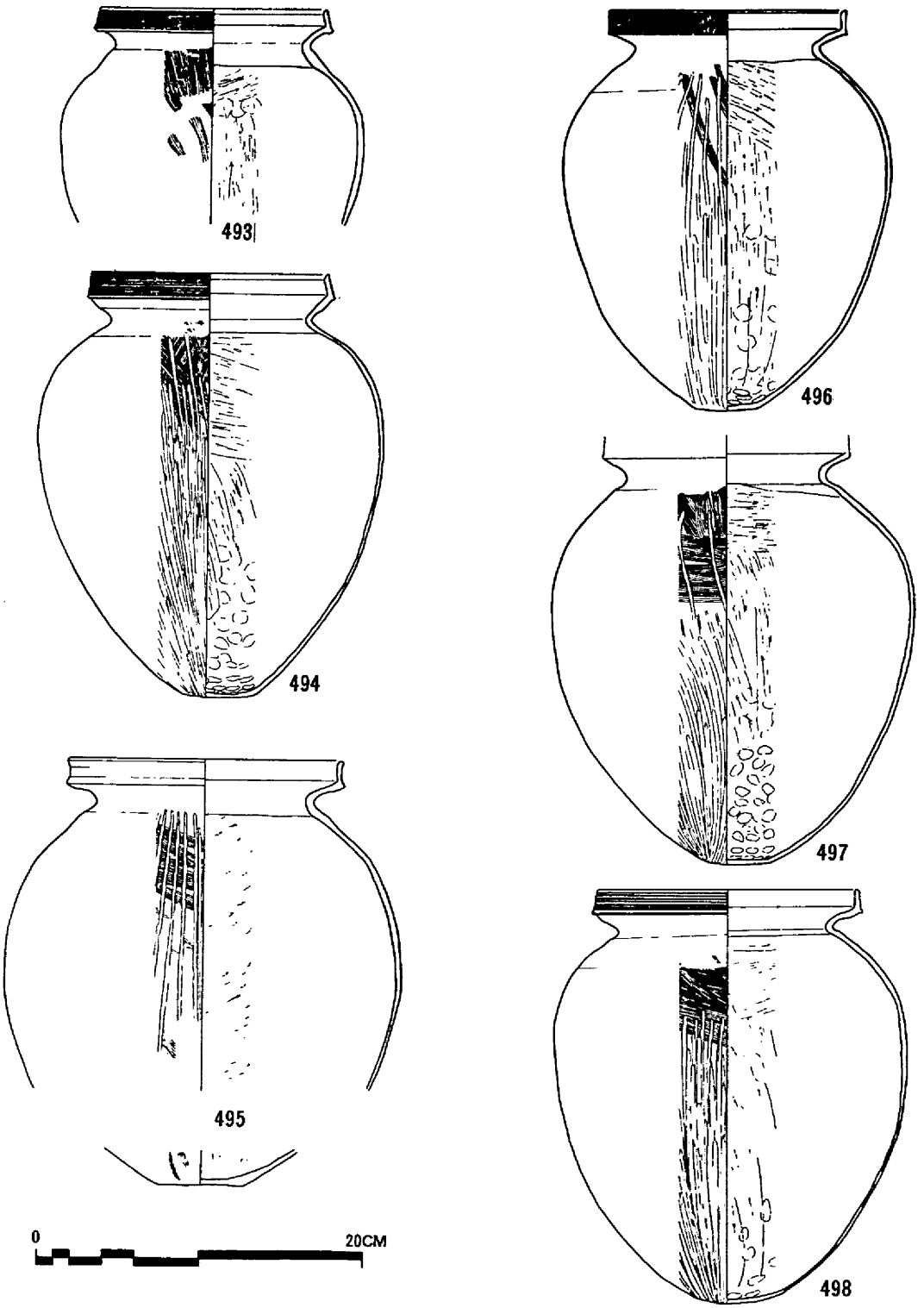
甕形土器（**475**～**477**）はいずれも口縁部がゆるやかな「く」の字状に開き，端部はやや内傾している。**475**は口縁端部を上方につまみあげ，横ナデしているのに対し，**476**，**477**は口縁端部を上下に拡張させ，端面に二～三条の退化凹線を記している。胴部外面は刷毛目，内面は横方向の篦削りでそれぞれ調整している。

鉇（**7**）は，刃部及び基部の一部を残す。現存長9.5cm。幅1.3cm，厚さ0.3cmの身部に幅2cm，厚さ3.5cmあまりの峰部を作り出している。中央にはわずかに稜線を持ち，先端は薄く，両縁に刃をつけており，わずかに反りを持つ。

以上，出土土器から上東・鬼川市Ⅱに併行する時期のものと思われる。



第143図　下田所　P－4出土遺物（1）



第144図　下田所　P－4出土遺物 (2)

9）P－4

＜遺構＞微高地の中央，溝6を切って検出された井戸状を呈す土壙である。150×130cmの不整円形を呈し，深さ推定110cmを測る。第1層からは多量の土器が，自然木などと共に投棄された状態で出土した。また第2～4層からも若干土器が出土している。第5層は暗灰色粘土ブロックが混じる微砂層であるが，その下層の底に近い所から完形の甕が1個体出土した。なおこの第5層を掘り下げていく途中，基盤層の砂層から出水が激しくなり調査を中止した。

＜遺物＞壺形土器（479）はやや内傾して立上がる頸部から急に開く口縁部を持ち，さらに上方にほぼ直立する拡張部を持ち，いわゆる二重口縁を呈する。口縁端面には横ナデによる四条の凹線状の文様がみられる。内面は頸部まで篦削りしている。

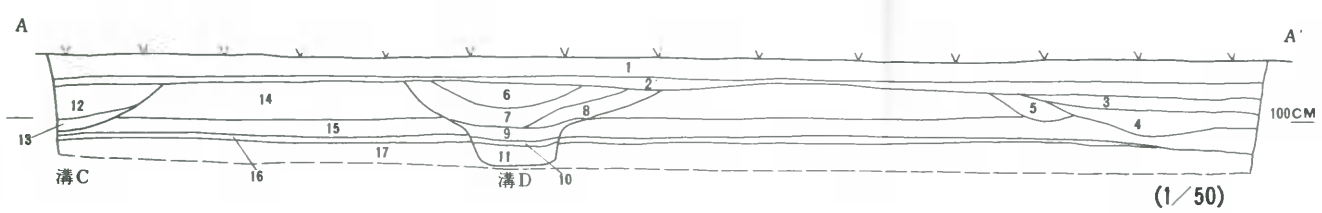
甕形土器（480～488，493～498）は口縁部の特徴から大きく，3つに分けられる。口縁部が単に「く」の字状に外反するA類，外反する口縁端部がつまみあげられて上方にわずかにのびるB類，「く」の字状に外反する口縁部に，垂直及びやや内傾して立ち上がる拡張部を持つC類がある。

A類（481～483・486～488），B類（484～485）共に胴中央付近に最大径を持ち，肩があまり張らない器形である。いずれも胴部は細かな刷毛目調整が成され，内面は篦削りによって器壁を非常に薄く作り上げている。なお，481においては胴部外面及び底部に，刷毛調整以前に成された叩き目痕が認められる。C類（493～498）は最大径がA・B類よりもやや上部に位置し，わずかに張る肩を持つ。口縁拡張部には，七～八条の櫛状工具による施文（櫛描平行沈線文）のあるもの（493・496～468），横ナデ仕上げのもの（495）がある。共に肩部近くまで篦磨きが成されており，上部は刷毛調整されている。一部篦磨きが暗文風に肩部まで延びるものもある。内面は底部より約$\frac{1}{3}$までには無数の指頭圧痕が残り，その上から頸部に至るまで篦削りしている。器壁は非常に薄い。また497はA類481と同様，成形段階に成されたとみられる叩き目痕が，肩部及び胴部の一部に認められる。

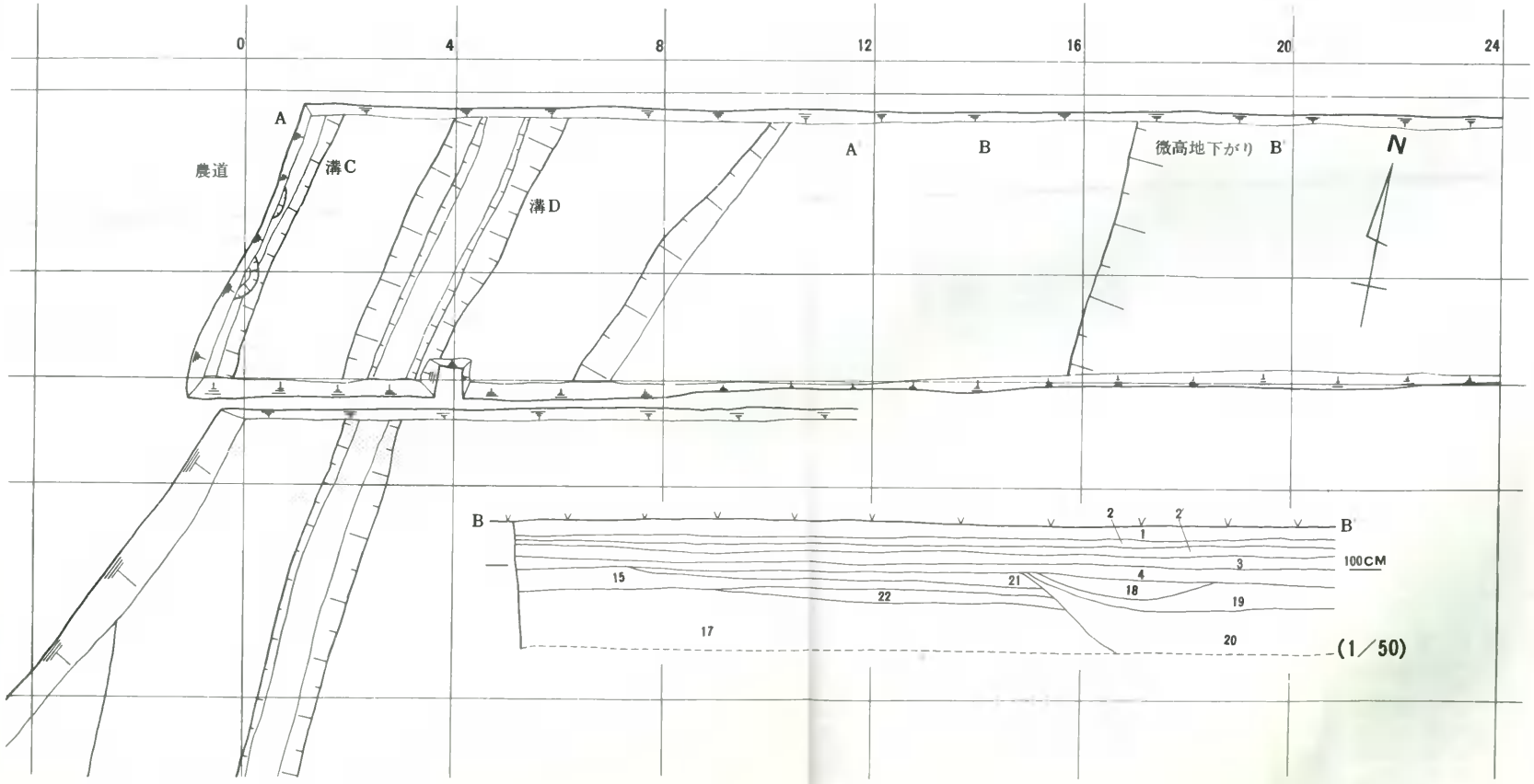
高杯形土器（490～492）　490は開きながらわずかに外反して立ち上がる口縁部を持ち，内外面とも横ナデしている。精製粘土で作られた堅緻な土器である。491はわずかに内彎しながら広がる口縁部をもち，端部には一条の凹線状の横ナデが成されている。内面は一部刷毛目痕が残るが，ナデによって消され，そののち水銀朱が塗られている。川入遺跡出土小型器台（130，237）の前出的なものかもしれない。

鉢形土器（489）は口縁部内外面は横ナデ，胴部外面は刷毛目，下部は篦磨きが成されている。内面は篦磨き調整している。

以上，この土壙出土の遺物は甕形土器の特徴から前回調査の才の元P－1，2とほぼ同時期のものと考えられる。前回調査では酒津式（註16）が古・新に二分出来るならば新しい時期にあたると理解されたものであるが，壺形土器は内面の篦削りが頸部まで及んでおり，甕形C類は口縁拡張部に櫛描平行沈線文が施され，肩部も酒津式に比べ張りがなく，底部も丸底化が進んでいる。高杯形土器（491）も以前には全くみられないものであるなど，これら土器群は酒津式より一型式新しい段階のものと考えられる。　（江見）



1．耕土層
2．床土層(黄褐色砂泥)
2'．床土層(灰褐色砂泥)
3．茶灰褐色粘質土層
4．淡黄灰色粘質土層
5．茶灰色砂層
6．灰黄色泥砂層
7．灰茶褐色泥砂層
8．茶灰色砂泥層
9．灰褐色砂質土層
10．黄灰色粘質土層
11．暗灰色砂質粘土層
12．淡灰褐色砂質土層
13．淡茶灰色砂質土層
14．茶褐色砂質土層
15．暗青灰色粘土層
16．黄褐色粘土層
17．暗灰色粘土層
18．暗灰色粘質砂層
19．暗灰色微砂層
20．暗灰色粘質土層
21．淡黄灰色粘質土層
22．灰白色粘土層



第145図　才の元　遺構配置図（1／100）

挿頁14

第8節　才　の　元　調　査　区

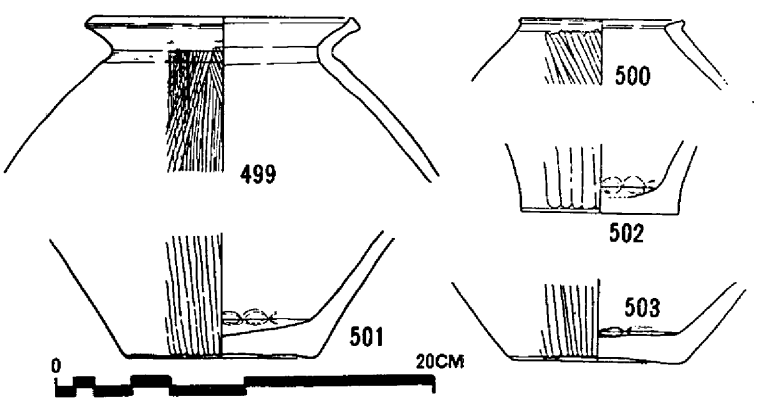
この調査区は，西端を五反田地区との境の農道から，東の田所地区との境の農道までの約130 mの間である。調査は，用地内の北側に添って幅1.5mの東西トレンチを，さらに20m間隔に幅1.5mの南北のトレンチをそれぞれ設定し，微高地の追求及び確認に主眼を置いた。

調査の結果，五反田地区との境の農道から約20m東の地点で微高地の東端をおさえることができた。微高地の西端は，五反田地区のトレンチでは確認できず，農道あるいは水路下で下がるものと思われる。この微高地上では，前回調査で確認されていた南北に走る溝2本の続きを検出した。また，下田所地区側の東端トレンチでは，基盤層が徐々に上がるのを確認した。この部分が下田所地区の微高地の末端部と考えられる。下田所地区の微高地と才の元地区の微高地との間の最深部には，現水田面から約2 m下に黄褐色砂礫層の基盤層を確認した。最下層の第20層からは，第146図の土器が出土した。他に新しい時期を示す遺物が検出できないことから弥生時代中期の包含層であると考えられる。第3層～第4層は，弥生時代中期の土器片～奈良時代の須恵器まで包含しており，安定した堆積を示す。第2′層から上の層は，鎌倉時代の土器が出土している。

＜**遺物**＞500は，いわゆる無頸壷形土器である。口縁部は「ハ」の字状を呈し，端部はわずかに斜め上方へつまみ上げている。外面は篦磨き，内面はナデによって仕上げている。甕形土器（499）は，肩部から「く」の字状に折れて立ちがる口縁部をもち，端部は肥厚させている。外面は荒い刷毛目で，内面はナデで調整され，全体に器壁は厚い。501～503は安定した底部を示す。

1）溝　D

＜**遺構**＞微高地上に検出されたもので，基盤層である茶褐色砂層を切り込んで南北方向に延びる。幅170～200cm，深さ約70cmを測り，二段掘りになっている。堆積層は5層にわかれ，凹レンズ状の堆積を示す。遺物は，最下層から上東式の範疇に入るものが数片出土している。



第146図　才の元　斜面出土

2）溝　C

＜**遺構**＞農道のため東肩部を検出したにとどまった。この溝は，溝口とほぼ平行に南北に延びる。溝内の上層堆積は，第12，13層にみられるように凹レンズ状を呈していた。遺物は検出できなかった。　（中野）

第2章　小　　結

上東遺跡からは前回・今回調査を含めて，4つの微高地を確認し，そこから住居址（16以上），建物（2以上），溝状遺構（約30），各種土壙（千数百）池状遺構（6）など多数を検出した。これらの遺構及び遺物については前章で概略したが，それらのまとまり，あるいは遺跡の性格を把握することは，想定される遺跡の広がりから見れば調査範囲はあまりに狭く，現出資料ではなかなか困難である。ただ'74・'76の二度にわたる発掘調査の結果から少なくとも次のようなことがいえる。上東遺跡の1，2の微高地上では，弥生時代中期後半からは確実に生活が営まれ，後期にその繁栄をみ，引き続き古墳時代前半に及ぶこと。また奈良時代～鎌倉時代においても同様のことがいえる。また，狭い調査範囲ではあるが，上東遺跡の遺構・遺物のあり方の一端を表出していることは否定できない。そこで，かえって混乱を招く恐れがあり，また推論の域を出ないが，現時点において考えられることを簡単に記して小結にしたい。

住居址について

上東遺跡から検出された住居址（住居群）は前回及び今回調査においても，いずれも東鬼川市調査区からのみ検出されており，その数は鎌倉時代の1軒を除き，弥生時代後期から古墳時代にかけて13軒（以上）を数える。以下，もう一度簡単に整理してみる。

1）　**上東・鬼川市0期**　　当調査区最古の住居址は上東・鬼川市0式の土器を出土した7－P－52土壙を一柱穴として形成されたものである。当土壙は前述したように，遺物が柱穴の掘り抜き穴から一括して出土したもので，土壙周辺からも同時期と考えられる土壙・遺物が検出されている。このことから，平面プラン及び柱穴の全容は明らかにならなかったものの，住居址が存在したことを想定させる。また'74調査においても上記土壙と同時期の土壙（P－151）が検出されているが，これもまた住居址に伴なう柱穴であった可能性が強い。

2）　**上東・鬼川市Ⅰ期**　　この時期のものは3軒（H－1・11・13）検出されている。いずれも全容を把握することはできなかったが，平面プランは径約800㎝前後の円形を呈すもの（註17）で，H－11からは簾状文が配された分銅形土製品が，H－13からは打製の石庖丁が出土している。

3）　**上東・鬼川市Ⅱ期**　　この時期のものは5軒（H－4・8，'77，12・14・15）検出されている。住居址の規模は鬼川市Ⅰ期とほぼ同じと思われるが平面プランは径7～800㎝前後のやや楕円形を呈す。住居址中央には円形土壙が存在し，炉のような施設があったものと考えられる。遺物としてはH－4・11・15からガラス小玉が，H－8・15からは石鏃が，H－11からは銅鏃が出土している。また，これら平面プランで確認することができた住居址の他に，調査区28～68ラインの間からは柱穴状を呈す土壙を多数検出しており，それらのほとんどは上東・鬼川市Ⅱ，あるいはⅠ期の土器を含むものであった。これらは平面プランこそ検出されなかったものの，床面を削平された住居址の柱穴で

あった可能性が強く，当地区には何回となくくり返し，住居址が建て直されていたものと考えられる。

4）上東・鬼川市Ⅲ～才の町Ⅰ期　この時期のものは1軒（H－3，'74）検出されている。平面プランは径約450㎝のほぼ正円形を呈すが，以前のものに比べ規模が約½近く小さくなっており，一住居内における人員の減少が考えられる。また遺物においても次の2つのことが考えられる。1.銅鏃は出土しているものの石鏃は確認されておらず，上東・鬼川市Ⅰ期まで存続したと考えられる石庖丁に続き，石鏃においてもこの時期には完全に姿を消すようである。2.「く」の字口縁をした，胴部外面叩き，内面箆削り調整された甕形土器が初めて現われる時期で，このことは弥生時代中期以降，土器製作において，独自の手法と形態を持ち，継承してきた吉備文化圏及び畿内文化圏との交流の結果として促えることができる。

5）亀川上層期　この時期のものは5軒（H－2・7・17，以上'74，10・16）検出されている。方形のもの（H－10・16・17？）と隅丸方形のもの（H－2・7，'74）があり，そのうち4軒は1辺400㎝前後の比較的小規模なものであるが，H－16は一辺約600㎝を測り，前述のものに比べ規模も大きく，建てられた方向も異なっている。いずれの住居址も柱穴はH－7にみられるように4本柱で，住居址中央には炉が存在し，壁際には方形の土壙が設置されたものと思われるが，他の住居址については明らかでない。

以上みてきたように上東・鬼川市0期から出現する住居址は，上東・鬼川市Ⅱの時期をもって全盛期をむかえ，上東・鬼川市Ⅰ～才の町Ⅰ期まで継続している。しかし東鬼川市調査区においては，亀川上層期に至るまでの二時期のものは住居址のみならず，他の遺構・遺物さえも全く姿を消しており，また，亀川上層期以降においても奈良～鎌倉期をのぞいて同様のことがいえる。この様に当微高地からは才の町Ⅱ～下田所（才の元P－1・2）期及び亀川上層以降の二度にわたって住居址（及び遺構）の存在しない時期が判明した。これら検出されなかった時期の住居址は調査区北側ないしは南側に存在するのか，狭い調査範囲内の調査からは断定しがたいが，あえてそれが許されるならば，これら住居址のあり方は，在地型墳墓が出現するまたは出現すると想定される（註18）上東・鬼川市Ⅲ期と，畿内型古墳が出現する亀川上層期以降との，二度の政治的要因による社会的変化の表出に他ならないものではないかと考える。

溝状遺構について

弥生時代のものは21本検出されており，微高地中央を走るものは溝2・3（東鬼川市，'77），溝D（才の元，'77），微高地縁辺部を走るものは溝A・B・D・Y・Z（以上才の町，'74），溝1～7（西鬼川市，'77）などがある。前者は比較的幅が狭く，単独に検出されているのに対し，後者は幅250m前後の広いものが多く，中期末～後期前半にかけて何度も掘り返されている。またこれらとは別に，微高地上から開溝されている溝5（下田所，'77），非常に小規模な溝1（下田所，'77）などがある。溝の性格については，その多くが用排水路と考えられるが，狭い調査範囲のため断定しがたい。

奈良時代のものは溝7（東鬼川市，'77）がある。ほぼ東西に延びており，西端は南西に折れ曲っている。溝の南側からは須恵器を含む土壙がみられ，屋敷その他の関連施設と考えていく必要があろう。

平安時代の溝は，溝１（才の町，'77）が検出されている。弧状に延びているが，大半が用地外に延びていくものと想定され，上記の溝７と同様に捕えていく必要があろう。

鎌倉時代のものは溝Ｗ（才の町，'77），溝５（東鬼川市，'77），溝２～４（下田所，'77）などがある。これらの多くはそのまわりに建物，あるいはまとまりはないが柱穴状土壙が多数検出されているため，居住地の区画溝としての性格をもつものと想定される。

土壙について

土壙はいずれの微高地からも検出されており，総数は今回調査だけでも厖大な数を数える。その多くは前述した住居址に伴なう柱穴土壙と考えられるが，これらの柱穴とは考え難く，また，後述する井戸状を呈す土壙とも様相を異にする土壙が40基近く検出されており，若干の検討を加えてみたい。これらの土壙の中で土壙墓の可能性が強いものが少なくとも３基存在する。

これら８－Ｐ－20（東鬼川市，'77），Ｐ－10（同，'74），Ｐ－106（同，'74）は平面プランがいずれも楕円形または隅丸方形を呈し，規模は長軸100～150㎝前後，短軸75～100㎝前後，深さ35～50㎝前後と，ややばらつきがみられる。どの土壙も，遺物は床土直下から出土し始め，土壙中程までの間に，完形を含む多量の土器が出土しているが，床面に密着するものはない。

一方，当遺跡は後世に水田の地下げなどによって土壙の上部は相当削平を受けている。同時期の住居址などの壁の残りぐあいから想定すれば，土壙の平面プランはもう少し大きく，深さにおいても，少なくとも50㎝は足して考えなくてはならない。これをもとに葬送方法を考えるならば，屈葬あるいはそれに近い方法がとられたものと想定される。また，土壙上部には多くの完形土器が供献され，それらが死体腐敗の後下部へ落ち込んだものと考えるならば，これらの土壙は後世の削平によって，今日のようなあり方を示しているのは偶然ではないだろう。東鬼川市調査区では上記の土壙ほど土器を持たないが，ガラス小玉や石鏃，銅鏃などをもつ，同様規模の土壙が20基近く存在しており，上記の仮説の上に立てば，これらもまた，墓として考えることができる。

それでは他の遺跡についてはどうであろうか。時期は若干遡るものの上東遺跡と同じく沖積地に立地する雄町遺跡（註19）と比較検討してみたい。

土壙墓は第４調査区から130基近くを検出しおり，他に壺棺墓２基（註20），木棺墓４基も同時に検出している。土壙墓は単独で存在するものと切り合って群集するものとの二様があり，平面形態は４類型に大別されるものの，当調査区は上面を数十㎝削平を受けており，それら土壙の復原平面形態は長楕円形を呈すものと推定している。そして土壙の規模は調査時のものであるが長軸70～130㎝前後，短軸40～70㎝前後のものが大半を占め，深さは復原推定，深いもので100㎝近いものがあるらしい。遺物は土壙墓の数に比べ非常に少ないが，床面に密着して出土しており副葬品と考えられているものＣ－11号，Ｈ－１・２号がある。時期は中期前半のものと考えられている。また径170㎝×50㎝前後，深さ30㎝前後の長方あるいは隅丸方形を呈す木棺墓が４基検出されている。これらはいずれも土壙墓とは切り合い関係をもたず，離れた位置につくられている。遺物は出土しておらず年代は定かでないが隣接する土壙群と関係をもち，意識的に単独墓としてつくられたものと推定されている。

以上，これらの土壙墓及び木棺墓は微高地西側から集中して検出されており，大型水路を挟んで微高地東側には同時期の住居址が営まれている。

以上，雄町遺跡のものとの比較においては，1．土壙の規模にさほど変化はなく，埋葬施設として考えられなくはない。2．雄町では群集して存在している。3．土壙墓群と関連をもつと考えられている木棺墓は一例も検出されていない。4．遺物の量に大きな差が認められる。4については土壙の上面削平によるものと考えられなくもないが，根本的に相異をなす点は土壙の立地である。雄町のものは，住居と墓域が溝によって明確に分断されているのに対し，鬼川市調査区中央に走る溝は雄町のそれのような役割を果しておらず，不規則に，住居址群と群在している。

このように，雄町遺跡の土壙墓群と比較検討した結果，上東から検出されている一連の土壙とは全く相い入れない状況を呈していることが判明した。このことは弥生時代中期（雄町）から後期（上東）に移行するなかでの葬制の変化であるのか，上東遺跡における特殊性なのか，それとも土壙墓と推定してきたことに無理があったのか，理解し難い。

上記の推論に立ってみるならば，上東・鬼川市Ⅰ期には存在している土壙墓は，Ⅱ式にはその数を増し，Ⅲ式まで継続する。しかし以後，土壙墓は全く姿を消してしまう傾向がある。一方，上東遺跡の北には王墓山低丘陵が連なっており，その中でも辻山田遺跡～女男岩遺跡にかけては，鬼川市Ⅱ～下田所（才の元Ｐ－１，２）期にかけての土壙墓群の存在が知られている（註21）。このことから，土壙墓の変遷は上東・鬼川市Ⅲ期をもって終わる上東遺跡（平地）土壙墓から，上東・鬼川市Ⅱ期から発生する辻山田～女男山遺跡（丘陵）土壙墓へと移行していくものと考えている。

以上，述べてきたが，他に類似する例は少なく，また，上東遺跡の土壙のあり方にも問題が残されており，断定することは出来ない。今後の資料の増加を待ちたい。

井戸について

24個検出されているが，Ｐ－123（東鬼川市，'74）の鎌倉期のものを除いては弥生時代後期前半～古墳時代前期までのものであった。その中で，矢板を打ち込んでいるものは井戸Ⅰ・Ⅱ，Ｐ－３・Ｐ－４（以上，東鬼川市，'74），井戸Ⅲ（才の元，'74）の５例存在する。これらの両調査区は，基盤層が砂あるいは礫層であるためと考えられる。この他にも東鬼川市からは矢板をもたないものが５例検出されており，また，才の町微高地では基盤層が粘土で，現在湧水層には達していないものも検出されたが，これらもまた井戸と考えられる。

検出された井戸のもつ最大特徴は，遺物を多分に含むことであるが，このあり方として，1．井戸－Ⅰ（東鬼川市，'74）にみられるように，上層には完形品を含む土器群があり，その下に炭層が堆積しているもの。2．Ｐ－２（亀川，'77），Ｐ－４（下田所，'77），Ｐ－へ（才の町，'74）などにみられるように，上層は１と同様で，さらに底部に１ないし２個の完形土器を沈めているもの。3．Ｐ－１，２（才の町，'74），Ｐ－２（東鬼川市，'74）のように，廃棄物を投棄しているものなど大きく３つの差異が認められる。そのうち１，２の上層堆積は下層堆積状況と照らし合わせて見る限り，本来水平に置かれていた土器群の陥没の結果と理解され，土壙墓とは考えにくい。井戸廃棄時の祭祀と

の関連で捕えるべきであろう。　（江見）

註 1　伊藤晃・柳瀬昭彦・池畑耕一・藤田憲司「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・第２集』岡山県教育委員会　1972

註 2　岡山理科大学三好教夫教授から「樹木類ではアラカシ属，コナラ属，マツ属，シイ属が，草木類ではイネ科，アカザ科，ヨモギ属などが優勢に出現している」との結果をいただいた。

註 3　黒崎直「古墳時代の農耕具」『研究論集Ⅲ』奈良国立文化財研究所1976で全国的に集成し，検討されている。

註 4　杵として使用する際には，握り部に角をもつため非常に不便であることから二次加工痕の可能性が強く，竪杵半折後，杵とは別の用途に使用されたものと考えられる。

註 5　岡山大学畔柳鎮教授から「樹皮ではなく，広葉樹であり，そのうちでも，散孔材で，年輪の構造も認められる。髄線構造はわずかに認められるが，資料がわずかなため，なんともいえない。現段階では，推定段階ではあるが，マユミと推定される」との鑑定を得ている。

註 6　当初は表面の刻線文様や朱塗りであることが，浜松市伊場遺跡出土の短甲状木製品の部分に類似していることから浜松市立郷土博物館館長の向坂鋼二氏に鑑定願ったところ，短甲状木製品について木質・手法・着色顔料の種類等については御教示をいただき，また，木製品（４）は酷似しているが，木取りの方法に違いがあるなどの所見をいただいた。記して感謝いたします。

註 7　臼の未製品の可能性を考えたが，他の木製品にみられるように，当土壙出土遺物は，破損品が多く，また形態的にも他の例とは差異がある。

註 8　例えば「受け」の部分を支点とする運動としては，ハネツルベ，櫓の受部などが考えられる。

註 9　斧の着装部が長く平坦なことから鉄斧が着装されたのではないかと考えている。

註 10　東潮「東高月遺跡群出土の分銅形土製品」『用木山遺跡』岡山県山陽町教育委員会　1977

註 11　器表面の調整の役割りを果してきた，肩部から下半に集中して見られた篦磨きの手法が，才の町Ⅱ式の壺形土器，甕型土器にかなり文様風になり，下田所（才の元Ｐ－１，２）期には，後述のように甕の肩部から放射状にかなり整然とした篦磨きが見られるもの（495）と，かなり雑に下半を主に篦磨きをしたもの（494，496～498）が混在する。亀川上層期に至っては，口縁部あるいは肩部から胴部上半の目立ったところに，確実に意識をして文様として施されている。器表面の調整手法の一つである「篦磨き」が，製作者の意識で文様として施される，また施されたとする時点においては，「暗文」と呼称するべきかもしれない。

註 12　ネズミサシ・シャシャンポとの樹種鑑定を得ている。

註 13　Ｐ57法万寺調査区Ｐ－２，土器番号326

註 14　山磨康平・岡田博「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・８』岡山県教育委員会　1975

註 15　間壁忠彦・間壁葭子「岡山県昭和町日羽ケンギョウ田（建行田）遺跡」『倉敷考古館研究集報・第３号』1967

註 16　鎌木義昌「岡山県倉敷市酒津遺跡の土器」「岡山県倉敷市西阿知町新屋敷遺跡の土器」『弥生式土器集成・資料編』　1958

間壁忠彦「倉敷市酒津及新屋敷遺跡出土の土器」『瀬戸内考古学・第２号』　1958

註 17　全容が明らかなものはなく，楕円形の可能性もある。

註 18　近藤義郎「古墳以前の墳丘墓―楯築遺跡をめぐって」『岡山大学法文学部学術紀要・第37号（史学篇）』1977

註 19　葛原克人・泉本知秀ほか「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会　1972

註 20　本項には時期，形態的に直接関係なく除く。

註 21　間壁忠彦・間壁葭子ほか「王墓山遺跡群」『倉敷考古館研究集報・第10号』　1974

上東・川入遺跡出土木器の樹種鑑定

岡山大学農学部教授　畔　柳　鎮

かねて依頼を受けておりました表記の木器の樹種鑑定につき，詳細顕鏡調査の結果次のように樹種を鑑定いたしましたので，報告いたします。

地区	遺構	番号		遺物	樹種
才の町	P－2	1	1	片口容器	ホウノキ
		2	2	加工木	ヒノキ
		3	3	板状木製品	クスノキ
	P－1	4	4	朱塗り木製品片	ヤナギ
		5	5	曲物蓋	ヒノキ
		6	6	竪杵	モチノキ
		7	7	二叉鋤状木製品	アベマキ
	※	8	8	台状木製品	カシワ
亀川	東斜面堆積	9	9	加工木	ネズミサシ
		10	10	手斧柄	アラカシ
		11	11	手斧柄	クリノキ
		12	12	竪杵	クロバイ
		13	13	おもり状木製品	ネズミサシ
亀川	東斜面堆積（中層）	14	14	加工木	ヒノキ
		15		加工木	ヤブツバキ
		16		砧状木製品	
		17		朱塗り木製品	ヒノキ
東鬼川市	4・P・2	18	16	おもり状木製品	カマツカ
	4・P・1	19	17	杵状木製品	アラカシ
	7・P・2	20	18	二叉鋤状木製品	アラカシ？
		21		矢板	アベマキ
八幡西	土手	22		杭	アカマツ
		23		杭	ネズミサシ
		24		杭	ネズミサシ
法万寺	P－1	25		板材	ツガ
	P－2	26		矢板	クロマツ

上東・川入遺跡出土木器樹種鑑定表

※　（註）8の台状木製品について，種々の細胞的特徴よりカシワと推定したが，カシワの語源は，牧野博士は炊き葉または堅し葉，国学者の林甕臣はケシキハ（食敷葉）によるというが，古来から神事慶祝の樹として用いられた。秋に落葉せず枯葉で枝上に残り，翌春新芽の出る時新葉と古葉とが入れかわり，葉をゆずるという点が目出度とされている。現に甲斐吉田辺では，方言としてユズリハという。明徳記にはカシワは神聖木だと記し，伊勢神宮の祭典に神盃としてその葉を使うことが記されており，東雅には「カシハは古の時には，凡飲食の物を盛るに葉をもちい，その葉を呼んでカシワといいたり」とある。万葉古今動植正名（山本章夫著）には「カシハは両手掌を合す如く食物を覆い合すべきによる。拍手するをかしわでという。神前に拍手するは誠を致すを案内するなり」とある。ただ木材を神器として使った記述はないが，神聖な木として器台に加工し，供え物の台として使用したものであろう。おそらくその上にカシワの葉も使用したことが考えられる。

岡山県倉敷市上東遺跡出土遺物に塗布された赤色顔料物質の化学分析

武庫川女子大学薬学部
安田博幸　青園泰子　則近　薫

標記の遺跡より出土した遺物は塗布されている物質の微量化学分析を行ない，所見をまとめたので報告する。

試料の外観および分析用試料の採取：

1. 上東遺跡井戸状土壙出土の表裏両面の全面に赤色顔料が塗布されている，短甲残欠状木製品（弥生後期前半，4.5cm×5cm×1.2cm）。その赤色顔料約10mgを鋼針で注意深く剝離して採取……分析試料1
2. 同遺跡微高地斜面堆積土より出土の，表裏両面の全面に赤色顔料が塗布されている，鳴子残欠状木製品（弥生後期前半，2.2cm×5.5cm×0.7cm）。その赤色顔料約10mgを鋼針で注意深く剝離して採取……分析試料2。
3. 同遺跡井戸状土壙出土の高杯形土器（弥生後期ないし古墳初期）内部に塗布の跡をとどめて残っている赤色顔料。その赤色顔料物質約20mgを鋼針で注意深く剝離して採取……分析試料3

以上の3試料を著者らの常法[1]に従って，ペーパークロマトグラフィーと検出試薬による微量化学分析を行ない，赤色顔料成分の検索を行なった。

実　験　の　部

分析用試料溶液の作製：

上記各分析試料をそれぞれガラス尖形管に移し，濃硫酸0.1mlおよび濃塩酸0.3mlを加えて加温し，酸可溶成分を溶解させた後，蒸留水を適当少量加えて遠心分離器にかけ，酸不溶成分と分離した上澄液を加熱濃縮して，ペーパークロマトグラフィ用の試料溶液とした。分析用試料溶液の各番号は，分析試料の各番号と対応するものとする。

ペーパークロマトグラフィーと検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認：

2cm×40cmの東洋沪紙№53を使用し，ブタノール硝塩酸を展開溶媒として，各分析用試料溶液と対照の鉄イオン（Fe^{3+}）と水銀イオン（Hg^{2+}）の標準液を同条件下で展開した。

展開の終った各沪紙を風乾後，縦に二分し，その一方には，検出試薬として1％ジフェニルカルバジドのアルコール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し，他方には検出試薬として0.05％ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧し，それらの際に発現する，それぞれの呈色スポットの位置（Rf値として表現される）と色調を検した。

上記の各分析用試料溶液ならびに対照イオンの標準液について得られた。沪紙上のスポットのRf値と色調は，つぎのとおりである。

(1)　ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出：(Hg^{2+}は紫色，Fe^{3+}は紫褐色のスポットとして検出)

	Rf 値（色　調）	
試料溶液 1	：0.12（紫褐色）	0.86（紫色）
〃　2	：0.11（〃）	0.84（〃）
〃　3	0.12（〃）	0.87（〃）
Fe^{3+} 標準液	：0.14（〃）	
Hg^{2+} 標準液	：	0.83（〃）

(2)　ジチゾンによる検出：(Hg^{2+}が存在すれば橙色のスポットとして検出。Fe^{3+}は反応陰性のため呈色せず)

	Rf 値（色　調）
試料溶液 1	：0.85（橙　色）
〃　2	：0.84（〃）
〃　3	：0.87（〃）
Hg^{2+} 標準液	：0.83（〃）

判　定

以上のように，試料溶液1，2，3からは，すべて，Fe^{3+}とHg^{2+}がともに検出された。ただし，それらの呈色スポットの呈色強度からいえば，Hg^{2+}のスポットの呈色がきわめて顕著であったのに対して，Fe^{3+}のスポットはいずれも，ごく淡い呈色であった。そのような結果から，3試料に塗布ないしは使用された赤色顔料物質は，「少量のベンガラ（Fe_2O_3）の混ざっている水銀朱（HgS）」と判定する。

〔註〕

1）安田博幸・鶴崎暁子：「尼崎市田能遺跡16号棺の人骨に付着の朱赤色物質の成分について」『古代学研究第49号』P.9（1967）
安田博幸：「埋蔵文化財の分析化学」『考古学と自然科学第4号』P.33（1971）

Ⅴ 結　　語

川入・上東遺跡について，Ⅰ～Ⅳまでの項をもうけ，それぞれ記してきた。この報告は，保存処置としての解決されないいくつかの問題点はあるものの，それぞれ遺構・遺物の概略ならびに小結をもって，現状での一応の成果を示したつもりである。しかしながら前回の山陽新幹線に伴う調査（以下前回調査）（註１）と同様に，調査期間ならびに整理期間も制限された中での記録処置であり，遺構・遺物の厖大さも加わり，全体を網羅できなかったことをことわっておきたい。

以上のように，全体として事実報告の域を出ず，またそこまでも至らず，両遺跡の充分な評価ができなかったことを自省する次第である。ここでは前回調査の，特に土器編年についての欠をおぎなうことで，まとめにかえたい。

川入・上東遺跡の弥生式土器及び古式土師器について

前回調査報告「上東遺跡の調査」（註２）の中で，おもに弥生時代後期から酒津式に至る間の土器編年については，遺構単位の単純資料を基礎にして，上東・鬼川市Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ及び上東・才の町Ⅰ，Ⅱ（＝酒津式）という分類を試みた。しかし，調査員各自の理解の仕方の若干の違いもあり，また整理時間の少なさと紙数の都合から，論旨を十分に記せないまま誤解を得るような表現箇所を補いえないところもあった。今回の都市計画道路に伴う発掘調査が，新幹線に伴う発掘調査区（前報告）の北に接して行なわれた関係もあり，ここで改めて前回の資料をも含め，また今回の川入・上東両遺跡出土の良好な資料（弥生中期後半～古墳初期）をも含めて編年表（表６）を作成し，論を進め，前報告の欠を補っておきたい。

弥 生 式 土 器

岡山県南を中心とする弥生時代後期の土器は，上東遺跡出土の一群の土器をもって代表させてきた。しかし近年，弥生時代後期の細分について具体的な論拠を明示しないままに，いたずらに混乱を招いているような点が伺える。そこで，弥生時代後期の土器編年に関して，まず従来の考察の過程を研究史的に簡単に振り返っておきたい。

現在まで少なくとも文章化された明確な見解は，三つの段階に分けられる。その一つは，弥生後期を上東Ⅰ式と上東Ⅱ式に分類しようとしたものである（註３）。しかしこの上東Ⅱ式と呼ぶものは，少なくとも一般的にその後上東式として認識されてきた，「弥生式土器集成」に収録された上東遺跡出土の土器を中心とした一群を細分しようとしたというようなものではなく，壺形土器などに散見される口縁部拡張がより発達したものを含む（＝酒津式のことのようである一筆者註）ものを識別しようとしていたものである。鎌木義昌の1955年次（註４）及び1958年次（註５）の見解からみて，上東Ⅱ式とは，「丸底でないという一事に拠って，弥生式土器として扱った『酒津式土器』」のことをさしているようである（註６）。これに対し，坪井清足は，上東遺跡出土土器が，大型器台の盛行，甕

形土器の口縁部の技法や高杯のつくり，凹線文の使用など，「上東式」の中に弥生中期後半の要素を多分に残しながらも大阪府西の辻Ⅰ地点に共通する要素を見い出して，上東式土器は弥生時代後期前半期に比定されるもので，酒津式の前に弥生時代後期後半期の一形式があるのではないか，と畿内地方をも見渡した卓見を示した（註７）。

一方，佐原真等は紫雲出山遺跡出土資料の詳細な検討を基礎に瀬戸内沿岸の土器を概観して，上東式に先行するものとして香川県高松市すべり山（大空遺跡）出土の一群（＝大空式）を考えていることを明らかにした（註８）。さらにまた，こうした見解を踏まえつつ，上東式土器そのものの検討が充分には尽くされていないという反省にたって，間壁忠彦等は，岡山県小田郡矢掛町白江遺跡の資料を検討して，「弥生式土器集成」に記された「上東式土器」のうちのより古相の一群を抽出して白江Ⅰ式を設定し，同時に，上東式と酒津式の中間に位置づけ弥生時代後期終末に相当するものとして白江Ⅱ式を設定し，後期も三期に分け得るとした（註９）。

前回の報告は，以上のような，論拠を明示した編年研究の現段階を踏まえた上で，より後出的な上東式の一群である上東・鬼川市Ⅲ式を抽出した編年細分の試案を提起したものである。しかし，前回報告に記した鬼川市Ⅰ～才の町Ⅰ式までの変化は極めて漸次的であり，隣接した型式の土器片は，わずかな小片では十分に識別できない面もある。

そこで整理する意味で，今回調査で新たに設定した上東・鬼川市０式（仮称）を含めて，また修正分をも含めて上東・鬼川市Ⅰ式～才の町Ⅰ式を説明してみたい。（表６・７参照）

1. 上東・鬼川市０式（仮称）

鬼川市０式として設定した土器は，県南部で弥生時代中期末に比定されている仁伍式（註10）と併行関係にあると思われるもので，いわゆる上東式に先行するものである。この時期の土器は，Ｐ―151（東鬼川市・前回調査，以下'74とする），７－Ｐ－52（東鬼川市・今回調査，以下'77とする）の土壙出土の一群および溝５（法万寺，'77）がある。これらは，壷形土器の頸部にみられる凹線文，壷形・甕形土器に共通する内面胴下半の篦削り調整，全体にシャープでスマートな造り，砂の少ない胎土，膚色または白っぽい色調などの特徴を示している。この時期まで存在する，器胴上半に波状文や刺突文を何条も廻らせ，口縁部内面に二重に凸帯を廻らせる壷形土器は，鬼川市Ⅰ式以降にはみられなくなる（註11）。

2. 上東・鬼川市Ⅰ式

前回調査で「上東式」の最古として設定し，白江Ⅰ式（註12）との併行関係を考えていたものである。前回報告では溝２土器溜り（東鬼川市，'74），井戸Ⅲ（才の元，'74）出土の一括土器をあてておいた。また，前回調査では中期末と考えていた溝二・四・六（西鬼川市，'74）出土の一群などは，今回調査溝２・４・６（'74の溝二・四・六）の比較検討の結果，一部に中期末と考えられる土器（**974・980～986・989・990・100～103**，'74）が認められるものの，大勢は鬼川市Ⅰ式に加わるものと理解した。またＤ－Ｚ（才の町，'74）の一括出土土器は，鬼川市０式と鬼川市Ⅰ式のどちらの要素をも備え，例えば**9**，**29**，**35**，**36**（才の町，'74）などは胎土ばかりでなく成形・調整手法においても鬼川市０式とは区別できない。しかしながら高杯形土器や上記以外の土器については，形態・

調整手法・胎土などの要素は鬼川市Ⅰ式に比定されるものである。今回調査のものは，良好な一括資料である８－Ｐ－20（東鬼川市，'77），亀川下層の一部（'77），Ｐ－２（才の町'77）などがある。

これらの遺構出土の一群は鬼川市０式に比べて以下のような共通する特徴をもつ。

壷形・甕形土器は，口縁部の上下の拡張がわずかになり，器胴内面の篦削りが胴部上半まで及ぶが，頸部のくびれ部よりはやや下方までしか至らない。また胴部及び底部の器壁はやや厚みを増す。高杯形土器は杯部が浅くなり，口縁端部が外方へ拡張するものが出現し，口縁及び脚の端部の成形が特に粗雑化する。また全体の器種について一様に砂粒を多く含み，明るい赤褐色を基調とした色合いを呈す。以上の特徴は，土器そのものの粗雑化の傾向を示しているといってよい。

3.　上東・鬼川市Ⅱ式

弥生式土器集成図録（註13）の「上東式」との併行関係を考えたもので，Ｐ－10・２・３・４（東鬼川市，'74），Ｐ－イ（才の町，'74）出土の一群及び亀川斜面堆積中層出土（'77）の大部分（註14），Ｐ－１～４（東鬼川市，'77）などがこれにあたる。

これらの遺構出土の土器は，鬼川市Ⅰ式に比べて次のような特徴をもつ。

壷形・甕形土器の口縁端部の拡張は退化して凹線も粗雑になり，特に壷形土器の頸部はほぼ等間隔に沈線が廻らされる。また長頸壷形土器は重心が下位に移り，胴部最大幅の位置がほぼ器高中央部にみられ，底部近くは少しすぼまる傾向がある。甕形土器は，それまでナデ肩を呈していた肩部は張りぎみになり，壷形土器と同様に内面の篦削り調整は頸部まで達する。高杯形土器は，口縁端部の肥厚及び拡張がほとんどみられなくなり，杯部と脚部の接合は円盤充填法と差し込み法が併存し，脚の端部に肥厚をもつものと丸くおさめるものが併存する。高杯形土器をのぞき，いずれも鬼川市Ⅰ式に増して胎土は砂っぽく，雑になる傾向があり，また脚付直口壷形・カップ形・ジョッキ形土器など土器の絶対量の増加と器種の増加が認められるのもこの時期である。

4.　上東・鬼川市Ⅲ式

いわゆる「上東式」に後出し，白江Ⅱ式に先行するものとして設定した一群で，井－Ⅰ（東鬼川市，'74）出土土器を指標とした。今回調査では，鬼川市Ⅱ～Ⅲ式のどちらの要素をももつＰ－３（亀川，'77），２－Ｐ－38（東鬼川市，'77）などの一群があり，Ⅲ式はＰ－３（法万寺，'77）がある。

これらの遺構出土の土器は，鬼川市Ⅱ式に比べて次のような特徴をもつ。

壷形・甕形土器の口縁端部は，ほぼ直立して上方へ少し拡張をもちはじめる。長頸壷形土器の頸部は間のびして，施される沈線はより細くラフになる。胴部の最大幅は器高の中央より下に位置し，底部近くはシャープさを失ってくる。甕形土器の口縁端面に退化凹線を施すものと，ナデるだけのものが半々くらいみられ，口縁部径が器高の割には大きいものが目立つ。高杯形土器は脚柱部が短かくなって，杯部口径が少し小さくなり，深さを増す。またこの時期には，少なくとも中期末からの変化がたどれる，口縁部が外反して斜め上方に立ち上がる特徴をもつＡ類と鬼川市Ⅱ式から確実にたどれる，内湾しながら立ち上がる杯部をもつＢ類の二種類に加え，二重口縁を呈するＣ類が加わる。高杯形土器を除き，いずれも砂っぽい胎土である。高杯形土器は鬼川市０式からこの時期のものまで，他の器種よりは精選された，砂粒の少ない胎土であり，次の才の町Ⅰ式以降にみられる水漉し粘土は使

用されていない。

5. 才の町Ⅰ式

「上東式」と「酒津式」との間に比定し，より酒津式に近い白江Ⅱ式との併行関係を考えたもので，P—へ（才の町，'74）出土の一群を指標としたものである。しかしながらこの時期のものはP—へ土壙を除いて，いわゆるセット関係を満たす土壙はあまりみられない。また，9—P—1（東鬼川市，'77）のように鬼川市Ⅲ式と才の町Ⅰ式のどちらの要素をもそなえた一群などもある。

この時期の土器は，先行する鬼川市Ⅲ式，後出する才の町Ⅱ式と比較して次のような特徴をもつ。

鬼川市Ⅰ～Ⅲ式にみられたいわゆる長頸壷形土器は影を消して短頸の壷形土器が主流をしめ，より酒津式に似てくる。甕形土器は，口縁端部が上方に立ち上がるものとわずかに肥厚させただけのものの二種類がある。口縁端部を上方につまみ上げて拡張させた端面に凹状の面をもつもの（248～252など，'74）などが多くみられる。壷形土器，甕形土器ともに底部はまだ安定感があり，才の町Ⅱ式とははっきり区別できる。調整手法，胎土などは鬼川市Ⅲ式とほとんど変わりはない。高杯形土器は脚柱部がより短くなり，裾部との間に屈曲した部分が認められる。外反して立ち上がる口縁部は立ち上がりが急になり，長さも増す。そのため鬼川市Ⅲ式のものよりも杯部が深くなっている。前述のように高杯形土器は水漉し粘土が使用され，Ⅲ式までにみられた多少砂っぽい質の高杯形土器は確実になくなる。

以上，上東・鬼川市0式～才の町Ⅰ式の特徴を概略的に説明したが，前回調査時に考えていたことの修正及び補足，ならびに今回調査の良好な資料との比較等についておもに中期～後期にかけての時期のものについて今少し詳しく取り上げてみたい。

今回調査の川入・上東両遺跡において出土した土器の中で最も古い時期のものは5（大道西Ⅰ・P—1），499～503（才の元・斜面）などがある。しかし，遺構に伴っていても単独出土や量的に少ない斜面堆積であった。そこで，一括資料としては最も古いH—6—1・2・3（法万寺）出土のものから説明したい。101・102の長頸壷形土器は，頸部下に凸帯をもつもので，この時期のものとしては古い様相を示す。また113，114の高杯形土器にみられる口縁端面の凹線文，99，100の長頸壷にみられる凹線文など，ほとんど主流となった凹線文の使用は，形態的には蔬池式（註15）の影響が残るものの前山Ⅱ式（註16）の範疇でとらえることができ，いわゆる中期後半の古い時期に比定される。その次に古い時期のものは，鬼川市0式と仮称する7—P—52（東鬼川市・'77），P—151（同・'74）出土の一括土器がある。いわゆる仁伍式に併行関係を考えたものであるが，壷形土器の口縁部の拡張，高杯形土器の杯部の外反などの特徴が，H—6出土の一括との間に一時期の型式を想定させる。しかしながらこの時期については，前山Ⅱ式の設定以降型式そのものを細分化しようとする試みは学史的にはみられず，また現段階では資料的にも乏しく，機会を待ちたい（註17）。

鬼川市Ⅰ式については白江Ⅰ式と理解されてきたものとの併行関係を考え，溝2土器溜り（東鬼川市，'74）出土の一括をあてておいたが，200点を越える土器の量や遺物整理に時間的な制約を受けたこともあって，全体の器種（特に甕形土器）を検討できない点もあった。このため，前回報告に続いて発表された，上東遺跡の北に接する丘陵上にある「王墓山遺跡群」の発掘調査報告（註18）の中

で，前回報告資料だけでは鬼川市Ⅰ式は必ずしも完全に白江Ⅰ式に併行するものではないという評価を受けている。この報告の中で，プロト上東・上東・エピ上東・プロト酒津・酒津・エピ酒津という呼称が新たに用いられている。この分類は，弥生時代後期の細分が「上東式」を中心にして行われている現状と，中期との接点及び「酒津式」との接点をいかに理解するかという点では，展望のあるタイムリーなものであり，一応我々の上東遺跡での細分の理解と対応するものと考えている。しかし，前回報告時には，鬼川市Ⅰ式は「プロト上東」あるいは「白江Ⅰ式」に併行する一型式として理解しようという見通しがあり，また想定ながらも明確にすることが本意であった。またそのような事情もあって，前回報告では鬼川市Ⅰ～才の町Ⅰ式の各型式を，あえて弥生後期の細分型式としては強調しなかったものである。しかし今回調査で８－Ｐ－20（東鬼川市'77）出土の一括遺物は，前回調査で図示資料の少なかった特徴ある甕形土器をも含む資料であり，我々の展望していた鬼川市Ⅰ式に合致する内容をもち，そのまとまった出土状態からみて単純資料として扱うことが可能である。土器の個々の特徴については，遺構・遺物の項，及び先述の鬼川市Ⅰ式のところで述べたとおりで，特に今回その特徴に加えた，中期末の土器（鬼川市０式）に対して上東式土器の特徴の一つが，褐色の色調と胎土にあることがある程度客観性をもつものならば，８－Ｐ－20（東鬼川市，'77）の一括資料はより上東式に近づいた内容を持つと言える。

鬼川市Ⅱ式については，従来の「上東式」にあたることは前述のとおりであるが，表６の鬼川市Ⅱ式のところを破線でくぎっているのは，Ⅱ式が細分できるという意味ではない。これは「弥生式土器集成」に載っている，Ⅱ式に比定される一群の土器が，どちらかというと古い様相を残すものが多く，二度にわたる上東遺跡の調査の出土土器の中に個々にはみられるものの，いわゆる一括土器としては特に取り上げるものはなく（註19），比較的新しい要素のものを載せる結果となったものである。

古式土師器

ここで取り扱う古式土師器とは，一応才の町Ⅱ式～亀川上層までの土器分類をさす（註20）。

岡山県内の弥生時代後期から古墳時代初期にかけての土器編年については，鎌木義昌，間壁忠彦による酒津式（註21）の提唱後，それを中心として進められてきた。またそれ以前，坪井清足は王泊第六層式（註22）を設定し，畿内との比較を行った。しかしながら，その後に設定された酒津式は，提唱された時点においては王泊第六層式との詳しい比較検討はされなかった。王泊第六層式は，「仔細に検討するときそれ自体未だ一貫した型式学的変化を示すものとして体系づけることができるほどの材料がないこと」から，「王泊第六層様式以前の土師器の存否の問題，あるとすればそれと弥生式土器との関係，……王泊第六層と第五層の中間様式の存在…などの問題がある」（註23）という性格を持ちながらも，その後一部研究者の間で，王泊第六層式が単純型式としていまだに捕えられてきている感がある。

前回報告では，才の町Ⅰ式に続く才の町Ⅱ式までを一応型式設定し，それに続くＰ－１・２（才の元，'74）出土の一括土器，亀川上層出土の一括土器は型式化が想定されるものの，資料の少ないこととセット関係をつかめるだけの器種構成がないことから断定的には型式設定は行わなかった。しかしながら今回調査において，それぞれ資料にめぐまれ，検討の結果新たに下田所式と亀川上層式を加

えることができた。以下，才の町Ⅱ式～亀川上層式を説明してみたい。

6. 才の町Ⅱ式

いわゆる「酒津式」との併行関係を考えたもので，P－ト（才の町，'74）出土の一群を指標としたものである。前回・今回調査ともに，一括出土の良好な資料としては，この型式はほとんどみられない。しかし，P－ト出土の一群は出土土器量が豊富なこと，高杯形土器の良好な資料が少ないものの器種構成を満たすこと，また，まとまった出土状況を呈すことから単純資料として取り扱うことができ，単一の時期を示す一型式を与えることが可能であると考える。

この遺構出土の土器は，次のような特徴をもつ。

壷形土器は，頸部をもつものともたないもの，口縁部が上方に拡張するものとしないもの，口縁端部を肥厚させるものと丸くおさめるものなど，それぞれの一，二の特徴をそなえ，四種類くらいに大別できる。しかし，いずれも胴部及び底部は丸みを帯びている。器表面の調整は，全体に刷毛目だけのもの，肩部に刷毛目，それ以下に篦磨きのものと二種類ある。甕形土器は，口縁端部を上方に拡張させるもの，肥厚させるだけのもの，丸くおさめるもの，また拡張部端面に退化凹線を施すもの，篦描平行線文を施すもの，ナデによる一条の凹部をもつものなど，口縁部の形態手法により，六種類くらいに分かれる。また，口縁端面に篦描平行線文をもつものが，器表面に刷毛目・刷毛目と篦磨き・篦磨きと三種類の調整を施し，また「く」の字状の口縁をもつものの一つが叩き目と篦磨き調整を施すほかは，ほとんど刷毛目だけの調整によっている。

壷形・甕形土器ともに胴部内面は，頸部下及び口縁部下までていねいな篦削りが行われ，才の町Ⅰ式のものに比べいずれも底部は丸底化の傾向がうかがえる。また，叩きをとどめる甕形土器（**343**，'74）や，鼓形器台（**313**，'74）がみられるのもこの時期からである。

7. 下田所式

酒津式に後出し，P－1・2（才の元，'74）とP－4（下田所，'77）出土の一群を指標とするものである。前回報告では，P－ト（才の町'74）とP－1・2の出土土器をもって，酒津式が古・新にわかれる可能性を示したが，その後P－4の一括出土土器などを加えることにより，酒津式そのものが二つにわかれるのではなく，後出する単独の一型式の設定が可能であると理解した。

これらの一群は，次のような特徴をもつ。

壷形土器は点数も少なく，口縁部のみなので，才の町Ⅱ式との区別はつきにくい。甕形土器は，「く」の字状に外反した口縁部の端部をわずかに上部へ肥厚させるものや，端部にわずかな面をもつものに加えて，拡張部端面に櫛描平行沈線文をもつもの主流をしめて存在する。これらは，形態的には底部の丸底化がより進行し，それに伴う胴部の球形化，口縁部径が胴部幅に比べて小さくなるなど，全体的なバランスが才の町Ⅱ式と亀川上層式との中間的な特徴を示す。胴部内面は口縁部下までていねいに篦削りが成され，外面は**1067**（才の元，'74），**481・497**（下田所'77）などのように，刷毛目あるいは篦磨きの下に叩きが残っているものもある（註24）。高杯形土器は，杯部が三段に立ち上がるものやボール状を呈するものなど，酒津式（＝才の町Ⅱ式）とほとんど区別がつかない，脚端に屈曲をもつものが多いことや脚柱部が多少長くなる傾向があるなどの亀川上層式に近い特徴があ

る。また，外面下部を篦削りする椀形土器（皿形土器）や次時期の小型器台形土器の系譜をたどれる491（下田所'77）などが出現するのもこの時期である。

8. 亀川上層式

王泊第五層式や山田原（註25）にわずかに先行する時期のものとして設定し，亀川斜面堆積上層（亀川'74・'77），H－4（法万寺，'77），大溝Ⅳ層（同），P－2（同）などの一括土器を指標とするものである。

これらの一群は，下田所式と比較して次のような特徴をもつ。

壺形土器は，口縁端部がラッパ状に開いて二段に立ち上がるものと斜め上方に立ち上がり「く」の字状の口縁をもつものとがあるが，いずれも底部は完全に丸底を呈す。甕形土器は，わずかに内湾しながら立ち上がる，「く」の字状の口縁部をもち，端部の内側にわずかな凸起状の肥厚をもつものがみられてくる。また，下田所式に多くみられた，口縁端面に櫛描平行沈線文をもつものは，この時期にも存在し，口縁部だけでは見分けがつきにくい。しかし，この時期のものは，口径が比較的小さく，口縁拡張部下の稜線が明確でなくなり，端面に施される櫛描沈線が薄くなるなどかなりラフになる傾向がある。底部は，壺形土器と同様に完全に丸底になる。叩きの128・129（法万寺，'77）をのぞいては，どの甕形土器も内面篦削りで胴部壁をかなり薄く仕上げている。また，皿形土器は浅くなり，高杯形土器は口縁部が異常に発達して脚部が長くなり，脚柱部下に屈曲をもつ傾向をみせる。また，小型坩形土器（小型丸底），小型鉢形土器，小型器台形土器が，セットでとらえられるのもこの時期である。

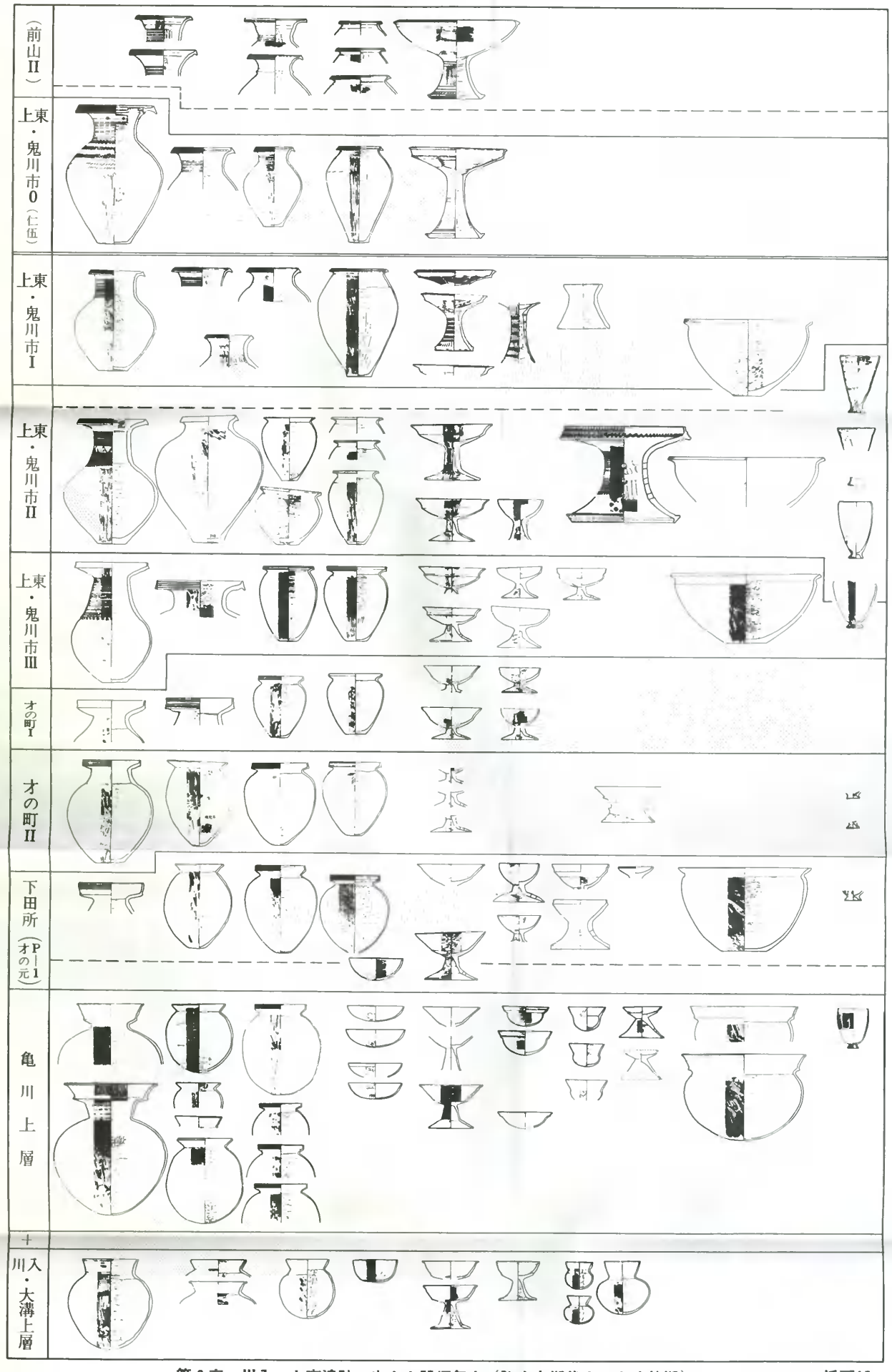
以上，才の町Ⅱ式～亀川上層式の特徴を概略的に説明した。この中で，下田所式については，一応形態の変化の中でのまとまりはつかめたものの，資料的に多少不足の感もある。また表6の下田所式のところを破線でくぎっているのは，現段階では型式の細分を示すものではなく，上東・鬼川市Ⅱ式と同様に，下田所式の中には，より古い要素（酒津式的要素）と，より新しい要素（亀川上層式に近い要素）とが混在するという意味である。例えば，H－7（東鬼川市，'74）出土の一括は，壺形土器，鉢形土器がラッパ状に二段に立ち上がる口縁部をもつが，高杯形土器が三段に立ち上がる杯部をもつなど，亀川斜面上層出土のものとP－I（才の元，'74）出土のもののどちらの要素も示している。

また亀川上層式は，前回報告時点では小若江北式併行くらいに考えていたが，今回調査資料を加え型式名を設定するにあたり，小若江北式にわずかに先行する時期を与えている。

以上のように，前回の山陽新幹線関係と今回の都市計画道路関係の二度にわたる調査の結果を通観しながら，おもに土器の形態論を軸として，弥生中期後半から古墳時代前半期までの土器編年について記してきた。

ここで他遺跡との編年上の対比など，例をあげて詳しく記述すべきであるが，紙面の都合ならびに筆者の力不足もあり前報告の上東式土器を中心として，編年上の欠をおぎなうにとどめた。参考までに川入・上東両遺跡の土器編年として表6（註26）を，他遺跡との対比編年として表7（註27）を載せておいた。なお，この小稿をまとめるにあたっては，前回調査者伊藤晃，藤田憲司に負うところが大きい。

（柳瀬）



第6表　川入・上東遺跡　出土土器編年表（弥生中期後半～古墳前期）　　挿頁15

土成生集弥器（註28）	島泊高王（註29）	館報古考集敷究倉研（註30）	幹町新雄（註31）	多寺幡廃（註32）	貫尻縦谷（註33）	計幹・都新上東(川入)	畿内 大和 河内（註34）		山陰
前山Ⅱ			雄町5				第Ⅳ様式		
			雄町6			鬼川市0（仮）			
大空		白江Ⅰ 上土田	雄町7・(8)	弥生後期末 下層	（Ⅰ）・Ⅱ	鬼川市Ⅰ	第Ⅴ様式		↑九重↓
上東		辻山田東	雄町(9)・10			鬼川市Ⅱ			
		グランド上層				鬼川市Ⅲ			
		女男岩 白江Ⅱ	雄町(11)			才の町Ⅰ	下北鳥池層	纒向Ⅰ	鍵尾Ⅰ
酒津		辻山田F1 深山 五万原	雄町(12)	下層Ⅰ	Ⅲ	才の町Ⅱ	（上田町1）・上田町2	纒向Ⅱ	鍵尾Ⅱ
	←王泊第六層→	D・F2	雄町13	下層Ⅱ	Ⅳ	下田所		纒向Ⅲ	小谷……
			雄町14		Ⅴ	亀川上層（大溝下層）		纒向Ⅳ	
	王泊第五層	山田原		下層Ⅲ	Ⅵ		布留……		
	王泊第四・三層	走出		下層Ⅳ					
				下層Ⅴ	Ⅶ	（大溝上層）			

表7　編年対比一覧表（弥生時代中期末～古墳時代前期）

註 1　伊藤晃・柳瀬昭彦・池畑耕一・藤田憲司「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・第2集』岡山県教育委員会　1974

註 2　註1に同じ

註 3　鎌木義昌・坪井清足「岡山県庄村上東遺跡の土器」『弥生式土器聚成図録解説・第6輯』弥生式土器文化研究特別委員会編　1954

註 4　鎌木義昌「各地域の弥生式土器―中国」『日本考古学講座4・弥生文化』　1955

註 5　鎌木義昌「岡山県倉敷市酒津遺跡の土器」『弥生式土器集成・資料編』　1958

註 6　鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成・本編1』　1964
鎌木義昌「原始時代」『岡山市史・古代編』1962の71頁にもその見解がみられる。従って前報告の234頁の表における鎌木氏の編年記述はまちがいであった。

註 7　坪井清足「岡山県都窪郡庄村上東遺跡の土器」『弥生式土器集成・資料編』　1958

註 8　小林行雄・佐原真「紫雲出」香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会　1964（57頁～58頁，註㊾）

註 9　間壁忠彦「岡山県矢掛町白江遺跡」『倉敷考古館研究集報・第1号』　1966

註 10　高橋護「郷内村小学校裏貝塚出土の弥生式土器の編年的位置について」『遺跡・23号』　1955
山本慶一「倉敷市児島仁伍遺跡」『倉敷考古館研究集報・第8号』　1973

註 11　岡山地方では，菰池期にこの種のもの（南方遺跡）がみられはじめ，いわゆる仁伍式まで（山陽町門前池遺跡，H―12など）存在するようである。

註 12　註9に同じ。

註 13　註7に同じ。

註 14　亀川斜面堆積の中層は，前回調査の時には一括して下層と理解し，また鬼川市Ⅰ式のものが多く出土していた。今回調査において中層出土のものは，上東遺跡第一章亀川斜面のところで述べたように，鬼川市Ⅰ式のものはほとんどみられず，またレベル的に下の方からも才の町ⅠあるいはⅡ式のものが出土するなどかなり時期幅をもつ層であることが判明している。その中にあって中層の大部分が鬼川市Ⅱ式の土器であった。

註 15　鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成・本編Ⅰ』　1964

註 16　鎌木義昌「岡山県児島市福江前山遺跡の土器」『弥生式土器集成・資料編』　1958

註 17　岡山県教育委員会による「児島高校移転用地内埋蔵文化財発掘調査」で，弥生時代の中期後半の一括土器が出土している。また，報告書も近く刊行される。

註 18　間壁忠彦・間壁葭子ほか「王墓山遺跡群」『倉敷考古館研究集報・第10号』　1974

註 19　その理由として次のことが考えられる。まず，我々が調査した範囲に，たまたまその時期のものが少なかったこと，今一つは，「弥生式土器集成」に載っているものが，東鬼川市と西鬼川市の，おもに調査区の北側から出土したものが多く，時期が新しくなるにつれて集落そのものが南下する傾向にあり，そのために我々の調査範囲内からは，東鬼川市Ⅱ式の中でも，より新しいものが多く出土したことなどが考えられる。

註 20　弥生式土器と土師器との識別については，いろいろな理解があるが，1つには，弥生式土器に続く内容で丸底土器の成立の一事をもって土師器とするという見解（鎌木，1955）と，古墳時代の表徴である古墳の出現をもって土師器とするという時代区分による見解とがある。前者については，いち早く丸底土器の成立が，広域的で普遍的な古墳文化の内容をもつものとして，正当な評価を受ける指摘があった（小林，1938）が，その後，古墳時代の成立についての研究も進められ，布留式より，より古い古墳時代の土器の存在についての検討もなされており（田中，1965），現段階では，後者の見解の，時代区分を一定の指標にした，様式設定の意識が評価を受けるに至っている。近年，淀川水系を中心にした土器様式と集団関係の大系的な検討を含めて，都出比呂志の提唱した古墳時代の成立に関する見解（都出，1974）は，古墳の出現という著しい影響力のもとに土器が定形化を遂げることをもって識別にしているが，前方後円墳の成立についての土器編年上の細かな時期の設定について，最近の「趨向」（石野・関川1976）の成果などからは，検討の余地も残されているように思える。また，岡山地方に

おける，布留式よりも古い土師器については，酒津式土器がそれまでの弥生式土器＝上東式に比べ，より古墳時代的特徴をもつものとして土師器に組み入れる横山浩一の見解（横山1959）があり，最古の土師器についての結着は，古墳成立（どの墳墓をもって，古墳とするか）との絡みにおいて，未だはっきりしているとは言えない。筆者等は，最古の土師器についての見解は，現段階の研究の動向からは十分な理解を示し得ないでいるため，ここでは暫定的に，才の町Ⅱ式～亀川上層式の間の土器をもって，古式土師器と限定して用いることにしたい。

鎌木義昌「各地域の弥生式土器一中国」『日本考古学講座４・弥生文化』 1955

小林行雄「彌生式土器聚成圖録解説』 1938

田中琢「布留式以前」『考古学研究・第12巻第２号』 1965

都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係一淀川水系を中心に一」『考古学研究・第20巻第４号』 1974

石野博信・関川尚功「纒向」 1976

横山浩一「手工業生産の発展」『世界考古学大系３・日本Ⅲ』 1959

註 21 註４に同じ。

間壁忠彦「倉敷市酒津及新屋敷出土の土器」『瀬戸内考古学・２号』 1958

註 22 坪井清足「岡山県笠岡市高島遺蹟調査報告」 1956

註 23 註22のⅡ王泊遺蹟の28頁

註 24 このような形での叩きは，現在のところ才の町Ⅱ式及び亀川上層式の同種の土師器に観察されないことから，このことが逆に，下田所式の特徴を示す指標にもなり得ると考えられる。

註 25 三杉兼行・間壁忠彦「備前・原遺跡の土器」『遺跡・26号』 1957

間壁忠彦「岡山県笠岡市走出の祭祀遺跡」『倉敷考古館研究集報・第２号』 1966

註 26 この表を作成するにあたっては，高橋護氏をはじめ，多くの方々に御教示をいただいた。

註 27 この表の対比関係は筆者等の理解するところであって，原報告者と相違する点があるかもしれないことをことわっておきたい。

註 28 註４，註７，註16などの一連の「弥生式土器集成・資料編」による。

註 29 註22による。

註 30 註９，註18，註25などの倉敷考古館研究集報による。

註 31 正岡睦夫ほか「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会1972による。

註 32 出宮徳尚・根木修「幡多廃寺発掘調査報告」岡山市教育委員会1975による。

註 33 高畑知巧「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・11』岡山県教育委員会1976による。

註 34 河内については，都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係一淀川水系を中心に一」『考古学研究・第20巻第４号』1974によるものを，大和については，石野博信，関川尚功「纒向」1976によるものをあてた。特に才の町Ⅰ式以降について，纒向については，実見もでき，ある程度の併行関係がつかめた。しかしながら前回報告時およびその後に筆者等が考えていた都出氏の考えておられるものと纒向のものと間に差があり，表のような形となった。今後の検討をまちたい。

川入・上東遺跡の製塩土器について

製塩土器については，前回調査報告（註１）の中で，上東遺跡出土の土器編年にそってＡ～Ｅタイプに類別され，それぞれＡ＝弥生時代中期末，Ｂ＝上東・鬼川市Ⅰ・Ⅱ，Ｃ＝上東・鬼川市Ⅱあるいは Ⅲ，Ｄ＝上東・才の町Ⅱ，Ｅ＝亀川上層と考えている。今回調査出土のものを上記に従えば，新た

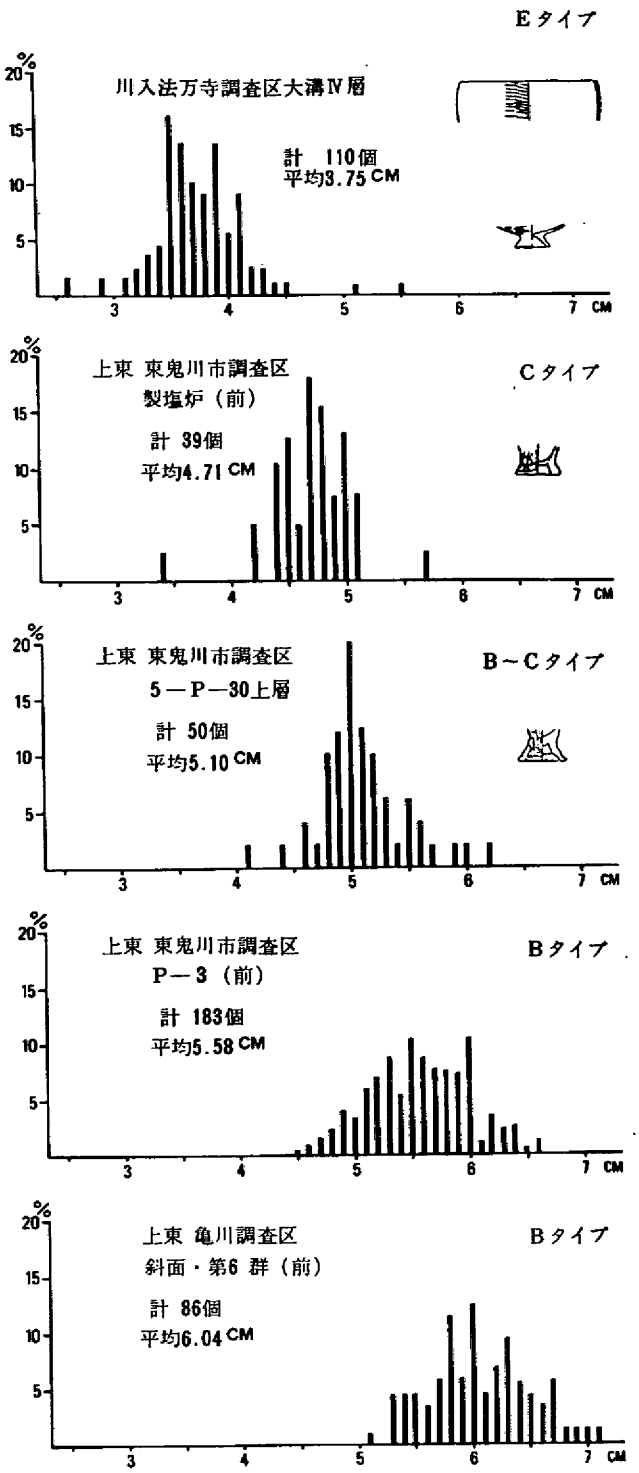


表８　川入及び上東遺跡出土製塩土器脚部径計数比較表

にＣタイプとＤタイプの間に位置づけられるＣ′タイプ（第113図，320）が摘出され，また，川入遺跡法万寺調査区大溝下層からはＥタイプが補充された。

Ｃ′タイプは脚部端部を丸く仕上げるという新しい手法に加え，鉢部外面に刷毛調整が成されるという特徴がある。このことはＡ～Ｃタイプに普遍的に見られた。外面箆削りによって器壁を薄くするという効果を放棄することで，それに変わる製作技術的な変革の表われであるのか，下田所期には確実に出現するであろう叩き技法に至るまでの，過渡的な流れの中での一型式なのかは不明である。

Ｅタイプは前回調査では僅少しか出土していなかったものであるが，今回調査によって明らかになった。脚部は低く，小型化しており，鉢部底の張りが強く，ボウル状を呈するもので，胴部外面は叩き成形されている。このタイプは亀川上層以降，走出遺跡(註２）期まではほとんど変化なく続いていったものと考えられる。

なお表８は，一括出土のなかでも比較的多量に出土したものを対象に，百分率で表わしたものである。

（江見）

註１　伊藤晃・柳瀬昭彦・池畑耕一・藤田憲司「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・第２集』岡山県教育委員会　1972

註２　間壁忠彦「岡山県笠岡市走出の祭祀遺跡」『倉敷考古館研究集報・第２号』1966

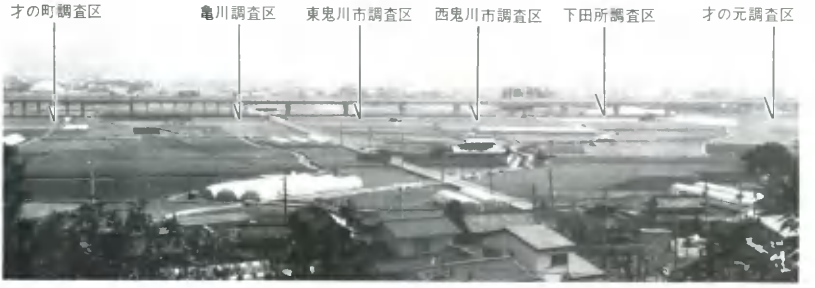
おわりに

今回調査対象になった岡山市川入遺跡，倉敷市上東遺跡は，都市計画道路（富本町・三田線）建設に伴う緊急発掘調査であり，その限られた調査期間，整理・報告書作成期間の中で，我々調査員は最善をつくしたつもりである。しかしながら，前回山陽新幹線（岡山以西）建設に伴う調査と同様に，遺構・遺物の厖大さから，報告書に掲載する遺構・遺物の選択を余儀無くされ，その中でも少しでも多くのものを取り上げて報告したいという気持ちから，広くしかし浅くという記述になり，その結果はⅠ～Ⅴの報告のとおりである。今後，遺構・遺物の未整理のもの，記述不足のものについて，あるいは今回十分にはできなかった他地域との比較における両遺跡の評価などについて，「岡山県埋蔵文化財報告」（岡山県教育委員会）などの紙面に補足していきたいと思っている。

なお，本報告書作成にあたって，御教示，御指導をいただきました埋蔵文化財保護対策委員の方々を始め，県内外の研究者の方々に感謝の意を表します。

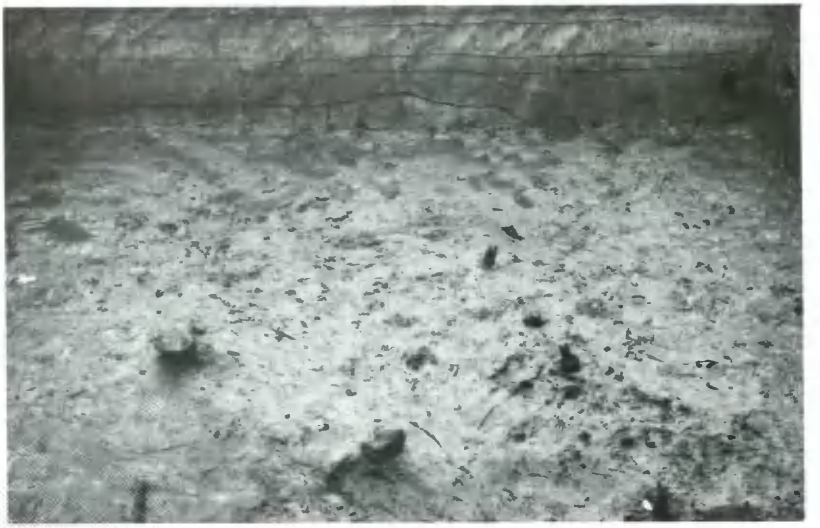
1－1　川入・上東両遺跡遠景（北西から）

1－2　川入遺跡遠景（北西から）



1－3　上東遺跡遠景（北から）

図版２



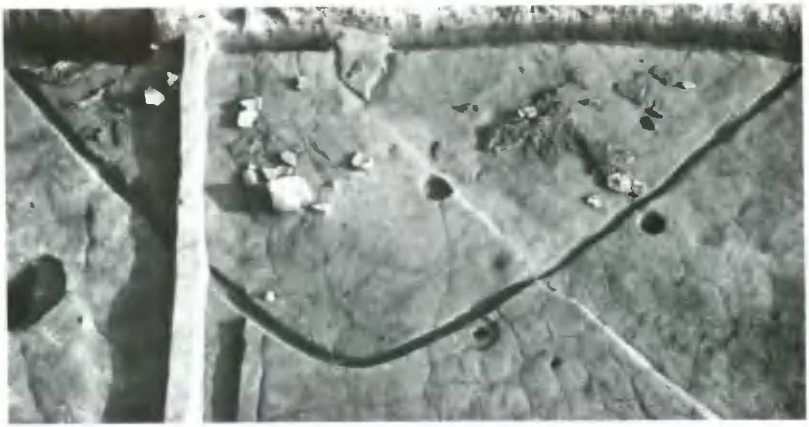
２－１　八幡西調査区　土手状遺構（南から）

２－２　入溝調査区　遺構検出状況（東から）

（北から）

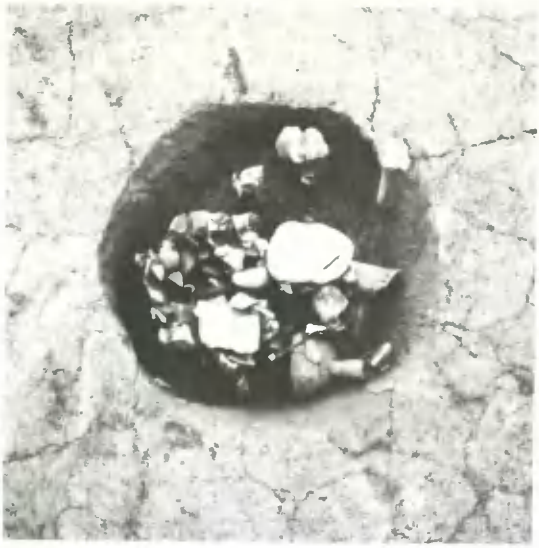
大道西Ⅰ調査区　築地状遺構周辺（南から）

図版 4



4 － 1　大道西Ⅰ調査区　H－3　検出状況（北から）

4 － 2　大道西Ⅰ調査区　微高地西端付近（東から）



5 － 1　大道西Ⅰ調査区　P － 5　検出状況（南から）

5 － 2　大道西Ⅰ調査区　P － 4　検出状況（東から）

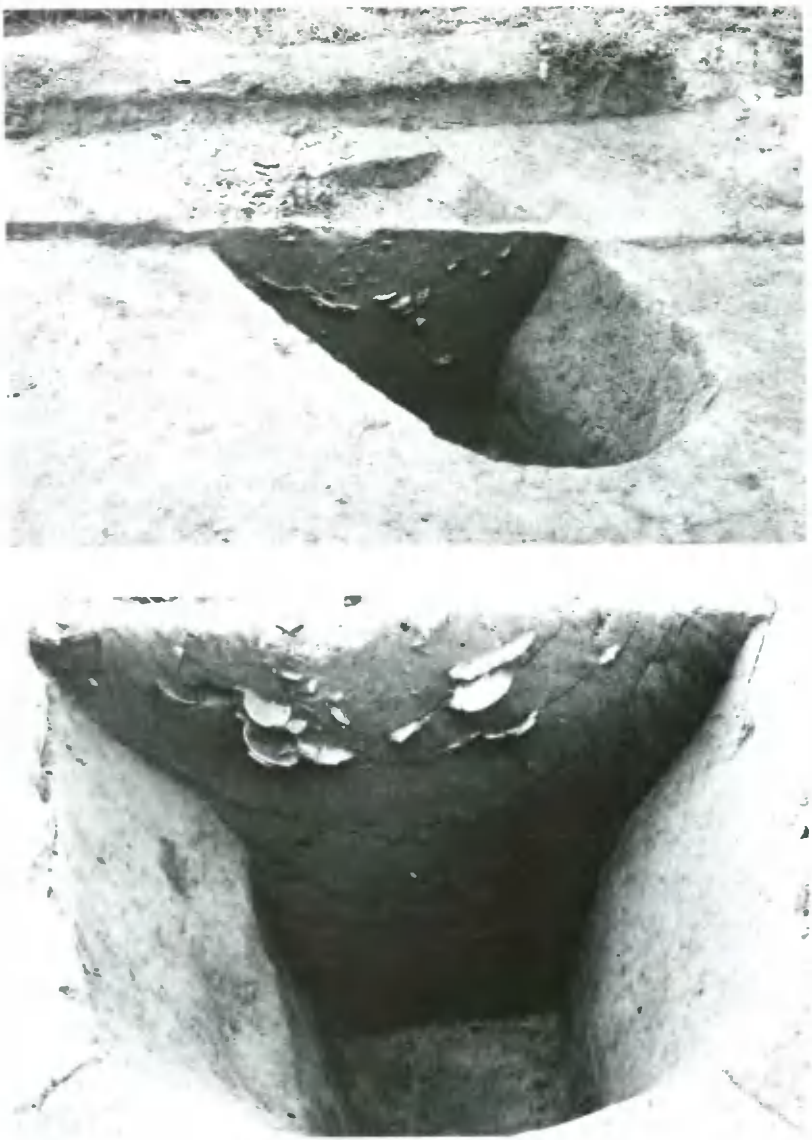
図版 6

大道西Ⅰ調査区　P－8　検出状況（南から）

7－1　大道西Ⅰ調査区　P－9　上層遺物出土状況（西から）

7－2　大道西Ⅰ調査区　P－9　上層遺物出土状況部分（南から）

図版 8



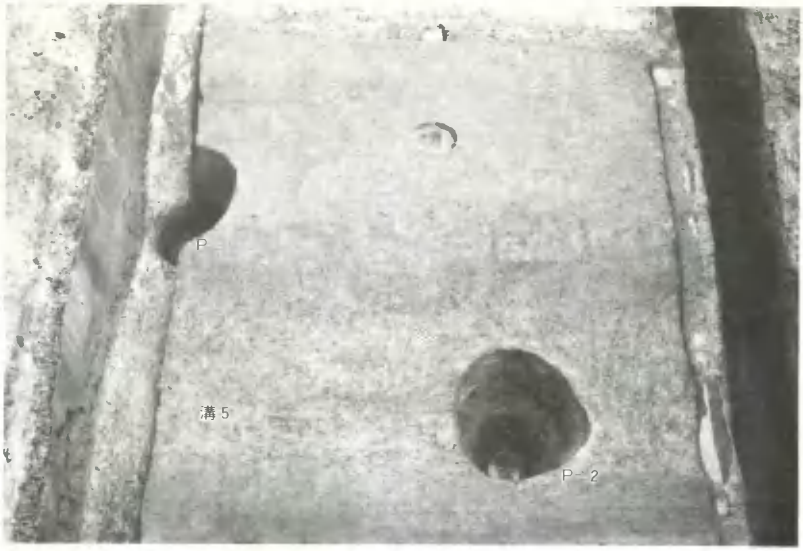
大道西Ⅰ調査区　P－9　検出状況（南から）

9－1　法万寺調査区　H－4　検出状況（南から）

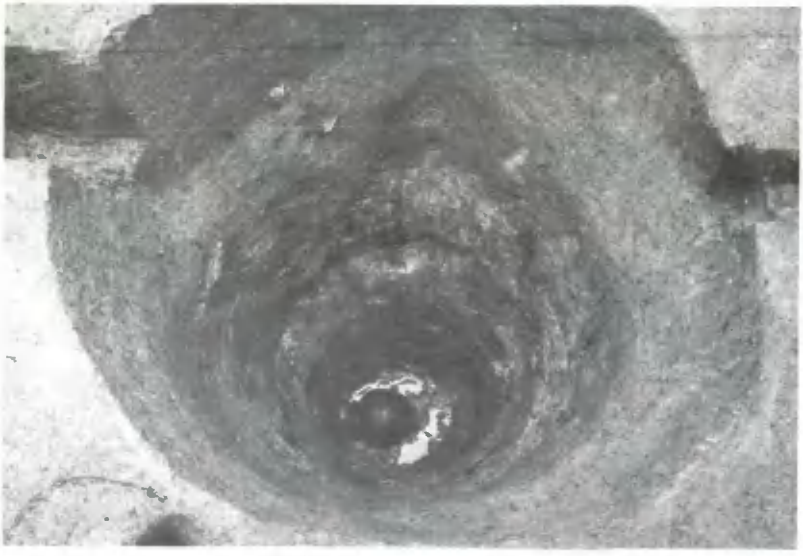
9－2　法万寺調査区　H－5，6 検出状況（南から）

10－1　法万寺調査区　溝状遺構検出状況（東から）

10－2　法万寺調査区　溝4　遺物出土状況（南から）



11－1　法万寺調査区　遺構検出状況（東から）



11－2　法万寺調査区　P－1　検出状況（東から）

図版12

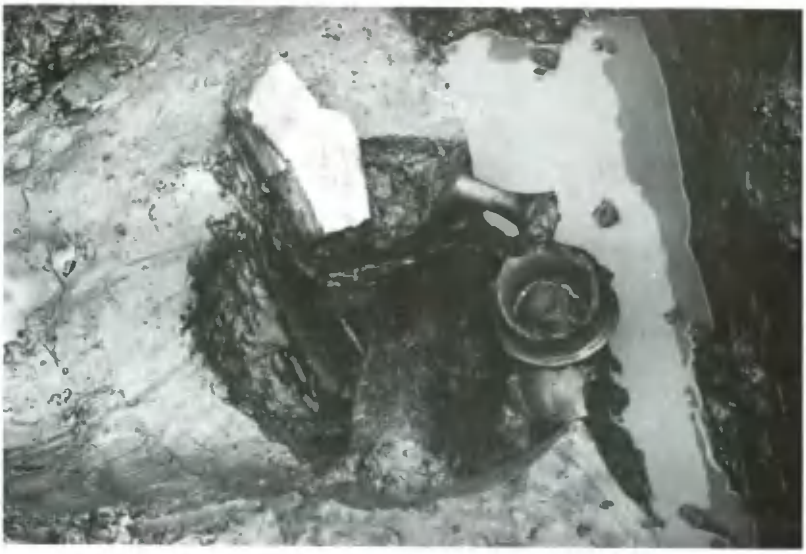
（北から）

法万寺調査区　P－2　遺物出土状況（南から）

13－1　才の町調査区　遺構検出状況（東から）

13－2　才の町調査区　作業風景

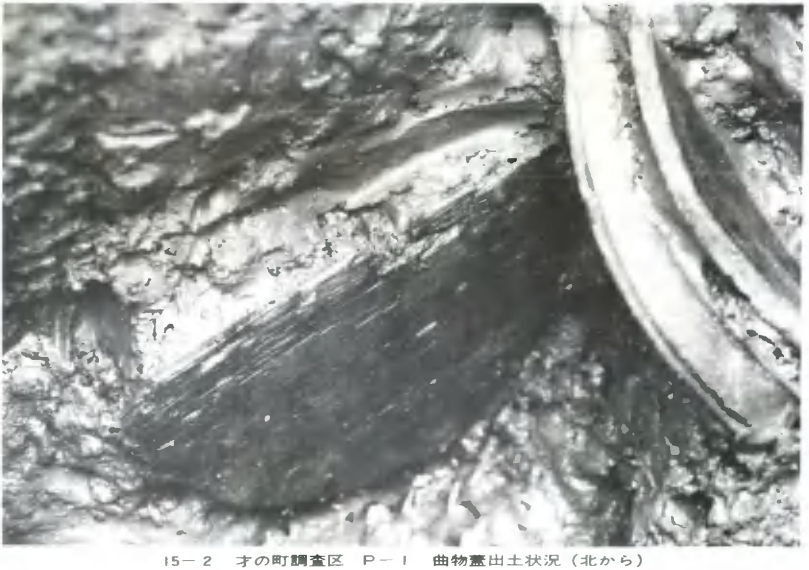
図版14



14－1　才の町調査区　P－2　検出状況（西から）

14－2　才の町調査区　P－2　遺物出土状況（北から）

15－1　才の町調査区　P－1　検出状況（東から）



15－2　才の町調査区　P－1　曲物蓋出土状況（北から）

図版16

（北から）

才の町調査区　P－1　遺物出土状況（北から）

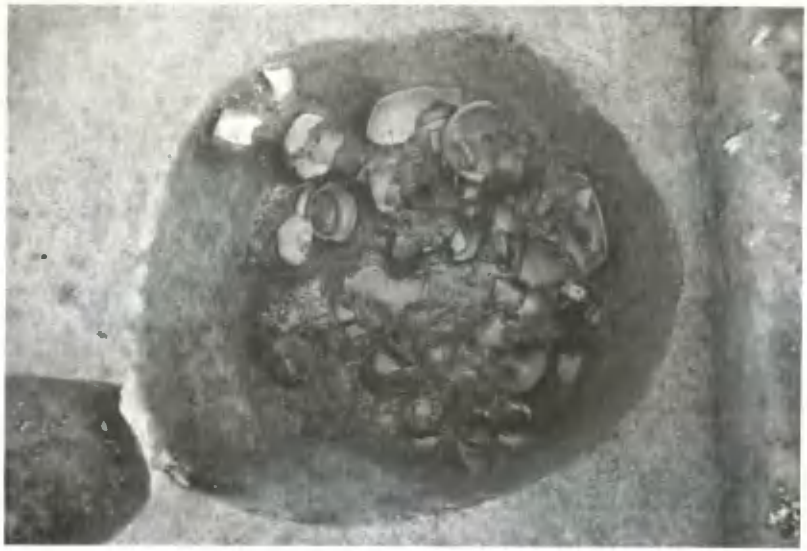
17－1　亀川調査区　微高地東斜面（南から）

17－2　亀川調査区　東斜面中層遺物出土状況（南から）

図版18

18－1　亀川調査区　東斜面上層　出土遺物

18－2　亀川調査区　東斜面上層遺物出土状況（南から）



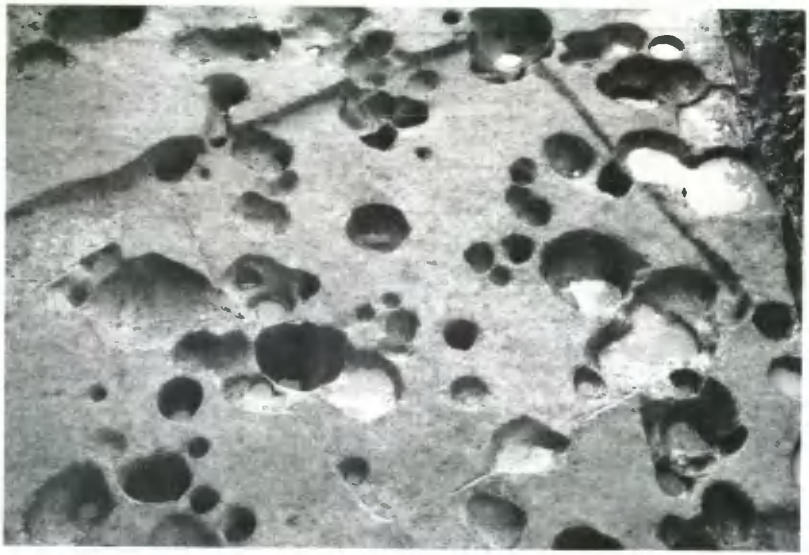
（北から）

亀川調査区　P－2　検出状況（南から）

20－1　東鬼川市調査区　遺構検出状況（東から）

20－2　東鬼川市調査区　住居址群検出状況（西から）

（南から）



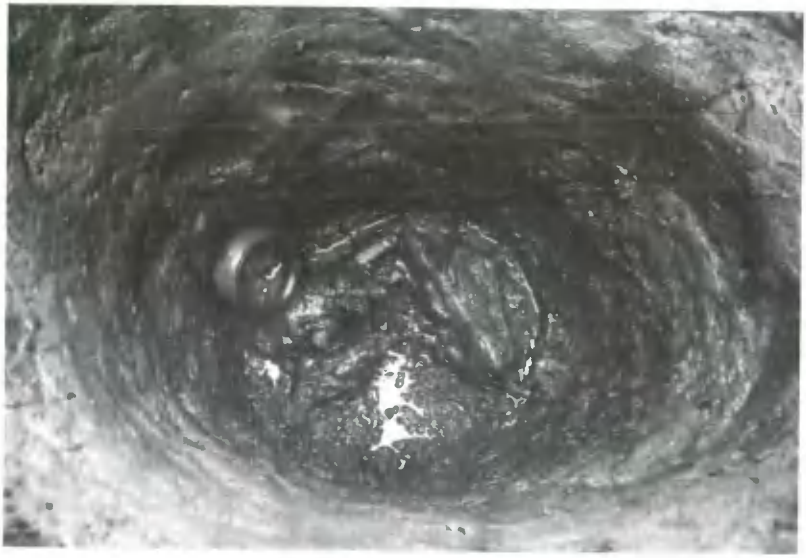
東鬼川市調査区　H－10　検出状況（東から）

図版22

22－1　東鬼川市調査区　8－P－20　検出状況（南から）

22－2　東鬼川市調査区　4－P－4　検出状況（東から）

23－1　東鬼川市調査区　5－P－1　検出状況（南から）



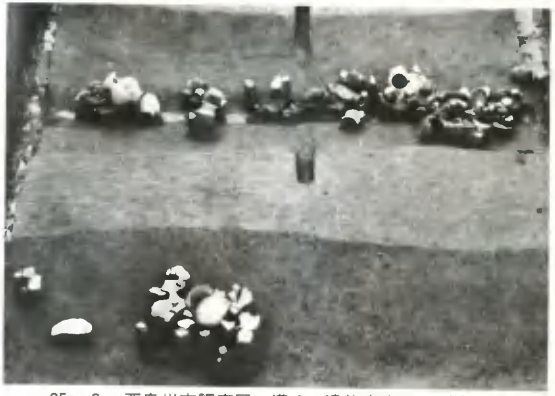
23－2　東鬼川市調査区　4－P－3　遺物出土状況（西から）

図版24

24－1　東鬼川市調査区　2－P－38　検出状況（東から）

24－2　東鬼川市調査区　9－P－1　検出状況（東から）

25－1　西鬼川市調査区　遺構検出状況（西から）



25－2　西鬼川市調査区　溝4　遺物出土状況（東から）

図版26

26－1　西鬼川市調査区　溝4及び溝5　遺物出土状況（南から）

26－2　西鬼川市調査区　溝4及び溝5　検出状況（南から）

27－1　西鬼川市調査区　東部分遺構検出状況（東から）

27－2　西鬼川市調査区　溝2及び溝6　検出状況（南から）

28－1　下田所調査区　遺構検出状況（東から）

28－2　下田所調査区　P－4　遺物出土状況（東から）

28－3　下田所調査区　P－3　出土ヤリガンナ

29－1　才の元調査区　溝状遺構検出状況（南から）

29－2　才の元調査区　溝－D　断面（南から）

図版30

5

2，1

34

35

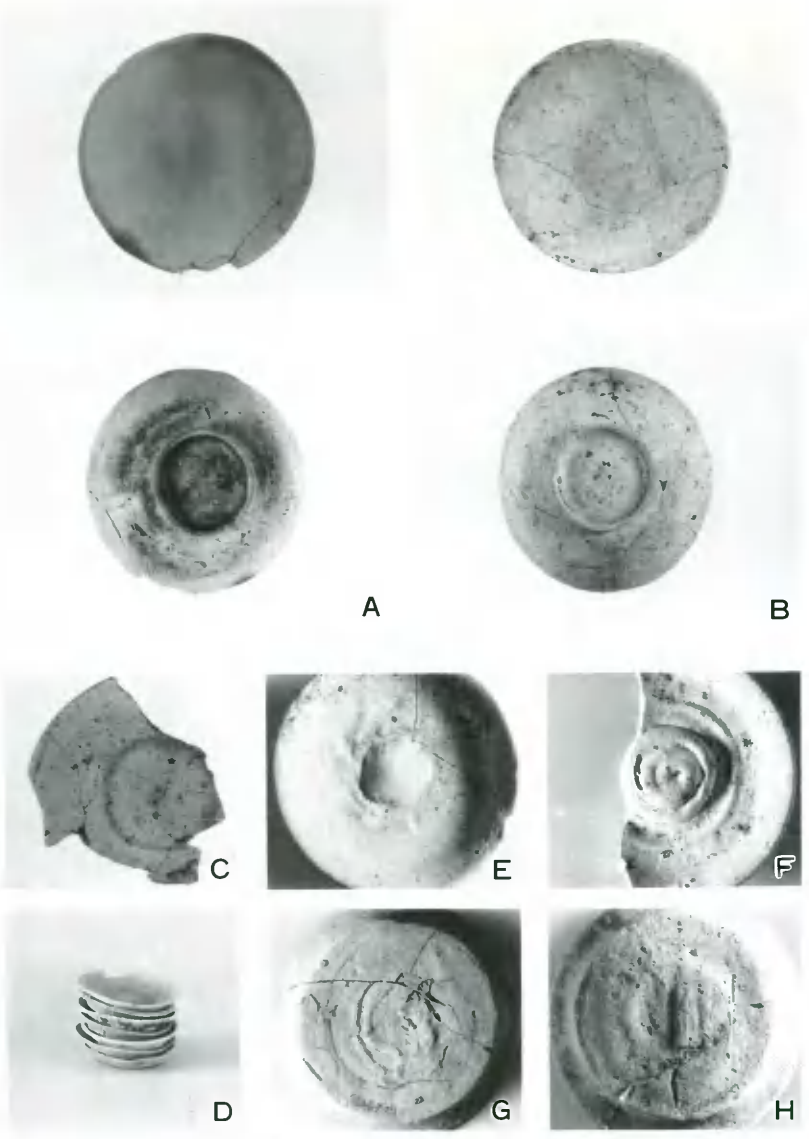
30

大道西Ⅰ調査区出土遺物

50

54

大道西Ⅰ調査区　P－9　出土遺物



大道西Ⅰ調査区　P－9　出土遺物部分

128

140

法万寺調査区　H－4　出土遺物

図版34

192

199

203

315

319

326

334

法万寺調査区　第４，Ｐ－１，Ｐ－２　出土遺物

236

240

241

269, 270

276

271

261

282

280

法万寺調査区　大溝（Ⅳ層・Ⅲ層）出土遺物

図版36

36－1　川入遺跡出土　緑釉

36－2　川入遺跡出土　白磁・青磁

27

36

37－1　才の町調査区　P－1　出土遺物

34

57
58

56

37－2　亀川調査区　東斜面中層出土遺物

64

74. 76. 75

65

66

70

72

亀川調査区　P－2　出土遺物

39－1　東鬼川市調査区　7－P－52　出土遺物　39－2　西鬼川市調査区　溝4　出土遺物

図版40

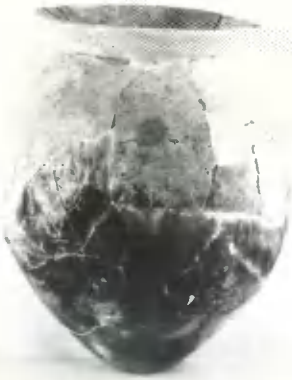
40－1　東鬼川市調査区　2－P－38　出土遺物

40－2 東鬼川市調査区　6－P－42　出土遺物

40－3　東鬼川市調査区　9－P－1　出土遺物

479

488



481

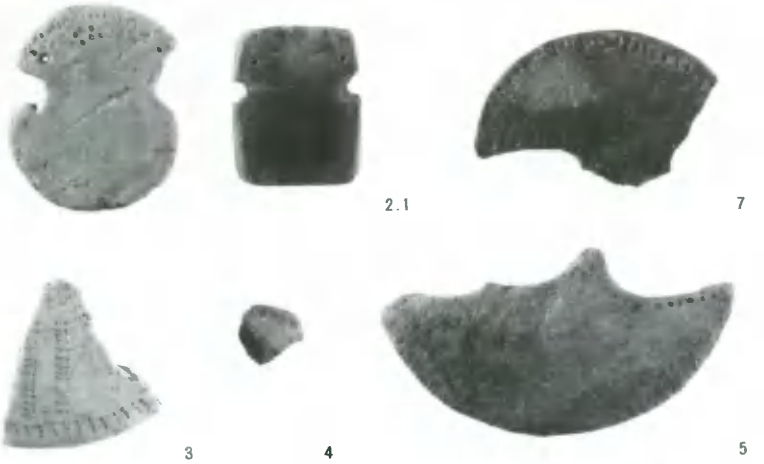
487

494

498

下田所調査区　P－4　出土遺物

図版42



2.1　7　3　4　5

分銅形土製品

玉類

5　4　1　3.2

上東遺跡出土遺物　銅鈴

石鏃

5

1　　3

石庖丁

石錘

9.10.11

上東遺跡出土石器

5

5

6

7

4

才の町調査区　P－1　出土木器

10

11

12

14

13

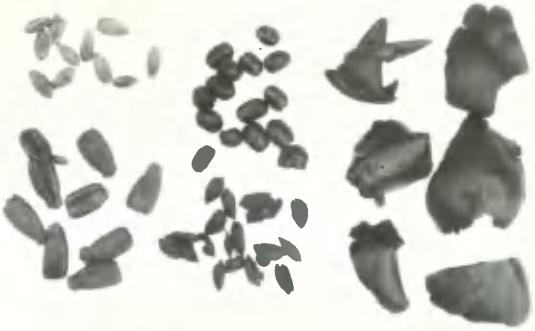
亀川調査区　東斜面中層出土木器

16

17

18

東鬼川市調査区　各土壙出土木器



クリ
ソラマメ
アズキ　炭化モミ
マクワウリ　センナリヒョウタン
モ　モ

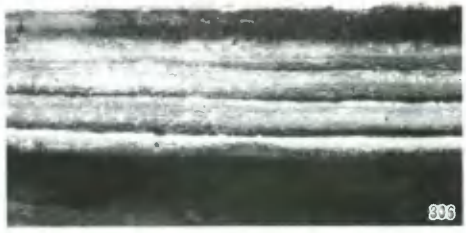
47－1　上東遺跡　各土坑出土種子類

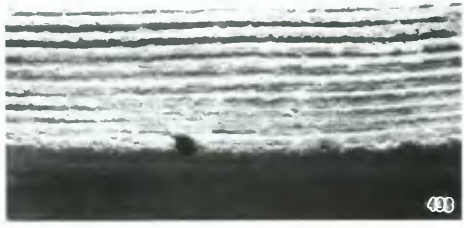
ヘナタリ　ハイガイ　ヤマトシジミ
キセルガイ　カキ

47－2　亀川調査区　東斜面下層出土貝類

図版48

57


306


433

57

315

315

323

施文各種　　（甕形土器口縁部）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (16)

川入・上東

都市計画道路（富本町・三田線）
に伴う埋蔵文化財発掘調査

昭和52年3月10日 印刷
昭和52年3月31日 発行

編集
発行　岡山県教育委員会
印刷　岡山県出納局用度課